

して居ります。ヴェスタは聞かされた通りを信じて居ります。あなたを本當の叔父さんだと思つて居ります。私はそのことに就きましては色々と考えました。そして幾度お話ししようと思つたか知れませんでした。けれどもあなたに眞面目になられると、心がひるんで自分の思つてゐる事をお話し出来さうにもなかつたのでございます。それで私はこの事を置手紙にして残して参れば、お分りになつて下さるかと思ひました。レスター様、お分りになつて下さいませうか？ お怒りにはなりませんでせうね？ 私は二人の爲にそれが一番好いことだと思ひます。私はいふ處置を取るべきだと存じます。レスター様、どうぞ私をお許し下さいませ。そして二度と私のことはお考へにならないで下さいませ。私は一人でやつて行けるつもりでございます。けれども私はあなたをお慕ひ申して居ります。心から愛して居ります。そしてあなたのお恵み下さつた御高恩に對しては、お禮の申し上げやうもございません。只あなたの萬福をお祈り申し上げます。何卒私をお許し下さいませ。私はあなたを愛して居ります。レスター様、心から愛して居ります。

ジェニー。

尚、私は父とクリイヴランドへ参るつもりで居ります。父は私が面倒を見てやらねばなりません。父は獨りぼっち

なのです。けれども何卒私を迎へて来ては下さいますな。それが一番好いことだと存じます。」

彼女はこの手紙を封緘し、當分の間それを自分の肌につけて秘めて置いて、出て行くのに都合の好い時機を待つてゐた。この計畫を決行しようとしたのは四五日後のことであつた。或る午後、レスターが一日家を留守にする電話で報せて来たので、彼女は自分とヴェスタに必要なだけの衣類を數個のトランクに荷造りして、運送屋を迎へにやつた。彼女は自分の行くことを父に電話で知らせようと思つたが、父には家がないと氣がついたので、自分が行つて探しても同じだと思ひ直した。ジョージとヴェロニカが家を出た時、家具は若干置いて行つた。その大部分は倉庫に保管してある——と父からの手紙にあつた。すれば、小さな家か長屋でも借り受けて、その家具を、備附けたら宜いだらう、さう云ふ積りで運送屋を待つてゐるところへ、扉を開けて入つて来たのはレスターだつた。

どう云ふ理由でか分らないが、レスターは豫定を變更したのだ。決して心靈説も、直覺説も信じてゐなかつたけれども、この時ばかりは、彼の感情が特殊な働きを演じたのだつた。彼はシカゴの南部にあるカキキー沼へ、友達數名と一日の鴨獵を試みようと思つてゐたが、氣を變へて、

その上いつもより早く歸宅することにしたのだ。そんな氣になつた原因は説明できなかつた。

彼は道々、こんなに早くから家へ歸るのを少し變だと思つた。だが部屋の中央に置かれてある二つのトランクを見ては啞然として了つた。一體どうしたと云ふのだ？ ジェニーが着替をして、出かける仕度をしてゐる。ヴェスタも他處行きの服装だ。彼は驚いて蒼色の眼を見張つた。

「何處へ行くのかね？」

「あの——、あの——」ジェニーが後へ退りながら言つた。

「出て行かうと思つてゐましたの。」

「何處へ？」

「クリイヴランドへ参らうと思つてゐました。」

「何の用で？」

「あの——それはお話し致さうと思つて居りました、こんな風な生活をしてゐてはいけないと思つて居りましたの。良くないことだと考へまして、お話ししようと思ひながら出来ませんでした。それで私、手紙を書いて置きました。」

「手紙だつて？」レスターが聲を高めた。

「一體何を言つてるんだい？ 手紙は何處にある？」

「あすこに」と、部屋の中央にある小さいテーブルを機械的に指すと、その上に載つてゐる大きな本の上に、目につくやうに通の手紙が置いてあつた。

「ジェニー、お前はたつた一通の置手紙で僕と別れようと思つてゐたのかい？」幾らか聲を荒く彼が言つた。「僕にはとんと合點がいかない。問題は何か？」封筒を引裂いて、初めの所を讀んだ。「ヴェスタを外へ連れて行つた方が好い。」と彼が促した。

彼女はその通りにした。再び部屋へ歸つて来て、眞着になつて立つたまま、目を見開いて、壁の方を見たり、トランクを眺めたり、レスターを見詰めたりした。彼は考へ深げに手紙を讀んでゐた。二度身じろぎをして、床の上に手紙を落した。

「さうか、ジェニー」と彼は遂に言つた。彼が何を言ひ出すかと待つてゐるジェニーを見据ゑながら。若し彼にその氣さへあつたなら、この腐れ縁を切る機會が来たのだ。けれども平和にことが進行してゐる今、彼は手を切るとは言ひたくなかつた。これまでになつた二人の關係を今更破つて了ふのは變に思へた。眞實、彼はジェニーを愛してゐて——それには微塵の疑もなかつた。それにも拘らず、結婚したくはなかつた——否、何の不都合もなく、二人が結婚することは出来ないのだ。彼女もそれは承知してゐた。手紙を見てもそれは判じられた。「お前の考へが間違つてゐる。」彼は徐ろに言葉を續けた。「お前がどんなことを考へてゐるのか知らないけれども、お前の物の見方は正しくない。」



僕はお前と結婚が出来ないと言つた——今急には出来ないのだ。非常に多くの問題が關係してゐるのだが、それをお前は少しも知らない。僕がお前を愛してゐる、それは知つてゐるだらう。けれども僕の家庭の事や仕事に就ても考慮しなければならぬ。そしてこんな事の爲めに起る色々の問題は、お前には分らないのだが、僕には分つてゐる。兎に角、僕はお前に今出て行つて貰ひたくない。お前のことはいつも氣に掛けてゐるのだ。と言つても、勿論無理に止めだてするのではない。たつてとあれば、それも致し方がない。だが、お前が出て行く氣になるのは穩かでないやうだ。本當にお前は出て行く氣ではないのだらう、え？ まあ、坐るがよい。」

見附からずに出て行けると許り思つてゐたジェニーは、かろなつては全く途方に暮れた。彼が靜かに因果を含める、これが彼女の頭痛の種だつた。レスターが彼女に訴へるなんて——彼女はレスターをこんなにも愛してゐるのではなにか。ジェニーが彼の方へ歩いて行くと、レスターが彼女の手をとつた。

「ねえ、よく聞かさい、」と彼が言つた。「今お前が出て行つたところで、何の利益もない。何處へ行かうてんだつて？」

「クリイヴランドへ、」と彼女が答へた。

「それで、どうしてやつて行く積りだ？」

「父がその氣になつて呉れれば父を引取つて、——父はほんとに獨りぼつちなんですよ——何か仕事を探さうと思つてゐましたの。」

「では、前とは違つた仕事で、お前に出来ることがあるかね？ まさか二度と小間使になる氣ちやあるまいね？ それとも何處かの賣子になるつもりかい？」

「あの、私は家政婦の仕事でも見附けようと思つてゐましたの。」彼女は色々自分の出来さうなものを考へて、之が一番宜いと思ひついたので。

「駄目だよ、」と彼は頭を横に振つて呟いた。「出来ることではない。それこそお前の獨り決めと云ふものだ。僕と別れたところでお前の身柄が淨められると云ふぢやなし、過去は何時までもついて廻る。どつちみち同じやうなものだ。今のところ結婚は出来ない。先へ行つたら出来るかも知れないが、それは自分でもはつきりは言へないし、従つて約束もしたくはない。例へ僕が同意したとしても、お前は茲を去るわけには行かないのだ。若し別れるにしても、お前が考へてるやうなものに逆戻りしては貰ひたくない。僕は何か用意はしてあげよう。だがお前は本當に別れると云ふのではないだらうね、ジェニー？」

レスターの強い個性と頑強な反對に會つて、彼女が決心

したことも滅茶々々になつて了つた。彼に手を握られただけで、決心はぐらく／＼になつた。彼女は泣き出した。

「泣くんぢやない、ジェニー、」彼が言つた。「お前が考へてゐるほどまづくは行かないだらう。暫くはそつとして置かさ。さあ、そんなものは取つておしまひ。もう出て行きはしないだらう？」

「い、い、え、」ジェニーはしゃくり上げた。レスターは膝の上に彼女を抱いた。「この儘にして置くがよい、」と彼は言葉を續けた。「世の中つて、妙なものさ。直ぐにどう變へようつたつて無理だ。自然に變るのだ。僕だつて不斷我慢の出来ないことを辛抱してゐるんだ。」

彼女は涙を浮べ乍らも寂しく微笑んでゐた。幾分平靜な氣持に歸つた。

「さあ、こんなものは片附けるがよい、」と彼がトランクを指して優しく言つた。「それから、一つ約束して貰ひたいものがある。」

「何ですの？」とジェニーが尋ねた。

「これからは何事も隠し立てしないこと、分つた？ 一人でよく／＼考へ込んだり、僕に内緒で何もやつたりしないこと。考へ事があるならあるで打明けて貰はう。僕はお前を食べはしない。お前の胸に餘ることは打明けて呉れれば相談に乗るし、又僕に出来ないとしても、二人の間で隠し

立てはしないことだ。」

「分りましたわ、あなた。」と、まともにレスターを見詰めながら、彼女は力を籠めて言つた。「本當に隠し立は致しません。今までは落着きがありませんでしたけれども、もう怖がりませんわ。本當に大丈夫です。」

「さうなくてはいけない。お前の約束を信じるよ。」さう言つて彼はジェニーを放した。

かう物事が決定したので、四五日して今度はゲルハートのことが問題になつた。ジェニーは數日の間、父のことを氣に病んでゐたが、これはレスターと相談すべきだと考へ附いた。で或日、夕食の膳で、クリイヴランドの状態を彼に説明した。「獨りぼつちの父は本當に不仕合せなんですの、」と、彼女が言つた。「私はそれを思ふと暗い氣持になりますわ。私はあの時クリイヴランドへ父を連れに歸らうと思つてゐましたの。でも今では何としたものでせうかしら？」

「お金は送らないのかい？」

「父はもう私からの送金を受取りませんの、私が善くない——正しい行ひをしてないと考へてゐるのですわ。私が結婚してゐると云ふことを信じて呉れないのです。」

「お父さんの方にも一理あるやうだね、」とレスターは靜かに言つた。

「でも私、父が工場等で寢起きしてゐると思ふと堪りませ



んわ。もう年は老つてゐるし、寄邊もないのですもの。」  
 「一體、クリイヴランドにゐる兄弟達は、何をしてるんだね？ お父さんの面倒は見えないのかい？ 兄さんのパスは何處にゐるのだね？」

「父が氣難かし屋だものだから、皆も構はないのですけど、」と彼女はあつさり言つた。

「さうだと僕も意見の述べやうがないね、」とレスターは微笑んだ。「お父さんも氣を樂に持つ方が宜いんだがな。」

「その通りですけれども、年を老つてゐるし、今迄に色々苦勞をして來たものですからね。」

レスターはフォークを玩具にしながら、暫くの間考へ込んでゐた。「僕は思つてるんだがね、」と彼は遂に口を切つた。「若しこの儘でやつて行くとすると、現在の生活様式ではない。ハイド・パークにでも家を借りたらどうだらう。事務所へは少し遠いが、實の所僕はアパート住ひには餘り感心しないのだ。庭でもある處を借りれば、お前にもヴェスタにも都合が良いだらうし、お父さんに來て貰ふことも出来る。お父さんはぶら／＼してゐれば宜いし、何か片附け物の手傳ひ位はして呉れるだらう。」

「え、來てくれれば、それこそ父にはもつて來いだと思ひますわ、」と彼女が答へた。「きちんとするのが好きですから、草捲りや爐の世話はして呉れるでせう。でも私が結

彼女の思ひ通りになればよいと思つた。父のゲルハートは大して興味のある人物だとも思へなかつたけれども、毛嫌ひすることもなかつた。彼が屋敷まはりの雜用をすると思ふのなら、させて構はないのだ。

三七

ハイド・パークに居を構へる計畫は、その後間もなく具體化した。數週間経つて、諸事が常態に復すとレスターは南ハイド・パークへジェニーと一緒に家をさがしに出掛けた。彼等は最初の借家さがしで直ぐ氣に入つたのを見附けた。大きな部屋の十一もある古風な家で、一千坪もある芝生の中に建てられ、シカゴ草創當時植ゑ込まれた大きな樹木で蔽はれてゐた。凝つた好みで落着きがあり、平和な氣分が横溢してゐた。ジェニーは、自分が正當な主婦としてこの屋敷に移るのではないと考へて憂鬱にはなつたけれども、その田園風なのどかさにすつかり恍惚となつた。彼女は自分が家出したら、或はレスターが後を追つて、正式の結婚と云ふ事になりはしまいかと漠然と願つてゐた。だが今は皆過去の夢だつた。彼女は留まる事を約束して了つたので、この上は善處する外なかつた。ジェニーがこんな中間數があつても仕方がないと言つても、レスターはそれを受けつ

婚したと納得させないうちは來ますまい。」  
 「と云つたところで、結婚許可證を見せなければ駄目だらう。どうも難かしい御註文だね。まあ別荘の爐の世話でもしてゐたら怪我はないが、」と彼が考へ込んで附け加へた。ジェニーはこの戲談の裏面を讀みとることは出来なかつた。自分故に醸し出された紛擾を反省するので頭は一杯だつた。例へ自分達が美しい家庭をもつたとしても、父は來てくれまい。けれども、孫のヴェスタの傍にゐられるやうにして上げなければならぬ。ヴェスタは屹度父を慰めるに違ひないのだ。

ジェニーは悲しい思ひに沈んでゐた。それを察したレスターはやがて言つた。「僕もどうして良いか分らない。結婚許可證の用紙は容易には手に入らない。それを偽造するなんてことは法律上の犯罪だ。そんなことはやりたくないね。」  
 「レスター、私だつて、そんな事をして迄もとは思ひませぬ。たゞ父があんなに片意地なのを悲しんで居りますの。一度かうと思つたら却々頑固なものですもの。」

「そのことは、僕達が引越してから後に譲つたらどうだらう、」と彼が言ひ出した。「その上でお前がクリイヴランドへ出掛けて行つて直接お父さんに話して見るさ、お前の言ふことなら諾くかも知れない。」レスターは彼女の父親に對する態度が氣に入つてゐた。その純情さには彼も動かされけなかつた。「時々客も來るからね、」と彼が言つた。「まあ家具をすつかり入れてみるからだ。」  
 彼は差配に契約更新の自由を留保して、五ヶ年の借家證書を調へさせた。そして、屋敷は直ちに人を入れて修理した。建物のペンキは塗變へ、裝飾も仕直し、芝生も刈り込まれて、すつかり見違へるやうになつた。大きな居心地の好い書齋兼居間、廣い食堂、瀟灑な應接間、客間、ゆつたりした臺所、配膳室等、住居らしい住居の一階を構成するものが皆備つてゐた。二階は寢室と、浴室數箇、女中部屋一といふ配置だつた。いかに都合よく、調和が取れてゐるので、ジェニーは家の中を整頓して行くのを非常な誇り、また樂しみに思つた。

引移つてから間もなく、ジェニーはレスターの許しを得て、父に來て呉れるやうにと手紙を書いた。自分達が結婚したとはあらはにでなく推量するやうに書いた。近隣の美しいこと、庭の廣いこと、屋敷内の便利な點もこまかく述べた。そして「本當に好ましい住居です。屹度お父さんもお氣に入るでせう。ヴェスタは毎日此處から學校へ通つて居ります。お父さんも私達と一緒に暮しなされては如何でせう。工場のお住居よりはすつと宜しいと存じます。お父さんが來て下さるよう、心からお待ち致して居ります。」さう附け加へた。



ゲルハートは眞顔になつてこの手紙を讀んだ。これは本當だらうか？ 結婚しないのに大きな屋敷を借りるなんてことがあるだらうか？ 今迄永い間、嘘をついてゐたではないか？ それとも自分が誤解してゐたのかしら？ 時期が来たのだ——が併し自分に行くべきものだらうか？ 彼は今が今まで長い間一人で暮して来た——シカゴへ行つてジェニーと一緒に住むべきだらうか？ 娘からの勧誘は彼の心を動かしたけれども、結局彼は、行かないことに決心した。彼の方にも娘の方と同様に落度があつたと承認するのは、業腹だつた。

ジェニーは父が拒絶して来たので失望した。彼女はレスターと相談した上、自分で出かけてみることに決めた。そこで彼女はクリイヴランドへ行つて、工場を探し歩いた。それは市の極めて汚ない區域にある大きな家具工場で、囂々とかまましい音を立てゝゐた。事務所で尋ねると、一人の事務員が彼女を遠く離れてゐる倉庫へ案内して、面會した。婦人があるとゲルハートに通じて呉れた。ゲルハートは誰かしらと訝りながら、貧弱な寢臺から起きて来た。父が埃だらけのだぶ／＼服を着、胡麻鹽の頭髮に、むしろくしやの眉毛をして、暗い扉の奥から出て来るのを見ると、彼女は再び切なる哀愁の感に胸を打たれた。「まあ、氣の毒なお父さん」と思つた。彼がジェニーの方へ歩いて来た。態々

訪ねてくれた親切を思ふと、彼の難かしい眼の色も、幾分和らいだ。「どうしてやつて来たんだい？」と彼が注意深げに訊ねた。

「ねえお父さん、一緒に来て載きたいんですよ、」とジェニーが懐しさうに頼んだ。「お父さんを、いつまでも此處にお置きしたくありませんもの。これから先、一人でお暮しになるなんて、私には抛つて置けませんわ。」

「そんな用事で出て来たのか？」と彼が當惑して言つた。「さうですの、」と彼女が答へた。「さうさして下さいません？ もう此處を引拂つて下さいませよ。」

「だが俺は良いベッドがあるんだよ。」父親が、自分の見すばらしい風體を辯解するつもりで説明した。

「それはさうですけれども、私達も立派な家をもつて、ヴェスタも一緒に居りますの。ねえ、来て下さいません？ レスターもお願ひしろつて申します。」

「では、聞きたいことがあるよ、」と彼が要求した。「お前は結婚したかね？」

「え、」と彼女は遁れる術なく嘘をついて了つた。「ずつと以前に結婚致しましたわ。お出でになつたら、レスターにお聞きになつて下さい。」やつとの思ひで、父の顔を見ることが出来た。父は娘の言葉を信じた。

「うん、時が来てゐる、」と彼が言つた。

「ねえ、お父さん、来て下さいませすでしょ？」と彼女が懇願した。

ゲルハートは彼の癖で、両手を突きだした。娘の切なる哀願が、心の髓までこたへたのである。「うん、行かう、」と言つて、ぐるりと背を向けた。父の兩の肩を見てジェニーは、彼がどうしてゐるかを知つた。彼は泣いてゐたのだ。「ねえお父さん、さあ、」と彼女は嘆願した。それには答へないで、彼は自分の荷物を取りに、薄暗い倉庫の奥へ入つて行つた。

三八

ゲルハートは、ハイド・パークの屋敷の寄寓者になると直ぐに自分の仕事を感じてやり始めた。彼は爐と庭の世話を受持つた。自分が爲すべき仕事もないのに、外から人を雇つて給金を拂ふのが馬鹿らしく思へた。彼がジェニーに庭木の手入れ不足をやかましく言つた。レスターが刈込鋏と鋸を買へば、春になつたら自分が刈込む積りだつた。獨逸では誰でもそれ位の心得があるのだが、アメリカ人はてんで駄目だ。彼は又道具や釘を要求して押入や棚を繕つた。又殆ど二哩も離れてゐる處に、ルーテル教會を見附けて、クリイヴランドのよりも宜いと言つた。牧師は無論神より遣

はされた者であるのだ。そしてヴェスタを伴つて、規則正しく教會へ行かなければ承知しなかつた。

ジェニーとレスターは、新生活に慣れはしたものの不都合がないでもなかつた。或種の故障が確かに起つた。ノース・サイドにゐた頃のジェニーは、近所の交際を絶つて黙つて暮せた。けれども今では相當な家に住つてゐたから、近所の人達は作法と心得て訪問するだらうし、ジェニーも一廉の主婦として、應待しなればならなかつた。彼女はレスターとこのことに就いて相談した。二人は夫婦だと云ふことにより、とレスターが言つた。ヴェスタはジェニーの最初の夫ストーヴァ(彼女の母の姓)の子として紹介する手筈にした。ヴェスタが生れて間もなく、父親はこの世を去つたことにするのだ。無論レスターは繼父であつた。この近邊はシカゴ社交界の中心を離れてゐたので、レスターは自分の友達に會ふとは思はなかつた。彼はジェニーが訪問客を迎へる用意に、社交の普通の形式を説明して聞かせた。二週間経たないうちに、ジェイコブ・ステンダール夫人と云ふ、この界隈では相當重きをなしてゐる婦人が訪れた。この婦人は五軒程先に住まつてゐて——この邊の家は皆、廣々した芝生の中に建つてゐた——或る日の午後、買物の歸途、馬車で乗りつけた。「奥様は御在宅でございますか？」と新しい女中のジャンネッ



トに尋ねた。  
「はい、多分いらつしやると存じます。お名前を承はれませんでせうか？」

女中は名刺を受取ると、ジェニーの所へ持つて行つた。ジェニーはそれを物珍しげに眺めた。

ジェニーが客間へ行くと、すうりとしたブルネットの物見高さうなステンドール夫人が、いかにも丁寧に挨拶した。「本當にお邪魔だとは存じましたが」と彼女は愛嬌を作つて言つた。「私は御近所の者でございます。四五軒先の向側に住んで居ります。お通りがけに、お氣附きかと存じますが、白い石の門柱の所でございます。」

「ま、左様でございましたか」とジェニーが答へた。「よく存じ上げて居ります。良人とも此處へ参りました時から、立派なお住居とお噂申して居りました。」

「いえ、私も御主人様の御高名は承つて居りました。良人はウィルクス・フロッグ・スイッチ會社に關係して居ります。」

ジェニーが頭を下げた。客の口振りから見ると、その會社は相當有名で、儲つてゐるに違ひないと察せられた。

「私共はもう長いこと、この土地に住まつて居りますが、初めてお出になつてはさぞ御不自由なこと、お察し申上げて居ります。お暇の節には何時か午後にもお出掛け下さいませ。お待ち致して居ります。私はいつも木曜日に皆様

にお出でを願つて居ります。」

「是非お邪魔させて載りますわ。」とジェニーは、少しそははしながら答へた。彼女にとつては辛い試練であつた。「本當によくこそお訪ね下さいました。良人は何時も忙しくして居りますが、在宅の節は、貴女様や御主人様のお出でを悦ぶことゝ存じます。」

「何時か夕方にも、お二方で屹度お出掛け下さいませ。」とステンドール夫人は答へた。

「私共は靜かに暮して居りまして主人は餘り賑かな社交は好みませんが、御近所の御交際はいつも喜んで居ります。」

ジェニーは好意の押賣を微笑して受けた。そして客を玄關まで送つて出て握手を交はした。「奥様は本當にお美しくお羨ましくございますわ。」とステンドール夫人は淡白に言つた。

「まあ、とんでもないことでございますわ。」とジェニーは少し赤くなつて言つた。

「では是非、お近いうちに、お待ち申上げますよ。」と夫人は手を振りながら、別れの挨拶を告げた。

「これなら宜かつた。」とジェニーはステンドール夫人の馬車を見送りながら思つた。「あの人は良い人らしい。レスタールに話さう。」  
その他の訪問客はカアマイクル・パーク夫妻や、ハンズ

ン・フィールド夫人や、ティモシー・バリンガー夫人等で、皆名刺を置いて行くとか、暫く雑談して行くとかした。ジェニーは自分が人並以上に扱はれてゐるのを知ると、自分でも威厳を保つように努めた。事實彼女は非常に立派に應待した。全く愛想よく、優雅に振舞つた。にこやかに微笑んで、態度も極めて自然だつたので、相手に好印象を與へた。

ジェニーは客人達に、自分は最近まで、ノース・サイドに住んでゐたことや、夫のケインが、以前からハイド・パークに家を持ちたいと望んでゐたことや、自分の父と娘も一緒にゐることや、又レスタールはその娘の繼父であること等を話した。そして自分も皆様の御親切に酬いて、良き隣人になりたいと希望を述べるのだつた。

レスタールは夕方になると、是等の訪問客に就て聞かされた。彼は近所の人達と交際しようとは思はなかつた。ジェニーは客に接するのを面白いと思ふようになって来た。新しく友達の出来るのを喜んだ。そしてレスタールが自分を立派な妻、理想的な伴侶と思つてくれるやうな何かはつきりしたことをしてかしたいと願つた。何時かはレスタールが自分と本當に結婚を望むようになるかも知れない。

その後間もなくジェニーが知つた所によると、第一印象といふものは當てにならなかつた。近所の人達が彼女に近づいたのは早計だつた。噂が擴がり始めた。サマヴィル夫人が

ジェニーの隣人クレイグ夫人を訪問した時、レスタールと云ふ人物の話が出ると、「え、本當にねえ、あの人の評判は少し變なんですよ。」とサマヴィル夫人が白まじりに言つた。「まあ、そんなことが、」と相手は好奇心を動かして言つた。「あの方は落着いた、保守的な方のやうにお見受けしますけど。」

「え、そんな所もおありですの、」とサマヴィル夫人が續けた。「あの方のお家は、とても立派なんですよ。そして良人の話では、あの方が同棲してゐた若い御婦人があるんですつて。今の方がその人かどうか存じませんが、ノース・サイドで夫婦みたいにして暮してゐられた時には、何でもゴード嬢とか、そんなお名前で紹介されたさうですの。」

「只事ならぬ報知を聞くと、クレイグ夫人は侮るやうに舌打をした。」

「驚き入りますわねえ！ 屹度同じ婦人でございますわ。あの方のお父さんは、ゲルハートつて云ふんですから。」

「ゲルハートですわ。」とサマヴィル夫人は叫んだ。「その通りでございますわ。何でも以前にも事件があつたやうでしてね——たしかお子さんが一人ありますわ。その後結婚なすつたかどうか存じませんが、男の方の親御様はその御婦人を構ひつけないとか聞いて居りますの。」

「まあ耳寄りなお話を伺ひましたわね！」とクレイグ夫人



が大袈裟に言った。その後正式に結婚なさつたと思へるでせうかしら？ まあ、近頃とんだ方とお附合を始めたものでございますのね。」

「本當でございますわ。世の中つて、時々妙にこんがらかることがありますてねえ。でも、あの方、惚れ／＼するではございませんの？」

「美人ですわ！」とクレイグ夫人が言った。「そして初々しいですわねえ。私も惚れ込んで了ひましたわ。」

「でも別の方かも知れませんか。私、取違へてゐるのかも知れませんか。」と客の方が續けた。

「そんなことございせんよ。ゲルハートですもの。前にノース・サイドにお住みになつてゐたと、自分でお話してしたものだ。」

「それでは矢張り同じ方ですのね。でも、あなたからあの方のことを伺ふなんて、不思議でございますわ。」

「本當にねえ。」とクレイグ夫人は答へたが、自分は今後ジェニーに對して、どんな態度を取つたら宜いかを思案してゐた。

この他にも色々と評判が立つた。ジェニーとレスターが、ノース・サイドをドライブしてゐるのを見たと言ふ者、ジェニーをミス・ゲルハートとして紹介された者、ケイン家の人達の態度を知つてゐる者などが出て來た。無論ジェニーの

現在の地位、美しい邸宅、レスターの財産、ヴェスタの美しいこと等は皆、よからぬ風評を緩和する助けになつた。ジェニーはよく氣の附く主婦であり、善き母でもあり、非常に溫和しい女性であつたから、誰も個人的に非難する者はない。けれども彼女には暗い過去がある、だから、それを勘定に入れて考へなければならぬのだ。

やがては來ようとする嵐の前觸れがあつた。或日、ヴェスタが學校から歸つて來て、突然に「母さま、私のお父様は誰なの？」と尋ねた。

「お父様のお名前はストーヴァと云ふのですよ。」と母親は答へたが、何か悪口でも言はれたのではないか——屹度良からぬことを聞いたのだらうと想像された。「何故そんなことを訊くの？」

「あたし何處で生れたの？」と母の問ひには耳も借さず、ヴェスタは、自分の身柄をほつきりさすことに一心だつた。

「あなたはね、オハイオ州の、コラムバスで生れたのですよ。それがどうしたと言ふの？」

「アニタ・バリンガーがね、私のことをお父様がないつて言ふの。そして私が生れた時、お母様はお嫁に行つてなかつたんだなんて言ふの。そいでね、私は本當のお嬢様ぢやなくつて、——誰の子でもないんですつて。あたし腹が立つたから、あの人を撲つてやつたの。」

ジェニーの面から表情が消えた。彼女は當てもなく前の方をぢつと見たまゝ坐つてゐた。バリンガー夫人は訪問してくれた、そして上品で頼みにもなる人だと思つてゐたのだが、その家の娘が、ヴェスタにそんなことを言つたのだ。何處であんなことを聞いたのであらうか？

「ねえ、もうそんな人に構ふのではありませんよ。」と終にジェニーは口を切つた。「その子は何も知らないのですよ。」

あなたのお父様はストーヴァと云つて、あなたはコラムバスで生れたの。もうお友達と喧嘩をしてはいけませんよ。誰でも喧嘩をすると厭なことを言ふものです——知りもしないことをね。だからこれからは知らん顔をして、その人の傍へ寄つてはいけませんよ。傍へ行かなければ何も言はないでせう。」

筋の通らない説明ではあつたが、それでヴェスタは氣が濟んだ。「でも、あの方が叩いたら、私だつて叩いてあげるから。」とヴェスタは頑張つた。

「いゝ子だからその人の傍へは行かないのね。そしたらあなたも叩かれはしませんからね。」と母親が答へた。「自分の勉強だけしてゐればそれで宜いの。あなたさへ構はずに居れば、その子も喧嘩なんか出來ません。」

自分の言つた言葉に考へ込んでゐる母を残して、ヴェスタは行つて了つた。近所では互に話し合つてゐるのだ。自分

の經歷が皆の話題にならうとしてゐるのだ。一體どうして分つたのであらうか？ 傷口の痛みを我慢するのと、あとから時々その傷をほじくられるのではことが違ふ。或日ジェニーが直ぐ隣のハンサム・フィールド夫人を訪問すると、其處でお茶の御馳走になつてゐるウィリストン・ベーカー夫人に出會つた。この人はケイン家のことや、ノース・サイドでのジェニーの噂や、ジェニーに對するケイン家の態度をも知つてゐた。ベーカー夫人は、ブレイスブリッジ夫人に似てインテリ風で、瘦せた、元氣のある婦人で、交際相手に就いて極めて八釜しかつた。それまで常にフィールド夫人を自分と同じく用意周到な人であると信じてゐたので、ジェニーが客に來たと知るや、表面平靜を裝つてはゐたけれど内心は苛々してゐた。「ベーカー様、こちらがケイン夫人でございます。」とフィールド夫人が微笑を含んで、二人を紹介した。ベーカー夫人は不快げにジェニーの方を見た。

「レスター・ケイン夫人ですつて？」と彼女が尋ねた。「左様でございますの。」とフィールド夫人が答へた。「左様でしたか。」と冷やかに夫人が言葉を續けた。「レスター・ケインの奥様のお噂は私も随分伺つて居りました。」と「奥様」の語に妙に力を入れて言つた。

彼女は全然ジェニーを無視して、フィールド夫人の方へ向き直り、ジェニーの口を出せないやうな親密な話を始めた。



ジェニーは、こんな難かしい場合に適當した話題を見附け出すことも出来ず、孤立無縁になつて立つてゐた。ペイカー夫人はもつと長くゐたかつたのだが、すぐにお暇すると言ひ出した。「もうこれでお暇致しますわ。私今日ニール夫人をお訪ねするお約束もありますの。ほんとにお邪魔致してしまいました。」

ペイカー夫人は室の外へ出る時になつて、ジェニーの方へ初めて眼を向けて、形ばかり頷いて見せた。

「私達は時々變な人に出會ふものですよ。」と彼女は別れ際にフィールド夫人に言つた。フィールド夫人はジェニーを庇ふ氣持はなかつた。と云ふのは自分が社會的に高い地位にゐない所から、中流階級の婦人の常として、少しでも上の人に取り込まうと思つてゐたからである。ジェニーよりもずっと社會的に重きをなしてゐるペイカー夫人の逆鱗に觸れなくなかつたのだ。フィールド夫人は言譯らしく微笑して元の場所に戻つて来たが、幾分狼狽氣味だつた。勿論ジェニーは面目を失してゐた。直ぐに彼女は辭去して家へ歸つた。ジェニーは侮辱を痛感し、またフィールド夫人も自分と實際したことを後悔してゐるだらうと思つた。今後は往來できないと觀念した。そして今更のやうに自分の生活は失敗だつたと云ふ絶望的な感じが甦つて来た。自分の生活は立て直すことは出来ないのだ。いや、出来たにしても事實立

ち直るものではない。レスターには正式に結婚してくれる氣がないのだもの。

時は流れて行き、家の中には變つたこともなかつた。この大きな邸宅には手入の屈いた芝生や樹木があり、葡萄の蔓がヴェランダの柱にからんで、自然に緑のヴェールを作つてゐる。ゲルハートが庭をあちこちする。ヴェスタが學校から戻つて来る。レスターが朝になると、輕快な二輪馬車で出て行く。さういふ光景を見ると、誰しも此處には平和と豊饒があつて、この麗はしい家庭には何の不幸の影もないと思つたであらう。

そして事實、レスターとジェニーは圓滿に生活してゐた。近所の人達は殆ど訪ねて来なかつたし、來てもほんの二三人で、これと云ふ交際はなかつた。でも特に寂しくなつたとは思へなかつた。家庭内だけで既に變化もあり樂しくもあつた。ヴェスタはピアノを習ひ始めて、却々上手だつた。音楽の耳があつたのだ。ジェニーが青や藤色や、オリブ色の平常着を着て、縫ひ物、掃除、ヴェスタの學校仕度、片附物などをしてゐる姿は全く美しかつた。それから又ゲルハートはせつせと色々の仕事に身を入れた。彼は何でも、自分で手を下さないと氣が濟まなかつた。彼が日課にしてゐる仕事の一つは、レスターなり召使の者なりの後を見廻つて、瓦斯や電氣を消して歩くことだつた。點けつばなしになつ

てゐることがあつては、不經濟極まるからであつた。

この儉約な老獨逸人にとつては、僅か三四ヶ月も着ると無造作に棄て、了ふレスターの高價な衣類が、苦情の種であつた。それに、一寸革に皺が出来たとか踵が少しばかり減つたとか言つては、レスターが上等の靴を捨てるのを氣に病んでゐた。ゲルハートはその靴を修繕して穿くように言つたが、レスターは、「一體何處が悪いんだ」と云ふ口叱言に對して、穿き心地が好くないのだと答へた。

「こんな贅澤なことをして！」とゲルハートが苦情がましく言つた。「なんて無駄をしてるんだ！ 碌なことにはならないぞ、今に困るんだ。」

「でもお父さん、仕方がないんですよ。」とジェニーが辯解した。「あの人は、そんな風に育てられたんですもの。」

「ふん、立派な育て方つてもんだ！ アメリカ人はちつとも經濟を知らん。暫く獨逸へ行つて來ると宜いんだ。そしてたらお金の有難さが分るになあ。」

レスターはジェニーからこの話を洩れ聞いたが、只笑つてゐた。ゲルハートが面白い男に思へた。

今一つの非難は、レスターが燐寸を無駄使用することだつた。彼は燐寸を擦つては、シガアに火を點けずに喋つてはその儘捨て、了ふ癖があつた。或時は火の出ない中にシガアへ點けようとしては、二本でも三本でも打棄れることもあ

つた。春や夏の夕方など、ヴェランダの一角に席を占めて煙草を吹かしながら、いつも半燃えのマッチを投げ捨てた。ジェニーも傍にゐるのだが、夥しい燐寸を擦つては芝生に投げ捨てるのだつた。或時などは、ゲルハートが草刈りをしてゐると、半燃えの燐寸が一握りやそこらでなく、幾箱分も草の下で腐つてゐるのを見附けて仰天した。最小限度に言つて、がっかりして了つた。彼は不屈至極な證據物件を新聞紙に拾ひ集め、ジェニーが縫ひ物をしてゐる居間へ持つて來て見せた。

「これを見るがい、これを！」と彼は促した。「一寸見てくれ！ あの男は經濟を知らない、まるで！」と言つたものの、適當な例を思ひ出せなかつた。「これがあの煙草呑みの作法なんだ。一箱五セントの燐寸だ、いゝか、五セントだぞ。こんなことをしてゐて良くなる筈があると思ふか？ まあ、これを見るがい。」

ジェニーはそれを見て頭を振つた。「あの人はだらしないんですの、」と彼女が言つた。

ゲルハートは新聞紙の包を地下室へ持つて行つた。せめてそれは爐で燃せばいい。彼は附木がはりにそれを用ゐてパイプに火を點けても可いのだが、それには古新聞の方が宜かつた。彼はその爲に古新聞を澤山持つてゐた——それも亦、この家の家長の不經濟な遣り口の一例證であつた。



こんな環境の中で働くのは悲しいことだった。殆ど何事によらず彼に反対だった。けれども彼は敢然として浪費や恥づべき贅澤と戦った。自分の身の周りはあくまでも儉約した。彼は二ヶ年の間、毎日曜日に同じ黒い服を着たが、それはレスターが幾年前に高い代を拂つて買ったものゝ作直しだった。レスターの靴も少し我慢すれば穿けないことはなかつたから、無論ゲルハートはそれを穿いた。古いネクタイも黒いのなら結構だった。シャツも縫直しが出来たものならば、さうして用ゐた。親切な料理人に針を借りて下着も仕立直した。靴下は丁度間に合つた。こんな風で、ゲルハートは衣類の爲には一文も出す必要がなかつた。

その他レスターの使ひ古した靴、シャツ、カラー、服、ネクタイ等を、ゲルハートは數週間も數ヶ月もしまつて置いて、悲しい氣持で、仕立屋とか古靴屋とか屑屋等と呼んで來て、出来るだけ高價に賣り拂つた。彼は古着屋は皆ベテラン師であり、屑屋も古靴屋も掛引が甚しいので信用が置けないことを知つた。あいつ等は皆嘘吐きだ。彼奴等は貧乏を賣物しながら旨い儲けをしてゐるのだ。ゲルハートは一々事實を調べて廻つて、自分の賣つた物品の處分法をつきとめた。

「こん畜生め！」と彼は叫んだ。「彼奴あ靴一足に十セントしか寄越さずにおいて、手前の店先ぢやあ、二弗もの値段んのね。嬉しくつて？」とか、「まあ、こんなに額へ皺が寄つて。駄目ぢやありませんか。それに今朝はネクタイを替へずにお出かけになつたのね。どうしてなの？ あたくし出して置きましたのに。」「さうだ、忘れたね、」と言つたり、額の皺をなくすやうにするとか、今は禿げてゐなくても直ぐに禿げると言つて笑ふのがレスターの常だった。

應接間や書齋で、ヴェスタとゲルハートがある前では、幾分遠慮の氣味はあつたが、矢張りジェニーは可愛らしい振舞ひをした。「クローバの中の豚」とか、「蜘蛛の穴」とか、「子供の撞球」等と云ふ變な謎が好きであつた。レスターもこんな他愛のない遊戯の仲間入りをした。時には一時間もかゝつて難かしい謎を解くこともあつた。ジェニーはかうした機械的な問題を解くのが上手だった。その正しい解き方をレスターに教へることもあつて、そんな時は獨りで嬉しがつた。或時は彼の背後に立つて自分の頸をレスターの肩に載せ、兩腕を彼の頸に巻きつけたりして眺めてゐることもあつた。レスターは五月蠅いやうな顔もしなかつた——内心は女の愛情に浸つて幸福であつたのだ。ジェニーの氣轉、朗かさ、物やさしさは愉快な雰圍氣を造り出した。殊に彼女の若く美しいのがレスターの心を捉へてゐた。そして彼は自分も若々しく感じたのである。凡そ彼が嫌だと思ふ事は、前途に何の望みもない老人になつて、干乾らびて了

を付けてやがる。盗人だ、畜生！ 俺から一弗で買つて好い譯だに。」

ジェニーは笑つてゐた。父が不平を言ふ相手は彼女だけだった。レスターには何を言つても無駄だった。ゲルハートは僅かな貯へを、殆ど總て愛する教會へ寄附した。教會では節度、誠實、信仰の模範と認められてゐた——あらゆる美德の權化であつた。

かうして社交的には不穩な風向になつてゐたけれども、ジェニーはこのところ夢のやうな楽しい生活を營んでゐた。レスターも自分の處世法に時々疑を懷きはしたものの、家庭にあつては常に親切で思ひ遣り深く、その日／＼の起居を楽しんでゐるらしかつた。

「何も變つたことはございません？」とジェニーは夕方レスターが歸宅すると尋ねるのだ。「あるものかね！」と答へてレスターは、ジェニーの頸か頬を抓るのがきまりだ。

何時も氣の利いてゐる女中のジャネットが、主人の上衣や帽子を受取ると、ジェニーは彼について奥へ行くのだった。冬になると、彼等は書齋にある大きな爐の前へ坐つた。春や夏や秋だと、レスターはヴェランダへ出ては、芝生や、遠い街を眺めながら、食事前のシガアを楽しむのだった。

ジェニーは何時も彼の椅子の手に腰を掛けて、彼の頭を撫でた。そして「ねえ、あなたの髪はちつとも薄くなりませふことであつた。「何時までも若くてゐたい。でなければ若いうちに死んだ方が好い。」これが彼の口癖だった。その心持がジェニーにもよく呑み込めて來た。彼女は自分も若々しくしてゐられるのが嬉しかつた。

なほ彼等の家庭生活の楽しい一面として、レスターが段段ヴェスタを可愛がるやうになつたことを挙げられる。夜になると、ヴェスタは書齋の大きな机に向つて勉強をするのだった。ジェニーは縫ひ物をするし、ゲルハートはルーテル教派の長い／＼書目等を讀んでゐた。この老人は、ヴェスタがルーテル教派の學校へ通はせられないのを残念がつたけれども、レスターはそれに耳を借さなかつた。ジェニーがゲルハートのこぼしてゐることを告げると、レスターは言つた。「さうでもない、獨逸式の教育法なんか眞平だ。公立學校ならどんな子供にも立派なものだ。構はずにゐて下さいとお父さんに言つとくがい。」

實際この四人は楽しい時間を過すことがあつたのだ。レスターは七つになる小學生を膝の上に載せて押搦つた。所謂人生の事實を逆にして説明したり、パラドクスを持ち出したたりして、この芽生つゝある子供の心が、どんな風に反應するか試して見た。「水つて何だらうね？」と尋ねる。「それは飲むものよ、」と答へると、彼はヴェスタの顔を見詰めて「あゝ、さうだけれども、水は何んだか知らないの？ 先



生はもつと他のことを教へて下さらないの？」と訊きかへすのだつた。

「だつて、やつぱり飲むものぢやなくつて？」と、ヴェスタは頭張つた。

「飲むものだなんて言つては御返事にはならないよ、」と彼は言ひかへすのだつた。「先生に水は何ですかつて尋ねて御覽。」さう言つて彼は稚い子供の頭に、この厄介な問題を宿題にして置くのだ。

食物、陶器、衣類、その他何によらず化學的元素に還元して聞かせるので、事物の外観の蔭に在る妙なものに就てヴェスタは心を悩まされ、終にはレスタターを恐れるやうになつた。又ヴェスタは毎朝學校へ行く前に、自分の服装をレスタターに檢閲して貰ふ習慣になつてゐたが、それは何時も彼が身なりを八釜しく言ふからだつた。きちんとした容姿であることを彼は求めた。髪飾りには大きな蝶結びのリボン、靴は季節によつて短靴から深靴に變へ、衣類の色合も皮膚の色や性質に相應しい配色にしなければならぬと要求した。

「あの子は明色で快活な氣質なんだから、暗い色のものを着せてはいけない、」と注意したことがある。

で、ジェニーはこんな事にもレスタターの意見を確めるのが必要と氣附いた。それからヴェスタに、「お父さんの所へ

行つて見て載いていらつしやい。」と言ふやうになつた。

ヴェスタはレスタターの前に行つて、ぐるりと廻つて見せて、「よくつて？」と言ふのだ。そして「あゝ、それで好い、それで好い。行つておいで、」と云ふ聲を聞くと、彼女は出て行くのだつた。

レスタターは非常にヴェスタが自慢になつて來た。日曜日や或は週日でもドライブする時には、何時もヴェスタをジェニーと自分の間に坐らせた。彼は又ジェニーに、ヴェスタをダンスの稽古に通はせるやうにと言つた。するとゲルハートは狂氣せんばかりに怒り且つ憎んだ。

「この罰當りめ！」と彼はジェニーに當つた。「碌でもないダンスをさせるなんて。何の爲めだ？ 子供を臺なしにする氣なのか？ 恥知らずにしようて云ふのか？」

「まあお父さんは、」とジェニーが答へた。「そんなに言ふことはありませんのよ。良い學校なんですつて。レスタターは是非其處へ通はせると申してますわ。」

「レスタターが、ふん、レスタターが。子供の教育はよく心得てゐるだらうよ。カルタはするし、酒は飲むんだからな！」  
「お父さん。そんな風に仰言らないで、」とジェニーは熱心に言ひ譯した。「あの人の親切な事はよく御存知ですのに。」  
「さうとも、良い人だよ、事に依つてはな。だが、このことに就ては別だ。どうして、良いどころかい。」

ゲルハートは眩きながら出て行つた。彼はレスタターがゐる前では何も言はなかつた。で、ヴェスタはお祖父さんを自分の意のままにした。

「やあい、」と言つて彼の腕を引張つたり、白髮髯の頬を擦りまはした。こんな時にはゲルハートも屈託がなかつた。彼は何かしら夢中になつて——咽喉が詰まる感じだつた。「そんなことをするんだな、」と彼は叫んだ。

ヴェスタが彼の耳をつまんで引張つた。

「これ、止さないか！」と彼が言ふ。「もう澤山々々。」  
それでもヴェスタは、自分の氣が濟むまではやめようとしなかつた。ゲルハートはこの孫を愛してゐた。ヴェスタも祖父さん相手ならどんなことでも出來た。ゲルハートは何時も變らず忠實に従僕となつて、孫の御用を勤めたのだ。

三九

レスタターの不正規な生活に對して、ケイン家では愈々黙つてゐられなくなつた。この儘にして置けば、世間の物笑ひになるのは明白だつた。噂は四方に擴まつてゐた。明かにさうとは言はないにしても、暗黙の中に世間は合點してゐるらしかつた。父親には、レスタターが社會の因習を無視する理由が解らなかつた。相手の女が何かで名のある者ならば

——例へば舞臺の妖姬とか、文藝界のきけ者とても云ふのならば、彼の行動は讃むべきでないまでも納得は出來る。併しルイズの話のやうに、ありふれた才能しかない、白粉こて塗りの女を相手とは、全く不可解なのだ。

レスタターは彼の息子、しかも氣に入りだつた。その息子が世間並に身を固めて呉れないのは辛い。シンシナチの娘達で、レスタターに好感を寄せてゐた誰でもを見るが宜い。例へばレテイ・ペイスだ。常識から云へばこの女と結婚して宜かつたのだ。縁織もよし、人情もあり、才能にも恵まれてゐた。レスタターの老父は非常に悲しんだが、その内に段と險しい氣持になつた。息子の仕打は恥知らずだ。不自然で、不合理で、作法を辨へぬものだ。アーチボード・ケインはこの事を思案し抜いた揚句、どうしてもこれは改めさせねばならぬと思つたが、扱て實際にはどうして宜いのか見當がつかなかつた。レスタターは一人前になつてゐるから、自分の行動を批評されるのを嫌ふに違ひない。さしあたり手の下しやうがないのだつた。

この問題に一段落つける上に役立つやうな事件が幾つか起つて來た。ルイズはシカゴへ行つて、人騒がせをさせて後、間もなく結婚したので、ケイン家では外孫が來る外は、全く家の中が寂しくなつた。レスタターは妹の結婚式に招待されたけれど、出席しなかつた。それから今一つには、母の



ケイン夫人が亡くなったので、遺言状の書換が必要になつた。母の不幸があつた時には、レスターも家へ戻つた。そして自分が近頃母に遠ざかつてゐたこと——母に心配をかけながら、言ひ譯もしなかつた事を悲しく思つた。父はこの機会に話さうと考へたけれども、餘りに憂鬱に沈んでゐる息子を見ると、それも延して了つた。レスターはその儘シカゴへ歸つて行つて、又沈黙の幾ヶ月か續いた。

妻が亡くなり、娘が結婚したので、アーチボード・ケインは、長男のロバートと一緒に暮すことにした。三人の孫達が年老いた彼を慰めたからだつた。彼の死後になつて整理を必要とするものは別として、商賣のことは皆ロバートが采配を振つてゐた。ロバートはやがて自分が總ての實權を握る日を豫想して、妹達、その配偶者、また父親にいつも愛想よく振舞つた。彼は決してお追従者ではなく、抜目のない、冷靜な事務家肌の人物で、弟が考へてゐた以上に抜目になつた。彼は既に自分のどの兄弟二人を合はせたよりも資産を有つてゐたが、それはそつと内證にして、金のあるやうな素振りは見せなかつた。人から妬まれるのを恐れて、厳格なスパルタ式の生活を営み、人目に付かない而も直ちに役に立つ正金を大切にした。レスターがぐうたらな生活をしてゐる間に、彼はせつせつと働いてゐた。

ロバートが弟レスターを事業の實權に參與せしめないよ

うにとの目論見は大して必要でなかつた。と云ふのは父がシカゴでのレスターの行狀に就て考へた揚句、次男には財産らしいものを分け與へてはならぬと腹を決めたからである。レスターはロバートが考へてゐた程がつしりしてはゐないのだ。この二人を比べると、レスターは智的にも情的にも傑れてゐた——社交や趣味の點では段違ひだつた——併しロバートは黙々のうちにたつぷり金を貯めて了つた。レスターが今眼を醒まさなければ、一體どういふことになるのだ？ それよりは、頼み甲斐のある者に財産を譲つた方が宜い。そこで父親は慎重に考慮した結果、公證人に遺言を書換へさせて、若しレスターが考を改めない限り、ほんの名ばかりの財産を譲ることにしようかと考へた。けれども今一度考へ直させる機會を與へ、今迄の間違つた生活に乗せて、世間に顔向けの出来るようにしてやらうと決めた。それにはまだ遅くはない。レスターには立派な未來があるのだ。彼が態々それを投げ棄てるやうなことをするだらうか？ 父はレスターに手紙を書いて、お前の都合の宜い時に會つて話したいと言つてやつた。一日半と經たないうちに、レスターはシンシナチへやつて來た。

「お父さん、氣を落着けて下さい」とレスターが早口に言つた。「激して下すつては困ります。私の言つてゐるの

「いや、分つてゐます」とレスターが落着いて答へた。

「お父さん、若し時には、子供達の結婚に就ては何も干渉しない積りでゐたが、年を取るにつれて考へ方も變つて來た。

商賣をしてゐる中に、結婚の、取引に及ぼす影響と云ふものが分つて來たのだ。それで自分の子供達がうまく結婚して呉れるやうにといふ氣になつた。レスター、お前のことではわしも頭を悩ましてゐたし、今でも心配してゐるのだ。

近年お前が仕出かしてくれた問題のお蔭で、わしは頭の休まる暇もない有様だ。お母さんもそのことでは死ぬまで悩み續けた。それがお母さんの大きな悲しみだつた。この位の處で覺を附けたらどうなの？ お前の噂は此處までも擴がつてゐる。シカゴではどんなだか知らないが、祕密で通せるものではない。それが爲めにシカゴの店が旨く行く譯はないし、お前個人の爲めにだつてなる筈はない。これ程長い間のことだから、お前はどつちを向いても面目ない仕儀になつてゐるのだ。それでも未だ止めようとはしない。一體どういふ氣持でゐるんだ？」

「それは、僕があれを愛してゐるからです」とレスターが答へた。

「本氣でそんなことを言ふのぢやあるまい」と父が言つた。「若し愛してゐるのなら、先づ第一に結婚した筈だ。永年の間女と同棲し、相手も自分も不面目な思ひをしなが

ら、それでもその女を愛してゐるとは受取れない。情慾で結びついてゐるとは言へるだらう、けれどもそれは決して愛情ではない。」

「お父さんは私が結婚してないことが、どうしてお分りなんでしょうか？」とレスターは冷かに尋ねた。彼は父がそれをどう取るか知りたかつた。

「眞面目になるが、いゝ！」さう言つて老父は兩肩を張つて身構へ、レスターを凝視した。

「まだ結婚はしてゐません」とレスターが答へた。「けれども結婚しないとも限りません。結婚するかも知れないのです。」

「馬鹿な！」と力を籠めて父が言つた。「わしは信じない。レスター、お前程の頭のある者が、そんなことをするとは信じられない。頭がどうかしてゐるな？ 長い間公然と不義の關係を續けてゐて、今更結婚するなど、嘯く。若し實際結婚するのなら、何故最初にさうしなかつたのだ？ 兩親の顔に恥を塗り、母親の心を苦しめ、事業の妨げをし、世間の物笑になつて置いて、それから問題の對象と結婚すると云ふのか？ そんなことは信じられん。」

老アーチボードは立ち上つた。

「お父さん、氣を落着けて下さい」とレスターが早口に言つた。「激して下すつては困ります。私の言つてゐるの



は、結婚するかも知れないと云ふだけです。あれは悪い女ではありません。そんな風に仰言らないで下さい。未だお會ひになつたことはないし、何にも御存知ないのですから。」

「わしは知つてゐる」と、老アーチボードがきつぱり言つた。「善い女なら、あんなことはしない筈だ。財産を狙つてゐるのだよ。他に何を欲しがらるものがある？ そんなこととは分り切つてゐる。」

「お父さん」とレスターは、無氣味に聲を低めて言つた。「何故そんな風に仰言るのですか？ あれにはお會ひになつたことはなし、白いも黒いも御存知ないのです。ルイズが歸つて、尾に鱗つけて言ふことを鵜呑みにしてゐらつしやる。あれは御想像のやうな悪い女ではありません。若し私がお父さんの立場にゐたならば、そんな風には言ひますまい。あなたは善良な女を、不當に見ていらつしやるのです。どんな理由からか、お父さんは公平であるまいとお考へのやうです。」

「公平か！ 公平か！」と、アーチボードは遮つた。「公平だなんて口を利くのなら、お前が街の女と一緒にゐるのが、わしに對して、お前の家に對して、また死んだ母親に對して公平な仕打だと言ふのか？ お前が——」

「止して下さい」とレスターは、手で恰好をしながら叫んだ。「ねえ、そんな風に仰言るのなら、僕はお聞きしません

「で、お前はあれと結婚する氣であるのかね？」と父親が言葉を續けた。

「僕は結婚するとは申さなかつたのです」と息子が答へた。「結婚するかも知れないと言つただけで。」

「かも知れない！ かも知れない！」と父はまたも怒りを感じて叫んだ。「お前には前途があるのだ！ 何と云ふ悲劇だ！ 一體世間での善悪の標準を無視するやうな人間に、わしの財産を鏹一文だつて任す氣になれると思ふか？ いか、レスター、お前はこの車輛事業も、家族も、又お前個人の名聲も何とも思つてゐないやうだな。一體お前の自尊心はどうかしてゐるな。途轍もない無茶な氣紛れとしか思はれないよ。」

「お父さん、それは却々説明の出来るものではありません。僕には巧くお話し出来ません。たゞ僕は、自分がこの事件に頭を突込んでゐること、それは自分で始末しなければならぬと云ふことを知つてゐるだけです。都合よく落着くかも知れませんが、僕は彼女と結婚しないかも知れず——するかも知れません。僕は未だどうするか申上げるだけの準備がありません。暫くお待ち願ひたいのです。出来るだけ考へてします。」

老アーチボードは不承知らしく頭を振つた。「レスター、お前は全く飛んでもないことをしたのだ、い

よ。今僕と一緒にゐる女、僕が結婚するかも知れぬ女のことを話してゐるんではありませんか。僕はお父さんを愛してゐます。併しそんな風に言つて戴きたくありません。あれは街の女ではありません。僕がそんな女を相手にしないことは、お父さんだつて百も御承知の筈です。もつと落着いてこの問題をお話し出来ないのなら、僕はお暇します。僕は濟まないと思つてゐます。本當に濟まないのです。けれども、あんなお言葉はお聞きしたくはありません。」

老アーチボードは自制した。彼は自分が、反對の意見にも拘らず、息子の言葉を尊重した。彼はまた椅子に腰を下して床を眺めた。「一體どう云ふ處置をしたものだらう？」と彼は自問した。

「お前は以前と同じ處に住んでゐるのかね？」と彼はやうやく口を切つた。

「いえ、ハイド・パークへ移りました。一戸建てを借りてゐます。」

「子供があると云ふが、お前の子供かい？」

「いえ。」

「お前の生ませた子供が何處かにあるかい？」

「それが何よりのめつけものだ。」

レスターは顎のところを搔いただけだ。

や全くだ。そしてお前は、自分の好きなやうにする積りなんだらう。わしの言つたことは、ちつとも身に沁みてないやうだ。」

「今のところその氣になれません。でも、濟まないとは思つてゐるのです。」

「では言つて置が、お前が家名や、自分の名譽を重んじないやうなら、わしにも遺言狀の書き方がある。この儘にして置く譯には行かない。道徳上から言つても、またどんな點から考へても、わしがそれを承認することは出来ない。そんなことは眞平だ。あの女と別れるのもよし、結婚するのもよしだ。若しお前があの女と手を切ると言ふなら、何とでもしてやらう。金も遣りたいだけ遣るがよい。それは文句は言はない。お前の望むだけ出してやらう。そしてわしが決めてある通り、お前も他の兄弟達と同様に財産を分配してやる。だが結婚するのならば話が別になる。どちらにでも決めるが宜い。けれどもわしを悪く思はないで貰ひたい。わしはお前を愛してゐる。わしはお前の父だ。そしてわしは自分の務めと思ふことをやつてゐるだけだ。篤と考へて、お前の腹を聞くことにしよう。」

レスターは溜息をついた。これでは全く望がないと思つた。恐らく父は自分の言つたことを實行するであらう。と云つてジェニーと別れて、それで自分の腹の蟲が承知するだ



らうか？ 本當に父は自分を除け者にするだらうか？ いや、そんなことは決してない。老父は今も尚彼を愛してゐる、それは目に見えてゐた。レスターは困惑して了つた。父から強制的に出られてじり／＼した。この自分が強ひられてジェニーを捨てると思ふのだ。彼はじつと床を見詰めた。

老アーチボードは、思ふ壺にはまつたなと思つた。

「今日はこれ以上お話しする必要はありませんでせうね？ 今後の考に就ては、今申上げることが出来ません。もつとゆつくり考へなければなりません。茲では極め兼ねます。」二人は互に顔を見てゐた。レスターはこの事件に對する世間の態度や、父の過敏な神經に慄らなかつた。父は息子を可哀相だと思つたけれども、何處までもやり通す決心だつた。レスターが、彼の言ふことを聴くかどうかは不明だつたが、まだ脈はあると思つた。多分正氣に立ち歸るであらう。

「ではお父さん、失禮致します、」とレスターが手を出しながら言つた。「二十十分の列車に間に合はさうと思ひますから。もう他にはお話しはございませんか？」

「いや、もうない。」  
息子が去つてから、父は深い思ひに沈んでゐた。何とこじれて了つたのだらう！ どんな成功でも出来たものを臺

無しにして了つた！ 間違ひだらけの生活にこだはつて！ 彼は頭を振つた。ロバートの方が利口だ。事業をやつてゆけるのは彼だ。彼は冷靜で保守的だ。レスターがあんなであつてくれたら、彼は色々考へた。そして席を立つたのは、それから餘程経つてからであつた。併し猶ほ、彼の心の奥底では、この不肖の息子が氣がかりだつた。

## 四〇

レスターはシカゴへ歸つた。彼は、その程度こそ分らなかつたが、兎に角非常に父の怒りに觸れてゐることを感じた。今まで父との個人的な關係で、父があれ程熱したことにはなかつた。だが今になつても未だ、レスターは、二人の不和が取返しつかないものであるとは思はなかつた。そして父の愛情と信用を取戻すには、どうしても斷乎たる處置を取る必要があるとは殆ど思ひ到らなかつた。一般世間に就て言へば、どれだけ人の口の端に上らうと構ふことはなかつた。自分は最早平氣でゐられると思つてゐた。だが果して然らうだらうか？ 世間では、弱みがあるか、或はそんな嫌疑でもあると、直ぐに人に背を向けて了ふ。ほんの一寸したへ、までもやりたくないと云ふ氣持が、普通の人間の潜在意識にある。我々は失敗と云ふものが傳染するかの

やうにして、逃げ廻るのである。レスターもやがてかう云ふ偏見に捉へられたのだ。

或日、レスターはベリイ・ドッジと云ふ百萬長者に出會つた。彼の主宰してゐるホルブルック・キングズベリイ商會の呉服物商世界に於ける位置は、ケイン商會の車輛工業界に於ける位置と匹敵してゐた。ドッジは以前レスターの親友の一人であつた。レスターは、クリイヴランドのヘンリー・ブレイスブリッジとか、シンシナチのジョージ・ノールズを知つてゐると同様に、このドッジをもよく知つてゐた。レスターはノース・ショア・ドライブにある、彼の立派な邸宅をよく訪問して、事業のことに就ても、社交上に於ても、二人は常に相會してゐた。ところが、レスターがハイド・パークに引移つてからは、以前の親交は杜絶してしまつた。そしてこの日、二人はケイン商會の程近く、ミシガン・アヴェニューで顔を突き合せたのだつた。

「いやあ、レスター君、これは暫くだつた、」とドッジが言つた。彼は形式的に握手をしたが、何處か冷かなところがあるやうだつた。「その後君は引越して結婚したさうだね。」  
「なあに、そんなことはないよ、」と、彼は世間普通に解釋して貰ひたいらしく、氣樂に答へた。

「結婚したのなら、何もそんなに隠すことはないぢやないか？」とドッジは不愉快さうに口角を上げて、強ひて微笑を

浮べながら言つた。彼はなるべく好意を見せて、この難關をうまく切り抜けようと努めたのだ。「どうも僕等は、さうした問題でよく大騒ぎをするものだが、友達にはちやんと明かさなけりやいけないよ。」

「いやあ、」とレスターは、段々自分の身に迫つて來る社會的因習の鋭い鋒先を感じながら言つた。「僕はね、從來の風習を打破したいと思つてね。僕はさう云つたことで餘り騒ぎたくないのさ。」

「つまるところ、趣味の問題だらうからねえ？」とドッジが氣のない調子で言つた。「無論今でもシカゴの市内に住んでゐるんだらうねえ？」

「あゝ、ハイド・パークだ。」

「そりやあ良い處だ。ときに景氣はどうだね？」とドッジは一應別れの挨拶をする前に、巧みに話題を轉じた。

レスターは、若し自分が本當に結婚したと思つてゐればドッジのやうな男なら、當然言ふべき言葉を發しなかつたのを氣附いた。普通の場合だつたら、友人はケイン新夫人に就いて知りがつたに相違ない。同等の身分の人々の間であつたならば、それに共通した親しみの表現があるべき筈である。必ずドッジは、レスターに、新妻を連れて來てくれと言つたらう。又自分から訪問することを約束したに違ひない。けれどもそんな事は變氣にも出さなかつた。レス



ターは、この意味深い沈黙に氣附いたのだつた。  
さう云つた態度は、バーナム・ムーア一家、ヘンリー・オー  
ルドリッチ一家、その他レスターが等しく親交のある多くの  
人々に就て見ても同じだつた。表面では彼等は、レスター  
が結婚して家を持つたものと考へてゐたらしく見えた。彼  
等は何處へレスターが居を構へたのかを知りたがり、彼が  
何處までも秘し隠しにするのを押搦ひたがるのではあつた  
が、問題のケイン夫人に就いては一言も觸れなかつた。レ  
スターは、始めて自分の行動が世間の批判的となつてゐ  
るのを覺つた。

最も手非道い打撃は、ユニオン俱樂部で舊友ウィル・ホイ  
トニーから受けたものだつた。それが何等含む所のないも  
のであつただけに、一層レスターは身にこたへた。或夕方、  
レスターはユニオン俱樂部で夕食を攝つたが、ホイットニー  
が外套室から、煙草賣場に行かうとしてゐるところを、讀  
書室の眞中で出會つたのだ。この男は典型的な社交人で、  
瘦せて丈が高く、艶々した顔に、りゆうとした服装だつた。  
幾分皮肉味もあつて、殊にこの日は酒が利いてゐた。  
「おい、レスター、」と彼が呼びかけた。「ハイド・パーク  
で巢を作つてゐる噂だが、却々油断がならんねえ。——  
愈々結婚したら、奥さんに、どう言ひ譯して聞かせる積り  
だね？」

「僕あ、何も言ひ譯することなんか無いよ、」とレスターは  
苛々しながら答へた。「一體どうして僕のことさう口を  
出すんだい？ 君だつて石の館に安穩と暮してゐるわけ  
やあるまい？」  
「は、う、うまいことを言ふな！ いゝ氣持でゐると見え  
る、どうだね？ ノース・サイドで一緒に連れ廻つてゐたあ  
の可愛い、あれと結婚したんぢやあるまいな？ え、圖  
星を指されたらう。は、う、さあどうだ。君が結婚したな  
んて談話だらう！ そんなことはないんだろ、え、どうな  
んだい？」  
「よして貰はう、ホイットニー、」とレスターが荒々しく言  
つた。「馬鹿なことを言ふもんぢやないぞ。」  
「こりや失敬、」と相手は言つて、稍々眞面目になつた。  
「いや、僕が悪かつたよ。少し廻つてゐるものだからね。あ  
すこでウキスキー・サワズ(ウキスキーにレモ)を立てつゞけに八  
杯さ。失敬々々、何時か正氣の時に改めて話をしよう。い  
いかい？ う、う、う、あは、僕も少しだらしがない男だ  
よ、ぢやあ、またその内に。は、う、う。」  
レスターは「は、う、う」と云ふ不愉快な笑聲が耳について  
仕方がなかつた。それは酔拂ひの口から出たのだが、彼に  
は非道くこたへた。「ノース・サイドで君と一緒に連れ廻つ  
てゐた、あの可愛い女と結婚したんぢやあるまいな？」彼は

腹立まぎれに、ホイットニーの不躰な言葉を自分で言つて  
みた。こん畜生！ 少し穩かでなくなつたぞ！ 彼、レス  
ター・ケインが、こんなことを言はれて黙つて我慢したこと  
はないのだ。彼は反省するやうになつた。事實彼はジェニー  
と懇にしてゐる爲めに、大分痛い目に遭はなければなら  
ないのだ。

四一

ところが、もつと悪いことが待つてゐた。アメリカ人は  
知名な人物の噂が好きである。ケイン一家は金もあり、社  
交界にも名高かつた。そのケイン家の重な後継者の一人で  
あるレスターが、一介の給仕女と結婚したと云ふのである。  
百萬長者の後継者なのだ！ そんなことがあり得るものだ  
らうか？ 願つてもなき新聞の特種だ！ 忽ちにして記事  
が紙面に現はれた。サウス・サイド・パジエトと云ふ社交記  
事本位の小新聞が「シンシナチの有名な車輛製造家の息子」  
とだけで、本名は出さずにレスターのことを書いた。それ  
には事件の輪郭を簡單に傳へてあつた。「その夫人某に就  
いては、クリイヴランドの有名な家庭で女中を勤め、その  
前はオハイオ洲コラムバスで女工をしてゐたと云ふことが  
知られてゐるに過ぎない。上流社會にはかうした夢のやう

な戀物語があるのであつてみれば、ロマンスは未だ滅びた  
りとは言ひ得まい。」

レスターはこの記事を見た。彼はその新聞を取つてゐな  
かつたのだが、その記事に赤線を附けて、親切にも彼に郵送  
してくれたのだ。それは明かに彼を強請る計畫だと考へて  
彼は非常に立腹した。けれども彼にはその對策策はなかつ  
た。無論彼はこんな記事の出ないことを望んだが、もし之  
を止めさせようとして、却つて事態の悪化を招くのを恐れ  
た。で、その儘に放任して置いた。ところでパジエト紙の記  
事が、他の新聞の注意を呼んだのは無理もない事だつた。  
面白い讀物になりさうだ、と云ふ譯で、就中大膽な一日曜  
新聞の記者が、このロマンスを調べて、書かうと思ひ立つ  
た。「召使女との戀の代償、百萬弗」と云ふ、人騒がせな見  
出しを附けて、一頁全面にわたる讀物を作り上げようとい  
ふのだ。レスター、ジェニー、ハイド・パークの邸宅、シン  
シナチにあるケイン商會の工場、ミシガン・アヴェニューの支  
店倉庫等の寫眞も集める——これは屹度讀者を沸かせるに  
違ひない。而もケイン商會はどの新聞にも廣告を出さない  
のだから、新聞は何の遠慮もない譯だつた。若しレスター  
が豫め聞きこんでゐたならば、その新聞へ廣告でも出すか、  
或は發行者に頼んで記事を書かせずに済んだでもあらう。  
ところが彼はそんなことゝは露知らなかつたので、手の下



しやうがなかつた。その新聞記者はすっかり手順をつけて了つた。シンシナチ、コラムバス、クリイヴランド、各地方の新聞と連絡を取つて、ジェニーに關する報道を電話で受けるやうにした。クリイヴランドのブレイスブリッジ家を訪問して、ジェニーが嘗て雇はれてゐたかどうか確かめられた。ゲルハート一家に關する尾に鱈つけた話がコラムバスで集められた。ジェニーの結婚前數年間に互つてノース・サイドで暮してゐたこともほゞくり出され、かくして話の筋が巧につき合はされた。記者はもとゞり慘酷に悪口を書き立てる目的ではなく、寧ろ祝福する積りであつた。だからヴェスタが私生兒であることや、彼等二人の非合法的な同棲生活や、二人の結婚に對する家族の反對する實際の根據等には言及しなかつた。その記者の考へでは、所謂現代のロメオとジュリエットを作り上げ、その中でレスタターは熱烈な、獻身的な戀人として登場し、ジェニーは貧乏で可愛い自助的な娘として現はれ、それが百萬長者の息子の愛によつて玉の輿に乗るに到つた次第を語らうと云ふのだつた。そして有數の挿繪畫家を煩はして、物語の色々の場面を描かしめ、あくまで煽情的新聞の型に則つて作り上げられた。シンシナチの寫眞師につかませて手に入れたレスタターの寫眞もあつた。ジェニーの散歩してゐるところを、こつそり寫眞部の者の手で撮影したりもしたのである。

斯うして青天の霹靂と云つたやうに、その記事が現はれた。それは美辭を連ね、懇慫に綴つてはあるが、陰慘な事實が背景としてぬつと大きく浮んでゐた。ジェニーは初めは氣附かなかつた。レスタターは偶然それを見附けたが直ぐ破つて了つた。彼は言ひやうもなく狼狽し、煩悶した。「自分の仕事をおとなしくやつてゐる市民に對して、こんなことをするなんて怪しからん新聞だ。」自分の深い苦悶を押し隠すには外出が一番いゝと思つて家を出た。町の賑やかなところ、殊に下町の方面を避けて、コッテジ・グロウヴ・アヴェニューを眞直ぐに、田舎へと志した。電車に揺られながら彼は、ドッジや、バーナム・ムアや、ヘンリー・オールドリッチやその他の友人達が、どんな風に思つてゐるだらうかと考へた。これは一撃の下に粉碎された形だつた。彼の取り得る最上の方法は、敢然これに面して一語も發せずにあるか、或は何でもないことのやうに手を振つて否定し去るかであつた。が、これ以上新聞に書かれる事を阻止せねばならなかつた。彼は幾分平靜になつて家へ戻つた。心の均衡は回復してゐたが、月曜日には法律顧問であるワトスン氏に會つて、是非相談したいと思つた。ところでワトスン氏に面會してみると、法律に訴へるのは捌巧な遣り方でない云ふことになつた。放任して置く方が賢明であつた。「だが、これ以上やられてはたまらない。」

「それは私にお委せ下さい、」と顧問が慰めるやうに言つた。

レスタターは立ち上つた。「全く驚き入るよ——この分らずやのアメリカと云ふ處は——と彼が叫んだ。「少しばかり金があると、もう記念碑か何かのやうに曝しものにされるんだからね。」

「いやあ、少し金のある人間は、」とワトスン氏が引取つて言つた。「首の周りに鈴を附けた猫みたいなものですよ。鼠共は皆その猫が何處にゐるか、何をしてゐるか、ちや、あんと分るんですからね。」

「いや旨い比喩だ、」とレスタターは難かしい顔で同意した。ジェニーは五六日程も、この新聞記事に就いて何事も知らなかつた。レスタターは自分からその話を持出す氣にはなれなかつたし、ゲルハートは、縁でもない日曜新聞などは、一度だつて手に取つたことがない。ところが、近所の奥さんの一人が無遠慮に、自分はその新聞を見たと言つて、ジェニーの注意を呼んだ。ジェニーは直ぐには意味が分らなかつた。「私のことですか？」と彼女は聲を高くした。「え、あなたと御主人様のことですよ、」と客が答へた。「あなた方のロマンスなんですか。」

ジェニーはさつと赧くなつた。「まあ、私まだ見ませんでしたわ、本當に私達のことなのですかしら？」

「そりや、あなた、」とステンドル夫人は聲を立て、笑つた。「間違へよう筈がありませんもの。家に行けば新聞がありますの。歸りましたらマリーに持たせて寄越しませすわ。あなたのお美しい寫眞が出てゐますのよ。」

ジェニーは縮み上つた。

「どうかお願ひ致します、」と彼女が力なく言つた。

一體自分の寫眞を何處で手に入れたのか、新聞にはどんなことが書いてあるのだらうか？ 殊にそれがレスタターにどう影響するかを考へて、彼女はうろたへ氣味だつた。レスタターはその記事を見たのかしら？ もしさうしたら、何故自分に話して呉れないのだらうか？

約束の新聞を近所のお嬢さんが持つて来てくれた。その第一面を見た時、ジェニーの心臓は一時に動かなくなつた。残らず曝け出されてゐた——何の情け容赦もなく。おぞましくも、その見出しの目に立つこと——「この百萬長者、この小間使のため戀の囚虜となる。」左側にレスタター、右側にジェニーの寫眞を掲げて、その間にさう説明があつた。その上に、割見出しで、このシンシナチの有名な車輛業者の息子レスタターが、社會的地位と幸福を抛つて、いかに自分の戀ひ焦るゝ女人と結婚するに到つたか、と記してあつた。記事の中には多くの挿繪があつて、ブレイスブリッジ夫人の邸宅でレスタターがジェニーに話しかけてゐる所や、二人が鹿爪



らしい牧師の前に立つてゐる所や、瀟洒なウィクトリヤ四輪馬車を驅つてゐる所や、ジェニーが立派なお屋敷(それは豪華な帷帳の様子で明かである)の窓際に立つて、遠景にある賤しい労働者の住居を眺めてゐる所などを現してあつた。ジェニーはもう恥しくて絶え入るやうな氣がした。自分自身に取つてよりも、レスターの心持を推測して堪らなかつた。それに彼の家族の者達がどんなに思ふことだらう? かうなると、彼等は自分達二人を責める種が出来たと云ふものだ。彼女は心を平靜にしようとした。努めて感情を制御しようとした。けれども又しても涙がこみ上げて来るのだ。だが今度のは自らの敗北に對する反抗の涙であつた。こんなにまで追ひ廻されたくはない。彼女は構はずに置いて貰ひたかつた。今度こそは、正しい生活に歸らうとしてゐたのだ。どうして世間と云ふものは、自分をこんなに苦しめたりしないで、頼りになつては呉れないのであらう?

四二

レスターがその新聞を見たとき云ふことは、同じ日の夕方にジェニーに分つた。彼は色々考へた末、是非持つて歸つて見せるべきだと心を決めたのである。嘗てレスターは二人の間には隠し事があつてはならぬと宣した。今、無法にも

彼等の平和を攪き亂さうとするこの事件は、やはり秘密にして置くべきものではないのだ。彼はジェニーに、今度の事は考へないようしろ——自分には大打撃だが、二人の間は變ることはないのだと言ふ積りだつた。この冷酷な新聞記事の影響は今更どうしようもなかつた。レスターの社交仲間にしる、或はそれ以外の者にしる、所謂世間人は皆レスターが今までどんな生活をしてゐたかを知つたのだ。挿繪入のこの記事で、彼がジェニーを追つて、クリイウランドからシカゴへ来た次第、又ジェニーが非常な恥しがり屋で、レスターは彼女をものにするには、どんなに長い間口説を必要としたか、その経路が總て明かになつた。それによつて、彼等二人がノース・サイドで同棲してゐた譯も分つた。レスターから見れば、これは事實を甘つたるい衣で包んだと云ふことに腹が立つた。けれども、もつと非人情な暴露よりも、彼はまだこの方がましだと思つた。歸宅すると彼はポケットから例の新聞を出して、書齋の机に擴げた。傍らにゐたジェニーは彼を見成つてゐた。これから何が飛び出すかを、彼女は知つてゐたからである。

「ジェニー、お前に面白いものがあるよ、」と、問題の記事と挿繪を指さしながら、彼が愛想なしに言つた。「私も見ましたの、」とジェニーが元氣なく答へた。「ステンドルの奥さんが今日見せて下さいましたの。あなたも御

覽になつたかどうかと思つてみましたわ。」

「随分僕のことを大袈裟に書いてあるぢやないか? 僕もかうまで御執心なロメオだとは知らなかつたよ。」

「レスター、本當にお氣の毒ですわ、」とジェニーが言つた。彼の戲談まじりの言葉の裏に潜む、彼にとつて、容易ならぬ意味を見て取つたのだ。彼女はずつと以前から、レスターが自分の感情、本當に辛く思ふことを、その通り口には出さないのを知つてゐた。彼は不可抗力に對しては戲談を言つたり、無造作にこれを片附けようとする傾向があつた。で、このあつさりと言つて退けた言葉の中には、「どうにも仕方がないのだから、出来るだけ損害を少くしよう、」と云ふ意味が含まれてゐたのだ。

「悲觀するには當らないよ、」と彼は言葉を續けた。「今になつては何とも出来ないことだ。大して惡氣があつて書いたのではあるまい。たゞ僕達が、偶然評判の種にされたよけさ。」

「そりやさうです、」とジェニーが彼の方へ近づきながら言つた。「でも、何にしても私濟みませんわ。」間もなく夕食の知らせがあつたので、この話題は閉ぢられた。

けれどもレスターの頭には、事態が益々面白くなるかと云ふ考へが附纏つてゐた。この前會談した時に、父はかなり判然とこのことあるを指摘した。而も今、この新聞記

事は問題をその絶頂に持ち來したのだ。彼は昔の交際社會への絶縁は平氣だつた。昔馴染はもう彼を顧みないだらう。少くとも保守的な連中はさうだらう。無論少數の獨身者、結婚はしたが相變らず陽氣な男、或は結婚した、しないに拘らず世間ずれのした婦人達は、一切を心得てゐて不相變彼を好いたけれども、そんな人達では社交界は成立しなかつた。彼は全く追放されたのだつた。改悛の實を擧げない限りは救はれないのだ。言葉を替へて言へば、金輪際ジェニーを思ひ切らねばならないのだ。

でも彼は、そんなことはしたくなかつた。考へるだけでも苦しいことだ——どうしても我慢がならない。ジェニーの思考力も進んで來て、殆どレスターと同様に物事をはつきりと見分けることが出来るやうになつてゐた。彼女は安價な野心を懷いたり、附けるやうな女ではないのだ。心の寛い、立派な女なのだ。彼女を見棄てるのは男の恥辱だ、それに彼女は美人だ。レスターは四十六歳、ジェニーは二十九歳になつてゐたが、それでゐて彼女は二十四五にしか見えなかつた。或女が美人で、若くて、合性で、聰明で、自分と同じ見解を有つてゐると云ふことは滅多にあるものではない。レスターは、父が言つた通り、自分の巢が出来てゐたのである。彼は其處へもぐつて寢れば宜いのだつた。

老父が加減が悪くて衰弱してゐると云ふ報知のあつたの



は、不愉快な新聞事件後間もないことだった。レスターは何時シンシナチへ呼び戻されるか知れなかつた。彼が仕事に追はれてゐる最中に父の訃報が届いた。無論レスターは非常に驚き且つ悲しんだ。そして回顧的な、寂しい氣持でシンシナチへ歸つて行つた。彼に取つては父は偉い人物であつた。親子關係は別として、全く立派な面白い老人であつた。子供の頃にはよく父が彼を膝に載せてアイルランドの昔の生活のこと、又少し長ずると商賣上の苦勞に就いて、更に成年に達した時分には、取引上の金言や、實際經驗の智慧を彼の頭に注ぎこんでくれたものだつた。アーチボード老人はあくまで實直を旨とした。今レスターが平易な言葉で話することが出来たり、事實を直截に述べることの出来るのは、皆父の賜物であつた。「嘘をつくな」とは父の常に繰返し言ひ聞かせる言葉であつた。「自分がかうだと思つたことは、その通り言ひ現はさなければいけない。それが生命の息吹だ、眞理だ、それから眞の商賣上の成功が生れる。之を固守する者こそ立派なものになるのだ。」レスターはこの言葉を信じた。眞理を主張して止まない父を尊敬した。今やその父がこの世を去つて了つたのだ。彼は悲しまざるを得なかつた。彼は自分が父と和解出来たら宜かつたのと思つた。若し父がジェニーを直接知つたならば、必ず好きになつてくれたらうとも想像した。なる程さうは思つ

たものゝ、彼は家族との關係が旨く納まるやうな機會があらうとは考へなかつた。彼がシンシナチへ着くと烈しい吹雪だつた。雪がさかに降りしきつた。車馬の響きが鈍重に傳つて來た。彼が汽車から降りるのを迎へたのはエイミーだつた。この妹は今まで彼と仲好しではなかつたが、兄を見ると喜んだ。妹達の中では彼女が一番寛容であつた。レスターは兩腕で妹を抱いて接吻した。「エイミー、こんなにして迎へに来てくれると、全く昔のことを思ひ出すよ」と、彼が言つた。「家の者は皆元氣かね？ もう皆集つてゐるだらうな？ まあお父さんもとうとういけなくなつたね。でもお父さんは、自分の思ふ通りの生き方をなすつたと云ふものだ。自分の努力が報いられて御満足だらうと思ふよ。」「さうですわね」とエイミーが答へた。「でも、お母さんが亡くなつてからは、大層お寂しうございましたわ。」二人は道々昔話をしながら、温かい感情に浸つて家へ歸り着いた。近親の者や、その他の親戚達が、昔ながらの邸に集つてゐた。レスターは來合せてゐる人達とお定まりの悔みを交換しながら、父も長命したものだと思つた。父は功成り名遂げて、熟した林檎が樹から落ちるやうに往生したのだ。レスターは、黒い棺に納められ、廣い客間に安置

された父の顔を眺めると、自ら愛惜の情に堪へなかつた。輪廓のはつきりした、意思的な、謹直な父の顔を見て、レスターは微笑んだ。「全く一生涯を通じて、お父さんは立派な人だつたね」と彼がその場にゐた兄のロバートに言つた。「これだけの人物は直ぐには見附かるまい。」「さうだとも」とロバートが重々しい口調で答へた。葬式が済んだら直ぐに遺言を開くことになつた。ルイズの夫はバファロへ歸りたがつてゐたし、レスターもシカゴに用事を控へてゐた。葬式が終つて二日目に、親族の者達の會合が、ナイト・キートリー・オブライエン法律事務所で開かれた。この三氏は、故人の法律顧問であつた。レスターはこの會合に出席する道すがら、父が自分に對して不公平なことはしないだらうと考へた。二人がこの前に會つてから、そんな時は經つてゐなかつた。彼は考慮の期間を父から許して貰つてあつた。自分とジェニーの關係を除けば、父は彼に好くしてくれたのだ。商賣上でも彼の意見は會社の爲めになつてゐた。どうして彼を繼子扱ひにするなんてことがあり得ようか？ 彼はそんなことがあらうとは思へなかつた。一同が法律事務所に着くと、丈の低い、忙しうな、それでゐて愉快なオブライエン氏が、血族の者や、色々な關係

者を温い握手を以て迎へた。氏は二十年間も、アーチボード・ケインの個人的な相談相手だつた。氏は故人の氣質をよく呑込んでゐて、自分が懺悔聽聞僧の積りだつた。そして子供達を可愛がり、別してレスターが氣に入りであつた。「もう皆さんお集りのこと、思ひます」と彼が上衣のポケットから角縁の眼鏡を取り出して、勿體らしく一座を見廻しながら言つた。「では本題に進みます。何も前置は申上げずに、直ちに遺言狀を讀みます。」彼は机の方へ向つて、その上に置いてある紙片を取つて、さて咳拂をして徐ろに讀み始めた。それはある點では一種變つた遺言狀であつた。と云ふのは、先づ最初に餘り重要でない遺贈が擧げられた。第一に古くからの雇人や、召使や、友人等に對する少額のもの。次に公共團體に對する遺贈に關するもの。最後に近親の、それも娘達に關するものから始まつてゐた。イモージェンは誠實な愛娘として、車輛會社の株六分の一と、故人の遺産の四分の一を受け取つた。この遺産の總額は(父所有の動産で、彼女の貰つた額前ではない)ざつと見積つて八十萬弗はあつた。エイミーとルイズも同じ割合で分與にあづかつた。孫達へは丁年に達したらと云ふ條件で、若干の善行賞が遺された。それから、ロバートとレスターに就ての言葉だつ



「次男レスタアの身上に起つた或問題の爲に、爾餘の財産分配に關して、自分は或條件を附する義務を感じる。即ち、ケイン製造會社の株四分の一と、殘餘の財産、動産、不動産、現金、有價證券の四分の一は、忠實に自己の義務を遂行したる功を認めて、長男ロバートに譲渡する。次にケイン製造會社の株四分の一と、殘餘の財産、動産、不動産、現金、有價證券の四分の一は、別に定むる條件の實行せらるゝ時まで、次男レスタアの爲に、ロバートの手に於て保管さるべきものとする。而して我が希望として、我が子孫はロバートが自發的に實權を拋棄するか、或は従來行はれたるものよりも良き方法を指示するまでは、ケイン製造會社、及び彼に委託されたる他の利害に關する監督に従ふべきものとする。」

レスタアは腹の中で「畜生」と叫んだ。顔の色が變つた。けれども、身動き一つしなかつた。彼は人に見られるやうなことはしたくなかつた。彼に就ては別に項を設けては記述されてゐないのだつた。

「別に定むる」條件と云ふのは、詳細に規定されてゐたが、オプライエン氏は故人の希望によると言つて、家族の者の前では讀上げなかつた。レスタアが間もなく知つた所によると、彼は三年の間、毎年一萬弗を受取る筈で、その三年

間に、次の二者のうち、何れか一方を選ぶことになつてゐた。第一、彼が未だ結婚してなければ、ジェニーと別れて父の希望に従ひ正しい生活に入ること、と云ふのであつて、この場合には彼の受くべき遺産は直ちに彼に交附される。第二に、彼はジェニーと結婚しても可いが、その場合には、三年間特に支給する年一萬弗といふ額を、彼の存生中繼續して與へる。但し彼が死ねば、ジェニーには一文も與へないと云ふのであつた。問題の一萬弗は、エル・エス及びエム・エス株二百株の年利子であつて、その株券はレスタアが何れかに決定するまでは保管されることになつてゐた。もしレスタアがジェニーとの結婚を拒むか、或は手を切らないと云ふならば、彼は三年の期限が切れると一文も貰へないことになるのだつた。レスタアが死ねば、利子を生んでゐた二百株といふものは、當時生存せる兄弟姉妹の間で按分することになつてゐた。もし遺産相續人の側で、遺言狀に就て物言ひをつけるやうなことがあれば、彼（もしくは彼女）の額は没收されると規定されてゐた。

父が斯うまでに、自分の問題を、徹底的に考へぬいたのは、レスタアに取つて全く驚歎すべきことであつた。彼は條件を讀んで、或はロバートが之に容喙したのではないかと疑つた。併し無論それは憶測に過ぎなかつた。今まで兄が何等敵意を示したことはなかつたのである。

「一體誰が遺言狀を作つたのですか？」と少し後になつて、彼はオプライエンに尋ねた。

「いや、私達が皆御相談に與つたわけですよ、」とオプライエンは少し極りわるさうに答へた。「實際纏めるのに骨を折りました。御承知の通り、お父さんの考へを變へさせるのは難かしいのです。全く挺に負へません。お父さんはこの中、或項目のことでは、殆ど御自分の意見を棄てて了はれた位なのです。無論基本の精神に於ては、私達の意見を述べた筋合ではありません。あなたとお父さんの間の問題です。私はこれに關係する事は厭だつたのですよ。」

「いや、それはよく分つてゐますとも！」とレスタアが言つた。「そんなことで御心配なさらないで下さい。」

オプライエン氏は非常に嬉しがつた。

遺言を讀んでゐる間、レスタアは石のやうに黙りこくつてゐた。

暫くして他の者が立ち上つたので、レスタアも至極く無頓着な様子で席を立つた。ロバートも、エイミーも、ルイズも、イモゼンも吃驚りしたが、さう無暗に氣の毒だとも思はなかつた。確かにレスタアの行動は良くなかつた。レスタアは父を非常に立腹さして了つたのだ。

「これちやお父さんが少し頑固すぎるよ、」とレスタアの隣に坐つてゐたロバートが言ひかけた。「こんなにまでする

とは思はなかつたね。他にも満足に行く方法はあつたと思ふんだが。」

レスタアは難かしい顔で微笑した。「構はないですよ、」と彼が應じた。

イモゼンや、エイミーや、ルイズは何とかして慰めたいと思つたけれども、うまい言葉がなかつた。レスタアの自業自得である。「お父さんは少し非道かつたと思ひますわ、兄さん、」とエイミーが口を切つたが、彼はぶつきら棒にあらつた。

「なあに平氣さ、」とレスタアが言つた。

彼は其處に突立つた儘、若し父の意思に背いた場合には、自分の収入は一體どれ位あるかと勘定して見た。エル・エス及びエム・エスの二百株の相場は、一株千弗少し上だつた。そして時に依つて多少の出入はあつたが、まづ五六歩位の利廻であつた。この率で年に一萬弗手に入る譯で、それより多くは望めなかつた。

親族の者は別れ／＼に家路に着いた。レスタアは妹の家へ歸つたが、直ぐにもシンシナチを去りたかつた。そして仕事を口實に、誰とも晝食を共にせず、一番早いシカゴ行の列車に乗つた。彼は汽車の中で色々思案に耽つた。

これが自分に對する父の心遣ひなのだ！だがこんなことが事實あり得るだらうか？このレスタア・ケインが、三



年の間、年に一萬弗の収入ださうだ、そしてジェニーと結婚したならば、それが延びると云ふのださうだ！「年に一萬弗、」と彼は考へた。「それも只の三年間！ 何てこつた！ 少し氣の利いた事務員なら、誰だつて稼ぐことが出来る。これが父が自分にして呉れたことなのだ！」

## 四三

こんなに無理強ひされた爲めに、レスタターは家族の者に對して、少くとも當座の間、反對に立つ氣になつた。大きな間違をしたと云ふことが、最近彼にもはつきりと分つて來た。第一に、世間の指彈を避ける爲めにジェニーと結婚しないのが悪かつた。第二に、ジェニーが別れたいと申し出たのを、受けつけなかつたのが宜くない。取るべき道は、只一つしかなかつたのに、彼は全く、へまをやつて了つたのだ。彼は財産を棒に振るわけには行かない。自分の金が澤山あるわけではないのだ。ジェニーが幸福でないことは、彼にも分つてゐた。どうして彼女が幸福であり得ようか？ 彼も不幸であつた。ジェニーと結婚して、年一萬弗ばかりの金に満足できるだらうか？ そして又彼はジェニーを自分の生活から失つて甘んじ得るだらうか？ 彼は何れとも決し兼ねた。餘りにも問題は錯綜してゐた。

葬式を済ませて歸つて來たレスタターを見て、ジェニーは直ぐ何か面白くないことがあつた、何か子として父の死を悔む以外に頭を悩ますことが起つたに違ひないと思つた。一體どうしたのか不思議だつた。彼女は勞はるやうにして彼に近づいた。けれども彼の惱みはさう容易く癒やされさうもなかつた。レスタターは自尊心が傷つけられると、氣が立つて不機嫌だつた。彼の勘氣に觸れる者を殴り兼ねなかつた。ジェニーは何か自分の手で出來たらと、氣になる儘に彼の舉止を見成つてゐたけれども、彼の方では胸の中を打明けようとはしなかつた。彼はたゞ悲しんだ。そして彼女もそれに惹かれて、みじめな氣持であるだけだつた。

日が経つて行つた。父の死に依つて變化を來した財政状態は、今や慎重に考慮すべき時期に立ち到つた。工場經營の人事關係も改めねばならなかつた。ロバートは父の遺志によつて社長になつた。レスタターの地位も決めねばならなかつた。ジェニーとの關係を變へない限り、彼は株主でなかつた。事實、會社に取つては何でもない者だつた。祕書兼會計係を續けて行く爲には、一株でも持つことを必要とした。ロバートは株を多少なりとも預けてくれるだらうか？ 妹達はどうかだらう？ それとも彼等は賣つてくれないだらうか？ 或は誰か、遺言書にあるロバートの特權に逆らつて迄も、彼の爲めに骨を折つてくれるだらうか？ 現在のと

ころでは、彼等は皆レスタターに好意は示さなかつた。で彼は痛し痒しの状態に在つた。解決策はジェニーと別れる一途のみだ。それを敢行すれば、何も彼は頭を下げて株を分けて貰ふ要はない。又若しそれが出來ないならば、父の遺言を辱しめることになる。彼ははじつくりと考慮した。彼はこの先自分がどうなるか、はつきり見通しがついてゐた。ジェニーを棄てるか、前途に望みを斷つかである。何と云ふ破目に立ち到つたことだらう！

ロバートは、弟に向つて、もつと他にも方法は取れたのにはと言つたものゝ、心では斯ういふ状態になつたことを喜んだ。そろ／＼彼の希望が叶ふのだ。ロバートはずつと以前から、自分の計畫を實現したかつた。現在の會社組織を改めるだけでなく、他の車輛會社を合併して事業の擴大を計らうとした。若し東部及び西部地方の大會社を二三仲間に入れられることが出來れば、販賣上の費用を省き、生産過剩も防止され、一般に掛りが目に見えて少くなるのだ。彼はニュー・ヨークに代理者を置いて、その手で他處の車輛會社の株をこれまでに集めてゐたので、既に合同實現の準備は成つてゐた。それで何よりも、彼はケイン商會の社長に選ばれねばならない。そしてレスタターは株主でなくなつたのであるから、エイミーの夫を副社長に据ゑ、別に人を求めて祕書と會計を委せばいいのだつた。遺言の條件に従へ

ば、レスタターが本心に還るまで、株券や他の財産は、暫定的にロバートの手に保管され、その權利は彼によつて代行されることに決つてゐた。父の積りではロバートをして、レスタターを牽制させようとしたのである。彼は策を弄したくはなかつたけれども、さうするのが近道だつた。彼は正當な義務を遂行するだけなのである。レスタターが正氣に歸ればよし、でなければ、ロバートの意の儘に腕を振はせるだけのことである。

レスタターはシカゴの支店で勤務しながら、この成行が見通せた。自分は永久に會社から除外され、たゞ兄のお情でやつと支店長の格であつた。彼は然う考へると苛立したかつた。兄の口からはかうした變化の起つたことを指示するやうな言葉が當て出なかつた——萬事が以前通りに動いてゐた——けれども今ではロバートの建築が掟であることは明白だつた。事實レスタターは、年に幾許と云ふ給料を貰ふ使用人に過ぎなかつた。彼はむかつて了つた。

數週間の後、彼には是以上どうしても我慢出來ない氣持になつた。今までは自分の自由に振舞へる獨立した存在であつたのだ。例年の株主總會が迫つて來たが、父の在世中にはそれは一片の形式に過ぎず、父が一人で總てを切盛りし、裁決したのである。ところが今年には株主の割據を現出し、兄は議長になるであらうし、妹達は各々の夫によつて



代表されるであらうことは、まづ確實である。しかも彼自身はその席に出られないのである。この不面目な豫想があるにも拘らず、兄は彼に株を與へようとも譲らうとも言はなかつた。株を持たなければ、彼は重役として出席の資格もないし、また會社の役員に就く事も出来ない。レスタは辭表を認める決心をした。ぶつかるところまでぶつかるのだ。それによつて、自分がどんな意味に於ても兄の世話にならないと云ふこと、即ち自分の實力に依つて、また關係者一同の希望に依つて置なければ、自分の地位に留るものでないと云ふことを兄に見せつけるのだ。若しレスタがジェニーを棄て、會社に復歸する段になれば、一介の支店長としては満足出来るものでない。彼は簡明直截で事務的な手紙を書いた。

親愛なるロバート兄——貴下の指圖の下に會社再組織の期既に近づけることを承知致し居るも、小生は一株も所有株なきため、重役の地位も、祕書兼會計の地位も之を占むる資格なしと存じ候。就ては本書面を以て右の職務に對する正式の辭表として御受理相成度候。尙右後任及び小生今後の勤務に就ては重役會議の決議に俟ちたく存じ候。小生は單に支店長としての職に留る事に執着を覺えず候へ共、貴下將來の計畫に齟齬を來らしむる意思は毛頭無之ものに

候。右申述べたる所により小生が亡父の遺言書に記された條件を少くとも直ちには受諾せざるものと御諒承被下度候。この點に關しては貴下の御意見を是非承り置きたく希望仕候。御返書切に待上候。敬具。

レスタ一拜。

ロバートはシンシナチの會社の事務所で、この手紙に就て慎重に考へた。自分から挑戦して來るなんて、レスタのやりさうなことだつた。若しレスタが物事に對して直截的であるやうに、細心であつたならば、どんな人物が出來上つたであらうか？ だがレスタには少しも手管がなかつた——機巧がなかつた。彼は決して利口に立ち廻れないのだ——がロバートの心中では、大きな成功を望めば、どうしても狭く立ち廻らなければならぬと承知してゐた。「時には無慈悲なこともしなければならぬ、時には手管も用ゐなければならぬ」と彼は自分に言つて聞かせたものだ。「大きな勝負ごとをやる時に、事實を見極めて策を立てないと云ふことがあるか？」彼は考へたことを、その通り實行したのだつた。

ロバートは、レスタと云ふ男が禮儀も辨へてゐて、自分の弟でもあるのだが、容易にこつちの思惑通りにならないことを知つてゐた。彼は、あまりにも無遠慮に意見を吐き、論争好きだつた。若し彼が父の希望通り遺産の分割にあづかることになれば、當然會社の經營に割込むのである。レスタはロバートの行手の障害になるわけである。ロバートが之を望む等はなかつた。レスタがジェニーに、少くとも當分の間くつゝいてゐて、段々影が薄くなつて行くのが、ロバートには好ましかつたのである。

長い間考へた末、ロバートは政略的な返事を書いた。自分はどうなにしたら宜いか、未だ決心がつかないでゐる。それに妹達の夫の意向も不明だ。で、是非とも協議をしなければならぬ。自分一個としては、出来ることならレスタが、祕書兼會計の職に留つてゐてくれることを希望する。差當つて、従前の通りその儘職に就いてゐて貰ふのが好都合だと書いた。

レスタは憤慨した。何だつて兄はこつちを搜ぐるやうなことをするのだらう？ 「出来ることなら」など云ふまでもないのだ。一株だけでも譲けて呉れたならレスタは資格が出来るのだ。ロバートは弟を恐れてゐた。それが根本問題だ。なんの、自分は支店長の職などは蹴飛ばしてやるんだ。直ぐに辭職するんだ。そこでレスタは折返して手紙を書いて、種々考慮の末、自分は當分の間、一人でやつてみたいことがあると言つてやつた。都合をして誰か人をシカゴへ寄越して支店の事務を受繼がして欲しい。一月

だけ待つてもいい。さう書いた。すると數日ならずして遺憾の意を述べた手紙が來て、ロバート自身としては非常に残念ではあるが、レスタが決心してゐると云ふのならば、計畫の邪魔はしたくない。イモジェンの配偶者ジェファスン・ミジリーが、以前からシカゴで住みたいと希望してゐるから、當分の間、支店の世話をさせても宜いと云ふ文意だつた。

レスタは微笑した。どう見ても兄は今度の微妙な局面を出来るだけ有利に導かうとしてゐるのだ。ロバートは、弟が法律に訴へて事を面倒にすることも出来るのだが、決してそんな手段に出る弟ではないと見抜いてゐた。この紛擾は必ず新聞の手にかゝる、自分とジェニーとの評判は未だほとぼりが冷めないでゐた。レスタにとつて最善の解決法は、ジェニーを棄てることである。問題はやはり此處に戻つて來るのだ。

#### 四四

今四十六歳だと云ふレスタ一程の年輩になつて、たとへ最近貰へる事になつた一萬弗を合せて年一萬五千弗の收入こそあれ、何の縁故も持たぬ廣い世間へ投げ出されては面喰はざるを得ない。レスタは、自分が若し近い將來に何



か巧い儲け口を見附けなければ、一生浮ぶ瀬がなくなると自覚してゐた。勿論ジェニーと結婚する事は出来る。さうすれば自分の死ぬまで年一萬弗は貰へるのであるが、ケイン家の財産の正當な分前に與ることは出来なくなる。また現在彼は約五千弗の利子を生む七萬五千弗の持株があるが、それを全部賣拂つて、例へば商賣敵の車輛會社に投資することも出来るのである。併し現在のやうな立場にある彼が自分から飛出して行つて、父の會社に戦を挑む氣になれるだらうか？ のみならずそれは困難な仕事である。同業界の牛耳を取つてゐるケイン商會を向うに廻すのは容易でない。今レスタターが動かせる資本と云つては、七萬五千弗だけだ。彼は果してそんな小規模の、人目につかぬ企畫で満足するだらうか？ 現今の狀態では、車輛事業界に足場を作る爲には金が必要なのだ。

レスタターの缺點と云ふのは、想像力にも洞察力にも恵まれてゐながら、大事業に成功する必須要素である所の唯我獨尊的主張をあくまで頑強に、無慈悲なまでに貫き得ない點に存した。一般に事業界の立物となるには、自分の舞臺として擇んだ事業の發展の爲に、神から授けられた唯一つの思ひつきを固守するでなければならぬ。つまり或一つの物、例へば石鹼、新型鋸切り、安全剃刀、或は自動車の加速装置、何でもよいので、それが自分の想像力を烈しく

左右し、猛火の燃立つやうに、自分の全存在を支配するの  
でなければならぬ。このやうな白熱的精神状態に入るには、貧乏で、且つ若いことを必要とする。自分が發見し、これから専心にやつて行かうとする仕事か、前途に多くの機會と喜びを齎らすのでなければならぬ。幸福は未だ手の届かない處にある必要がある。でなければ、燃え立つべき心熱も燃えない——成功へのために必要な衝動も不足するのである。

レスタターは無くてならぬこの心熱を缺いてゐた。彼は最早、所謂人生の喜びを、殆ど知り盡して來た。世間が八釜しく騒ぎ立てる快樂そのもの、幻影を、見破つて來た。無論金の世の中で、彼はその金も持つたことがあつて——樂に暮しが出來た。だが彼には一か八かやつつけるだけの勇氣があるだらうか？ 彼は自分の身の周りを眺めた。恐らく彼には勇氣がある。確かに彼は、安閑と坐りこんで、他人が働いてゐるのを、傍觀する自分を想像するに堪へなかつた。

結局、彼は自身で形勢の調査に乗り出す決心をした。だが何も急ぐ必要はないのだ。失敗を招きたくないだけだ。彼は先づ最初に、車輛の製作販賣に従事してゐる人達に、兎に角當分の間は自分がケイン商會と關係を絶つて、他に連絡を取ることも自由な地位にあると云ふ印象を與へるに如く  
ルや、カルナックの神殿に詣では、複雑で力強い、完成した古代埃及文明から學ぶ所があつた。こゝにも數百千萬の人々が異なる神々を信じ、異なる政體を持ち、異なる生活を營んで生き且つ死んで行つたのである。生れて始めてジェニーは世界の廣いことを判然と知つた。かうした見地から——衰頹した希臘、破滅した羅馬、或は忘却せられた埃及などの見地から眺めると、自分達の些細な困難とか、區々たる信念等と云ふものが實に無意味なものだと感じられた。父の信じてゐるルーテル教主義も大したものとは思はれないしオハイオ州コラムバス市の經濟生活も、なんだか無意味に考へられる。母は隣近處の口の端を氣に病んでゐたが、こゝには善惡取り混ぜて死滅した人間の世界があつた。レスタターの説明によると、諸民族の間に於ての道德上の異なる標準と云ふものは、氣候に因ることもあれば、宗教的信仰に因ることもあり、又マホメットのやうな、特殊な人物の出現に因ることもあると云ふことだ。そして、小さな因習がこの世界、大きな歴史の世界で如何に擴大されて見えることか、それをレスタターは好んで指摘した。躡げながら、それがジェニーにも分つて來た。假に今までジェニーが悪かつたとしてよう——それは狭い範圍内では大きな影響を及ぼしたであらうが、人類史の全局面と云ふものから觀察したならば、どれ程の役割をしたことになるだらうか？ 誰でも人間は皆東

はないと考へた。で、レスタターは公に自分がケイン商會を退き、休養の爲めに歐羅巴旅行に赴く旨を發表した。彼は一度も外遊した事がなかつたし、ジェニーもそれを悦ぶだらう。ヴェスタはゲルハートと一緒に、女中を一人つけて家に残して置いて、自分とジェニーは歐羅巴をしばらく漫遊して來ればよい。ヴェニスやバーデン・バーデン、その他有名な保養場が見たかつた。カイロ、ラクソール、アゼンス等へも日頃から行きたいと思つてゐた。外遊から歸つて來たらば今度は眞面目に計畫を實行に移せようと云ふものだ。

父が亡くなつた年の春、レスタターは店の仕事を片附けて了つて、愉快な氣持で手落なく旅程を立てた。そしてジェニーを腹心の友として色々旅の必需品を調べて、ニュー・ヨークから汽船でリヴァプールへ向つた。英國の諸地方を漫遊すること數週間の後、二人は埃及へ渡つた。其處から引返して希臘、伊太利を経て、埃太利、瑞西に入り、更にパリから伯林に足を駐めた。レスタターは色々の目新しいことで氣分を紛らすことは出來たけれども、何かしら時間を空費してゐると云ふ感じに附纏はれて不愉快だつた。大企業は旅行に依つて生み出されるものではない。それにまた彼は健康の爲めに旅行してゐるのでもなかつた。

ジェニーはと云ふと、見るもの聞くものに感心して、未知の生活に堪能した。嘗て夢想にしたことのないラクソール



の間にこの世を去つて了ふのである。ジェニー自身も、レスターも、誰も彼も。さらば、まごころを外にして、人の世に介意すべきものが、何處にあるだらうか？ その他に何が實在してゐるだらうか？

## 四五

この外遊中にレスターは、ジェニーと知り合になる以前から知つてゐた女性に邂逅した。最初はロンドンのカールトン・ホテルで、それからカイロのシェパードでも會つた。レティ・ペイスと云ふのが娘時代の名であつた。彼は彼女を尊敬してゐたと云つても差支なかつたが、長いことこの女性には會ふ折がなかつた。彼女は六年ほど前にマルカム・ジェラルドと結婚したが、二年足らず前から未亡人になつて了つてゐた。マルカム・ジェラルドはシンシナチで銀行や株式仲買で資産を作り上げ、未亡人は樂に暮せる身分だつた。幼い女兒が一人あつたが、何時も乳母や女中に委せつきりで、母親は文明國の到る處の大都市から集つて来る崇拜者達の賑やかな中心になつてゐた。頭も良ければ細緻もよく上品で、詩も書くし、讀書も盛にする、繪も描けると云ふのだつた。その上にレスター・ケインを心から讚美してゐた一人であつた。若い頃、彼女は眞實レスターを愛してゐ

た。娘ながら人物や世事を見分ける目が高く、レスターは男の中の男として彼女の眼に映じたのだつた。この人は落着もあり分別もある、それに人前で決して様子をしない。さう云ふ點が彼女の氣に入つてゐた。レスターは詰らないお座なりの話を嫌つて、何時も單純な、ざつとばらん話しぶりだつた。その昔のことを云へば、彼等はダンスの場を抜け出し、バルコニーに納まつて、レスターの煙草の煙を見ながら語り合つたのも一度や二度ではなかつた。彼は哲學を論じ、書物のことを批評し、或は他の都市に於ける政治及び社會問題を話して聞かせた。一口に言へば、レスターは彼女を物の分る一人前の人間として交際し、彼女はレスターが自分に結婚の申し込をして呉れるだらうと、心待してゐたのである。レスターの大きな頑丈な頭を眺めて、短く刈つた薔色の短い硬い頭髮を自分の手で撫で、見たいと彼女が思つたことも度々であつた。レスターがシカゴへ引き移つたことは、彼女に取つては、可成り大きな痛手だつた。當時、彼女はジェニーと云ふ女に就ては、何も知らなかつたが、これでレスターを、自分のものにする機會がなくなつて了つたと直感した。

その中に、彼女の熱心な崇拜者の一人マルカム・ジェラルドが烈しく結婚の申込をして來たので、彼女はそれを受諾した。レティは彼を愛してはゐなかつたけれども、兎に角仲間人でしたわ。若しあの方から申し込を受けてゐたらば、例へ自分で生活の爲めに働くとしても、屹度私は結婚してゐましたでせう。」

「その方そんなにお困りだつたのですか？」と友が尋ねた。「いゝえ、別に苦勞のないお金持なのですけれども、そんなことは問題ではありませんでしたの。自分が望んでゐたのは、その方御自身だつたのですわ。」

「さう仰言つても、永い間にはどう變るか知れせんね。」  
「私の氣持を御存じないんですわ、」とジェラルド夫人が答へた。「私は幾年もの間、あの方をお待ちしてゐたのですもの、間違ひつこありませんの。」

レスターも、今のジェラルド未亡人、レティ・ペイスに就ては愉快な印象や楽しい記憶の數々を有つてゐた。彼はレティが好きだつた、心から好きだつたと言へよう。何故レティと結婚しなかつたのだらう？ さう言つて彼はいつも自分の胸に聞かすのだつた。レティならば理想の妻だ。父を始め皆の者が悦んでくれたであらう。ところが自分は淫草のやうに流れ歩いた揚句、ジェニーに會つてからと云ふもの、レティを思ふことがなかつた。そして六年後になつて、再會したのである。彼は、レティの結婚を知つてゐた。レティの方でも、レスターには、何か事件があつたと云ふ噂——彼がその後問題の女と結婚して、サウス・サイドに住んでゐ

好くしてゐたし、いづれは誰かと結婚しなければならなかつた。彼等と一緒になつたのは、ジェラルドが四十四歳の時で、その後彼は四年しか生きてゐなかつたが——美しい、心の寛い女を妻にしたと云ふことは十分に理解できた。かうして彼は肺炎を病んで他界し、ジェラルド夫人は裕福な寡婦として、思ひ遣りもあれば魅力も衰へず、世智に長けた眼を以て、たゞ財産を遣ふより外のことは、何もせずに暮して來たのであつた。

彼女の性質として、何をするにもどつちつかずと云ふことが出来なかつた。彼女は長い以前から、レスターの印象によつて形造られた理想の男性を心に描いてゐた。彼處此處の社交界(彼女の交際範圍は年と共に擴がつた)で會つた伯爵、侯爵、男爵等と云ふ斗筭の輩は一顧にも値しなかつた。外遊中に出會つた、表面だけ體裁のいゝ肩書こそ持つて居れ、財産目當の求婚者達には飽き／＼してゐた。人の性格を見抜き、世態人情に通じ、社會の、また人間心理の動きを判断する頭腦を持つ彼女は、是等の人間及び彼等によつて代表される文明の眞相を見透してゐた。私が昔シンシナチで知り合になつた男の方となら、丸太小屋の中に住んでも幸福に暮せたらうと思ひますの、」とレティは、アメリカ生れではあるが、今は貴族夫人と呼ばれる一人の友に洩した事があつた。「その人は全く腹の出來た、清廉剛直



ると云ふことは薄々聞き知つてゐた。けれども財産の紛擾に就ては知る所がなかつた。初めの時は六月の或夕方、カールトン・ホテルでレスタターに出會つた。窓はすっかり開け放たれ、花は到る處に咲き満ち、一陽來復の世界は新生の氣で香はしかつた。一瞬間、彼女はいさゝか上氣の體であつた。何かしら胸が詰つた。でも氣を取り直して、なよやかな手を差し延べて握手を求めた。

「まあ、レスタター、」と彼女が叫んだ。「御機嫌よう！ 嬉しうございますわ。こちらが奥様でいらつしやいますの？ まあ、お美しくいらつしやいますのね。本當にあなたにお目にかゝつて、何だか活返つたやうな氣持になりましたわ。奥様には失禮でございますが、私御主人にお目にかゝつて本當に嬉しいのでございますよ。でもまあこの前にお會ひ致してから随分長いことになりますのね、レスタター。それを數へてみると我ながら年を取つたと思ひますわ。全く、どうせや、六七年にもなりますのよ。私は結婚して子供まで出来、可哀相にジェラルドは亡くなつて了ひました。そして苦勞と云ふ苦勞はしつゝして參つたのです。」  
「いやあ、そんな風にはお見受け出来ませんよ、」と彼は微笑して言つた。仲の好かつた友達に會つて、彼は嬉しかつた。レティは今だにレスタターを好いてゐるのだ——それは一目瞭然であつた、そして彼も亦レティが好きだと思つた。

ジェニーは微笑してゐた。彼女はレスタターの昔友達に會つて嬉しかつた。牙えた眞珠色の縞子の上から素晴らしい黄色の裳を曳き、圓い滑かな兩の腕を肩まで出して、胸は短く詰めて裁ち、暗紅色の薔薇の意匠を腰のあたりに一つ附けてゐるこの婦人は、ジェニーに取つては典型的な女性と思はれた。いつも彼女はレスタターと一緒にゐて、綺麗な女を見るのが好きだつた。美人が通つてゐると、彼女はレスタターを突つては優しく彼を揶揄して喜んだ。「レスタター、私など相手にしないで、あの人の處へ行つてお話しになりたくはありません？」目に立つて美しい婦人に出會ふと、きまつて言ひかけるのだつた。レスタターは、ジェニーの見立てが良いか悪いかを吟味したが、女の魅力と云ふものを見別ける上で、ジェニーの目が高いことを知つて來たのである。「いや、僕は現狀で十分満足してゐるよ、」と彼はジェニーの目の中を覗き込みながらやり返すか、或は戲談に「僕も昔程若くないのが残念だ、でなければ、引返して見せるのだがね、」などと言ふのだつた。

「やつて御覽になればいいのに、私待つてゝ上げますわ。」  
「若し僕が本氣になつたら、お前はどうする積りかい？」  
「どうもかうもないでしょ。多分あなたは私の處へ戻つてお出になりますもの。」  
「本當に構はないかい？」

「そりや、構はないことはありませんわ、でも、あなたがその氣におなりでしたなら、私お留めしませんわ。相手の方が眞心籠めてゐて下さらないのに、何も私の方から飽くまでもとは思ひませんもの。」

「一體何處でそんなことを覚えて來たんだね、ジェニー？」と或時、彼が相手の考へ方の範圍を試めさうとして尋ねた。「何處でだか、私存じませぬわ。それがどうして？」  
「お前の考へ方はどこまでも包容的で親切だよ。確かに普通の考へぢやないよ。」

「まあ、だつて私達は自分中心に物を考へるべきではないでせう。何故と訊かれると困りますけれど。違つた考へを持つてゐる女の人もありますけれど、男と女は共に手を取合つて生活するか、でなければ、一緒に暮さないのが良いと思ひますわ——さうはお考へになりませんか？ 男の方が家を一寸留守にして——長逗留でなく——再び歸つて來る氣ならば、さうさせた所で、大した問題ではありませんまい。」

レスタターは微笑したが、さうした優しい考を、尊敬した——尊敬しない譯に行かなかつた。

この宵、ジェニーは、この婦人がレスタターと話をしたさうにしてゐるのを見て、屹度二人だけで話したいことがあるのだと直感した。それでジェニーは彼女らしく氣を利かし

た。「私一寸失禮さして載きたいのですが、」と彼女は微笑を浮べて言つた。「部屋に少しばかり片附けものが残してありますの。またこちらへ參ります。」

ジェニーはよい頃合まで自分の部屋に引籠つてゐた。レスタターとレティは色々昔話に耽つてゐた。彼が自分の身に起つた出來事を適當に打ち明けると、レティも今日までの生活に就て語つた。「レスタター、あなたが結婚なすつて納まつてゐらつしやるから申上げますがね、」と彼女が大膽に切り出した。「今だから白状しますが、私が本當に結婚して欲しいと思つた人は、あなただつたのですよ。それなのに、あなたは申し込んで下さらなかつたのねえ？」

「でも、出そびれたのかも知れませんが、」と彼はレティの素敵な黒い瞳を眺めながら言つたものゝ、ひよつとしたら、自分が結婚してゐないことを承知してゐるのではあるまいかと想像した。何處から見てもレティが、前よりもずつと綺麗になつてゐるのを彼は感じた。彼の目にはレティは典型的な社交婦人になつてゐた——一點非の打ちどころもない——優雅で自然で機智に富んでゐる、そして誰彼の區別なく交際して行ける女性、客が男でも女でも相手相應に應對の出來る理想的な女性として映じた。

「え、さうでございますとも！ あなたのお考へになつてゐらしたことは、ちやあんと知つてゐますわ。今しが



た、此處から立つていらした方が、忘れられなかつたのですわ。」

「何を言ふんです。早合點はいけません。あなたには分りつゝありませんよ。」

「兎に角、あなたのお目の高いことは認めますわ。あの方チャーミングですこと。」

「ジェニーにも良いところはありますよ。」彼があつさり答へた。

「それであなた方、幸福でございませう？」

「結構幸福です。さう、幸福なんぞせう——世の中を有るが儘に觀ることの出来る人が、さうであると思ふ程度にはね。昔から御存知の通り、大して空想なんかには煩はされる性質の人間ではありませんからね。」

「本當ですわね、さう申して失禮でなければ、空想なんか少しもお持合せがないのですわね。」

「さう言つていゝでせう。併しですね、時には少しあると宜いと思ひますよ。今よりも幸福になるだらうと考へるのです。」

「私も同じなの、レスタ。自分の生活は失敗だつたと云ふ風に考へられるんですよ、お金是有餘る程ありますけど、と云つてクリーサス(傳説上の大金持)には敵はないでせうかねえ。」

「そんなことをあなたから聞かうとは思ひませんよ、あなたでゐるのではないかしら？ 彼女はこんな不快な考へをそれだけで押しやつて了つた。直ぐ妬ましい氣持になるに違ひないが、それは卑しむべきだ。」

ジェラルド夫人は、ケイン夫妻に對して、あく迄愉快に振舞つた。翌日彼女は二人を招待してロトン・ロウ(ロンドンの馬車遊歩道)と一緒にドライブした。その後でクラリッジで夕食を共にしたが、レティはそれから約束があつてパリーへ行かねばならなかつた。彼女は心から二人の者に別れを告げ、近い中に再會したいと述べた。彼女は寂しい氣持でジェニーの幸運を羨んだ。レスタは昔に變らず、彼女の心を煮きつけた。變つた所があるとすれば、以前よりも慇懃で、思遣りが出来、健康さうに見受けられた。レティは彼が自由の身であつて呉れたらばと願つた。そしてレスタの方でも——意識の表面には出て來なかつたが——同じやうに願つてゐたのだ。

レティがそんな風に考へてゐた爲に、レスタにしても若し自分と彼女が結婚してゐたならば、こんな事にもなつてゐたらうかと、想像をめぐらすやうになつたのも自然である。この二人は、今しつくり心が合つてゐた。人生觀から云つても、趣味の上でも、又實際的に考へても、二人の間の會話は、丁度永年の親友のやうに、何時でも自然に流れ出た。レティはレスタの交際社會の人々——それは又同

た程の縹緞で、頭があつて、おまけにお金があつて——以ての他ですよ。」

「お金は何の働きをするでせう？ 旅行をして、無駄計をして、財産目當のお馬鹿さんを追ひ拂ふだけの役です。本當に私、とても厭になつて了ふことがありますわ！」

レティはレスタを見詰めた。ジェニーが控へてゐるにも拘らず、昔の感情が甦つて來た。どうしてレスタの心持を讀み損ふことがあらうか？ 二人は陸じい夫婦のやうに、否、若い戀人のやうに楽しい氣持でゐた。ジェニーにもこれ以上の魅力はなかつた。レティがレスタを見詰めてゐる中に、彼女の目は意を通じた。レスタは少し寂しく微笑んだ。

「あゝ、妻が來ます」と彼が言つた。「少し元氣を出して、他のことを話させよう。あれも却々話せますよ。」

「えゝ、存じて居りますわ」とレティは答へ、ジェニーの方へ向いて、晴れやかに微笑みかけた。

ジェニーは何となく微かな不安を感じた。この人は昔レスタの若い血を湧かしたのではないかしら、と漠然と思つた。かういふ人をこそ——私をではなく——擇んでレスタは結婚すべきだつたのだ。身分から云つても相應してゐるから、幸福であつたらう。恐らく今よりはもつと幸福であつたかも知れない。レスタは或はそんな風に考へ

時にレティの社交仲間であつた——を一人残らず知つてゐた。けれどもジェニーは誰も知らなかつた。レティとならば人生の機微に互る諸問題を、ジェニーとは話し合へないやうな風に語ることが出來た。と云ふのは、ジェニーが言葉を豊富に知つてゐなかつたからである。彼女の思想はジェラルド夫人のやうに滑かに表現されなかつた。實際のところ、彼女の性質はレティよりも更に深く、包容的で、そしてすぐれた情緒に恵まれてゐたのだが、それを無造作に會話のうちに表現することが出來なかつた。彼女はその性情をそのままに生活行動に現してゐるので、恐らくそこがレスタの心を惹き附けた所以でもあつた。丁度今の場合、また之に類した事情の下に置かれると、彼女は、不利な立場になる。この際レスタは、一時のことではあるが、レティと結婚してゐたら宜かつたと思つた。少くとも自分の未來に關して、今氣を腐らしてゐるやうなことにならず済んだに違ひないと思つた。

その後レスタ達がカイロへ行くまでは、ジェラルド夫人に會ふ折がなかつた。彼等の旅館の近くの遊園で、突然ジェラルド夫人に出會つた——その時レスタ一人で煙草を吹かしながら散歩してゐたのである。

「これは良いところで！」とレスタが叫んだ。「どつちの方から來たんですか？」



「マドリッドからですよ。先週の木曜日までは来る積りもなかつたのですが、エリコット家の人達がこの地へいらつしやると云ふものですから、御一緒に参りましたの。あなた方が何處にいらつしやるかと思つてゐましたが、埃及へ行くと言つたお言葉を思ひ出しましてね。奥様はどちら？」

「多分今頃はお湯でもつかつてゐるのでせう。陽氣が温かなので、ジェニーは水が戀しくなつたんですよ。僕も一浴びやらうかと思つてゐたところです。」

暫くの間二人で散歩した。レティは淡青色の絹物を身に着け、青と白とのバラソルを氣取つた風にかざして、非常に可愛く見えた。「ねえ、どうしませう！」と、彼女が突然叫び出した。「私ね、時々自分で自分を持て餘すことがあるんですの。こんな風にのらくらばかりしてもあられせんわ。アメリカへ歸らうかと思ひますの。」

「歸つたら宜いぢやないですか？」

「でも、さうしたところで利益があるかしら？ もう結婚なんかしたくないし。結婚したいと思ふ相手があるのですからね。」彼女は意味ありげにレスターを眺めて置いて目をそらした。

「なあにそのうちに見附かりますよ、」とレスターは間が悪さうに言つた。「あたりで放つて置くもんですか——あなたのやうな美人で金持を。」

「まあ、憎らしい！」

「はい、はい。お氣に入らなければどうにでも。僕は意見を述べただけです。」

「あなた、今でもダンスなさつて？」と彼女は今晚ホテルで催される舞踏のことを考へながら、さりげなく尋ねた。幾年か前には、レスターはダンスの上手だつた。

「そんなに見えますか？」

「ねえ、レスター、あなたはあの一番魅力のある藝術を見捨てたと仰言るのではないでせうね。私は今だに踊るのは好きなんです。奥さんはお踊りにならないの？」

「いや、あれはちつとも構ひつけないのです。とにかく稽古を始めたこともないので。さう言はれてみると、それは僕が悪かつたんですね。僕は近頃踊りなんて事は忘れてみました。」

彼は自分が、こゝ暫く、社交的な催しごとには顔を出さないのに氣がついた。一身上の紛擾のために、それが出来なかつたのである。

「今晚一緒に踊りませうよ、奥さんは反對なさいせんわ。全く素晴らしい踊場なんですの。今朝見て來ましたの。」

「考へて置ませう。練習を怠つてゐますからね。僕の年になつてダンスをやるに毒になりませう。」

「何を仰言るの、レスター。私までが年を取つて了ひます

わ。そんなに意氣地のないことでは駄目ですよ。本當にまあ、あなたはお年寄りの積りでいらつしやるのね！」

「僕は今煩悶してゐるんですよ。」

「おや、そんなら一層結構ですわ、」と彼の昔の戀人が答へた。

#### 四六

その夜の晩餐も終り、ホテルの舞踏場では奏樂が始まつた時、棕櫚園に隣つてゐるその大旅館のヴェランダで、ジェラルド夫人はレスターが煙草を燻らしてゐるのを見附けた。ジェニーも傍にゐて、白繻子の着物に白のスリッパを穿き、額や耳のあたりには頭髮が房々と重くかぶさつてゐた。レスターは埃及の歴史に就いて、あまり頭丈でないその民族の興亡、彼等に生活の資を與へたナイルの兩岸の狭小な地域、熱帯地の氣候と生活の驚異、それから新しい設備を誇り流行社會の連中を集めてゐるこのホテルと、傷心の状態、殆ど救ふ途のない古代文明との對照を默想してゐた。今朝彼はジェニーと共にピラミッドを見物して來た。電車に乗つてスフィンクスも見て來たのだ。半裸體に奇妙な着物を纏つた見窄しい男や子供の群が狭い、臭氣紛々とした、併し賑やかな色彩の路地や裏通を注意して見て來た。

「随分ごちやついてゐますのね、」とジェニーが言つた。「あの人は何て穢くて、脂じみてゐるのでせう。面白いとも思ふのですけれども、何だか蜘蛛のやうにごた／＼してゐるんですよ。」

レスターは薄笑ひをした。「そんなところだらう。だが、あれは氣候のせみだよ。暑さのためだ。熱帯地だからだ。こんな土地では極つて感覺的になり、しまりがなくなるものだ。それはもう仕方がないのさ。」

「え、それは知つて居りますわ。ちつともあの人達を責める積りではありませんの。でも全く變つてますわねえ。」

レスターは今宵そんなことを考へてゐた。月は感覺的な光を豊かに大地に灑ぎかけてゐた。

「まあ、やつと見附けましたよ！」とジェラルド夫人が叫んだ。「晩餐に出られませんでしたの。見物に時間を取られて遅くなつて了ひましてね。奥さん、御主人と一緒に踊つて戴くやうにお願ひ致しましてよ。」彼女もレスターやジェニーと同様、温氣と春と月光の影響を受けて、うつとりした氣持になつてゐた。樹立や庭園から微かに漂つて來る香で空氣は馥郁としてゐた。遠くでは駝駱の鈴が鳴り響き、「アヤア」とか「ウーシュー！ ウーシュー！」と云ふ異國情調たつぷりな叫び聲が、雑沓の巷を驅ける動物の群に呼びかけられるやうに聞えて來た。



「ええ、どうぞ」とジェニーが快活に答へた。「踊る方が宜しうございますわ。私も踊れると宜いのにと思ひますの。」  
 「直ぐに稽古を始めれば宜いんだよ。」とレスターが優しく答へた。「僕が相手になつて上げよう。昔程は軽く動けないが、どうにか踊れるだらう。」

「いえ、私そんなにまでして踊りたくはございませんわ」と言つてジェニーがにっこりした。「あなた方お二人で行つていらつしやいますし。私はもう直ぐ上へ行かうと思つてゐますのですから。」

「舞踏場へ来て見てゐれば宜いぢやないか。僕は三四回やれば澤山なんだ。濟んだら一緒に見てゐよう」とレスターは立ち上つた。

「やつぱり私此處に居りますわ。本當に氣持がいふんですの。あなた行つていらつしやいよ。ジェラルドの奥さん、どうぞお連れ下さいませ。」

レスターとレティは歩いて行つた。二人はとても似合つて見えた——ジェラルド夫人は黒のビーズで飾つた、くすんだ葡萄色の絹物を着て、恰好の良い兩の腕と頸を露出し、大形のダイヤを丁度額の上の黒い髪に燦然とさせてゐた。唇は紅に、愛嬌に満ちた笑を洩らすと、廣い親しみのある唇の間から眞白な揃つた齒並が見えた。レスターのがつしりした元氣のある姿は、夜會服を着てゐるので一層引立ち、

堂々として見えた。

「あの人がレスターと結婚すべき筈の女だつた」と、彼の姿が見えなくなると、ジェニーは獨語つた。そして自分の過ぎ來し方をそれからそれと追想に耽つた。自分は夢の中で暮して來たのだとも思はれた。今もなほその夢の國にゐるやうにも考へられた。彼女の耳には、人生と云ふものが丁度今宵の物音のやうに響いて來た。ジェニーはそれの叫び聲を聞いた。その老なる容姿も知つてゐた。けれどもその背後には、こもる／＼移り變り、重り合ふ夢のやうに、次から次へと變轉してやまない神祕が潜んでゐた。なぜ自分は今まで男性の心を魅したのであらうか？ 何故レスターは夢中になつて追つかけたのであらうか？ 自分は彼を拒むことが出來ただらうか？ 嘗て自分はコランバスで石炭を持ち運んだこともある。ところが今夜はエジプトのこの大きなホテルで幾部屋も占めて王妃然と納まり、あらゆる豪華に取り巻かれて、而もレスターは昔に變りなく心を盡してゐてくれる。レスターは自分の爲に幾多の苦勞を辛抱してくれた。なぜなのだらうか？ それ程にも自分が珍しい女であらうか？ ブランドーは珍しい女だと言つた。レスターも同じことを言つた。でも自分は、本當に自分のものでない寶石を手に一杯持つて、分に相應しくないのを感じてゐるのだ。またしてもジェニーは、初めてレスターとニユ

ト・ヨークへ行つた時に経験した、あの變な感情を経験した——この現在の夢のやうな生活は永續するものでないと云ふ感じがあつた。自分の生活は破滅の運命にあるのだ。何事か起るに違ひない。自分は身を落して裏町に逆戻りし、茅屋に住み、着古した着物を纏ふやうになるのだ。

それから彼女はシカゴにある邸宅のことを考へたり、レスターの友人の態度を思ひ合せて、屹度自分がそんな運命にあるのだと感じた。よしレスターが彼女と結婚したところで、世間の人達は自分を受入れては呉れないに極つてゐる。その理由はよく分つてゐた。今レスターと一緒に去つた、あの婦人の莞爾とした顔を眺めたところから判断すると、自分を美しい女だと思つてゐてはくれるけれども、レスターとは身分が違ふと考へてゐることは、ジェニーにも知れた。あの婦人は今、レスターと踊りながら、レスターには自分のやうな女が必要だと獨りで點頭してゐるだらう。レスターには、やはり彼が生長して來たのと同じやうな環境に育つた女が必要なのだ。レスターはいつも接して來たやうな親密さや、物事の細やかな味ひ方をジェニーに期待しても必ずしも得られなかつた。彼女は何事でもありのままに理解した。今では彼女も家具、衣類、物の配置、裝飾、作法、習慣等の細々した點に就て習熟しては來たものゝ、——彼女は生來それ等のことには適してゐなかつたのであ

る。

ジェニーが彼の許を去つたならば、レスターは昔馴染の世界——今、彼の腕に抱かれてゐるあの魅力に富んだ、教養のある、賢い婦人の世界に歸つて行くに違ひない。ジェニーの目には涙があつた。その瞬間、彼女は死んで了ひたいと願つた。その方が良いのだ。話變つて、レスターはジェラルド夫人と踊つたり、或はワルツの合間に、二人で坐つて、昔の時代や昔の場所、また昔の友達のことを語り合つた。彼はレティを眺めてゐるうちに、彼女の若さと美しさに驚歎した。レティは昔よりも女らしくはなつてゐたけれども、今もなほ月の女神ダイアナのやうに瀟灑たるものがあつた。そしてそのなめらかな肉體には張りがあつて、漆黒の瞳はすゞしく澄んで輝いた。

「レティ、あなたは昔よりも、ほんとに美しくなつたのね。全く素晴らしい。年を取るかはりに若くなつた」とレスターが感に打たれたまゝに言つた。

「さうお思ひになつて？」レティは、彼の顔を覗き込みながら微笑んだ。

「思ふの思はないのつて、僕は思つたから言つたんぢやありませんか。僕はあなたを悦ばせようとなんかしないんですよ。」

「まあ、お行儀知らずですのね、女ははにかむものよ。褒



められるのでも、ちびり／＼嗜<sup>こぼ</sup>ませて貰ふのが好き、大袈裟に褒め上げられるのは御免ですの。」

「一體どう云ふ意味ですか？」と彼は尋ねた。「僕が何んて言ひましたか？」

「なんでもないの。あなたはお行儀知らずですつてこと。本當にあなたは頑固で一徹な、大きな坊ちゃんですよ。でもそんなことは構ひません。私はあなたが好き。それだけで澤山ではなくつて？」

「え、さうですとも。」

奏樂が竭むと二人は庭園の中へ歩いて行つた。レスタールは彼女の腕をそうつと締めつけた。さうせずにはゐられなかつたのだ。レティが彼に自分の自由になると云ふ氣持を起させたのだ。彼女は彼がさう思つてくれるやうにと望んでゐた。二人で庭園の提燈を眺めながら、レティは私かに心の中で、彼が若し自由の身であつて、自分の處へ来てくれるならば、悦んで彼を受入れるのに、と思つた。彼女は何とでもしてレスタールを受入れる積りは出来てゐたが——たゞレスタールが恐らく肯<sup>うけ</sup>んじないであらう。彼は融通がきかない、彼は遠慮がある。彼女の知つてゐる他の多くの男達とは違つて、レスタールは決して卑しい眞似はしない。彼には出来ないのだ。やがて彼は立ち上つて別れを告げた。明日の朝、彼とジェニーは、ナイルを溯つて、カルナクとか、テ

べとか、またファイリーの水に臨む神殿とかを見物に行く豫定であつた。それで、朝早く出立しなければならぬから、彼は寢に就くのだと言つた。

「何時頃御歸國になるつもり？」とジェラルド夫人が残念さうに尋ねた。

「九月です。」

「もう船室はお取りになりましたか？」

「取りました。ハムバーグを九日に出帆します——フルダ號です。」

「私も秋には歸ることになるでせう、」と言つて、レティは高らかに笑つた。「もし同じ船に乗り合しても、お驚きにならないでね。私はどう氣が變るか知りませんから。」

「それはいい、是非どうぞ、」とレスタールが答へた。「それをお待ちしてゐます……明朝、發つ前にお目にかゝりませう。」彼は一寸言葉を切つた。レティは惱ましげに彼の顔を眺めた。

「しつかりなさいよ、」さう言つて、彼はレティの手を取つた。「世の中のこととはどうなるか分りませんよ。僕達が駄目だと思つてゐることでも、案外良いことがあるんですからね。」

彼はレティが、自分と別れるのを悲しんでゐるのだと思つた。そしてレティが望む通りに出来ない立場にあるのを同感した。レスタールとは頃合<sup>きあひ</sup>の相手であつた。ところがジェニーは、女としての自分を、レスタールがレティ以上に買つてゐるのを直覺してゐた。この問題は恐らく時が解決してくれる。それまではこの三人は稀なる友達として交際を續けた。彼等がシカゴへ着くと、ジェラルド夫人は自分だけの生活を始め、ジェニーとレスタールは、また以前の極つた日々を送ることになつた。

歐羅巴から歸つて、レスタールは熱心に仕事の糸口を捜し始めた。大會社はどこも皆、彼の提案を容れようとしなかつた。彼が何でも自分で牛耳<sup>ごうじ</sup>らなければ承知の出来ぬ性質であることが知れてゐたからである。彼の財産状態に關しては、未だ世間では知らなかつた。レスタールが調査した多くの小會社は、どれもこれも遣り繰りで立つてゐるものか、その製品が彼の氣に入らなかつた。たゞ一ヶ處、インディアナ州北部の或る小都市で、將來見込がありさうな會社を見附けて置いた。その會社と云ふのは、レスタールの父が若い時分にやつてゐたやうに、實地の經驗に富んだ創立者によつて管理されてゐたが、その人は實業家としての腕がなかつた。一萬五千弗を投資し、價格に見積つて約二萬五千弗の工場設備を以て仕事を經營し、僅少の利潤を得てゐた。レスタールは此處に着眼して、若し適當な方法を講じて智慧を働かせたならば、何か出来さうに思つた。急激にはどう

情した。レスタールは心の中で、此處にあるのは自分の擇ぶことの出來ない鍵だと思つた。けれども、それは矢張問題を解決してくれるに違ひないのだ。彼は何故今になるまでこのことが分らなかつたのだらうか？

「だつてレティはその當時、今ほど美しくなかつたし、また賢くもなく、金持でもなかつたのだ。」尤もだ、無理もない。けれども彼は、ジェニーに對して誠實を破ることは出來ないし、又彼女を不幸に陥れることも出來ない。さうでなくてはさへジェニーは十分不幸な目に會つて、それを勇敢に堪へ忍んで來たのである。

四七

ジェラルド夫人は更に一週間、歸國の旅を共にした。熟考した末、暫くアメリカで暮して見ようと決心したのだつた。シカゴとシンシナチが目的地で、レスタールと會へるのを樂みにしてゐた。ジェラルド夫人が再び出現したので、ジェニーは少からず狼狽し、色々のことを考へ始めた。何のつもりでジェラルド夫人が出て來たのか察しが出來た。若し自分があるなかつたならば、彼女はレスタールと結婚するに違ひないのだ。けれども現状を以てしては、問題は簡單でない。レティの生れから云つても、育ちや地位から云つても、



にもならないだらう。彼の存命中に大した儲けは期待出来ない。彼がこの小製造家に當つてみようと思つてゐた時に、彼は車輛トラストなるもの、噂を耳にしたのだつた。

ロバートが案を立て、車輛製造業改造に突進してゐたのだ。彼は同業者に向つて、相互に啗み合つてゐるよりも、互に提携して行く方が遙かに有利だと説いた。彼の説く所が肯綮に當つてゐるので、大車輛會社が次ぎ／＼に提携した。數ヶ月中に協議は成立して、ロバートは株式資本一千万弗と、強制賣却に附してもその七割五分に達する資産を擁する合同車輛製造業者協會の會長に選ばれた。彼は得意だつた。

このやうに事業界が進展してゐるのを、レスターは全く知らずにゐた。歐羅巴旅行のため、新聞紙上に簡單ながら報ぜられた車輛業者合同の計畫を知らずに過ごしたのだ。シカゴへ歸つてみると、相變らず、妹イモジェンの夫であるジェファソン・ミジリーが支店で采配を振つてゐて、エヴァンストンに住んでゐることを知つた。けれどもレスターは家族の者と反目してゐたので、その報道を直接手に入れることが出来ない立場にあつた。ところが偶然のことから案外早くそれがレスターの耳に入つた、そして彼はむしろ早くして了つた。

この報道を傳へたのは、外ならぬクリイヴランドのヘン

リ・ブレイスブリッジだつた。レスターがシカゴへ歸つて来て一ヶ月ばかりした或る夕方、ユニオン・クラブで彼に出會つたのである。

「君は會社を止したんだつてね、」とブレイスブリッジが穩かに微笑しながら話しかけた。

「あゝ、出て了つたよ。」

「今は何をやつてゐるんだい？」

「いや思惑はあるんだがね。何か獨立した會社をやつて見ようと思つてゐるんだ。」

「まさか君の兄さんの向うを張ると云ふんぢやないだらうね？」

「兄さんはあの合併で巧いことをしたものだ。」

「合併だつて！ それは初耳だ、」とレスターが言つた。

「僕は歐羅巴から歸つて来たばかりなんだ。」

「しつかりし給へ、兄さんは同業者での立役者になつたわけだ。君は何もかも御存知かと思つてゐたのに。ライマン・ウインズ・プロ・會社も、マイヤ・ブルックス會社も、ウッツ會社も、とにかく五六の大會社が皆加盟してゐるんだ。そして兄さんがその新合同組織の會長に選ばれたのさ。そんなことをやらかして、兄さんは屹度二百萬はせしめて了つたと思ふね。」

レスターは目を見据えた。その目が幾分険しくなつた。「そりや兄も出来たと云ふものだ。僕も嬉しいね。」

ブレイスブリッジは、自分の言葉がレスターの急處に觸つたと思つた。

「それでは又會はう、」と彼が言つた。「クリイヴランドへ來たら寄つて呉れ給へ。妻も君を歓迎するよ。」

「やあ有難う、」とレスターが答へた。「では失敬。」

彼は喫煙室へぶら／＼歩を運んだ。けれども今の報らせを耳にして、すつかり氣抜けがして了つた。自分の兄が車輛トラストの頭目になつてゐるのに、自分がどの面さげで、けちなぼる會社にへばり附いてゐられようか？ 何たることだ！ ロバートは一年と経たないうちに自分を葬ることが出来るのだ。自分でもトラストの計畫は懐いてゐたのだ。それを兄にしてやられて了つた。

若さと勇氣と闘志を懐いてゐる腕利きが、自分を惱ます運命に反抗することもある。けれども既に中年の聲を聞いてから、財産もなく、何處を向いても機會と云ふ機會が封じられてゐては、話が違つて來るのである。ジェニーが社交界に出る資格のないこと、彼女に關する新聞紙上の評判、父の反對と他界、財産の喪失、會社との關係の斷絶、ロバートの態度、新しいトラスト、かうしたもの全部一丸となつて彼の元氣を阻喪させて了つた。彼は努めて平氣を裝つた。そして今日までのところ、自分では立派に凌いで來たと思つてゐた。だがこの最後の一撃は、差當り少しこた

へ過ぎたやうに感じられた。この報道を耳にした晩、レスターは全く力抜けがして家へ歸つた。ジェニーは直ぐに見て取つた。それでレスターがその晩ずつと家にあつかなかつたことが分つた。ジェニー自身も憂鬱になつて氣が引立たなかつた。何事かと起つたに違ひない——彼が歸宅すると、ジェニーは思つた。彼女は一目見るなり「あなた、どうなさいましたの？」と訊きたかつた。けれども次の瞬間、若し何か起つたとしても、先方から切り出すまでは黙つてゐようと云ふ穩かな考が閃いた。そしてレスターの心を煩はさない程度で愛情を示し、努めて自分が感附いてゐることをレスターに氣取られまいとした。

「今日はヴェスタはとても御機嫌なのですよ、」と彼女は氣をそらす爲めに自分から口を切つた。「學校で、良いお話を載いて參りましたの。」

「それは宜かつた。」とレスターはむつ／＼りして答へた。

「それに近頃ではダンスも上手になりました。今晚は新しく習つたのを少し見せてくれましたの。あの子の可愛い姿は御存知ないでしょ。」

「それは結構だ。」と彼がつぶやいた。「ダンスを上手になつて貰ひたいとは何時も思つてゐたのだ。それに、もう何處か良い女學校へ上げる時だらう。」

「するとお祖父さんが、眞赤になつて怒るのですよ。私可



笑しくて噴飯して了ひますわ。それにあのお茶目さんは、お祖父さんを揶揄ふのです。今夜はお祖父さんにダンスを教へるなんて言ひ出しましてね。もしお祖父さんが、本當に可愛がつてなかつたら、それこそ、頬を打たれるところでしたわ。」

「さうだらう、」とレスターが笑ひ乍ら言った。「お祖父さんのダンスか！ こいつあ見ものだ！」

「ヴェスタは、お祖父さんにがん／＼言はれても、平氣の平左なんですからね。」

「それで宜いんだ。」レスターはヴェスタが非常に可愛かつた。彼女も今では一人前の少女になつてゐたのである。こんな風にして、ジェニーは彼の氣持が鎮まるまであやしてゐた。その中に問題の端々が少しばかり分つて來た。彼等が寢處へ引取らうといふ間際になつて、レスターが言った。「僕達が旅行してゐるうちに、ロバートは事業の方面で大分でかいことをやつたよ。」

「何をなさいましたの？」とジェニーは聴耳を立てた。

「車輛トラストを組織したんだ。いづれ同じやうな組織が全國の主要な産業の各方面に出來るだらう。ブレイスブリッジの話では、ロバートがその社長になつたさうだが、殆ど八百萬弗からの資本金だと云ふことだ。」

「まあ、本當なんですのー」とジェニーが答へた。「それで

四八

は、あなたの新しい會社は頼みになりませんか？」  
「さうだ、今のところでは何うにもならない。將來はよくなるかと思ふがね。まあどう發展するか見てよう。あゝしたトラストが、何をやれるか見當がつかないんでね。」  
ジェニーは全く悲しかつた。今までレスターが影音を吐くのを聞いた事がなかつた。彼がそんな調子で話すのは、これが初めてだつた。彼女は心から慰めの言葉が言つてやりたかつた。けれどもそれは、甲斐ないことだと知つてゐた。「でもよございませう、世の中にはいくらでも面白い事がありますもの。私だつたら、ね、あなた、何もそんなに急ぎませんわ、あなたには十分時間の餘裕があたりですもの。」

ジェニーはこれ以上は言へさうになかつた。レスターも氣を遣つたところで詮ないことだと感じてゐた。何をよくよすることがあらうか？ 何と云つたところで、未だ二年間は安心の出來る收入がある。若し入用とあれば、それ以上でも手に入るのだ。たゞ兄が華々しく進出するのに、自分は何もせずに腐つてゐるのである——流されるまゝに漂ふと云つた方が宜いかも知れない。それは惨めだつた。一番悪いことは、自信が稍ぐらつきかけたことであつた。

レスターは色々と案を考へてみたが、未だ今のところでは、自分が活社會に復歸する具體的な計畫は立たなかつた。ロバートが車輛トラスト結成に成功した以上、最早インディアナの、けちな車輛工場に手を出す興味は消滅した。彼は自尊心を傷け、地位を貶してまでも、自分よりは金を持つてゐると思はれる相手とさもしい競争する氣にはなれなかつた。兄のトラストに就て詳細に調べ上げて見ると、どうしてブレイスブリッジの話以上に、それはがっちりしたものであつた。そのトラストは幾百萬弗でも動かせた。ちつぽけな製造會社は、片端から、首を締められて了ふに違ひない。それに、今自分がおめ／＼と、豪勢な兄の影を踏んでおつかなびつくり商賣が始められるものだらうか？ そんなことは出來ない。餘りにも不面目だ。自分の兄を向うへ廻して、アメリカ中駆け廻り自分の財産を賭して新しいトラストと一戦試みるやうなものだ。だがそれは出來ない相談だ。當分は黙つてゐるに限る。そのうちに何か事が起つて來るだらう。若し起らなければ——その時は、彼にだつて自分の收入はあるし、歸らうと思へばケイン商會へ復歸する權利もあるのだ。元の鞘に納まつたものだらうか？

この疑問が何時も彼の頭にこびりついてゐた。  
レスターがこんな氣持である時に、土地周旋業のサミュエル・イー・ロスの訪問を受けた。この人物の名を書いた大

きな木製の廣告は、シカゴの周圍に擴がつてゐる吹曝しの廣野の、到る處で目につくのだつた。レスターはユニオン・クラブで一二度ロスを見たことがあり、却々太つ腹で成功してゐる土地建物業者だと聞かされてゐた。それにまたラ・サール街とワシントン街の角にあつて、目に立つ彼の事務所も注意したことがあつた。ロス氏は人好きのする顔立で、年は五十がらみ、丈が高く、黒い鬚を生やし、目の色は黒く、鼻筋が通り、鼻孔は大きく、そして頭髮は自然に縮れてゐたが、殆ど電氣でもかけたやうだつた。レスターは彼のしなやかな容姿や、細長くてきやしやな、そして特徴のある白い手に、先づ目を留めた。

ロス氏はケイン氏と土地賣買の相談に來たのだ。無論ケイン氏は相手の人物を知つてゐた。ロス氏の方でも十分ケイン氏を知つてゐると言つた。最近彼は、エイル・シムプソン・ライス食料品卸賣商店のノーマン・エイル氏と提携してエイルウッドの土地を開發したのだ。ケイン氏は、それを御存知であらうか？

ケイン氏は知つてゐた。  
僅か六週間経たない内に、エイルウッドのリッジウッド區に於ける最後の區劃が四十二パーセントの利益で賣切れて了つた。彼は自分が手がけた他の取引に就ても述べた。それは何れも有名な土地柄である。彼はあけすけに、損を



することもあると白状した。自分でも兩三回失敗したと言った。併し、周知のやうに、思惑の當る方が當らない方に比べて遙かに多いのだ。ところで、ケイン氏は今では車輛會社を退いて了つてゐるのだから、何か良い投資事業を探してゐることだらう。そこを見込んでロス氏は提案を持つて來たのである。レスタターが御意見を拜聴致しますと言つたので、客は猫のやうな目をしばだゝいて、扱て話を始めた。問題は、ロス氏とレスタターとが同等の額前で思惑をやらうと云ふのだ、即ちシカゴ市の西南部にある五十五番街、七十一番街、ホールステッド街、アシランド・アヴェニュー、この四つの線で圍はれた四十二エーカーの土地を購入して開發すると云ふ案である。今世間では土地熱が盛んになる徴候があるが、それは健全で、自然で、且永久性のあるものだ。市では五十五番街に鋪裝することになつてゐる。ホールステッド街の電車軌道を、現在の終點よりも更に延長する計畫もある。その地域の近くを走つてゐる、シカゴ・パリーントン・クインシー鐵道が喜んで旅客取扱驛を問題の地域内に設ける筈でもある。この土地の値段は四萬弗で、これは二人が等分に負擔する。道路を作り、之を鋪裝し、街燈を點じ、樹木を植込み、測量する等の費用が別にざつと二萬五千弗はかゝる。廣告費として、先づ二年乃至三年間、投資額の一割、即ち一萬九千五百弗乃至二萬弗は必要である。總計

九萬五千弗乃至十萬弗を、二人が共同投資することになるが、その中レスタターが五萬弗を引受ける譯である。それからロス氏は利益の計算を始めた。その土地の性質、賣口の如何、地價の騰貴等は、隣接地域の五十五番街以北、及びホールステッド街以東で賣買された鹽梅から判斷できるのである。例へば東南の角にあるモーターの地處を取つて見ると、一八八二年には一エーカー四十五弗の土地が、一八八六年には一エーカー五百弗でジョン・エル・スロウソンと云ふ人に買ひ取られたのである。ところが三年後の一八八九年には、同じ土地がモーター氏の手で一エーカー一千弗で譲り受けられた。それと同價格で今の話の土地が賣りに出てゐる。そこでこの地處を、間口五十呎、奥行百呎を一區劃として、一區劃五百弗に賣ることは出来るのである。その値段で、利益は見られるだらうか？

レスタターは無論利益のあることを認めた。ロス氏はいささか得意になつて、更に土地殖法を説明した。素人が飛込んで來て、ロス氏のやうな二十五年間も實地を経験してゐる者と同じに、四五週間か乃至は四五年のうちに旨い汁を吸はうとしても駄目である。老舗と云ふこともあれば、趣味の相異、また直覺の作用も關係してゐる。扱て二人が共同でこの計畫を執行するとすれば、ロス氏が萬事を心得

てゐる。彼は腕利きの部下の者もあるし、有力な請負業者も操縱できる。それにまた市の改良改悪を掌る稅務部、水道部その他の局課にも知人を持つてゐる。若しレスタターが彼と一緒に仕事をやれば、多少の金儲——と言つてもはつきり言ふことは出来ないが、——少く見積つて五萬弗だが、恐らく十五萬か二十萬の金は儲けさせてあげられよう。レスタターはこの上詳細に渡つて計畫の實行法を聞く氣があるだらうか？ 四五日靜かに考へた後、彼はロス氏の申し出を受諾することに決心した。兎に角、彼はこの事業をやつて見る氣になつた。

四九

この提案の變つてゐる點は、必ず成功すると云ふ第一條件が具つてゐることであつた。ロス氏は自分が引受けたら大抵の場合成功させるだけの經驗と判斷力を持つてゐた。彼は自分の熟知してゐる舞臺を濶歩してゐるのだ。凡そ頭のある男を擱へて、事實を並べて聞かせる段になれば、屹度彼は相手を納得させて了つた。レスタターは今度の提案には初め感心しなかつたが、もともと土地企業には興味を有つてゐた。彼は土地が好きであつた。餘り深入りさへしなければ、安全な投資法だと考へ

てゐた。彼はまだこの方面に手を出したことはなかつた。今まで彼の接してゐた仲間は、土地の話をしなかつたからである。今、彼は所有する土地もなければ、或意味に於ては、仕事にもあぶれてゐた。彼はロス氏を好み、その仕事振りが氣に入つた。ロス氏の述べた所を確かめるのは容易であつたし、事實、彼は各項目に就て調べた。蜿蜒と擴がる大野原には、ロス氏の看板が幾つも立つてゐる、日刊新聞には彼の廣告が掲載されてゐる。レスタターは徒然を嘲つ間に、何でも仕事を始めて、幾らかでも金儲けをするのは悪くないと思つた。レスタターの短處は、彼が以前程こま／＼した點に對して敏感でなくなつてゐたことであつた。最近——と云ふよりは全く最初からと云つた方が正しい——彼が手がけた仕事は皆大掛りなものばかり、例へば大量の材料購入とか、大註文の引受けとかで、すべて相談の中心事項は大規模な事務に關してゐて、小さい商人達の狙つてゐる小さなサイズのパートが勞働賃銀などの三仙五仙と云ふこま／＼した勘定を引受け、細かい落ちこぼれないやうに監督してゐた。レスタターはいつも大きなことばかりを預つて來た。で今度のやうな提案に對した時にも、彼が興味を感じたのは、大體の點にであつて、賣捌きに關する細かいことは氣に留めな



かつた。シカゴが段々發展し、地價も騰ると云ふことは否定出来なかつた。今では邊鄙な野つ原も、あと三四年もすれば、立派な住宅地になるに極つてゐた。今購入することの出来る土地なら、價格が下る筈は先づないのだ。早急に買手がつかず、地價の騰貴を見ないとしても、下落する筈はない。ロスはこのことをレスタターに説き聞かせた。レスタターは自分でもそれを確かだと考へた。

レスタターが十分考慮しなかつた若干の事項があつた。即ち、ロス氏の壽命或は健康状態であり、彼が住宅地として選定した地域に隣して、好ましからぬ建物が出る可能性であり、更に金融市場の模様で地價の下落する危険であつた——その結果、土地企業は足場を失ひ、地價の暴落となつて、有力な企業家、例へばサミュエル・イー・ロス氏の如きでさへも、惨敗の憂目を見ることなきにしも非ずなのだ。

數ヶ月間、レスタターは自分の新しい指導者であるロス氏の提示した條件を調査して、これなら大丈夫と云ふ得心がいつたので、僅六分の利廻にしかならない持株を賣つて、この新事業に注ぎこむ決心をした。先づ土地購入の爲めに二萬弗の現金を必要としたが、これはレスタターとロスとの二人の間の取極めでその土地を引取る事になつてゐた。——賣れ残つてゐる土地がある限り、この責任は何時までもかかつて来るのだつた。次には地處の手入れ費用として一萬

二千五百弗の金を募集することで、これはレスタターが引受けた。それから約二千五百弗といふものが税金やその他工事費として豫定以外の支出になつた。軟土と硬土では、地均しをするに當つて費用が違つた。樹木は必しも都合よく繁つてくれない。又他の改善工事を始める前に、市の水道局や瓦斯局の役人に會つて「諒解」を得なければならなかつた。この方面はロス氏が分擔したが、これに要する額に就ては、改めて相談する必要があつて、レスタターはそれを一々聞かされた。

二人が最初に話し合つてから約一年が経過して、先づ大體に土地の恰好がついても、廣告をしたり、新しい地域の人氣を煽り立てる爲めには、春まで待たなければならなかつた。そして廣告の費用として、第三回の拂込が廻つて來た。レスタターは更に有價證券を處分して一萬五千弗を作り、やがて實を結ぶべき事業の爲めに當然の務めを果たした。

今までのところでは、彼は楽しく仕事を見て來た。細かい事柄を處理して行くのに、ロス氏は確かに徹底した實務家振を發揮した。土地は立派に形が出来た。その土地には可愛らしく「インウッド」と云ふ名が附けられた。尤も、レスタターも知つてゐたやうに、この近邊には到る處に小さな森が散在してゐたのだ。併しロス氏に言はせると、郊外に住宅を求める人達は必ずこの名前に惹きつけられると云ふ

のだ。將來此處に來て憩ふ人々の爲めに樹蔭をつくる努力の盛んなのを見れば、人々は實蹟よりも、寧ろ意のあるところを汲み取つてくれる筈だと云ふのだ。レスタターは微笑んだ。

ところが漸く芽を吹き始めたこの計畫に對して、最初の厭な便りと云ふのは、ホールステッド街と三十九番街の交叉點にある國際鐘詰會社(これは鐘詰業トラストの仲間での有力なもの)が現在の敷地を棄て、新しい場所へ移ると云ふ噂が立つたことである。新聞の報ずるところでは、ぐつと南へ寄つて、恐らく五十五番街以南、アシランド・アヴェニュー以西の土地を望んでゐるとのことであつた。すると、丁度レスタターの持地面の直ぐ西隣に當るので、鐘詰會社がこの邊へ割り込んで來ると一寸考へただけでも、いざこれからと云ふ土地企業にとつては打撃になるのだつた。

ロスは憤然とした。彼は直ぐに對策を考へ、最善の方法としては、新聞廣告でどん／＼人氣を煽り立て、これ以上損害を蒙らない内に何とか處置をつけて見るのだと腹を決めた。この事情をレスタターに話すと、レスタターも同意した。彼等は既に廣告費に六千弗を遣つてゐたが、更に三千弗の金を十日の間にばら撒いて、インウッドが理想的な住宅地域である事、家庭を愛する人々の爲めに、凡ゆる最新の設備がある事、シカゴ郊外でも最も閑靜な場所となるべき

事を吹聴した。ところがそれもさつぱり效目がなかつた。數區劃は賣れたけれども、國際鐘詰會社が來るかも知れないと云ふ噂が人々の頭にこびりついてゐて、それが致命的なものになつた。移民の集團地域に近いと云ふ點を別にすれば、如何なる立場から見てもこの事業は失敗であつた。

レスタターがこの打撃に依つて單に失望したと云ふのは内輪に見ての話である。年々入つて來る規定の収入は別として、彼は自分の全財産の三分の二に當る五萬弗を此處へ注ぎ込んで了つてゐた。その上に税金は掛つて來る、修繕費も出る、地價の下落も覺悟しなければならぬ。彼はロスに提案して、地處を利益なしで賣り拂ふか、擔保に入れるかして、それを見放して了ふが宜いと言つたけれども、この海山千年の土地業者は、そんな樂觀はしなかつた。ロスには以前にも似たやうな失敗を二三度経験してゐた。最初から巧く行かないものなら、どうせ碌なことはないと迷信的に決めてゐた。圓滑に運ばないのは悪靈——不吉な魔物の仕事だとして、もうそれには手をつけたくないのだ。他の土地業者の意見だつて同じであることは、彼自身の経験から云つて、確かなのだ。

その後三年して、レスタターの土地は競賣に附されて了つた。彼は全部で五萬弗を注ぎ込んだのだが、一萬八千弗とほんの少しを回收したに過ぎなかつた。それでも、目の高



い友人達は、彼の怪我がこんなに軽くすんだのは運のいい方だと評した。

## 五〇

かうした土地投機事業が行はれてゐる一方、ジェラルド夫人はシカゴへ移ることに決めた。二三ヶ月シンシナチに住んでゐる間に、レスターの不規則な生活に就いて大分聞きこんだ。けれども、ジェニーと結婚したかどうかと云ふ疑問は未だにその儘残つてゐた。ジェニーの少女時代の誇張した色々の噂、シカゴの新聞が、レスターの事を愛の爲めに財産を棒に振つた若き百萬長者として書き立てた事、ロバートが事實上レスターをケイン商會から追ひ出して終つた事、等が彼女の耳に入つた。レスターが斯程まで犠牲を拂つてゐるのかと思ふと、彼女は腹立たしかつた。レスターはこの一年間と云ふもの、殆ど何もする事なく費して了つた。もう二年すれば彼の機會は去つて了ふのだ。ロンドンで會つた時の話では、自分は餘り空想を描いてないと言つた。けれどもジェニーと云ふ女は、その少ない空想のうちの一つではないのだらうか？ 彼は本當にジェニーを愛してゐるのか、それとも只可哀相だと思つてゐるだけではないからうか？ レティはその邊のことを確かめたかつた。

ジェラルド夫人がシカゴで借りた家はドレクセル・プールヴァールに在つて頗る豪華なものであつた。「この冬に私はそちらへ參つて家を借りるつもりゆゑ、いづれ度々會ひ出来ることゝ存じます」と、夫人はレスターに手紙を書いた。「シンシナチの生活には、つくづく降參致しました。何にいたせ、歐羅巴で暮したものは——申上げずとものこと。土曜日にノウルズ夫人にお會ひしましたところ、あなたのことをお尋ねでした。あの方はほんとに良いお友達なのでございますのよ。お嬢さまが明春ジミー・セヴァラースと結婚式をお舉げになるのです。」

レスターは悦びと不安の混合した氣持で、夫人の來市を考へてゐた。無論愉快な話相手には違ひない。だが最初から自分とジェニーと一緒に招待するやうな、へまなことはないだらうか？ そんなことは決してあるまい。もう今では萬事を知つて了つてゐる。手紙の書きぶりからでも分る。度々會ひするとあつた。ジェニーを問題にしてゐないのだ。自分は彼女に總てを打明けて了ふ必要がある。さうしたら彼女はこれから先の二人の交際に就て好きなやうに見せてくれるだらう。或午後のこと、居心地の好いレティの私室で、淡黄色の衣をつけた愛の權化と向き合ひ乍ら、彼は胸の中を打明けて宜いやうに思つた。彼女は理解してくれるに違ひない。この頃丁度、土地のことがそろ／＼疑

問になりかけた時で、彼は少し憂鬱になつてゐた。それで誰か話を聞いて貰ふ相手が欲しかつた。彼はジェニーには不景氣な話にする氣になつてゐなかつたのである。

「ねえ、レスター」とレティは彼に白状させようとして口を開いた——その時、女中がお茶を彼女に、ソーダを割つたブランドイをレスターに置いて行つた。「私、今度歸つて來てから、随分あなたのことを聞きこみましたわ。御自分ですつかり伺はして下さらない？ 私あなたのことがいつでも心に懸つてゐるのですもの、ね。」

「聞いたつて、一體どんなことを？」と彼が靜かに尋ねた。「それはね、お父さまの御遺言のこと、あなたが會社をお辭めになつたこと、それから奥さんに就て一寸した噂を聞きましたの。でも奥さんのことなんか、私、氣にしませんわ。私の言ふことお分りですわね？ あなた、もう宜い加減に締め括りをつけて、御自分の分前だけはお貰ひになつたら宜いぢやございませんの？ ねえ、レスター、あなたが本當に愛していらつしやるなら兎も角も、でなければ全く詰らない犠牲だと思ひますわ。愛していらして？」とレティは意味ありげに尋ねた。

レスターは一應思案してから返事をした。「レティ、最後の質問には、僕もどう答へて宜いか分らないんでね。愛してゐると思ふ時があれば、自分ながらどつちとも分らない

時がある。僕は何もかも率直に言つてゐるんですよ。全く今日までこんな變な事になつた例がないんでね。あなたは僕を非常に思つてゐてくれる、僕も——いや、それは言はずに置かう」と彼は微笑んだ。「が然し、打割つて言ふとですね、僕は未だ結婚してないのです。」

「そんなところだと想像してゐましたわ。」と、レスターの言葉が終るのを待ち受けて、彼女が言つた。

「と云ふのも、實は自分でも決心がつき兼ねてゐるからです。初めてあれを見た時には、これ程自分の心を捉へたものはなかつたと思ひましたね。」

「それで、その頃の私の魅力のほども分るといふ譯ですのわ。」

「僕の話が聞きたいのならば、口を出さないで載きませう」と彼は微笑んだ。

「私、一つお訊きたいことがあるの。それを伺つたらもう黙りますわ。そのお話は、クワイヴランドでのごとでございますか？」

「さうです。」

「そんな風に承知してゐましたわ。」

「その頃のジェニーはまつたく——」

「一目の戀ですわね」と又もレティは餘計な口を差押んだ。心で惱んでゐたのである。「屹度さうだわ。」



「本気で聴いてるんですか？」  
「あ、御免なさい。だって、私ちつとしてゐられない氣持なんですよ。」

「まあ、兎に角、僕は夢中になつて了つたんです。僕の社會とは少し懸け離れてはゐたけれども、この世の中で一番完全な女だと思ひましたね。アメリカはデモクラシーの國です。僕は何でもなしに、ジェニーが僕のものになるものと考へましたよ。ところが、それから——あなたの知つてゐる通りです。その點、僕が思ひ違ひをしてゐたのです。まさかこんなに難かしくなつて來るとは思はなかつた。僕はその前、あなた以外の人は見向きもしなかつたのですが——いや實際のところでは——あなたとも結婚する氣があつたかどうか分りません。誰とも結婚したくなかつた。ジェニーと一緒になつて、暫くして騒ぎが幾分落ついたら、二人は別れても宜いと、かう考へてゐたんです。十分仕送りをしてやる積りでした。僕も氣にしないで済まされる、向うも平氣だらう、そんな風に考へてゐたんです。分つて？」

「え、分りました。」と彼の懺悔聽聞役は答へた。  
「ところが、レティ、思惑通りには行かなかつた。ジェニーは不思議な性格の女で獨特の感情、情緒の世界を持つてゐるんです。僕達の所謂教育と云ふものはないけれども、生れつき上品で氣が利いてゐるんです。立派に一家の主婦であ

り、母親としても理想的です。珍しく愛情に富んだ女で、自分の両親に對しても口には程盡したものでなし、又自分の娘の——と云つても僕の子ではありません——可愛がり方も實に申分がないですよ。もちろんあれは氣の利いた社交界の婦人らしい優雅な點を缺いてゐます。即座に味のある應答をすることも出来ない。テンポの早い會話の仲間入りは出来ない。頭の働きは機敏に行かないものと見えるのです。偉いことを考へてゐても、それは決して表面に現はれて來ないが、併し考へてゐるな、感じてゐるな、と云ふことはこちらに通じるんです。」

「却々褒め方がお上手ですよ、」とレティが言つた。  
「當然ですよ、」と彼が答へた。「あれは立派な女ですよ。だがさうは言ふもの、僕をジェニーに結び着けてゐるものは、同情に過ぎないのではないかと考へることが時々あつてね。」

「どうですかね、」とレティは戒めるやうに言つた。  
「本當ですよ、でも、もう随分深い關係になつてゐるんです。最初に直ぐ結婚してゐたら宜かつたんです。その後あんまりいざござがあつたものだから、僕も辛抱がしきれなくなりさうです。父の遺言がことをこぢらすんです。あれと結婚すると、八十萬弗がふいになる始末で——いや、今ぢやトラストになつたから、もつとずつと多い額でせう。」

二百萬にはなるだらう。結婚しないであると、二年先には何もかも没收です。別れたやうに見せ掛けることは出来るのだが、そんな嘘はつきたくない。又若し敢てすれば、あれ程まで僕に盡してくれるジェニーの感情を、害するに決つてゐる。今僕の心の奥底をさぐつてみても、あれと別れて了ふ氣なのかどうか断定出来ない始末です。一體どうしたら宜いんだか。」

レスターは一寸彼女の方に視線を向け、心そこにあらぬ様子で葉巻に火をつけ、それから窓の外を眺めた。

「今までにこんな問題があつたものでせうか？」と、レティが床を見詰めながら訊ねた。暫く黙つてゐてから、彼女は立ち上つて、自分の手をレスターの圓いがつしりした頭の上へのせた。彼女の黄色い絹の部屋着はレスターの肩に觸れて、淡く香水の匂ひを撒いた。「可哀相なレスター、とんでもないことに縛られてしまつたのね。だけど却々解ける結び目ではないわ、いつそのこと斷切つて了はなければ駄目よ。今私に話して下さいやうに、あの方とこの問題を御相談になつて、あの方がどんな氣持であらうか見えて御覽になつたら宜いぢやありませんの？」

「そりや餘り氣の毒な氣がする。」  
「でも、レスター、どうせ、何とかしなければならぬのよ、」と彼女が主張した。「どつちつかずではゐられませ

わ。あなた自身に對しても不忠實ですよ。打明けて言ふと、あの方との結婚はおすゝめ出来ませんわ。だからと言つて、私の爲めに申してゐるのではないんです。尤も最初私をお棄てにはなつても、私は喜んであなたをお迎へはするつもりですけど。本當に申上げるとですね——たとへあなたが私の處へお出になつても、ならないでも、私は眞實あなたを愛して居りますわ。そしてこれからだつて變りなく愛しますわ。」

「それは分つてますよ、」とレスターは立ち上りながら言つた。レティの兩手を取つて、彼は彼女の顔を物珍しげに眺め入つた。それからぐるりと傍を向いた。レティは一息つく爲めにじつとしてゐた。彼の科がレティの心を擾したのだ。「でもあなたが一年に一萬弗で納まつて了ふのは餘りに勿體ないわ、レスター、」と彼女は言葉を續けた。「こんなにのらくらしてゐるのは惜しい社會人であらうしやるの。やはり元の社交界、實業界にお戻りになるのが本當よ。會社との關係さへ元通りになれば、今までのことはちつとも妨げにはならないでせう。あなたは御自分で條件をお決めになれるぢやないの。そして萬事を打明けてお話しになつたら、あの方だつて屹度納得なさると思ふわ。あなたが信じていらつしやるやうに、あの方が本當にあなたのことを思つていらつしやるのなら、犠牲をお厭ひになりませぬ。」



それは私、確かですわ。無論あなたは十分面倒を見てあげになつて宜いでせう。」

「ジェニーの望んでゐるのは金ではないのですよ、」とレスターが鬱ぎ込んで言つた。

「それはさうとしても、何もあなたがなくなつたつて生きても行けるし、十分の収入さへあれば、今よりも裕福に暮して行けますわ。」

「若し僕がそんなことにしないで済ませれば、ジェニーだつてその方を望んでゐるでせう。」彼は重々しく言つた。

「どうしても別れなくてはいけません、」とレティが前よりもきつぱりとした調子で言つた。「どうしてもですよ。あなたには一日だつて大切ぢやないの、レスター。どうして直ぐに——今日にでも、さう結着をつける覺悟をなさらないの？ ねえ、どうしてなさらないの？」

「そんなにせつかちに、」とレスターが反對した。「扱ひにくいことだね。實のところ、僕はそんなことはしたくない。殘酷だし——不公平ですからね。僕は駈けずり廻つて、自分のことを人に相談出来る人間ぢやないので、今までも、この話は誰にだつて聞いて貰はなかつた——父にも、母にもです。けれど、どう云ふものかあなたは誰よりも僕に近しいやうに思はれて、今度お會ひしてから是非この話を聞いて貰はなればと思へて——いや本當に聞いて戴きた

かつた。あなたを頼りにしてゐるんです。目下のやうな事情にあつてどうしてそんなことがあり得るか、あなたは不審に思はれるかも知れませんがね。でもそれは事實なんです。あなたは感情の上でも、頭のことでも、僕が考へてゐた以上に僕に接近してゐる。そんな顔をしなさい。さあ、これでおしまひです。今度は一つあなたの僕に對する御意見を伺ひませう。」

「レスター、私は何もあなたと議論しようと言ふのではありませぬよ、」と彼女は片手を彼の腕に掛けて優しく言つた。「私はあなたを愛したいばかりですの。さうした成行に就ては十分理解が出来ます。私にしても悲しいし、あなたにもお氣の毒だし、また——」とためらつて、「奥さんもお氣の毒だと思ひます。本當にあの方は美しい方ですわ。私もあの方は好きですの。本當よ、だけどレスター、あなたの奥さんになる人ではありませんわ。あなたには、もつと別のタイプの人が必要ですわ。私達がこんな風に批評するのはひどいやうですけど、決して、さうではありませんよ。私達は皆夫々の長所を發揮させるべきですわ。私に打明けて下さつたやうに、この場合、あの方の前に事實をお話しになれば、總ての事情が分つて、あの方も納得なさるでせう。さうなさいまし。あの方だつて、あなたの爲めになる

## 五

やうに願つていらつしやると思ひますわ。ねえ、レスター、若し私があの方の立場に置かれたら、あなたとお別れしますわ。私ならさうします、きつと。私の言ふことをあなた、信じて下さるでしょ？ 本當に悪い女でない限りさうしますわ。そりやあ、私だつて苦しみます。でも私はさうしますわ。あの方だつて辛いでせうが、さうなさると思ひますわ。屹度さうなさいませよ。私もあなたと同様に——いえ私の方が女だけに——あの方を知つてゐる筈ですの。ほんとに、」と彼女は言つて言葉を途切らせた。「若し私からでもあの方にお話しが出来ると宜いだけけれど、私なら納得の行くやうに話してあげられるの。」

レスターはレティの熱意に驚いて、彼女の顔を眺めた。レティは美しく、魅力があつて、申し分のない女であつた。

「そんなにせつかちに、」と彼女が繰返した。「僕はもつと考へて見たい。まだ多少餘裕があるのだから。」

彼女は暫く黙してゐた。聊か悄然としたやうではあつたが、決心は變らなかつた。

「決行するのは今ですの、」と彼女は魂の力を目の色に見せながら繰返し言つた。彼女はレスターが欲しいのだ。相手がさうと氣取つても、恥しいとは思はなかつたのだ。「まあ僕は考へて見ますよ、」とレスターは、不安さうに言つて、そゞくさと別辭を述べて歸つて行つた。

レスターは苦境の切抜策を色々考へた。そして故障が起らなかつたら、それを實行に移す折も遠くはなかつたのだ。ところでその故障と云ふのは、そんな時には起り勝ちな邪魔で、外でもなくハイド・パークの自分の邸での出来事だつた。ゲルハートが急に衰へを見せたのである。少しづつではあつたがゲルハートは受持の役割を罷めて行つた。終には床に就くやうな始末になつた。病室へ閉籠ると、ジェニーからの手厚い看護の下に、絶えずヴェスタの見舞ひを受け、時々レスターからも言葉をかけられた。寢臺の近くにある窓からは芝生が見え、街路も見下すことが出来た。彼はその窓から外を眺めては、いつも一時間程も、外の世界の出来事を氣にかけて考へ續けるのだつた。御者のウツが、馬や馬具の世話をちゃんとしなさいか、火夫が石炭を浪費したり、或は十分に火を燃さないか、など、氣遣つた。細々した心遣ひでも彼にとつては大事なことであつたのだ。彼はよく家事の取り方を辨へてゐた。彼は自分の引受けた役目は嚴格に果した。で自分が寢てゐては、物事が巧く運ばないやうに思つてよく／＼した。ジェ



ニーは父親の爲めに、羊毛を中に包んでどつしりとした紺の絹布のどてらを作り、それと揃ひの、厚ぼつたくて軟い羊毛のスリッパを買つてあてがつたけれども、彼はあまり使用しなかつた。それよりも寢臺の上で、聖書や、ルーテル教派の新聞を見たり、ジェニーを相手に家の中のことをあれこれと訊ねるのを好んだ。

「地下室へ行つて、あの男が何をやつてゐるか見て来て貰ひたい。さつぱり温くなつて来ないぢやないか」と彼はこぼした。「わたしにはあいつの姿が見える。坐つて何か讀んでるんだ。火が消えて了ふまで、すつぽかして置くんだ。ビールがいつも取つて來られる場所に置いてあるが、あれは鍵をかけて藏つとかなければいけない。あいつの性質は、お前には、分つてゐないんだ。碌な男ぢやないかも知れない。」

ジェニーは、家の中は氣持よく片附いてゐる、あの男だつて静かな、實直さうなアメリカ人で——少し位ビールを飲んで構はない、と反對するのが常だつた。するとゲルハートは直ぐ昂奮した。

「何時でもお前はさうなんだから、」と烈しく彼が言ふのである。「お前は經濟と云ふものを考へない。わしがゐなければ何時でもずる／＼にして置くんだ。あいつが實直なものか！一體どうしてそれがお前に分るんだい？ 何時も火

を絶やさないと置くかな？ お生憎さまだ！ 庭を綺麗に掃除するかな？ 見張つてなければ、あいつだつて他の奴等と同じことなんだ、ちつとも宜かない。どんな有様だか自分で出掛けて行つて調べるがよい。」

「はい／＼、」と彼女は優しくなだめるやうにして答へた。「さう致しますわ。くよ／＼なさらないでね。ビールはしまつて置きます。お父さん、コーヒとトーストでも召上りませんか？」

「いらぬよ、」と彼はすぐに頭を振るのである。「どうも胃の具合が良くないでなあ。こんなことで、どうなるんだらう。」

この近邊で一番良い、經驗もあり技術も達者なメイキン醫師が、ジェニーの招きに應じて診察し、熱い牛乳、藥用葡萄酒、安靜と云つたやうな簡単な療法を述べて、終りに、餘り期待をかけてはいけぬと注意した。「もはやいゝお年附です、衰弱も甚しいやうです。もう二十歳もお若いと思ひ切つた處置も出來ませんが、現在の御様子ですと、まづこの分で宜しい方です。もう暫くは、おもちになりませうし、起きて歩ける位なことは出來ませうが、それからは何とも申せません。それ以上は望めないとお諦めになつて下さい。私なども、もうこんな年をしてゐますから、何が起つても心配は致しません。」

ジェニーは父が死ぬと考へると悲しかつた。けれどもそれも是非ないことだとすれば、今のやうな境涯にゐるのは幾分の慰めになるのだ。少くともどんなにも看護の手は盡せるのだ。

これがゲルハートの最後の病氣だと分つて來たので、ジェニーは義務として兄弟達に知らせなければならなかつた。バスの處へ父の容體を書いてやると、その返事には、自分は非常に忙しいから、危篤でもなければ行くことが出來ないとあつた。なほ、ジョージはロチスター市の、確かシェフ・ジェファソン會社とか云ふ、壁紙の卸賣商店で働いてゐる旨も書いてあつた。マーサ夫婦はポストンへ引越し、市の郊外のベルモントと云ふ處に住んでゐた。ウキリアムはオマハの電氣會社で働いてゐた。ヴェロニカはクリイヴランドにある藥種問屋に勤めてゐる、アルバート・シェリダンと云ふ者と結婚した。「ヴェロニカは僕を訪ねても來ないが、兎に角このことは僕が通知して置く、」とバスはこぼして書いてあつた。ジェニーは各々へ手紙を出した。そしてヴェロニカとマーサからは短い返事が來た。非常に残念に思ふ、もし何か起つた場合には通知して欲しいと書いてあつた。ジョージは、父の容體が非常に悪くなつたら兎も角、今のところシカゴへ行けさうに思へない、だが容體の變化は知らして欲しいと言つて來た。ウキリアムは後になつてジェニー

に話したが、手紙を受取らないと云ふのだつた。

老父の病勢が募つて死期が近づいて來ると、ジェニーは非常に心を痛ました。昔は隨分氣持が疎隔してゐたが、今では全く親密になつてゐたのだ。ゲルハートにも、勤當した娘ながら——少くとも彼の知つてゐる限りでは——實に神妙な女だと云ふことが分つて來た。ジェニーは決して父親と言争もせず邪魔立てもしなかつた。父が病の床に就くに及んでは、彼女は晝夜何度となく病室に出入して、朝食はどうであつたか、晝食は食べられたか、晩の御飯はと尋ねて、病狀を案じた。父がぐつと衰弱すると枕許に坐つて書物を讀んで聞かせたり、或は針仕事をしたりするのだつた。或日、病人の枕を直してゐると、彼は娘の手を取つて接吻した。彼はすつかり氣が弱つてゐた。ジェニーは驚き、胸を詰らせて父の顔を見た。父の目には涙が光つてゐた。

「ジェニー、お前は宜くしてくれ、」と歎歎りながら言つた。「本當にわしを大切にしてくれた。頑固で氣難かし屋のわしだつたが、それも年寄のせゐと思つてくれ。許してくれるだらうな？」

「まあ、お父さん、そんなことを、」と言つた彼女の目には涙が溢れてゐた。「許すだなんて、そんなことないぢやありませんか。私こそ不孝な子でございましたわ。」

「いや／＼、」と父は打消した。ジェニーは跪いて、聲を出



して泣いた。ゲルハートは瘦せ衰へた、黄ばんだ手を娘の頭に置いて途切れ／＼に言った。

「泣くんではない、泣くんではない。わしも昔は知らずにゐたことで段々と分つて来たこともある。年を取ると眼が開いてくるものだ。」

ジェニーは表面は、顔や手を洗ふ様子で部屋を出て、泣けるだけ泣いた。父は心から自分を許してくれたのであらうか？ これ程までも父を欺いてゐた自分を！ もつと氣をつけてあげようとしたけれども、それは出来なかつた。併しこのことあつて後、父は以前にも増して幸福さうに、満足げに見えた。そして父と娘は共に語りひながら、楽しい幾時間かを過すことがあつた。一度、彼はジェニーに向つて言った、「いゝかい、わしはまるで子供の時のやうな氣持になつたよ、足腰さへ立つものなら草の上で踊るんだが。」

ジェニーは優しく微笑んだものゝ胸が詰つた。「お父さん、いまに良くおなりですよ。大分良くなりかけてゐるのですよ。癒つたら、馬車でお連れしますわ。」ジェニーはこの過去の數年間、父を安樂に暮させたので嬉しいと思つてゐた。レスタールはと言ふと、思ひ遣りがあつて、細やかな愛情を示した。

「おい、今日はどんなだい？」と彼は家に歸ると匆々すぐ尋ねるのでつた。そして夕食前にはきまつて、暫く老人の

部屋を見舞つて来るのだつた。「大分良いやうだね、」と彼はジェニーに言った。「この調子ならまだもちさうだ。心配することもないよ。」

ヴェスタも、お祖父さんと一緒に過す時間が多かつた。お祖父さんをすっかり好きになつてゐた。そして餘り妨げにならない限り、學校の本を持つて来て、讀んで聞かせたり寢室の扉を開けておいて、ピアノを弾いて聞かせたりもした。又時には、レスタールに買つて貰つた自鳴琴を持ち込んで、お祖父さんの爲めに鳴らして聞かせた。ゲルハートは時時ジェニー以外のものは、人でも物でも嫌になつて了ふことがあつた。娘と二人だけであつた。そんな時ジェニーは靜かに彼の傍で針仕事をした。彼女には、父の最後の遠くないことが眼に見えてゐた。

ゲルハートは持前の性質から、死後の手配を色々考へた。埋葬する時はサウス・サイドの二三哩も離れた處にあるルーテル教派の共同墓地で、自分の教會の慕つてゐる牧師に司式して貰ひたいと希望した。

「わしは極く質素にして貰ひたい。黒い服と、よそ行きの靴と、それから黒のネクタイだけで澤山だ。他のものは何もいらぬ。それだけで宜いのだ。」

ジェニーは、そんなことを言はないやうにと頼んだけれども、彼は聽かなかつた。或日の四時頃になつて、彼は急につと電報を打つて来て、翌日到着した。他の者は、行かれないが詳細知りたしと電報を寄越した。ジェニーは委細を認めてやつた。ルーテル教會の牧師が祈禱をしたり、葬式の打合せの爲めに呼び迎へられた。よく肥つてきちんとした葬儀屋が儀式萬端の用意を委せられた。昔に變る事なく實際してゐた數名の隣人が悔みに來た。そして死後二日目に葬式が営まれた。レスタールはジェニーとヴェスタとバスとを伴つて小さい赤煉瓦のルーテル教會へ出掛けた。そして單調な儀式の間ぽかんと坐つてゐた。彼は、來世の報償や美しい生活に就ての長たらしい説教を倦々しながら聞いてゐたが、話が地獄のことになると、堪らなくなつてじりじりと身體を動かした。バスも退屈したけれども、神妙に控へてゐた。彼は父が世を去つた今も、何か他人のこと位にしか考へてゐなかつた。只ジェニーだけが、同情の涙を流した。彼女は沁々父の多年の辛苦を追想した——薪を割つて生計を立てゝゐた頃のこと、父が一人で工場の屋根裏に住んでゐた時代のこと、一家の者が住んだ十三番街のぼろ家のこと、クリイヴランドのロリー街で過したあの慘めな苦境時代、彼女や母の爲めに悲憤した父、ヴェスタを可愛がつて面倒を見てくれた父の姿、それから最後に、晩年の幾日かと思ひ出された。

「本當に良い人だつた、」と彼女は思つた。「いつも皆の爲

氣が遠くなつて、五時には息を引き取つた。ジェニーは父の兩手を取つて、亂れた息遣ひを見成つてゐた。一二度彼は目を見開き、娘の方を見て微笑んだ。「もう死んでもいゝ」と彼は死に臨んで言つた。「わしに出来るだけのことはやつたのだ。」

「お父さん、死ぬなんて仰言らないで下さいよ。」  
「これでお終ひだ、お前はわしを大切にしてくれ。親切な女だつた。」

父の口からは、それ以上聞くことが出来なかつた。

苦勞の多い一生を茲で終へた父の死は、ジェニーを深く悲しませた。娘の優しい親切な心遣ひに身を委せきつて、ゲルハートは娘を友達とも思ひ、助言者とも思つた。娘の眼にも今になつては父の姿が様々な場景の前に浮上つて見えて來た。この律義な、骨身惜まず働く老獨逸人は、苦難に満ちた一家を營みつゝ、正しい生活を送つて來たのだ。いかにも彼女は父に取つて大きな惱みの種であつたが、彼がこの世を去るまで、とう／＼正直なところを打明けないうで了つた。父が今どこにゐようとも、自分が偽つてゐたことを知つてゐるのではないか、さうジェニーは思つた。それが分つても父は許してくれるだらうか？ 自分のことを親切な女だと言つてくれたのに。  
電報で兄弟達の處へそれ／＼通知した。バスは直ぐに立



めを思つて下すつたのだ。」會衆は讚美歌を唱つた。「神はわが力、わが高きやぐら」と歌つて、彼女は咽び泣いて了つた。レスターが彼女の腕を引張つた。彼もまたジェニーに惹かれて、泣けて來さうだつた。「もつとしつかりしなくては駄目だ」と彼が囁いた。「あゝ、これはいけない。どうにも出て行かない事には。」ジェニーは幾分静まつたけれども、これが父との今生の別れかと思ふと、堪らなかつた。

リディー・マー共同墓地で——其處にレスターは一割を買取つてあつた——素木の棺が墓穴に降されて、土がその上にかけられた。レスターは珍しさうに葉の落ちた立木、褐色になつた枯草、この粗末な墓地の側に、大草原の代赭色をした土が掘返されてあるのを眺めてゐた。この墓處には何一つとして目につくやうなものはない。見榮えのしない、一労働者の安息所に過ぎない。だが、それも故人の望みとあれば結構なわけだ。レスターはまた、バスの鏡い、瘦せた顔を眺めて、一體どんな経歴の男だらうかと考へた。葉巻煙草の店でもやつて、成功しさうな男だなど、想像した。それからジェニーが泣腫した目を拭つてゐるのを見て、「彼女には異つたところがある、」と獨語つた。ジェニーの悲歎は深刻で切實なものがあつた。「ほんとの女らしい女と云ふものは、言葉では言ひ盡すことが出來ない、」と彼は思つた。

家へ歸る途中、吹曝しの、砂塵の立つ道筋を馬車で走りながら、レスターは、バスやヴェスタがある前で、廣く世の中のことについて語つた。「ジェニーは餘り物事を深く考へ過ぎる、」と彼が言つた。「殆ど病的な位だ。人生と云ふものは、ジェニーが自分で鋭敏に感じる程辛い場所ではない。誰しも苦勞があるものだ。そして程度の差はあるが、僕達はそれを堪へ忍んで行かなければならない。甲の人が乙の人よりも幸福だとか、或は不幸だとか言つて批評することは出來ない。皆それ／＼に苦勞を背負つてゐるのだ。」

「でも、私はそれをどうすることも出來ないので、」とジェニーが言つた。「私は或人達には、本當に泣かされて了ふのですもの。」

「ジェニーは昔から少しふさぎ過ぎるよ、」とバスが口を出した。彼はレスターの立派な容姿や、その立派な暮しや、ジェニーが出世したことなどを考へてゐた。そして自分が初めに考へてゐたよりも、妹はずつと素晴らしい生活をしてゐると思つた。一時はてんで駄目だと思はれてゐたのに、全く世の中は變なものである。

「お前のやうにくよく／＼せずに、もつと氣を強く持つて、物事を努めて在りの儘に見るやうにするのが肝腎だ、」とレスターが最後に言つた。

バスも同感だつた。

ジェニーは馬車の窓から外を眺めて物思ひに沈んでゐた。そのうちに懐しい我家が見えて來たが、その靜かな廣い邸には最早父はゐないのだ。あゝ、もう父の姿を見ることは出來ないのだ。一同は車寄を内に入つて書齋に落着いた。女中のジャネットが内氣に、恐る／＼茶を運んで來た。ジェニーは細々した指圖をしに出て行つた。そして自分が死んだら一體何處へ行くのだらうかとつく／＼不思議に思つた。

## 五二

ゲルハートが死んだといふ事は、ジェニーを悲しませただけで、レスターにとつては大した問題ともならなかつた。レスターはこの齡老いた獨逸人の様々な良い性質を好いてゐたものゝ、それ以上別に何とも思つてゐなかつた。彼は、ジェニーの氣持を癒す爲めに十日程、或る保養場へ連れて行つた。そしてその後間もなく、現在の自分の立場を彼女に話さうと決心したのである。例の問題を彼女の前に明らかにし、まにさらけ出さうと思つたので、今はそれを切り出すのに都合が好くなつてゐたのだ。と言ふのは、土地賣買の思惑が慘めな、見當違ひになつてしまつたと云ふことを、既にジェニーに聞かせてあつたし、彼女は又レスターが相變らずジェラルド夫人に惹き付けられてゐるといふことにも氣附

いてゐたからだつた。レスターも亦夫人と自分が親しくしてゐるのだと遠慮なくジェニーに話してゐた。初めの頃は、ジェラルド夫人は、レスターを通して形式的にジェニーを連れて來るようにと言つたが、その癖自分から彼女に會ひに來たことは、一度もなかつた。ジェニーはこれではいけないと、はつきり見抜いてゐた。彼女は父も死んで了つた今となつて、自分の身の振り方が心配になつて來た。レスターが自分と結婚しては呉れないのではないか、それが氣掛りだつた。明かに、彼にはその素振さへも見出せなかつたのである。

不可思議な暗合とでも言はうか、ロバートも亦この問題を何とかしなければならぬといふ腹になつてゐた。ロバートは毛頭直接レスターに働きかけることは考へなかつた。彼はそんなことをする氣がなかつた。寧ろ彼はジェニーの方を動かすことが出來ればと思つた。彼女は理詰めの話に対しては柔順であるだらう。レスターが未だに彼女と結婚してゐないとしたら、彼に結婚の意志が無いといふ事を覺るに違ひない。誰か信頼するに足る第三者が、勿論生計を立て、ゆける金を持つて行つて彼女に與へ、事情を説明して聞かせたらどんなものだらうか？ 彼女はレスターと別れることを肯んじないで、この紛糾をいつまでも解決させずに置くと言ふのだらうか？ 何はともあれ、レスタ



「は自分の兄弟である、財産を失はさせてはならない。ロバートは現在實權を自分の手に握つてゐたので、氣前を見せることが出来るのだつた。彼は結局ナイト・キートリー・オブライエン法律事務所のオブライエン氏が調停には適役だと考へた。同氏は懇懇で、濃厚で、辯護士にも似ず惡氣のない人物であつた。オブライエン氏だつたら、ジェニーに對して、家族の者がどう考へてゐるか、レスターが彼女との關係を續けて行くとしたら、何んなに損害を蒙る事になるかを、丁寧に説明して呉れるだらう、萬一レスターがジェニーと結婚してゐるとしても、オブライエン氏なら見抜くであらう。手切金としてたつぷり出して宜い——まづ五萬弗か十萬弗、ことによつたら十五萬弗まで。ロバートはオブライエン氏を招いて、自分の意見を述べた。アーチボルド・ケインの遺產管理人の一人として、レスターの最後の決定に參與するといふことは、辯護士としての彼の大切な義務であるのだ。」

オブライエン氏はシカゴへ旅立つた。彼は到着するとレスターを電話で呼び出したが、都合の宜いことには彼は當日他出中だと分つた。オブライエン氏は直ちにハイド・パークの邸宅を訪れ、名刺を通じてジェニーに面會を求めた。彼女は二三分すると應接間へ降りて來たが、辯護士の用件に就ては全然氣附いてゐなかつた。

彼は出来るだけ懇懇な挨拶をした。  
「ケイン様の奥様でゐらつしやいますでせうか？」彼はさう言ひながら首をかしげた。

「左様でございます、」とジェニーは答へた。

「名刺で御承知下さいましたやうに、私がナイト・キートリー・オブライエン法律事務所の、オブライエンでございます。」と彼は口を切つた。「私は辯護士でございます、亡くなられたケイン様、——貴女の——あの——御主人様のお父様でございますね、その方の遺言管財者でございます。私のお訪ね申上げた事に御不審かとも存じますが、御主人のお父様の御遺言の中には、貴女及び御主人にとつて重大な條件となるものがございます。で、この條件といふのが非常に重大なことになるので、それに就ては——御主人様から未だお話がないと致しまして——當然お耳に入れなければならぬ筈のものだと存じます。私は——大變失禮な言ひ方でございますが——兎に角このことは特別な事情がございますので——多分未だお話しになつて居られないやうに存じますが。かう言つて彼は言葉を切つた。オブライエン氏そのものが、まるで疑問符のやうに、いかにも不思議な存在に見えた。

「私にはよく分りませんが、遺言とかいふことに就ては何も承知致してゐないのでございます。何か存じてゐなければ

ばならないことが在りましたら、ケインから私に聞かせて呉れることゝ存じます。そのやうなことは、未だ一度も伺つては居りませんが。」

「成程、」とオブライエン氏は非常に満足げに息をついた。「私の考へて居つた通りです。では、若し宜しうございまして、簡単に御話し致しませう。その上で詳細をお聞き下さるかどうか、御判断願ひませう。お坐りになりませんでせうか？」兩人共立つた儘だつたのだ。ジェニーが坐つたので、オブライエンは自分の椅子を彼女の近くへ引寄せた。「では申し上げます。こんなことはお話する必要はございませんが、亡くなられたケイン様はですね——その——貴女と御子息との御結婚に對して、可成な反對の御意見だつたのでございます。」

「え、私存じてゐます——」とジェニーは言ひかけたが、その儘に黙つて了つた。彼女は狐につまゝれた氣味で、それに少し心配になつて來た。オブライエンは話を進めた。「ケイン御老人の亡くなられる迄は、御老人は貴女の——え、——レスター・ケイン様に對して、さういふ御意見を居られたのです。ところが御遺言に因りますと、遺産分配に就て或る條件をお定めになられたのです。その爲めに御子息、つまり貴女の——え、——御主人にとつて、當然廻つて來べき分前が不利な事になつたのでございます。普通ならば御主

人は、ケイン製造会社ですな、現在では殆ど百萬弗、或はそれ以上の價値を持つてゐる會社の資産の四分の一と、其他合計凡そ五十萬弗の資産の四分の一とを相續されるわけなのです。ケイン御老人はこの財産を御子息に譲られたといふお考へでゐられたのは確かでございます。ところが——その——ケイン様のお父様の御遺言の條件の爲めにですな、レスター・ケイン様は、お父様の御遺言に従はなければですな、遺産を相續なさることが、まあ不可能だといふ譯になつてゐるのでございます。」

彼はこゝで一息し、眼球をぐる／＼横に動かした。彼は自分の立場から自然ジェニーに偏見を持つてゐたのだが、彼女の好ましい容姿態度から深く感銘を受けた。そしてレスターが周囲の反對を押し切つて迄も、彼女から離れ得ないでゐる氣持が呑込めた。彼はジェニーが口を開くのを待ちながら、ひそかに彼女の心を讀みとらうとしてゐた。

「して、その御遺言とか仰言るのは何でございませうか？」彼女は遂に訊ねた。沈黙が續いた爲めに、彼女の神経は聊か緊張して來たのだつた。

「いやお訊ね下さつて有難う存じます、」とオブライエンは言葉が続けた。「この問題といふのは、私からは甚だ申上げ難いことで——大變申上げ難いことなのです。私はあの遺産に就ては、心の使者として參つたに過ぎないのでして、ケ



イン様のお父様の遺志を受けた一人として参上致したわけでございます。これに就てはどんなに——え——どんなにケイン様も苦痛に思つて居られるか、私もお察し致します。貴女もその事に就ては御心痛のこと、存じて居りますが、併しですな、これはこの儘にして置くことの出来ない——何とかして解決しなければならぬ、實に難かしい問題なのでして。このやうな事はお話しするだけでも實に躊躇せざるを得ないわけですが、併しケイン御老人が御遺志として申遺されたことですから、私として申上げずに済ます事もありません。詰りその、と彼はそこまで言つてその兩眼を再び左右に動かした。「あなたと別れさせようとお考へだつたのですな。彼は息をつく爲めに聲を呑んだ。「御主人は遺産といふものを受けられないと云ふ始末です。いや年一萬弗は自由になるのですが、それも貴女と結婚なさつた場合に限られて居りますよ。」彼は再び言葉を切り、更に續けて言つた。「なほ附加へて申上げなければならぬことは、御遺言に因ると、御主人が遺産繼承の意志表示をなさるの三年以内でして、もうその期間も切れようとしてゐることです。」

オブライエンは、ジェニーが泣き出すやうなことにでもなりはせぬかと豫想し乍ら、言葉を途切らしたのだつた。併し彼女はじつと彼を見詰めてゐるだけで、兩眼は驚愕と、苦

痛と、悲しみとで曇つてゐた。彼女には總てが諒解出來た。レスタターは、彼女の爲めに財産を犠牲にしようとしてゐたのだ。近頃の彼の投機的な遣り口は自分の地位を取戻し、獨立出來るやうな状態に置かんが爲めの努力だつたのだ。彼が近頃呆けたやうになつたり、捕へる事の出来ない不安の容子を見せたり、何か不満らしい所があつたので、彼女は悲しく思つてゐたのだが、その原因は今こそはつきりした。彼は樂しまなかつたのだ。彼は損害を豫期して思ひ煩つてゐたのだ。而も彼女には一言も話さないでゐた。ではレスタターの父親は本當に彼の相續權を剝奪して了つたのだ！

オブライエンはジェニーと向きあつて坐つて、落着かなかつた。彼女の顔の表情を見ると、非常に氣の毒に感じはしたが、事實は事實として述べなければならなかつた。彼女の知つてゐなければならぬことだ。

「何とも濟まないと思つた、と彼は、相手がなか／＼答へようとしなさいのを見て、口を開いた。「私が斯様な不幸な知らせを持つて參つた事はお氣の毒に存じます。私と致しまして、このやうな役廻りは非常に苦しいのでございませぬ。私個人として何も貴女に悪意は持つてゐる筈はございませぬ——勿論このことは御諒解下さつてゐること、存じます。御兄弟の方々も今では少しも悪い感情を抱かれては居られないので——これも信じて戴きたいこととござい

ます。私があつた——ケイン様に遺言が讀まれた時に申上げたことですが、これは途方もなく不公平な處置でございませぬ。ですが勿論、それに従はなければならぬ單なる管財者として、又御主人のお父様の法律顧問にしか過ぎない私には、如何ともする事が出來ないのでございませぬ。で私の考へますには、貴女が現在の事情をすつかり本當に御理解下さつて、つまり、貴女の御主人の御相談相手になつて——彼は意味あり氣に言葉を切つた——「若し出來れば、何とか解決なさるのが宜しいと存じますよ。御主人が財産を元も子も失つて了はれるといふことは、御兄弟の方々の悲しみであると共に、私にとつても悲しいこととございませぬからぬ。」

ジェニーは顔を背けて床を見詰めてゐた。それから彼にじつと眼を注いで言つた。「主人がそれを手離すことはございませぬ、そんなことは正當でありませぬ。」

「さう仰言つていたゞいて、私もこの上なく満足に感じませぬ。奥様——ケインの奥様、と彼は續けて言つた。初めの程は強ひて避けようとしたレスタターの妻としての名稱を今は躊躇もなく用ひて。「さつぱらんに申上げますと、私はこのことに就て貴女がすつかり誤解して了はれはしないかと、心配してゐたのでございませぬ。勿論御存知のことと考へますが、ケイン家の方々といふのは大變偏狹な考へを抱

いて居られるのです。ケイン母堂、貴女の——その——御主人のお母様に當る方でございますね、その方も大變自負心の強いお方、といふよりも寧ろ非常に排他的な態度を持つて居られる御婦人でした。又御主人の御姉妹、御兄弟とも、所謂姻戚關係をやかましく言はれるのです。で、その方々は貴女と御主人との關係を不釣合なものと觀てゐらつしやるのでございませぬ。それに——少し殘酷な申し分でしたらお許しを願ひますが——皆様が御承諾になつてゐらつしやらないのでございませぬ。御承知のやうに、亡くなられた御先代の晩年には、色々取沙汰がありましたため、故人は貴女を中心にしての問題がうまく纏められるといふことを、それが御自分の御家族に關係してゐる限り、信じて居られなかつたのです。それに就ては、第一、お父様は御子息が貴女との關係で間違つた方法を取られたとお考へになつたのです。お父様の御遺言の一條項は、若し貴女の御主人——御免下さい——御子息がお父様の御意見に従はれず、貴女と別れる方法を取らず、當然の權利である財産相續もなさらないと云ふならば、遺して置くものは——私が嚮にお話し申上げた一年間僅か一萬弗の手當しかない、それも——え——失禮な言ひ分でございますが、少し酷いと思召すか存じませぬが、決して故意に申上げるのにはございませぬのでして——貴女と結婚なさると云ふ條件の下に、



と云ふ譯なのでございます。」

ジェニーは縮み上つた。自分に面と向つて、このやうな事を言はせるとは何といふ残酷な事であらう。内縁關係で暮して來た今日までの生活は、歩一步、不幸な結果を生んで來た。この不幸な生活には只一つの解決法があるだけなのだ——彼女にはそれがはつきりと分つてゐた。彼女がレスターから去つて行くか、でなければ、レスターの方から離れるかである。この二つの中、何れか一つを擇ぶより方法は無かつた。レスターが年一萬弗で生活して行くとは！そんなことは考へられない。

オブライエンは、彼女を不思議さうに眺めてゐた。彼はレスターが誤謬を冒したのだとも、また冒したのではないとも考へた。何故レスターは最初に彼女と結婚して了はなかつたのだらう？ あんなに美しい女なのに。オブライエンは穩かに、自然に話を進めていつた。「ケインの奥様、この問題と關聯して私が承知致して置きたい今一つの大切な點が在るのでございます。今となつては貴女にとつてそれはどつちでも宜しいやうなことはありませんが、併し私は委託されて参りました以上、伺つて置かねばなりません。お訊ね致しますに、御返事を聞かせて戴きたいと存じます。貴女は御主人の御商賣に就て、御關係になつてゐらっしゃいますでせうか？」

「いゝえ、」とジェニーは簡単に答へた。

「では、その問題を簡単にする爲め、また貴女が納得して下さるため、若し貴女のお手助けによつて御主人がこの困難な状態から抜け出されるやうになりましたら——え、明らかに申上げますと、貴女が若し御自分から身をお引き下すつて、別にお家をお持ちになられるやうでございましたら——私は喜んで申上げますが——え、——どの位の金額でも、その——」

ジェニーは立ち上つて、ふら／＼と窓の方へ歩いた。兩手をしつかりと握り締めて歩いて行つた。オブライエンも立ち上つた。

「その、それは兎も角、今迄の關係を打切る御決心がつかしましたと致しまして、御參考迄に申上げておきますが、貴女のお申出での金額が五萬弗、七萬弗、或は十萬弗でも」オブライエンは、彼女に心から同情してゐた——「貴女のお遣ひになるやうに、喜んで積立て、置かれることになつてゐます——委託して置くわけで、何時でも御入用の時には御自由になるのでございます。少しの御不便もかけない筈でございます。」

「もう澤山です。」ジェニーは心の痛みに自分の思ふことを言はうとする力も無くなり、心も肉體も、これ以上話を聞くに堪へなくなつて了つた。「どうか、もう仰言らないで下

さいまし。どうかこれでお歸り下さいませ。私を一人にして置いて下さいませ。お願ひ致します。私が出て行きます。私の方から別れます。それはいづれ話を取極めます。今日はどうか、これだけに置いて下さい。ねえ、何卒。」

「御心中は私にもよくお察し申上げることが出來ます。ケインの奥様、」と話を續けながら、オブライエンは、彼女の苦悶に同感を寄せてゐた。「私には、はつきりと分つて居りますよ。私はもう申上げようと思つた事は、すつかり申上げて了ひました。こんな役目は實に辛いことです——實に辛いことでございますよ。己むを得ず引受けたことを後悔致します。貴女は私の名刺をお持ちでございますね。どうか私の名前を御記憶下さい。御用のある日取をお聞かせ下さるか、それともお手紙で御指定になりましたら、何時でもお伺ひ致します。もうこれ以上お邪魔は申上げません。大層失禮致しました。序に申上げて置きますが、私のお訪ね致しましたことは、御主人にはお洩しなさらぬやうに——このことに就ては、貴女の胸の中に疊んで置いて戴くのが最上策でございます。私は御主人の御厚情を非常に有難く思つて居りますので、衷心から御同情申上げてゐるのでございます。」

ジェニーはじつと床を見つめてゐるばかりだつた。オブライエンが、外套を取りに廊下へ出て行つたので、

ジェニーが呼鈴を押すと女中のジャネットがやつて來た。ジェニーが書齋へ引籠つた時、オブライエンは、表通りを快活に歩いて行つた。ジェニーは本當の獨りぼつちになると、組合せた手を顔の下へもつていつて、床をじつと見つめてゐた。すると絹の土耳其絨毯の風變りな模様が不思議な繪畫となつて展開されて行く。彼女は自分が何處か小さな茅屋に、唯ヴェスタと二人きりで住んでゐる姿を想像する。レスターは別の世界にゐて、その側にゐるのは、ジェラルド夫人だ。今自分の住まつてゐるこの邸宅も、すつかり空っぽになつて了ふ。斯うして永い時が経つて行つた、そして、それから——

「あゝ、」と彼女は吐息をして、泣き叫びたい氣持をじつと我慢した。兩眼からはふり落ちる熱い涙を兩手で拭ふと、立ち上つた。

「さうなるのが當前なのだわ、」と彼女は心の中で思つた。「さうなるのが當前なのだわ。遠の昔にさうなる筈だつたのだわ。」そして別の考に歸つて行つた——「あゝ、お父さんが生きてゐらつしやらないのがせめてもの幸だ！ 何にしても、お父さんが、こんな處を御覺にならないで宜かつた。」

五三



レスターは、ジェニーとの内縁関係を正式なものに引直すか、又は別れるか、何れかに決定しなければならぬ退引きの來訪によつて、その時期が急速に早められた。オブライエンが訪れた日、彼は豫て招かれてゐたので、エレベーターを運轉する新式モーターの實驗參觀の爲めウイスコンシン州の小さな工場町、ヘゲウィッシュへ出向いてゐた——ことによつたら投資してもよいとの積りで、彼はジェニーと別れようと考へてゐたにも拘らず、實驗の結果を彼女に話して聞かせることを楽しみにしてゐた。歸宅して見ると、家の中は何處となく陰氣に感じられた。といふのは、ジェニーは自分で諦めはつけてゐたものゝ、感情をさう容易く隠蔽できる性質ではなかつたからである。彼女は別れるのが一番良い方法だとは覺つてゐたが、それをレスターに話すだけの勇氣が出せず、自分から約束したことをどうして果さうかと悲しく思ひ煩つてゐたのだ。思つてゐることを打明けないうで去つて了ふことは彼女には出来なかつた。レスターは當然自分と別れることを欲して宜いのだ。自分には決定的に——離別——といふ一筋道を進むより外方法がなく、それが得策でもあると彼女は信じてゐた。レスターが自分から好んでするとしても、ジェニーの爲めに遺産までを犠牲にさせては置けなかつた。それは不可能なことだ。ジェニー

は彼が今日までこの問題を黙つて、危険な状態に放つて置いたことを不思議に思つてゐたのだ。

レスターが歸宅した時、ジェニーは何時ものやうに微笑を浮べて迎へたが、それはいかにも不自然なものに見えた。「何もお變りございませんか？」彼女は習慣になつてゐる質問の言葉を發した。

「上々だよ。お前はどうかだつたかね？」と彼が言つた。

「え、變つたことはありませんの。」彼女はレスターについて書齋へ入つた。レスターは暖爐の火を長い柄の灰掻きで掻き立てゝから、部屋をぐるりと見廻した。それは一月の午後五時であつた。ジェニーは窓掛を降さうとしてゐた。彼女が引返して來ると、彼はまぢく眺めた。「お前、何時もとは、様子が異つてゐるぢやないか、さうぢやないかね？」彼女の物腰に唯ならぬ或るものを感じて彼は尋ねた。「まあ、いゝえ、私何でもありませんわ、」と彼女が答へた。が、唇の動きは尋常でなかつた——小さく顫へてゐるその唇は、彼の目を誤魔化すことが出来なかつた。

「僕にはよく分つてゐる積りだ、」と彼は猶も眼を彼女に注ぎ乍ら言つた。「何を心配してゐるのさ？ どんなことが起つたのだね？」

ジェニーは息をついて、心を落着ける爲めに、一寸顔を背け、再びレスターの方を向いた。「事があるの、え、お話

しなければならぬことが、あるのです、」と、彼女はやつと言つた。

「さうだらう。」彼は相槌を打つて笑ひかけたが、この言葉の裏には非常に重大な要件が潜んでゐることを覺つた。「どんなことなのだね？」

ジェニーは唇を噛み乍ら暫く黙つてゐた。何處から話の糸口を見出したらよいか、見當がつかかなかつたのだ。そしてやつとのことで口を開いた。

「昨日家へ男の方が訪ねて見えました——シンシナチのオブライエン様つて、貴方御存知？」

「うん、知つてるよ、何の用事で來たのだい？」

「貴方のことや、お父様の遺言のことを、私に話してみえたの。」

レスターが忽ち顔を曇らせたので、ジェニーは話を止めた。「何だつて彼奴、お前に、お父さんの遺言のことを話す必要があるのだ！ どんなことを言つて行つた？」

「あなた、どうか怒らないで下さい、」とジェニーが靜かに言つた。彼女はこの問題を解決に導く爲めには、完全に自分といふものを制御しなければならぬと覺つてゐたのだつた。「あの方は、貴方が私の爲めにどんな犠牲を拂つてゐらつしやるか聞かせて下すつたのです。そして貴方の遺産相續の期限が切れるのも、もう間もないことだと仰言つて

でした。貴方、何とか直ぐ手續なさいませんか？ 私と別

れたいと思つてらつしやるんではないの？」

「途方もない奴だ！」レスターは荒々しく言つた。「他人の私的問題に容喙するなんて、一體何を積りなのだ？

僕の勝手にさせまいと云ふのか？」怒りに胸顫ひして彼は再び叫んだ。「怪しからん人間共ばかり揃つてゐる！ 之はロバートの作業だ。ナイト・キートリ何・オブライエン法律事務所が何だつて僕の問題に干渉するのだ？ 面倒なことを始めやがつたものだ！」レスターの顔や目の色が變つたのでも解るやうに、彼は一時にかつとなつて了つた。

ジェニーはレスターの激怒に遇つて身顫ひし、何と言つていゝか分らなかつた。彼は暫くすると稍々我に返つた。

「で、彼の男はお前にどんなことを話したのだい？」

「貴方が私と結婚なすつたら、貴方のお手には一萬弗の年金しか入らないのですつて。それから、若し結婚なさらないで同棲を續ければ、一丈も差上げられないのですつて。貴方と私の中、どつちかど身退いた場合には、百五十萬弗が皆貴方のものになるのださうですわ。貴方、私とお別れになつた方がいゝとお考へにならない？」

ジェニーは最後の問題を、こんなに早く切出す積りはなかつたが、行が、りて自然さういふことになつて了つた。彼女はその場で、若しレスターが本當に自分を愛して呉れて



あるのだつたら、「いやだ」と力強く答へる筈だと考へた。若し愛してゐないのだつたら、返事を口籠つたり、事を長引かしたりして、結末を着ける可き不吉な日を延ばさうとするに違ひないと思つた。

「そんなことはない」とせつかちに彼が言ひ返した。「この問題に干渉したり、急いで梟をつけたりする必要が何處にあるのだ。僕が怪しからんと言ふのは、此處へ態々出掛けて来て、僕の個人問題をごつつかすことなのだよ。」

ジェニーはレスターの態度にひどく胸を刺された。愛情の表示を期待してゐたのに、怒りを見せてくれただけだつた。彼女にとつて今考慮の要點は、自分からレスターと別れるか、彼の方から自分を去つて行くかの問題にあつた。なのに、レスターに取つては、新たに干渉を受けたことが論議の中心になつてゐたのだ。自分で行動を開始する準備の出来てゐないうちに、他人に干渉される事は、彼にとつて脅威であつた。ジェニーは總てを見て知つてゐ乍らも、レスターと永いこと一緒に暮して、苦勞を（見方によつては）共にして來たことだから、彼が自分を心底愛してくれるやうになつてゐるものと希望を懐いてゐたのだ——そして自分はレスター1の心の中に愛情の種を植付けて置いたから、例へ表面は別居を避けることが出來ないとしても、彼は本當に別れて了ふ積りにはなるまいとの希望を持つてゐたのだ。勿

論二人は正式に結婚してはゐなかつた。が、それは事情が許さなかつたからである。この切迫語つた今になつて、よしんば彼女を手離すことが避け難いことであるとしても、レスターは、ジェニーを深く愛してゐるといふ證據を見せても宜いではないか。ジェニーはレスターとあんなに永い間一緒に暮して來ながら、自分は彼を理解してはゐないのだといふ氣が一寸した。だが、かうした氣持を持つてゐる一方、自分はレスターを理解してゐると思つた。彼は彼なりに自分を愛して呉れたのだ。レスターはどんな女に對しても夢中になつて、大袈裟に愛情を示す事が出來ない人だ。今迄のことにしてからが、彼はジェニーを捕へて、自分のものにしてしまつた、併しそれ以上に重大なことが起つて來ると、それでも猶ほ彼女を離さないで置くといふ程に愛しはしないのである。今レスターは彼女の運命を兎や角言ひ出した。ジェニーは進退極まつて心痛み、血の浸むやうな思ひをして苦しんでゐたのだが、併し生れて初めて堅い決心が出來た。例へレスターが犠牲を覺悟してゐやうが、自分が自分としてはさうさせられない。レスターの方から別れると言ひ出さなければ、自分が身を引くより外はない。自分が止まるといふやうなことは、重大視するに當らない。それには只一つの答しかないのだ。それにしても、若しかレスターが愛情を見せて呉れはしないか知らず

「直ぐ處置をお取りになるのがいゝとお考へにならない？」彼女はレスターが、何とか情の籠つた言葉を掛けて呉れることを期待して話を續けた。「もう期限が迫つてゐるつて云ふではございませんか？」

ジェニーは神經質に、机の上に在る本をあつちへ押ししたりこつちへ押ししたりした。冷靜を裝ふ事が難かしいので、非常に當惑してゐるのだつた。自分ながら言ふべき言葉も爲すべきことも見當がつかなかつた。レスターが立腹すると手が出せないのだ。でも、レスターにしてみればジェニーと別れるといつても大して辛いことはない筈である。ジェラルド夫人といふものが控へてゐるのだから、去つて行かうと思へば——さうなのだ、彼は行くのが當然だ。レスターにとつて財産は、ジェニーなどと掛替へに出來ない程、重要なものなのである。

「そんなことで氣を揉む必要はないよ」とレスターは頑固に言つた。自分の兄に對し、家族に對し、オブライエンに對する怒りが、未だ解けずにゐた。「そんなに周章てるには當らない。僕にはどういふ風にしたらいいものか、未だ考がついてゐないのだ。彼奴等の圖々しさが氣に入つたね！だが、もうこれ以上この問題には觸れたくないよ。夕飯になる時刻ぢやないかね？」レスターは自尊心をひどく傷つけられたので、この差出口を親切心からだと思ふことが出

來なかつた。ジェニーのことや彼女の思惑など、全然念頭に置いてないのだつた。彼はこの侮辱を與へた肉親のロバートをも憎んだ。そしてナイト・キートリー・オブライエン法律事務所の連中の首を、片つばしから絞め上げた胸がすくと思つた。

この問題は、結局それ切りにして葬り去る事が出來なかつた。ジェニーは一生懸命に心を落着けて考へを纏め、夕食の卓で再びそれに觸れようとした。ウエスタやジャネットがゐる前では、ぶちまけて話し合ふことは出來なかつたが、彼女は何かして一言二言口を利いた。

「私何處か小じんまりとした家を見附けますわ。」彼女はレスターの氣持が幾分和らいでゐるだらうと思つて、穩かに水を向けてみた。「私、この家にこの儘めたくありませんの。だつて一人でこんな大きな邸にゐては、所在がないと思ひますわ。」

「ジェニー、その話はもう聞かして貰ひたくないね、」と彼は強く言つた。「僕には今そんな氣持になれないのだ。そんなことをしようとは考へてもゐないのだからね。僕は何も考へてはゐないのだよ。」レスターは、オブライエンのことで非常に氣難かしく、頑固になつて了つてゐるので、彼女もとうとうそれなり口を噤む事にした。ウエスタは、普段あんなに優しい義父さんがひどく難かしい顔をしてゐるのを



見てびつくりした。

ジェニーはレスタターが氣迷つてゐるのを知ると、若し自分が彼を手離すまいと思へば、さうも出来るやうな妙な氣持になつた。が、そんな考を起してはならないのだと承知してゐた。それはレスタターに對して公正を缺く所業だ。又自分としても立派な、親切な、穩當な行爲だとは言へないのだ。

「さうですとも、レスタター、貴方はさうなさらなければなりませんわ。」と彼女は後になつてから抗辯した。「私これ以上は申しませんよ、たゞ貴方は、さうなさらなければならぬのですよ。私それより外の方法を、貴方にとらせませんの。」

この問題はその後屢々——事實毎日のやうに、二人の話題に上つた。或時は寢室で、或時は書齋で、或は食堂だの、朝飯の席でだの。而もそれが必ずしも言葉に出して語られたとは限らなかつた。ジェニーは氣が氣でなかつた。心の中の惱みは面にも現れた。どうしてもレスタターに實行させる決心だつた。彼がジェニーに、優しい所を見せるやうになると、彼女は層一層と彼の決斷を希望した。どういふ風にさせるべきか分らなかつたけれど、彼女はレスタターの顔を眺めては、彼が早く決めてくれるやうにと念じた。自分も幸福になれるのだ、彼女は自分にさう言つて聞かせた——

居りますわ。」

「僕は未だ考へが決らないのだよ、」と云ふのが、レスタターのおきまりの答だつた。「お前と別れたいなんてことは、考へてもゐないがね。勿論あの金は大切には大切さ。だが、金が萬事ではないからね。已むを得なければ年に一萬弗でも生活して行けるさ。今迄だつてそれで過して來たこともある。」

「まあ、だつて今日では貴方は社會的にずつと大切な地位にゐらつしやるではございせんか、」と彼女は反駁した。

「貴方にはそれだけで生活してゆけるのですか。この家の暮しだけで幾らかゝるか、考へて御覽になりませんか？ それに百五十萬弗——貴方がそれを捨て、おしまひになるのを、どうしてこの私が見てゐられませう。私は先づ自分から出て行かせて戴きますわ。」

「若しさうなつたら、お前は何處へ行かうと考へてゐるのだい？」と彼はいぶかしげに尋ねた。

「そりや、私何處か見附けますわ。貴方サンドウッドといふケノーシヤの手前の小さな町、覺えていらつして？ 彼處は住心地の良い處だらうと何時も考へてゐましたの。」

「僕はそんなことを考へるのは嫌だ。」レスタターはとう／＼ぶつつけるやうに怒鳴つた。「それは片手落といふものだ。二人が一緒にゐる事には、總ての條件が不利だつた。考へ

自分がレスタターと別れさへすれば、只その一事に依つてレスタターが幸福になれるのだと思へば、自分も同じやうに幸福な氣持に浸れるに違ひない。レスタターは善良な人物なのだ。恐らく愛情といふものを外にすれば、何事についても非常に愉快な人だつた。事實彼は自分を本當には愛してゐなかつた——多分あゝした色々の事情の爲めに愛してゐる事が出来なかつたのだ。自分はあんなにまで心から彼に愛を捧げたのだけれど。併しレスタターの家族の者が残酷に飽くまで反對をしてゐたので、それがレスタターの態度にも影響したのだ。ジェニーにはそれも理解できた。彼女には今、レスタターのあの大きなしつかりした頭腦が、どんなに回轉してゐるか想像が出来る。レスタターは徹底的に冷酷な氣持になつて、ジェニーと別れようとするには餘りに作法を心得た男であつた。又彼は自分の利益のみを鵜の目鷹の目で追ひ求めるには餘りに思遣りの深い男であつた——でも、彼は當然、自分自身の利益を考へれば宜いのだ。

「ねえ、貴方決心なさらないやなりませんわ、」とジェニーは繰返して何時も言ふのだつた。「貴方は私を行かせて下さらなければなりませんの。どつちにしても同じことぢやございせん？ 私は一人でやつて參ります。この事件がすつかり片附いてしまへば、貴方のお心持次第で、私の處へ來て下さることも出来ませう。私はお待ち致して

てみると、最初にお前と正式な結婚をして置くべきだつたよ。今となつてはそれが残念だ。」

ジェニーは言ひたいことが、咽喉元まで込上げて來たが、じつとそれを押へた。

「兎に角、これで萬事が終るといふ譯ではなしさ、僕さへその氣でゐればだね、」と言葉を結んだ。彼は吹きすすんだ嵐も止むかも知れないと考へてゐた。一度金が自分のものになれば、その先は——だが、彼は妥協や言ひ抜けを嫌つてゐた。

かうして二月の終り近くなるまでには、何時の間にか、ジェニーはサンドウッド附近に彼女の好きな家を探しても宜いといふ諒解が出来た。レスタターの口から、ジェニーには十分な金額をあてがはれ、欲しいと思ふものを何でも手に入るやうにすると言ひ聞かされた。暫く経てば、彼も時々ジェニーの家へ出掛けられるだらうといふことだつた。そして彼は内心、こんなことにさせた誰彼を、いづれ只では置かないぞと覺悟した。オブライエンを、近い中に呼びつけて、色々と相談することに決めた。彼は自分の腹の蟲の納まるまで、この男に言ひたいことを言つてやりたかつた。

それと同時に、レスタターの心の奥底で、影のやうに動いてゐたものは、ジェラルド夫人の姿だつた——魅惑的で、世慣れた（この言葉が有つあらゆる意味を含めて）姿だつた。彼



はその人の姿を、自分の心の全面に擴げて考へることはしなかつたけれども、それは絶えず彼の心に浮んでゐた。レスタは熟考にも熟考を重ねた。「多分さうするのが宜いだらう、と半ば決心した。二月に入ると、愈々實行に取掛る準備が整つた。

五四

サンドウッドといふ小さな町は、「ケノーシャの手前」とジェニーが説明したやうに、シカゴからはほんの一寸しか離れてゐず、汽車で一時間と十五分で行ける處だつた。町の戸數は三百、何れも小さな建物ばかりで、それが湖畔特有の美しい地域に散在してゐる。此處の住民は富裕といふのではなく、家屋も三千弗から五千弗どまりのものだが、併し何れも調和よく建てられ、樹々に圍まれ、一年中青々として氣持のよい夏の装ひをしてゐた。嘗てレスタとジェニーが此處を通つた時——それは二頭立の馬車で遠乗をした時であつた——ジェニーは青い樹々の間に、白い教會の小さな尖塔や、夏の湖上を靜かに揺れてゐるボートを眺めたりして、すっかり氣に入つたのだつた。

「何時かはこのやうな處へ住んでみたいものだわ、と彼女がレスタに言ふと、彼は、自分には此處は餘りに平和過

ぎると批評して、「いづれ好きになれる時も來るとは想像してゐるがね。現在の僕には餘りに引込みすぎであるよ」と答へたものだつた。

ジェニーは後になつて、この會話を思ひ出して見た。それは世の中を辛いものだと感じる時に浮び出る思ひ出であつた。若し、自分が獨りぼつちにならなければならぬ境遇になつて、且つ其處に住むだけの餘裕があつたならば、サンドウッドのやうな土地こそ好ましい。自分は其處で小さな庭を作り、鶏を飼つて、出來れば高い止り木を立て、その上に可愛い鳥小舎を設け、周圍には花や立樹や綠草を植ゑよう。湖を見渡される、このやうな土地に小さな家を持つことが出來れば、夏の夕方などには、靜かに坐つて雜物が出來ようといふものだ。ウェスタは家の周圍で遊べるし、學校の寄宿から歸つて來ることも出来る。此處には話相手が始どないかも知れない、一人もないかも知れない。が、只ウェスタに社交の必要さへなければ、ジェニーは何の屈託もなく孤獨の生活を行けると思つた。色々のことを書いた本も慰めになる——アーヴィングの「スケッチ・ブック」、ラムの「エリア隨筆集」、ホーソンの「トワイストウルド・テイルズ」等を読むことを覺えたのだ。ウェスタは成長するにつれ、音樂に對する洗煉された鋭い感覺が現れて、音樂家らしくなつて行つた。ウェスタは生來、音の調和を正しく聴取り、感傷

的な、また熱情に富んだ氣分を盛つた小唄や、樂器を好んで、巧みに歌つたり彈奏したりすることが出來た。彼女の音聲は勿論練習が缺けてゐたが——未だ僅か十四歳であつた——氣持よく聴かれるのだつた。そして既に兩親のよい性質を受継ぎ、その特徴を顯し始めてゐた——ジェニーの穩かで瞑想的な傾向が、ブランドの活潑な精神と天賦の實行力と結合してゐるのだつた。この少女は様々な事物、自然、書物、服裝、愛等に就て母親に尤もらしい意見を述べた。ジェニーは娘の心の發達する有様を見て、この兒が入つて行かうとしてゐる新しい世界を、覗き知ることが出來た。現代に於ける學校生活の要素、種々の知識の分野、音樂、科學等が配分されてゐることは、ウェスタが新しい話題を取上げるのを注意してゐるジェニーに、悉く理解されるのだつた。この娘は一廉の才能を具へた一人前の女になるのだ——他人を惱ますやうな攻勢的な才能ではなくて、内に自らを建設してゆく性質のものだ。ウェスタは、自分のことは自分で始末してゆけるだらう。かうしたことが盡くジェニーを喜ばせ、ウェスタの未來に大きな希望を寄せしめた。

サンドウッドで愈々手に入れた家は、一階半の建物だつたが、赤煉瓦の窓と壁の間には緑色の格子が設けられ、ウェラ

は床とすれ／＼に開く窓が付いてゐた。廣い書齋には書棚が造りつけになつてゐるし、客間にある三個の大きな窓は空氣と日光を絶えず供給して呉れた。家の敷地は百呎平方の四角な地面で、立樹も幾本か植ゑてあつた。以前の住者は花壇を造り、冬の越せる丈夫な種類の植物や蔓ものを植ゑるために、緑色の檜製の鉢を列べて置いてあつた。家は白のペンキで塗られ、鎧戸と屋根は綠色にしてあつた。

別居するにしても、ジェニーは今迄通りハイド・パークの家にゐても宜いのだとレスタは思つたが、ジェニーはそれを嫌つた。其處で孤獨の生活を送るなどは、考へる事も出來ないのだつた。其處には、餘りにも多くの思ひ出があつた。彼女は引越の時まで、澤山の道具類は持つて行くまいと思つてゐたが、とう／＼レスタが勸めて呉れるまゝに——ハイド・パークの家にあつた銀の食器や、窓掛や、椅子、卓子を持つて行くことにした。

「お前は何か必要か、とんと考へてゐないのだね、」とレスタが言つた。「皆んな持つて行くがいぢやないか、僕には何一つ必要なものと云つてないのだよ。」

新しい家の借用契約期間は二年で、更に五年間の契約權保留期限と、家屋購入の權利も與へられてゐた。彼女が愈々愈出ると決つた上は、レスタは寛大な氣持になつて、どんなことにしろ、彼女に不自由をさせてはならないと考へ



た。そして彼女を拘束するやうな註文は、何一つした事になかった。一つ困ったこと、云へば、今度の別れ話をヴェスタに、どういふ風に説明してやつたものかといふ點であつた。レスタは、この娘を非常に可愛がつてゐたので、彼女の生涯をこのごた／＼の渦中へ巻込みたくなかつた。

「ヴェスタは、春まで寄宿のある學校へやつて置けばいいぢやないか？」と彼が一度相談したことがあつた。が、それも時期が遅れてゐた爲めに、不得策であるとして止して了つた。その後二人の相談で、ヴェスタには、レスタの事務上の都合で、どうしても旅行しなければならぬ事、それでジェニーは引越すことになつた、と言ひ聞かすことにした。そして後になつてから、母親の口から、適當な理由を拵らへて、レスタと別れた、と話せば宜いのだ。それはジェニーにとつては辛いことだつた。かうした辯解はいかにも尤もには相違ないが、自分に對する男の冷淡さは、身に沁みるのだ。これだけの心遣ひでは、本當に自分を想つてゐてくれるのではない。

人生の神祕を開く鍵を見出さうといふ希望を懷いて、吾が熱心に研究してゐる男女間の關係の中で、最も解き難いのは、當事者相互の力を以てしては、何ともなし難い不幸な事情の爲めに、二人の間を割かれる場合であらう。今迄非常に美しく暮して來た家庭、和樂の源であつたものが、い

ざとなつて文字通りに分散すると決つた最後の數日、レスタにとつてもジェニーにとつても、それは堪へ得られない程に痛ましい試練であつた。ジェニーの身にすれば、打のめされたも同然だつた。彼女は喜んで奉仕の生活、調和の生活に身を捧げ、その状態に浸つてゐるところに満足を得ると云ふ安定を厭ふ性質だつた。彼女の生命は、同情と記憶の神祕な絲で縛はれてゐて、自然の刻々に變る要素をばつなぎとめて、一つの調和あり永續性ある世界を形成せしめることを任としてゐた。その神祕な絲の一つ——この家庭こそは、彼女の家庭であつたのだ。それが遂に消え去る時となつたのだ。

若しジェニーが過去の經歷に於て、今度のやうな經驗を経てゐたものなら、今家庭生活を振り棄てるのも幾分我慢し易かつたであらう、勿論彼女は自分の愛情の目安を物質的な考慮に置いてはゐなかつたのだが、彼女が人生を愛し、人格を愛する本來の心持には、少しの利己主義の汚毒も染んでゐなかつた。部屋から部屋と、歩き廻つて、絨毯や、家具や、その他裝飾品を擇び取りながらも、こんなことになつたのを心の底から歎いた。思つてもみるがいゝ、間もなく、レスタの夕方の歸宅を待つこともなくなるのだ！もう朝は一番に起きて、主人の爲めにコーヒーの準備をしたり、晚餐の食事に心を配る必要もなくなるのだ。いつも彼女は、

温室に美しく咲誇る花を剪つて來て、特にレスタの爲めにとつて、卓子の上に飾るのであつたが、今に、その必要も——レスタの爲めには——なくなるのだ。誰しも、日暮毎に車道を軋つて歸る馬車の音を待つ習慣に養はれ、階段を登つて來る足音を聞きわけて、夜中の十一時、十二時、一時でも、喜ばしい期待で眼を覺してゐる癖がついたりすると、さうしたもの別れる場合には、激しい苦痛を訴へるものである。ジェニーの腦裏を幾時間もの間、また來る日も來る日も苦しめてゐたのはかうした考であつた。

レスタも亦苦しんでゐたが、それは別の事情の爲めであつた。彼の苦痛は掻き裂かれ傷いた愛情とか、受入れられなかつた戀の悲しみではなかつた。それは策略の爲めに、親切、忠實、愛情のやうな美德を犠牲に供する立場にある人間が感じる、不公正から來る苦痛であつた。策略に従へば、素晴らしい生活が前途に拓けて來るのだ。ジェニーに與へるものは十分に與へてやつて、彼女と別れてしまへば、勝手に自分の爲たいことが出來、自然と莫大な富を伴つてゐる山のやうな事業が手に入るのだ。勿論彼はジェニーが自分の爲めに何時も盡して呉れた細々とした事や、色々な楽しい、愉快な事柄を思ひ出さずには居られなかつた。彼女が持つてゐた様々な良い性質は、又となく懐しいものだつた。彼は今迄にもそれを屢々思ひ浮べたのだが、殊にジェニーが

苦しむつゝも、それを一つとして顔に出さずゐるのを見通すわけには行かなかつた。最近に於ける彼女の動作や態度は平常と少しの變化もない——それ以上のこともなければ、以下のこともなかつた。他の女のやうに、ヒステリーじみたこともなかつたし、苦んでもゐないのに、顔にだけ辛抱の色を見せて、相手に同情を強ひようとしたりもしなかつた。そして、レスタが何處へ行かうと何を爲ようと——只レスタの爲めのみを考へて——穩かに、親切に、愛情を籠めて應待し、詮議立てして立腹させるやうな事はなかつた。レスタは彼女が物事を大きな眼で見ることが出來る腹のあるのを知つて、心から讚美し、感歎した。この女性には並々ならぬものが具つてゐるのだ。世の中の人がどう思ふともそれは放つて置いて宜い。彼女の生涯がかくも照運の星の下に置かれた事は、レスタとして恥しいことだつた。而も彼は自分を招いてゐる廣い世界の呼聲を兩の耳に聞いてゐたのだ。その世界は嘗て屢々彼に敵意を見せたことがある。果して彼は躊躇したのであらうか？

愈々最後が來た。近隣へ挨拶廻りも済ませ、外國へ行く旨の通知も出し、レスタは自分の部屋をオーディトリウムに借りて、不用の家屋は倉庫に保管させてしまつたので、二人はハイド・パークの邸宅に、さらばを告げることになつた。ジェニーはレスタを伴つて幾度もサンドウッドへ行つ



た。レスタは土地の模様を詳しく調べてくれて、其處が  
 佗しくはあるが、併し大變い場所だと言つて満足した。  
 春になるのも間近く、花でも咲けば慰めにもなるだらう。  
 彼女は庭師と雑役を兼ねた男を雇ひ、ヴェスタも手許で育て  
 ることにした。

「結構だ、」とレスタが言つた。「只お前が満足して暮せ  
 たらと思ふだけなのだからね。」

かうした間にもレスタは、自分の個人問題の解決に骨  
 折つた。自分の代理人ウオトスン氏を通じて、ナイト・キート  
 リー・オブライエン法律事務所に対し、希望の時日に父の遺  
 産の分配履行を望む旨を申込んだ。このやうなことをしな  
 ければならない境遇に在る間は、彼は幾度でも同じやうな  
 不人情な行爲を敢てしなければならぬ。多分、彼はジェ  
 ラルド夫人と結婚するであらう。そして合同車輛會社の取  
 締役に就任するだらう——株を手に入れれば、彼が除外さ  
 れることが不可能となるのだ。若しジェラルド夫人の財産  
 も自由になれば、兄のロバートが、深い利害關係を持つて  
 るるシンシナチ市街鐵道會社だとか、同じく兄が顧問をし  
 てる西部鋼鐵工場だとかの重役になれるかも知れない。  
 過去二三年間に於いての彼と今後の彼とは、何といふ大  
 きな身分の開きがあることだらう！

ジェニーはがっかりして絶望の状態にあつたと云つても

よかつた。極度な寂しさを味つたのである。ハイド・パーク  
 の家庭生活は實に意味深いものであつた。初めてこの家へ  
 移つて、近所の人々が訪ねて来てくれた時には、出世の門  
 口に立たされたやうな氣がして、何時かはレスタが自分  
 と正式に結婚してくれる日を空想したのでつた。ところが  
 嵐に次ぐ嵐が襲つて来て、今ではその家庭も夢も消え去つ  
 て了つたではないか。ゲルハートは死んだ。ジャネットも、  
 ハリイ・ウォードも、フリッセル夫人も暇を取らせた。大部分  
 の家具は倉庫に預けてしまつた。そして事實に於てレスタ  
 はゐないも同然だ。彼女はレスタが再び歸つて來ない  
 のだと云ふことをはつきりと覺つた。今は幾分の思遣りがある  
 だと思つて、猶ほこんな態度をとるのだから、若し自田な身  
 になつたならば、どんなことをするかも知れないのだ。自  
 分の大切な仕事に夢中になつて、ジェニーのことなど、勿論  
 忘れてしまふに違ひない。どうして忘れないと言へるもの  
 か？ レスタと彼女とは釣合はない縁だつたのだ。何も  
 彼もが不釣合だつたではないか？ 彼女は事毎にそれを見  
 せられて來た。世の中は、戀だけでは駄目なのだ——それ  
 は餘りにも明瞭だ。教育だとか、富だとか、訓練だとか、  
 鬭争や計畫に要する才能だとかいふものが必要なのだ。彼  
 女は鬭争や計畫を欲しなかつた。否、彼女にはそれが出來  
 なかつたのだ。

たら何處かへきまつた働きの口を求めても宜いと思つた程  
 であつた。くよくよと考へる餘裕さへなければそれで宜い  
 のだ。考へてゐれば狂人になつてしまふだらう。

五五

ジェニーとの關係が破れて以後の二二年間に、レスタ！  
 ケインは不思議なくらゐに社交的ならびに事業的精神を復  
 活させて、シカゴ、シンシナチ、クリイヴランド、その他  
 の都會の社交界や事業界に活躍してゐた。ジェニーと一緒に  
 今や、有力な後盾に勢を得て、特權を振廻せる身分だとば  
 かり、様々なことに首を突っこみ、財界及び事業界に於いて  
 の一流人物を以て自任してゐた。勿論彼は年を取つた。そ  
 して或點では昔のレスタと精神的に變つてしまつてゐる  
 ことも認むべきであつた。彼はジェニーを知る迄は、何處  
 から見ても打負かされた事のない人間であつた。事實彼の  
 やうに贅澤に育てられ、金ばかりが物を言ふ社會の賑かな  
 方面ばかりしか知らず、大きな事業に携つてゐると言つて  
 も、自ら之を創設したのではなく、只自分がさういふ地位  
 に生れあはせ、丁度空氣を呼吸するやうに、生れながらに、  
 それに關係を持つてゐるのであつてみれば、どんなに優秀

とう／＼これまでの生活は終りを告げて、ハイド・パーク  
 の家が閉ぢられた。レスタはジェニーと一緒にサンドウッ  
 ドへ出發した。彼はジェニーがこの變化に馴れる爲め、新し  
 い家にはんの暫く足を留めた——それは大して悪くないも  
 のだつた。そして、その内にやつて來ると言ひ置いて歸つた  
 が、併し彼の言葉は、實際上の、又精神上的の別居の事實を前  
 にしては何の意味もなかつた。ジェニーはレスタが歸る日  
 の午後、煉瓦道を歩いて行く彼の姿を見てガツシリとした  
 頑強な體にスコッチの服を纏つて、オーバー・コートを一  
 手に持ち、自恃心と幸運とに輝く容姿を見て、自分は死ん  
 で了ひたいと思つた。彼女は別れの接吻をして、どうか明  
 るい生活と成功と平和を祈ると述べたのだつた。そして失  
 禮すると言つて寢室に引籠んでしまつたのだつた。暫くし  
 てからヴェスタが母親を探しに入つて來た時は、ジェニーの  
 兩眼の涙は乾いてゐて、あらゆるものが鈍重な痛みやう  
 なものになつてしまつてゐた。茲に新しい生活が始まらう  
 としてゐた——レスタのゐない、ゲルハートのゐない、  
 ヴェスタだけを相手の生活が。

「何といふ不思議な廻り合せになつたのだらう！」臺所へ  
 身體を運び乍ら彼女は考へてゐた。彼女は何かしら用事を  
 しなればと決心したのだ。氣を散さなければいけない。  
 物事を考へたくなかつた。ヴェスタさへ世話がやけなかつ



な頭腦の人間でも、共同一致といふ空想に、満足されて了ふのである。未だ見たことのないものは、知る事が困難である。経験しない事を感じるのも甚だ困難である。吾々が住んでゐるこの世界は、それを創造した力が不明である爲めに極めて堅固で永久性のあるものとばかり考へられるが、レスターも自分の世界を同様に堅固であり、永久的なものと考へて、それを以て満足してゐた。彼が自らの價値を過重視したこと、自分の意欲や見解が、輿論の前には一文の値打すらないこと、つまり自分が間違つてゐたと初めて悟つたのは、逆風が吹き荒んで、社會的因襲の反對に直面した時に於てであつた。民族の靈、即ち社會そのもの、化身、獨逸人の所謂時代精神なるものは、何かしら監督の組織制度を持つてゐるものとして現れ、レスターにはそれが靈的存在、あるひは超人的存在と對應してゐるかのやうに考へられた。彼はそれに反逆することが出来ないのだ。その命ずる所を故意に無視することも出来ないのだ。彼の時代の人々は或特定な社會的協定の必要を信じてゐたが、レスターにしても、若しさうした協定に順應しなければ、忽ち社會から追ひ出されることを承知してゐた。彼の両親も——兄弟や姉妹も、社交界も友人も彼に背いてしまつた。一體全體彼の唯我獨尊主義は何に祟られたのであらう！ 神々からさへ見放されてゐるではないか。彼が企んだ土地の思

惑は、未だ嘗て耳にしたことがない程の甚い當て外れだつた。それは何故であるか？ 神々はレスターが問題にしてゐなかつた社會的協定を、彼に強ひようとして戦を挑んだのであらうか？ 確かにさう思はれるのだ。それで兎も角、彼は退却を餘儀なくさせられて、現在の彼になつた。経験によつて幾分傷められてはゐるが、なほ斷乎たる精神と元氣に満ち溢れて、十分問題にされる彼であつた。

そして又、彼が今迄の出來事の爲めに心を苦しめられたと言ふのも、或點までは自分が犯した罪の罰であつた。彼は生れて初めて醜い、殘忍な行爲を餘儀なくさせられたと感じてゐた。ジェニーにはもつと盡してやるべきではなかつたか、あれまで赤誠を捧げてくれた彼女を棄てるなど、恥づ可き行爲であつた。確かにジェニーは彼よりも立派な振舞をしたばかりではなく、彼のジェニーに對して行つた行爲は、特に己むを得ざるに出たものとして許すことは出来ない。彼は年に一萬弗で生活して行けた筈ではないか。現在所有してゐる百萬以上の富がなくとも生きて行けた筈ではないか、又社交界とても彼にとつて大きな誘惑には相違ないが、なくて済ませた筈なのだ。彼は或一人の女に心を惹かれて、一切をこんがらかせて了つたのだ。

その今一人の女はジェニーに劣らぬ良い女だらうか？ これが絶えず彼の心に浮んで來る問題であつた。その女も同

じやうに親切だらうか？ 彼女は自分の眼の前で、自分の妻同然の女から、この自分を奪ひ取らうと企んだのではなかつたか？ それは果して感心すべきことであらうか？ それは立派な女のすることであるだらうか？ 何にしても、彼女は自分に適はしい女であらうか？ 自分は彼女と結婚するのが當然であらうか？ ジェニーは法律上の妻ではないにしても、自分が精神的に負ふ所あるのを知り乍ら、他の女と結婚するといふことは、果して當を得てゐるだらうか？ また自分のやうな男と結婚する女があるだらうか？ 斯うした考がレスターの腦裏で、いつも出沒してゐた。彼は自分の行爲が殘酷で無情なものだと認めざるを得なかつた。

最初に冒した物質上の誤謬が今では精神的誤謬とからまつて來た。彼は第一の誤謬を正さうがために、第二の誤謬を冒さうとしてゐるのだ。だが彼は満足し得るやうに、過去を清算することが出来るであらうか？ それによつて理智的にも靈的にも満足し得るであらうか？ 心の平和を得られるであらうか？ 彼は考へ續けた。斯うして絶えず自分の生活を昔の(と言ふよりも、新しい)状況に順應させようと努力したが、しかも心は楽しまなかつた。却つて事實に於ては、一層不幸になつてゆく——冷酷な復讐的な氣持になるのを感じた。レティと結婚すれば、それは彼女の財産でもつて自分の仇敵をやつゝけるためなのだが、そんなことのため

めに彼女と結婚するのは厭だつた。彼はオーディトリウムに住所をきめ、冷淡な挑戰的な氣持で、シンシナチを訪問し、重役會議に列席したりして自分の心を落着かせ、世の中のことに興味を感じたいものと思つた。が、ジェニーに對する既定の方針は變へなかつたのであつた。

言ふまでもなく、ジェラルド夫人はレスターの復職に對して、深い興味の眼を睜つてゐた。胸に一物ある彼女は暫くの間レスターに消息するのを控へてゐたが、やがてハイド・パークの番地へ宛て、レスターの新しい住居を知つてゐない振りをして、手紙を書き、「何處へお住居ですか」と言つてやつた。レスターは今では生活の變化にいくらか慣れて、誰か理解のある友人——勿論それは女性の——が欲しいものと祕かに考へてゐた。彼が獨身であるといふこと、事業上の關係が舊通りとなつたといふことが理由で、社交界から招待狀が來はじめた。彼は日本人の供を一人連れて方々の別荘へ出掛けて行つたが、それは彼が再び獨り者になつたことを示す最上の看板であつた。誰も過去のことを云々する者がなかつたのである。

ジェラルド夫人の手紙を受取ると、レスターは是非挨拶に行かなければなるまいと思つた。彼は夫人に禮を缺いてゐたのだつた。ジェニーと別れるまでの數ヶ月といふもの、夫人に近づかなかつた。そして今でも晚餐に招待の電話を受



ける迄は出掛けて行かうとしなかつた。電話がかゝつて来たので、彼は招待に應じたのである。

ジェラルド夫人は主人役として、食卓の準備を萬端整へ、愛嬌を振りまいてゐた。その席には、ピアニストのアルボニ氏や、彫刻家のアダム・ラスカウエジ氏も招かれてゐたし、英國から漫遊に來た科學者のネルスン・キイズ卿や、珍らしいことに、この數年來社交界でレスターが顔を合せなかつたベリー・ドッジ夫妻も來てゐた。ジェラルド夫人とレスターとはお互によく知合つてゐる者同志のするやうに、如何にも愉快さうに挨拶を交した。彼が姿を見せると、彼女は「わたくしを、こんなに構はずにお置きになつて、平氣でゐらつしやいますのですか？ 罰をお受けにならねばなりませんよ、」と言つた。

「損害賠償は如何程ですか？」とレスターが微笑した。「ひどくへまをやつて了ひましたな。九十ほど答を戴いても仕方がありません。」

「答九十、宜しうございます！」と彼女が逆襲した。「それ位の所でお逃げにならうなどは卑怯でございませう。シャムの國では、罪人に對してどんな刑罰が加へられるか御存知でいらつしやいませう？」

「油の中へ入れて煮て了ふのでせうか？」

「さう、多分さうだらうと存じますわ。私、なにか身の毛チ・デイ會社の重役に選ばれたことを知つてゐた。レスターが再び活動を始めることは明瞭だつた。ところが食堂が開かれるとレスターはジェラルド夫人の右手に席を取つた。「このあとでまた晚餐にお呼び致しますから、いらしつて下さらないこと？」食卓の向側で話はずんである時、ジェラルド夫人はそつとレスターに言つた。

「参りますとも、それも近い内に。眞面目に言つて、僕はお訪ねしたいと思つてゐたのです。僕の現状を理解して下さいませう。」

「え、わかつてゐますの。澤山に聞きこんだことがありましてね、だから、來て戴きたいと思つたのでございますわ。御相談したいことがございますのよ。」

その後十日過ぎて彼は訪問した。どうしても彼女と話合はなければならぬやうな氣持がしてゐたのである。退屈と寂しさを感じてゐた。ジェニーとの永い家庭生活の後ではホテル生活は不満でならなかつた。理解のある、話のわかる相手を見附けなければと云ふ氣がしてゐたのだが、この家以上に都合のよい處が他にあらうか？ レティは彼の苦勞を何によらず聽いて呉れた。彼女ならば機會のあり次第、彼のがつしりした頭を自分の胸に抱いて息めて呉れるであらう。

「ところで、」と、いつもの掛引めいた前口上が濟むと、レ

のよだつやうなことを考へて居りますのよ。」

「きつとですよ、愈々お考がきまりましたら、聞かせて戴きたいものです。」彼はかう言つて聲を出して笑つた。そしてレスターは、主人の輔佐を勤めてゐるド・リンカム夫人に案内されて、名士達に一人々々紹介して貰つた。會話はきびきびしてゐた。彼の頭は屈託なく働いて、この場の智的な雰囲気によつて元氣をすつかり取り戻した。やがて彼は自分の直ぐ傍に立つてゐるベリー・ドッジの方へ向き直つて挨拶をした。ドッジは慇懃を極めてゐた。「今どちらへお住ひですか？ 随分永いことお目にかゝりませんで——だが——さう何時だと言言るんですか？ 妻が御挨拶したいと言つてお待ちしてゐますよ。」レスターはドッジの態度が變つてゐるのに氣がついた。

「いつの時にですよ、」とレスターが平氣な顔で答へた。「僕はオーデトリウムに部屋を取つてゐます。」

「先日もお噂してゐたところですよ。君はジャクソン・ドュポアを御存知でせう？ 御存知の筈です。僕等はカナダへ出掛けて、何か獵をしようと思畫してゐるのですが、御一緒に如何ですか？」

「お伴できませんね。今丁度仕事を立てこんでゐるのです。この次の折には是非参りますよ。」

ドッジは話を續けたがつてゐた。彼はレスターがシィ・エイスターが言つた。「どういふ風に説明すれば、お氣に召すのですかね？」

「背水の陣を布いておしまひになつたの？」

「どんなことですかね、」と彼は眞面目になつて答へた。

「兎に角、事情甚だ愉快だとは言へないんでね。」

「さうだらうとお察ししてゐますわ、」と彼女が應じた。

「それが貴方にどう響くか私には分つてゐました。現在も貴方が惱み抜いておいでなのが目に見えるくらゐです。私はずつとこの成行を注意しながら、貴方の心が鎮まるやうにと祈つてゐましたわ。かうした問題は、とても面倒なものに極つてゐます、でも屹度最後には良い結果になりますよ。他の方法では解決が駄目だつたの。解決の出來さうな筈がないのですわ。貴方は世間から引込んだ生活に堪へて行かれる方ではないのよ。生れつきそんな風に出來てゐらつしやらないの、その點、私と同じです。或は貴方は、御自分がなさつたことを後悔なさるかも知れませんが、別の途をお取りになつたとしても、同じやうに、いえ、それ以上に後悔してゐらしたでせう。も一つの生活はお出來になれないのですよ——お出來になれますか？」

「レティ、それは僕には分らない。全くのところ、分らないのですよ。僕はずつと前から貴女に會ひたいと思つてはゐるが、控へました。僕の戦ひは、他の方面にあつたんです



——と云ふ意味が分るでせう。」

「え、分りますわ、」と彼女が慰めるやうに言った。  
「だが、内面的の戦ひは今だに濟まないでゐます。それを乗り切ることが出来ないのです。今の事業の方にすつかり没頭して他を忘れて了へるかどうか疑問なんです。打明けてお話しすると、僕はあの女をそつくりそのまま愛してゐるとは言へないけれど、それでゐてやはり氣の毒に思へてね。其處に引掛つてゐると云ふわけです。」

「あの女には勿論不自由はかけてないわ、」と彼女は質問するといふよりも、寧ろ批評するやうに言った。

「何でもして欲しいと云ふことはしてありますさ。併しジェニーは變つた女で、やたらには物を欲しがらないのでね。生れつき引込無案で、見榮を張らうとしない。僕はサンドウッドに家を借りてやつてあるが、此處から北に當る湖畔の小さな町なんです。金もいくらか委託してやつてありますよ。でもあの女は、勿論自分の好きな處で暮して行けるわけです。」

「あの女の氣持がはつきり理解出来ませう、レスタター。そして貴方の氣持も分つてよ。あの女も一時はひどく苦しむこととせう——愛してゐる者を手離した時には誰でもが苦しむものですよ。でも、私達それに打克つてよ、そしてやつてゆくよ。少なくとも、生きて行けるよ。あの女も

さうなの。初めは苦しいでせうけれど、暫くすれば諦めも出来て、貴方のこともそんなに悪くは思はないでせうよ。」

「ジェニーが、僕を責めるやうなことは決してありませんよ、」とレスタターが答へた。「責めると言へば僕自身が責めるでせう。僕は赦しばかりの間自分で自分を虐めつけることだらう。それは僕の生れつきもつてゐる性向が災するのですね。この落着かない僕の氣持が、どの點までが習慣で、——僕の身體加減とでも言つたもの——またどの點からが同情であるのか、自分でも分らない程なんです。僕は自分位この世の中で、要領を得ない男はあるまいと考へることが時々ある。僕は考へ過ぎるのだ。」

「可哀相にねえ。レスタター、」と彼女は物優しく言った。  
「え、分つたわ。貴方は今寂しいのよ。さうぢやなくて？」

「その通りなのですよ。」

「では、ウェスト・ベードンへ行つて、二三日お遊びにならないうこと？ 私も行行く積りでゐますの。」

「何時？」

「今度の火曜。」

「一寸待つて下さい。確かなところが分らないからね。」彼女は手帳を繰つてみた。「木曜だつたら暇になる。二三日は大丈夫。」

「さうなると宜いわ。貴方にはお友達が必要なんです。あそこへ行つたら、二人で散歩したり、話したり勝手にせう。いらつしやらない？」

「行くことにしますよ、」と彼女が答へた。

彼女は藤色の部屋着の裳を曳いて、レスタターに近寄つて来た。「まあ、何てしやちこぼつた哲學者様でゐらつしやいますのでせう。」彼女がかうくだけて言ひかけた。「何事も根掘り葉掘りしてお考へになる。貴方つて方はどうしてさうなの？ 貴方は昔からそんな調子でしたのね。」

「さうせずにゐられないのでね。考へ事をするといふのが僕の性質なんです。」

「え、でも私知つてゐることが一つあるの——」彼女はレスタターの耳朶をそつと捻つた。「私がさうしさへすれば、貴方は同情なんかの爲めに、二度と謬りを繰返さなくつてすむのよ、」と彼女が言つてのけた。「貴方の考へがちやんと纏まるまでは問題を絡ませないやうに、手出しなすつてはいけません。屹度よ。それから一つお願ひ事、それは私の財政の面倒を見て下すつたらと思ふの。貴方なら私の處の辯護士よりも、ずつと宜い相談役になつて戴けるわ。」

レスタターは立ち上つて窓の方へ歩いて行つたが、振り返つて、眞面目な顔で彼女を視た。「僕には、貴女の求めてゐるものは分つてゐる、」と頑固な口振で言つた。

「そんなことを言つてはいけないとでも仰言るの？」彼女は再びレスタターに近附いて来て、詰寄せるやうに言つた。そして訴へるものゝやうに、また挑戦するかのやうに彼を視据えた。「宜いではありませんの、私にだつてさうする自由はあるでしょ？」

「貴女には自分がどういふ事をしてゐるのか分つてゐないのだ。」彼が唸るやうな聲で言つた。が彼はなほも彼女から瞳を離さなかつた。じつと立つてゐる彼女は、その頃の年齢の女性を持つ魅力と、世馴れた思慮深い様子と、厚意と情愛とに溢れてゐた。

「レタイ、」と彼女が言つた。「貴女は僕に結婚を要求してはならない。僕はそれに値しないのだ。實際、値しないんだ。僕はひどく冷笑的な人間だ、餘りにも冷淡な男なのだ。時が経つにつれて、そのことが分つて来る。」

「でも私にとつては値打がありますの。」と彼女が言ひ張つた。「私は貴方を知つてますわ。それでも構はないの。私は貴方を求めてゐるんですもの——」

レスタターは彼女の両手を執つた、それから腕をつかまへた。そしてとう／＼引寄せて、その腰に彼の両手を廻した。「可愛いレタイ、」とレスタターが言つた。「僕にはそんな値打がないのだよ。貴女は屹度失望する。」

「いゝえ、失望なんかしませんわ。自分のしてゐることは



分つてゐるの。貴方が御自分のことをどう考へてゐらつしやらうと、そんなこと構はないの。」彼女は頬をレストアの肩にすりつけた。「私貴方を求めてゐるんですわ。」

「貴女がいつまでも攻めつけて来れば落城するでせう。」レストアは身を屈めて彼女に接吻した。

「おゝ」と彼女は聲を出して、火照つた顔をレストアの胸にうづめた。

「馬鹿げたことだ。」彼女を兩腕に抱きしめてゐながらも、彼は心の中で思つた。「こんなことをしてはいけない。」それでもまだ彼は女を離さなかつた。そして彼女が再び誘ふやうに、唇を寄せて来ると、レストアは、幾度もくく接吻した。

## 五六

レストアが果してジェニーの許へ戻つて来るかどうかは、何か力強い動因でもない限り、言明することが困難であつた。暫くしてから、彼は自分に分配された財産を確實に手中に納めたし、又初期に於ての感情の衝突も忘れられたので、自分が或る策略を用ゐれば——彼が生來の性癖を無視して骨肉としての義務を踏みつけるとすれば——ジェニーと一緒にになれるやうに取極めることは譯ないと承知してゐた。

併し彼は、ジェラルド夫人を通して世間に乘出す機會を捉へようといふ氣持がいつもあつた。彼はジェニーに對する純な氣持に對置して、彼女の競争者（それは社交界に於て最も華かな且つ興味ある人物の一人であつたのだ）の人格と財産に就いて看過してゐた點を想起したのだ。レストアがどう考へようと、この二人の女は、あくまで彼の頭の中で對立してゐたのだ。一方は洗煉されて理解があり、思想もあつて、上流社會の凡ゆる教養を受けて居り、且つ自分の望みを總て満足させることが出来る程の、財産の所有者である。他方は素直で情が細やかで理解があり上流社會の作法は全然心得てゐないけれども、人生の美だとか、人間同志の愛だとかに對する感受性を授かつてゐて、如何にも珍らしい、さらにはない女だつた。ジェラルド夫人もジェニーのこの美點は認めてゐた。彼女は、レストアがジェニーに結び付くのに反對したのは、ジェニーをさげすんだからではなく周圍の事情が二人の結合を不利ならしめると考へたからである。所が夫人自身と一緒になれば、レストアの社會的野心を満足させるには理想的なのである。さうなれば、總てが都合よく運ぶことになる。レストアはジェニーと幸福に——恐らく同じ程——ジェラルド夫人とも幸福に暮して行けるであらう。而も彼はこの西部の社交界や財界に於て、自分よりも立派な人物がゐないといふことを知つて満足に

思ふであらう。彼は永いこと慎重に考へ抜いた末、ジェラルド夫人との問題の解決を遅らせることは、利巧な事ではないと思つて、一刻も早く解決するように決心した。彼は既にジェニーを棄て、取返しつかない間違ひをしたのであつてみれば、今度の解決法が罪を重ねることになるとは思つてない。ジェニーは成程、レストアを失つてしまつたが、それ以外のものは總て望み次第になつてゐる。ジェニーは彼に自分と別れてくれと言つたのだ。レストアは不安定な且つ煩瑣な情勢を前にして、かうした考へを頭の中で、つちあげ、それに由つて新しい結婚のことを考へるやうになつた。やがて何等かの形で、ジェニーとの關係が復活するのを妨げたのは、ジェラルド夫人がいつも目の前にゐたからなのだ。當時のレストアの心の惑ひを解くものは、周圍の事情からして、ジェラルド夫人の他にはなかつた。レストアは一人である、唯あちこち訪れることが出来るだけであつたが、彼はそんなことはしたくなかつた。そして獨身者の自分が樂しみ、又ジェラルド夫人のやうな女が、容易に與へて呉れるやうな雰圍氣を作らうとする意圖に對しても、無關心であつた。彼は只ジェラルド夫人と一緒になれば、さうしたことは譯なく得られるのだ。二人の家庭は何處に營まれようとも、社交人が寄つてくるに決つてゐる。彼は顔を出して仲間になればそれで済むことだつた。ジェラルド夫人はレ

スターの生活の趣味を十分に理解してゐた。で、彼女はレストアが交る人々と一緒になつて樂むことが出来た。彼等と一緒に樂めることは澤山にあつた。彼は夫人の勧めに従つて、ウェスト・ベードンで落合つた。彼女の言ひなりに、シカゴでも晩餐會や、宴會、その他遠乗に出かけた。夫人の屋敷は、彼自身の家同様であつた——彼女がさう思はせるやうにしたのだ。彼女はレストアに打明け話をして、それによつて二人の關係を吞込ませ、いろ／＼と彼の意見を求める理由を想像させようとした。彼女はレストアが獨りぼつちであることを欲しなかつた。又彼が考へ込んだり、鬱々込んだりすることを望まなかつた。そして彼女は彼の慰めとなり、心勞を忘れて憩ふものとなつた。レストアは時々他の客と一緒に、彼女の屋敷を訪れる事もあつて、何時の間にか、彼がジェラルド夫人と結婚するのだといふ噂がたつてきた。彼女はレストアの過去の事に就て、兎や角と煩さい評判があつたので、レストアとの問題は目立たないやうにしなければならぬと思つた。で彼女は二人の交渉について新聞に簡単に書いて貰ひ、そのあとでいろ／＼の評判が下火となつたら、改めて彼の爲めに華々しい披露をしようと思つた。

「ねえ、四月に結婚して夏外遊してはどう？」と彼女が言つたのは、結婚のことが暗黙の中に諒解されてからのこと



だつた。「日本に行かないこと、さうすれば秋には歸つて來られるから、ドライヴに家を持つことにしませうよ。」

レスタは永い間ジェニーから遠ざかつてゐたので、初めの頃感じてゐた、あの烈しい自責の念はなくなつてゐた。只そのことに就いて、未だに何處か迷つてはゐたが、自ら自分の誤謬を押し隠さうとしてゐたのであつた。「それは素敵な考へだね。だが、馬鹿騒ぎはしないことだね。」と彼は冗談めいた調子で答へた。

「貴方、本気で言つてらつしやるの？」と、彼女はレスタを見ながら叫んだ。二人は一緒にお喋りをしたり、本を讀んだりして、その一晚を静かに過してゐるところだつた。「僕は永いことそれを考へてゐたのだよ、」と彼が答へた。「やうして、いけない理由はないだらう？」

彼女はレスタの處へやつてきて、彼の膝に腰をかけ、彼の肩に兩腕を載せた。

「私、貴方のおつしやつたことが、信ぜられないやうな氣がするわ。」彼女は、レスタを不思議さうに見詰め乍ら斯う言つた。

「ぢや、取り消すことにしようか？」

「そんな必要ありませんわ。では、四月と決めましたよ。日本へ行くのですよ。そのつもりでゐて下さい。何も空騒ぎはしませんすまい。でもよござんすか、たいした嫁入支度を

してお目にかけますよ！」

レティが彼の髪の毛をもちやく／＼に悪戯するので、レスタは無理に微笑んでみせた。かうした幸福の中にも、何かしら足りないものがあるやうに思はれた。それはレスタの齡が老けてゆく爲めであるかもしれない。

五七

一方、ジェニーは今迄とは懸け離れた世界に住つて、自分の行く道を切り拓いてゐた。レスタのゐないこの生活は、初めの間は實に堪へ難いものに思はれた。彼女は個性の強い女にも拘らず、その生活の中には、レスタの生活が深く喰ひ入つてゐて、それを引離して考へることは不可能であるやうな氣がした。考へごとをするにつけても、用事をするにつけても、まだ同棲してゐる時と同じやうに、彼の姿が附纏つてゐた。レスタは今何處にゐるだらう？ 何をしてゐるだらう？ どんなことを話してゐるだらう？ どんな様子でゐるだらう？ 夜が明けて眼を覺した時も、彼女はレスタが側にゐるといふ感じがしてならなかつた。夜は夜で、一人で床に就けないやうに思はれた。レスタは直き歸つて來るだらう——否、否、もう歸つては來て呉れない。まあ、何といふ事だらう！ 決して歸つては來な

いのだ。それ程にも、ジェニーはレスタを求めてゐた。

その他にも、細々した面倒な事を一々始末しなければならなかつた。このやうな生活様式の變化は、影響する所が遠くまで及ぶので、宜い加減にあしらつては置けなかつた。

ヴェスタに説明して聞かせる言ひ譯は、中でも一番困難な仕事だつた。最早自分で十分に物ごとを觀て判断を下すことの出來る年頃になつたこの少女は、既に疑念と不安を懷いてゐた。嘗て母親に向つて、自分を生んだ時に父親と結婚してゐなかつたことを非難した記憶があつた。また日曜新聞に、ジェニーとレスタに關する記事が載つてゐるのを見たことがあつた——それは學校で見せて貰つたのだ——併し彼女は母親がいやがるであらうと察して、そのことに就ては一言も話さないだけの分別があつた。今レスタが歸つて來なくなつたのは、非常な驚きを與へたのだが、二三年來、母親が何事によらず氣にするやうになつてゐるし、思ひ掛けないことで母の不機嫌を買ふ場合があるのを知つてゐた。ジェニーはとう／＼黙つてゐられないで、レスタが財産を相續する爲めに已むを得ず別れた事、その理由は専らレスタとジェニーの身分が違ふからだと話して聞かせた。ヴェスタは眞顔で聞いてゐたが、果して全部眞實かどうか疑念を挿んでゐた。併し母親が氣の毒で堪らず、打ち沈んでゐる姿を見ては、却つてその爲めにいつもの三倍もは

しやいで元氣な様子を見せた、そして寄宿のある學校へ入るやうにとの勧めを、即座に斷つて、出來るだけ母親の側にゐるやうに努めた。彼女は面白い本を見附けては、母親と一緒に讀んだり、一緒に芝居を見物に行きたいとせがんだり、ピアノを彈奏して聞かせたり、自分の畫や手工に就いて批評を求めたりした。サンドウッドのよく整頓してゐる學校でも二三人の友人が出來たが、夕方などにはその友達を連れて來て、佯住居に明るさを添へた。ヴェスタの美しい性質が分つて來るにつれて、ジェニーは益々我兒が愛しくなるばかりだつた。レスタは去つてしまつたが、せめてものことにヴェスタがゐる呉れる。かうした支那の助けで、頼みになるものゝ少なくなつて行く生涯を、どうにかやつてゆける事であらう。彼女はまたこのサンドウッドの隣人たちに、自分の過去を説明しなければならなかつた。つゝましまやかな暮しを立てゝゐれば、自分の過去のことを兎や角と語る必要のない場合もある。併し大抵はきまつて、何か言はずには濟まされないものである。世間といふものは——よしそれが肉屋やパン屋であつても、聽耳を立てるものである。端からぼつり／＼と、あれやこれやに就いて説明を求められる。この土地でもそれに變りはなかつた。ジェニーは、レスタが歸つて來るかも知れないので、夫が亡くなつたのだとは言へなかつた。彼女は自分から夫の許を去つたのだと言つ



た——それは夫が戻つて来た場合、受入れるか否かの権利が、自分の方にあるとの印象を與へて置きたかつたからである。この説明の結果として、彼女は近所の人々から興味と同情の眼を以て眺められるやうになつた。これほど要領の宜い説明はなかつた。斯うしてジェニーは、自分では豫想の出来ない大詰を待ちながら、静かな、單調な、其日々々を送つていつた。

サンドウッドの生活は、自然を愛してゐる者にとつて魅力のない處ではなかつた。その魅力は、ヴェスタの盡して呉れる眞心と共に、ジェニーの心を幾分でも慰めたのである。美しい湖水には舟が走り、消えることのない永遠の喜の源となつてゐた。周囲の田園は美しく馬車を駈けさせるに宜い處を持つてゐた。ジェニーの家には馬車があつた、——ハイド・パーク時代に乗り廻した二頭の内の一頭の馬もゐた。斯うして生活を續けてゆくうちに、段々と家畜なども飼ふよゝになつて、コリー種の犬もゐた。ヴェスタはそれをラッツと呼んでゐたが、未だ兎狗の時分に自分がシカゴから連れて來たのだつた。今ではすつかり大きくなつて、利口な、愛らしい、立派な番犬だつた。其他には猫もゐて、名前はジミー・ウツツとつけてあつた。ヴェスタの知つてゐる男の子の名前からとつたもので、ヴェスタはこの猫が、その男の子と瓜二つだと言つて承知しなかつた。それからまた、よく轉

る鵜がゐて、それを食べようと狙つてゐるジミー・ウツツをよく監視する必要があつた。なほ金魚鉢も一つあつた。このさゝやかな家庭はいかにも靜かに夢のやうに月日を過してゐたとは云ふものゝ、その樂しげな生活の底には、深ければこそ靜かに流れる感情の潜流が不斷にあつた。

レスタから別居後二三週間、何の消息もなかつた。それは一つには新らしく生れた事業關係に追はれて忙しかつた爲と、又一つには現在の事情では何の役にも立たない手紙を出して、徒にジェニーの心を混亂させて置くのは宜くないと考へたからであつた。彼はこの問題は、當分そつとして置きたかつた。そして暫らく時が経つてから、これ迄の状態を穩かに、落着いて知らせればよいといふ考だつた。それを實行したのは九ヶ月後のことで、自分の事業が可成り忙しかつたこと、シカゴ以外に旅をする用事が多いこと（これは本當のことであつた）、將來は大部分の時間を他の土地で暮さなければなるまいなどと書いた。ヴェスタのことやサンドウッドの様子も訊いた。「その内にそちらへ出掛けるかも知れない」とほのめかしたが、實際行く積りで書いたのではなかつた。ジェニーも彼の腹は見抜いてゐた。

更に一ヶ月後にレスタから二回目の手紙が届いたが、最初のほど長くはなかつた。ジェニーは巖に自分の生活狀

態をありの儘に綴つて、長々と書いて出したのだつた。彼女は自分の氣持をすつかり蔽ひ隠し、今の生活が大變氣に入つてゐるとか、サンドウッドで暮せて喜んでゐるとか述べた。レスタの爲に總ての事情が都合良くなるやうとの希望、萬事が納まる事になつた喜びをも記した。或る箇處にはこんな風に書いた。「私が不幸だとお考へになりませんよ。私は不幸ではございません。このやうになるのが當然のことでございます。外の方法を採るのだとしたら私満足出來ないのでございます。レスタ、貴方は御自分を一番幸福にするやうに努力なさいませ。あなたはさうなざる値打があまりになります。どんなことを貴方がなさらうと、それで私は宜しいのでございます。私少しも氣にはかけませんでせう。」彼女はジェラルド夫人のことを心に描いてそのやうに認めたのだが、レスタもそれと感附いてゐた。彼は併し、ジェニーの寛大な考方には多分に犠牲の精神と、言葉に現し得ない寂しさが混じてゐると思つた。彼が愈々、最後の考を實行に移すのを躊躇するのは、かうした氣持を知つてゐるからであつた。

或る朝、ジェニーが新聞に目を通してゐた時のことであつた。社交記事欄に次のやうな文字を見出した。  
ドレクセル・ブルバード・四〇四四番地のマルカム・ジェラルド夫人と、シンシナチ市の故アーチボルド・ケイン氏次男レスタ・ケイン氏との婚約が、許嫁によつて催された火曜日の宴會席上で、極めて親しい友人の間に發表された。結婚式は四月舉行される由。  
兩手から新聞紙が落ちた。暫くの間はじつとした儘で、空間を凝視して坐つてゐた。これは本當か知ら？ 彼女は自問した。どう／＼實際になつて了つたのか知ら？ 彼女は何れはかうなるに相違ないと考へてはゐたものゝ、でも——でも彼女は絶えずそんなことにならないやうにと念じてゐたのだつた。何故さうならないことを念じてゐたのだらう？ 彼女は自分から進んでレスタを手離したのではないか？ それとなく彼女がレスタに勧めたことは、實にこの結婚ではなかつたか？ 實現される時が來たのだ。彼女は何うしたものだらうか？ 仕送を受けて此處にじつとしてゐるのか？ さう考へるのは厭やだつた。でも、レスタはジェニーのものとして、可成りな金額を積立て、呉れてゐるのだ。それはラ・サール街に在る信託會社に、鐵道株券七萬五千弗の形で預けられ、年利子四千四百弗を産んでゐる。この金額はジェニーに直接支拂はれてゐるのであつた。彼女



はこの金を拒絶することが出来たであらうか？ 考へてやらなければならぬ。ヴェスタといふものがあるのだ。

ジェニーはこの大詰の場につかつかつて、幾重にも心を痛めた。而も坐つて考へてみると、怒つてみたところで馬鹿氣なことだと氣が附いた。人生は何時でも彼女をこんな風にして操つて来た。今後だつて同じであらう。彼女はそれを承知してゐた。若し自分が世の中に出て自活するとしても、それがレスターに何の影響を與へ得るだらう？ ジェラルド夫人に何う響くだらう？ 自分はこの小さな場所に閉ぢ籠められ、世に知られない存在として生きて行くのに、レスターはあの廣い世界で、思ふ存分な眞似をして楽しんでゐるではないか。これは餘りに辛いことだ。然し何故自分は泣くのだ？ 何故に？

ジェニーの眼には、涙を認めることが出来なかつた。併し彼女の魂は胸の奥で八つ裂きにされてゐた。彼女は徐ろに立ち上つて、新聞をトランクの底に匿し、鍵を掛けた。

## 五八

レスターがジェラルド夫人との婚約を公表した以上、彼は新しい生活秩序に順應するのに、さして困難を感じなかつた。確かに何も彼も順當に運ばれてゐるのだ。ジェニーに

對しては氣の毒だと思つた、——心から氣の毒に思つてゐた。ジェラルド夫人も同情はしたが、然し自分の結婚がレスターのためにもジェニーのためにも、最も良い事だと考へて陰氣にならうとする氣持を引き立てることが出来た。レスターはもつと幸福になるだらうと思つてゐたが——今ではその通りになつた。ジェニーも、何時かは自分の行爲が賢明で、親切なものであつたことを覺るであらう。そして没我的な行爲を自覺して喜ぶ時が来るであらう。ジェラルド夫人にしてみれば、亡くなつたマルカム・ジェラルドに對しては愛を感じてゐなかつたことだし、またレスターを自分のものにしようと願つた若い頃の夢が——聊か遅れてはしまつたが——愈々實現されたのであるから、その喜びは深かつた。彼女はレスターと共に送る日々の生活を——何處へ行くにしても、何を見るにしても——この上なく楽しいものに思つた。レスター・ケイン夫人として、始めて過ごす今年の冬のシカゴでの社交季節は、彼女には記念すべきものだらう。日本漫遊の旅——それはまた大きな満足である。

レスターはジェラルド夫人との結婚に就て、ジェニーに手紙を出した。彼は自分から何も申開きをしないと書いた。自分は、どうしてもジェラルド夫人と結婚するのが宜いと思つた。そのことを君に知らせなければならぬと思ふ。君は元氣で暮してゐることと思ふ。自分は心から、絶えず君

のことを氣にかけてゐるのだ。自分は君が出来ただけ愉快に、満足に生活してゆかれるやう、自分出来るだけは盡してあげるつもりだ。どうか自分を許して呉れ。ヴェスタにも宜しく傳へて呉れ。ヴェスタは、どうしても上級の學校へ入學させなければならぬ。云々。

ジェニーは周囲の状況を十分に理解してゐた。彼女は、レスターがロンドンのカールトンで邂逅して以來、ジェラルド夫人に心を惹かれてゐたと見てゐた。夫人はレスターを餌で釣らうとしてゐたのだ、そして今や彼を自分のものにしてしまつた。それはそれでいゝのだ。ジェニーは、レスターが幸福であれかしと願つた。ジェニーは喜んで返事を認め、その旨を述べた。二人の結婚に就いては既に新聞で讀んで知つてゐたとも書いてやつた。レスターは、考へながらその文面を讀んだ。其處に書き現はされてゐる文字以外の何もかを行と行の間に讀みとつた。ジェニーの辛抱強さには、今も彼の心を魅するものがあつた。事此處に至り、ジェラルド夫人との結婚期日が近づきつゝあるにも拘らず、彼は自分が或る意味でジェニーを忘れられないのを知つた。彼女は氣高い情味の豊かな女である。それ以外の總てのものが揃つてゐるさへすれば、彼はジェラルド夫人と一緒になりはしなかつた筈だ。それなのに事實はこの通りになつた。結婚式は四月十五日で、カトリック派の司祭司式の下に、ジェラル

ド夫人の邸宅で舉行された。レスターは、自分も時々は出かけてゆく教會の信仰といふものとは、似てもつかぬ思想を有つてゐた。彼は不可知論者なのだ、幼い時から教會の空氣を吸つて育つて来たので、結婚式は教會の厄介になることにした。

當日は、極く親しい友人關係のお客が五十人ばかり招待され、儀式は極めて順調に終つた。次いで祝詞が述べられ、コンフエティが雨霰のやうに投げられた。そして來客の食べたり飲んだりしてゐる間に、レスターとレティとは裏口から箱馬車に乗つてそつと逃げだした。二人が出發してから十五分後、それに氣附いた祝賀の客は、大騒ぎであとを追つてシカゴ・ロックアイランド・パシフィック鐵道の停車場へ駆けつけたが、その時は新婚夫婦は借切の客車に納つてゐた。もちろんコンフエティを持つて追つて来た人々は、そんなことにはお構ひなく勇敢にやつてのけた。シャンパンが次々と抜かれた。斯うして汽車が出發してしまふと、さすがの喧嘩も終り、新婚の二人はほつと息をついた。

「さあ、これで僕は君のものになつたよ。」レスターは愉快さうにレティを引ばつて自分の傍へ坐らせて言つた。「どうして呉れようつて云ふの？」「これもその中の一つ。」彼女はさう言つてレスターを固く抱き、熱烈なキスを與へた。二人は四日目にはサン・フランシスコに到着し、二日後には



ミカドの國へ行く、船脚の速い汽船に乗り込んでみた。斯うした間にジェニーは、物思ひに沈むばかりだった。最初に見た新聞には、レスターが四月に結婚する豫定だとあつたので、彼女はその後新聞を注意してゐた。そして式の日取が四月十五日の正午で、花嫁の邸宅で行はれるといふことが分つた。ジェニーは諦めてゐたとは云ふものゝ、丁度クリスマス季節に灯の點つた窓を覗き込む、貧しい空腹の子供のやうな、絶望の氣持で、時の進むのを妬ましく思つてゐた。

結婚式の行はれる日、ジェニーは、十二時を打つのを佯しい胸を懷いて待つた。まるで自分も式に列し、それを眺めてゐるやうな氣持だつた。眼の底には幻のやうに、立派な邸宅や、馬車や、祝ひの客や、祝祭、歡樂、儀式的の有様が一つ残らず浮んで見えた。千里眼でもあるやうに、新邸新婦が乗つてゐる借切の特別車の中だとか、楽しい旅行の光景などが彼女には鮮かに感じられた。新聞によると、二人は新婚旅行に日本漫遊の企てがあるといふ。あゝ、彼等二人のホネームーン！レスターはあの女のものだ、あの魅惑的なジェラルド夫人。ジェニーは、ケイン新夫人——あとにもさきにも之が最初のケイン夫人——が今レスターの腕に抱かれてゐるのを想像することが出来た。彼は自分を同じやうに抱いて呉れたことがあつたのだ。愛して呉れてゐたこ

とがあるのだ。確かにさうだつた！ジェニーはさう考へると、胸許が突きあげられるやうな氣がした。あゝ、どうしよう！溜息をついて両手を強く握りしめたが、それは何にもならなかつた。依然としてみじめな氣持に浸つてゐるのだつた。

結婚式の日が過ぎると、ジェニーもほつとなつた。何と言つたところで濟んでしまつたことだ、最早せんすべはないのだ。ヴェスタは何が起つたのかを氣附いたが、黙つてゐた。新聞で既に知つてゐたのだ。一日、二日と日が経つにつれて、ジェニーの心は穩かになつて行つた。今となつては不可抗力に直面してゐるのも同然であつた。それにしてもこの激烈な疼痛が段々と鈍つて、惰性的な憂鬱になるまでには、なほ數週間を必要とした。二三ヶ月すれば二人が日本から歸つて来るのだが、そんなことは別に問題にならなかつた。とにかく日本は非常に遠い處に在る國だし、またレスターが自分の住居の近く——シカゴの何處かにゐるのだと考へると、それはせめてもの慰めになつたのである。

斯うして春も去り夏も逝つて、十月の上旬になつた。それは肌寒を覚える或日のことであつた。ヴェスタが頭痛がすると言つて學校から歸つて來た。ジェニーは、熱くした牛乳を飲ませ——これは彼女の好んでする治療法であつた——後頭部に冷たいタオルを當てるやうにと言つて、部屋で休ま

せた。次の朝ヴェスタは軽い熱の氣味だつた。熱がぐづついてゐるので、土地の開業醫のエモリー醫師の診察を請ふと、腸チブスかも知れないとのこと、同じ町に他にも數名患者があるとも言つた。醫師は母親に向つて、お嬢様は生れつき體質がしつかりしてゐるから、大抵は熱に勝てるであらう、併し萬一の場合、酷い目にあふかも知れないと話した。ジェニーは自分の手には負へないと考へて、熟練した看護婦をシカゴから呼んで來た。かうして、恐怖と希望と勇氣の入り混つた警戒期が始まつた。

もはや腸チブスであるといふことは、一點の疑問を挿む餘地がなくなつた。當時レスターは、ニューヨークにゐるらしかつた。彼が多を其處で過す豫定だとは新聞に出てゐたのである。ジェニーは娘の病氣を知らせることを遠慮してゐたが、醫師が一週間の経過を診て重症であると診斷したので、彼女はどつちみちレスターには知らせなければならぬと思つた。ヴェスタは何時どんなことになるかも知れない。レスターはこの娘を大變可愛がつて呉れてゐたのだ。多分ヴェスタのことを氣にかけてゐるであらう。

レスターに宛てた手紙は彼の手許に届かなかつた。手紙が配達された時、彼は西印度諸島へ旅をしてゐたのであつた。ジェニーは止むなく一人でヴェスタの枕許で看護した。勿論、親切な近所の人々も同情してよく面倒は見えて呉れた

が、然し眞に愛する者によつてのみ與へられる精神的な慰藉は、是等の人々から得ることが出来なかつた。一時ヴェスタの病氣は持直しさうに見え、醫者も看護婦も希望を懷いたこともあつたが、その後は衰弱が甚だしくなつた。エモリー醫師は、患者の心臓と腎臓が弱つてしまつたと、ジェニーに告げた。

愈々死期が差迫つて、何うすることも出来ないやうになつてしまつた。醫師は嚴肅な顔をし、看護婦は口籠つて、はつきりしたことを言はない。ジェニーは只おろ／＼しながらも、娘の病氣が癒るやうにといふ一點に集められた熱烈な祈願——眞に祈禱らしい祈禱を捧げるばかりだつた。ヴェスタはこの二三年來、母親にとつて非常に離れがたいものになつたのだ！娘は母親を理解してゐた。自分のそれまでの生涯の意味が分つてきたのだ。またジェニーもヴェスタを通して、母親としての責任を大いに自覺するやうになつた。そして良き母となり、子を持つことの難さを知つたのである。若しレスターが反對せず、又彼と正式な結婚をしてゐたならば、彼女は喜んでもつと子供を産んでゐたことであらう。その外にも、ジェニーはヴェスタから教へられた所は多かつた——自分の生れと教育の低さを補つて呉れた永い幸福な年月だけでも忘れることが出来なかつた。數年來ヴェスタが段々と成長して、美しい、しとやかな、聰明



な女に育つて行くのを眺めては楽しんでゐた。それなのに、そのヴェスタは死んで行くのか！ エモリー醫師は遂に使者をやつて、シカゴにゐる知合の醫師を立會ひに招いた。その醫師は老人で、どつしりとした、同情もあり理解もある人だつた。彼は頭を傾けて言つた。「治療法には手違ひがありませんが、御令嬢の體質が病勢に堪へられるだけの強さをもつてゐないやうに考へられます。或種類の體質はこの病氣に對して抵抗力が弱いものでしてね。三日以内に回復に向ふ徴候がなかつたならば、危険が差迫つてゐるものといふことに意見が一致した。その旨を聞かされた時のジェニーの心の状態は、何人にも想像を許さないものであつた。しかもそれは母親の耳に入れて置くのが宜いとして話されたのだ。彼女は蒼白い顔をして、感情が昂ぶつて、考へるといふことが殆ど出来ず、たゞ歩き廻つた。そしてヴェスタの症状の一進一退をそのままに自分の身體にも感じてゐるやうだつた。ほんの少しでも回復の兆があると、直ぐにそれを母親も身體的に感じた。弱りが来れば来るで、まるで氣壓計のやうにそれを記録するのであつた。

デイヴィスといふ年の頃五十位の婦人がジェニーの家から四軒目に住んでゐた。健康で、同情があつて、世話好きの人だつたが、ジェニーの氣持をすつかり理解してくれた。このデイヴィス夫人は、ジェニーの氣持を出来るだけ平靜に保た

せるために、最初から来て看護婦や醫者と一緒になつて立ち働いて呉れたのである。

「さあ、奥さん、貴女はもう御自分の部屋でお休みなさいな。」夫人はジェニーが、病室で頼りなさうに看護してゐる時とか、又あちこちして手持不沙汰である時は、いつもかう言つて呉れるのだつた。「私が何でもお世話しますから、ね。貴女の思つてゐらつしやる通りを爲て差上げますよ。私何でも心得てゐるぢやありませんか。七人の子供を持つて、三人まで失くしたんですもの。私には分つてゐるわけぢやありませんの？」或日のこと、ジェニーがデイヴィス夫人の大きな、温い肩に顔をうづめ、聲を立て、泣いた。デイヴィス夫人も一緒に泣いた。「分つてゐますわ。まあ、まあ、可哀相に。さあ、こちらへ一緒にいらつしやい。」さう言つて彼女を寢室に連れて行つて呉れた。

ジェニーは、病人の傍を永いこと離れてゐることが出来なかつた。休みもせず、元氣の回復も待たずに、二三分も経つと、もう戻つて来るのだつた。その中に、ある夜更に看護婦が、朝迄は大丈夫だらうと言つて、無理にジェニーを休ませたのだが、急に病室が騒がしくなつた。隣室で、ものの二三分も横になつてゐたかと思ふ時、物音を耳にした彼女は起き上つた。デイヴィス夫人も前に行つてゐて、看護婦と二人でヴェスタの容態に就て相談してゐた。

ジェニーは總てを直感した。ヴェスタの傍へ行つてぢつと顔を覗詰めた。その蒼い蠟のやうな顔が、一切を物語つてゐる。兩眼は閉ぢ、微かな息をしてゐた。「ひどく弱つておいでです。」と看護婦が低聲で言つた。デイヴィス夫人はジェニーの手を握つた。

幾分間か經つた。暫くすると廊下の柱時計が一時を打つた。看護婦のマップリー嬢は藥の載せてある卓子へ幾度も行つて、柔かいガーゼをアルコールに浸し、ヴェスタの唇を濡めた。一時半を報ずる時計の音が鳴つた時、ヴェスタの衰弱し切つた體が顫へて——深い溜息が聞えた。ジェニーが夢中になつて前屈みになつたので、デイヴィス夫人が引戻した。すると看護婦が来て、二人に離れるやうに手で合圖をした。呼吸が止つたのである。

デイヴィス夫人はジェニーの身體をしつかり押さへた。「まあ、可哀相に。」夫人はジェニーの身體の顫へを感じると囁いて言つた。「仕方のないことではありませんか。泣かないでね。」

ジェニーは寢臺の傍に崩折れて了つて、まだ温みのあるヴェスタの手を愛撫した。「いゝえ、ヴェスタ、お前が逝つちやいけません、お前が、」と彼女は歎願するやうに言つた。

「ああ、もうこちらへいらつしやい。」デイヴィス夫人が優

しく慰めた。「貴女は總てを、神様の御手にお委せすることがお出来になりませんか？ 何事もすべて一番宜いよつにして下さるとお信じになれませんか？」

ジェニーは大地が崩れて了つたやうな氣がした。總ての絆が断ち切られて了つたのだ。眞暗闇の中に生きる自分には、何の光明をも見出すことが出来なくなつた。

## 五九

非人情な運命からこの最後の打撃を受けては、ジェニーは再び激しい憂鬱症に襲はれて了つた。彼女がハイド・パークでレスタと共に過した數年間の慰めと、愛の生活によつて、やつと癒すことの出来たあの憂鬱症が、再びとりついたのであつた。ヴェスタの死んだ事も、二三週間は信ずる事が出来なかつた。死後一兩日の間眺めてゐた彼女のやつれ果てた姿は、自分の娘とは、どうしても信ずることが出来なかつた。あの捷い動作、あの輝かしい健康、さうしたものは一體何うなつて了つたのであらうか？ 何も彼もが失くなつてしまつた。残されたものは眞蒼な、百合のやうな色をした亡骸——そして沈黙だけであつた。ジェニーは流す涙も涸れ果て、只剝るやうな烈しい苦痛を絶えず感じるのみであつた。不朽の智慧を持つた相談相手でもが



あつて、若し彼女に向つて明確に、納得の出来るやうに——死といふものはないのだといふ眞理を囁き聞かせてくれたならば、助かつたであらう。マフフリーやエモリー醫師やデイヴィス夫人、それに若干の隣人が心からジェニーに同情を寄せてくれた。デイヴィス夫人はレスタターに電報を打つて、ヴェスタの死を知らせたが、彼が未だ歸つてゐなかつたので、何の返事も來なかつた。家事は、ジェニーが何もする事が出来ない爲め、近所の人々が親切に世話をしてくれた。ジェニーは只ふらくと家の中を歩き廻つては、ヴェスタの持物や、又彼女が好きだつたものを——それはレスタターやジェニー自身の與へたものだ——眺めながら、今ではもう喜んで使ふ主がなくなつたのかと、溜息をついた。ジェニーは娘の遺骸をシカゴに運んで、リディーマー共同墓地に埋葬して貰ふように指圖した。其處には、ゲルハートが死んだ時、レスタターが買つて置いた一區劃があるのだつた。それから尙、コテジ・グロウヴ・アヴェニューの小さなルーテル教會——ゲルハートは其處の信者だつた——の牧師に、埋葬式の祈禱を頼んで貰ひたいと希望した。埋葬式前禮はジェニーの家で行はれた。サンドウッドの町に在るメソジスト教會の牧師が、「テサロニケ前書」の一部を朗讀し、ヴェスタの級友の一團が「主よ御許に近づく、昇る道は十字架に」の讚美歌を唱つた。花束、白い棺、多くの悔みの詞、そし

てヴェスタは運び去られるのだつた。棺は輸送する爲めに適當に包装されて汽車に載せられ、シカゴのルーテル派の共同墓地まで運ばれた。ジェニーは、夢見るものゝやうな様子だつた。茫然となつて殆ど無感覺に近かつた。近所の人五人程、デイヴィス夫人の口添で、親切にも附いて行つて呉れることになつた。愈々遺骸が墓穴の中へ降される時、ジェニーは無表情でそれを見てゐるのかと思はれる程、彼女は心勞に疲れきつてゐた。葬式が終つてサンドウッドに歸つて來ると、彼女は、もうこの土地に住みたくなないと洩らした。シカゴへ歸りたいと思つてゐたのだ。さうすれば娘や父の近くに居られると云ふものだ。

葬式を済ませたので、ジェニーは自分の將來の事を考へるやうになつた。彼女は生活の爲めに働く必要はなかつたが、何か氣を紛らす爲めの仕事をしようと思つた。それで看護婦になつてみたいやうな氣がして、それに必要な訓練を直ぐに始めて宜いと考へた。又弟のウキリアムの事を思つたりもした。彼は未だ結婚してゐない筈だから、自分の處へ來て一緒に暮して呉れるかも知れないと考へた。ところが弟の居所を知らなかつた。バスに問合せたが、彼も知らなかつた。彼女はとうとうどこかの店で働く事に決めた。彼女の性質として安逸に日を暮す事が出来なかつた。今の家に一人住むことも出来ないし、近所の人々が同情から彼女

の將來を、兎や角言つてくれるのも聞いてゐる氣になれなかつたのである。シカゴに移つて、ホテル住居でもしなから何か仕事を探るか、或はリディーマー共同墓地近くにも小さな家を借りて生活したならば、寂しい所在なさの氣持も幾分かは紛らされるかも知れないと考へられた。それから又思ひついて、孤兒を貰ひ受けて養つてもいゝと思つた。シカゴの市内には、さうした孤兒を預つてゐる孤兒院のやうなものが幾つもあった。

ヴェスタが死んでから三週間ばかりして、レスタター夫妻はシカゴへ歸つて來た。そしてジェニーよりの最初の手紙、電報、それからヴェスタの死んだことを知らせた手紙を開いてみたのであつた。彼は眞心からヴェスタの死を悲しんだ。彼のこの少女に對する愛情は、純なものがあつたのだ。ジェニーが可哀相でならない。彼は妻に言ひ置いて彼女に會ひに出かけた。彼女はどう身の振方をつける積りだらうか、獨りぼつちでは暮して行ける筈がない。或は自分が何か力になつてやれるかも知れない。レスタターが汽車でサンドウッドへ行つてみると、ジェニーは既にシカゴのトレモント・ホテルに引越してゐた。後を追つてホテルを訪ねたが、折悪く娘の墓參に出掛けて留守だつた。レスタターは今一度會ひに行くと、今度は宿にゐた。ホテルのボーイが、レスタターの名刺

を持つて來た時、ジェニーは胸が迫る思ひになつた——同じやうな感情の波の動きで、レスタターを迎へた事が以前はあつたが、今はそれよりも遙かに烈しいものがあつた。今や彼を求めること切であつたのだ。レスタターは新しい愛に幻惑され、また富、勢力、權力等が元通り自分の手に入つたにも拘らず、自分の取つた行爲を反省する餘裕はあつた。以前の自分の對する疑念や不満は、之を全く解消する事が出来なかつた。ジェニーに對して、樂に暮せるだけのことはしてやつたと思ひ乍ら、安心出來ずにゐた。ジェニーとの關係は、金で解決する問題ではないと明確に知つてゐたのだ。それなしには、無限の海に漂ふ、舵無き捨小舟にも等しい彼女であつたのだ。ジェニーは彼を必要としてゐた、それなのに、自分が彼女に與へたものは、自己保存の感情とか物質的利益に對する欲望とかに及ばなかつた。これは恥づべきことであつた。今エレベーターに運ばれてジェニーの部屋へ行く途中、取返しをつけることは出来ないと思ひつゝ、心から彼女に濟まないと感じた。憶へば、最初から自分が悪かつたのだ。先づ第一に彼女と關係をつけたこと、次には割に合はない取引として打切つて了つた事である。が、扱て、今更どうとも仕方がない。自分出來る最善の方法、心を開いて彼女の相談に乗つてやり、同情と助力とを與へることであるのだ。



「やあ、ジェニー」と彼は、部屋の扉を開けて彼を迎へて呉れたジェニーに親しく呼びかけた。一目見ただけで、死と懊惱の爲めに弱り切つた姿が認められた。肉は落ち、顔の色にも生氣がなく、眼ばかりが大きくなつてゐた。「ヴェスタは本當に可哀相なことをしたね」と彼は、稍々ぎこちなく言つた。「あんなことが起らうとは、夢にも考へてゐなかつたよ。」

實にこの一言はヴェスタの死後——レスタがジェニーを去つて以來——彼女が受けた最も意味深い慰安の言葉である。レスタが見舞ひに来てくれたといふだけでも、彼女を感動させたのであつた。その瞬間、彼女は口が利けなかつた。泉のやうに湧き出る涙は頬を傳つて流れた。

「泣いてはいけない、ジェニー。」かう言つてレスタは彼女の身體に手を廻し、その頭を自分の肩に支へた。「すまなかつた。今となつてはどうにもならないが、僕は謝らなければならぬことが澤山にあるよ。殊に今度のことは氣の毒に思つてゐる。何處へ埋葬したのだね？」

「お父さんの側に、」彼女は涙泣き乍ら答へた。

「よし、」と呟くやうにレスタは言つて、黙つたまゝ彼女を抱いてゐた。ジェニーはやうやく掻き亂れた心を取直し、レスタから離れた。それから手巾で涙を拭ひながら、彼に坐るやうにと言つた。

「僕が留守にしてゐた間に、こんなことになつて濟まなかつた、」と彼が言葉を續けた。「僕がこつちに居りさへしたら、傍にゐてあげたのに。もうサンドウッドで生活を續けることは厭だらうね？」

「え、暮せませんの、レスタ。とても辛抱出来ませんでしたの。」

「何處へ行かうと思つてゐるのだね？」

「未だそれが極められずにゐるんですの。彼處で御近所の厄介になるのが遠慮されましたわ。何處か小さな家を借りて、赤ちやんを貰つて育てるか、でなければ何か仕事をしようかと思ひました。獨りぼつちぢやゐられませんわ。」

「赤ん坊を貰つて育てるといふ考へも悪くないね、」と彼が言つた。「いゝお相手になるだらう。だが、何處から貰ふ積りなのかね？」

「孤兒院のやうな處へ行つて申し込むのぢやないこと？」

「さう簡單にも行くまい、」と彼は考へながら答へた。「手續の方法があるのだよ——詳しいことは知らないがね。或る方法で制限してゐるのだよ。ウォトソン氏と相談して便宜を計つてもらふといゝ。好きな赤ん坊を選んで、その後の手續はあの人に委せて置けばいゝよ。僕からそのことを話して置かう。」

レスタは、ジェニーが非常に寂しがつてゐるのを見てと

つたので、「弟のジョージは何處にゐるのだね？」と尋ねた。「ロチスターにゐますの、でも、來れないの。バスの話では、結婚したのですつて。」

「他に誰か身内の者で、一緒に生活するように言つてやるものはゐるのかね？」

「ウキリアムならいゝと思ひますけれど、生憎居所が分らないのです。」

「シカゴで家を持つ積りなら、ジャクソン公園の西にある新住宅地ではどうだね？」と彼が参考に意見を述べた。「彼處には手頃な家があるよ。買ふには及ばないからね。良い家だつたら氣に入る迄は借りて置けばいゝだらう。」

ジェニーは、それがレスタの言葉だといふだけで、一も二もなく賛成した。レスタが自分の身の上で、それほど心配して呉れるのは有難い。これなら全く縁が切れて了つたわけではない。少しでも氣にかけてゐて呉れるのだ。ジェニーは、レスタに奥さんはお變りありませんか、旅行は如何でしたか、ずつとシカゴに住むお積りですかなど尋ねたりした。レスタはその間、自分のジェニーに對する仕打が、不親切であつたことを思ひ出してゐた。彼は窓の方へ行つて、デイボン街を見下した。窓下の繁華な世界が彼の注意を奪つてゐた。折敷くやうな荷馬車や乗物の群、先を急ぐ歩行者の交流、すべてが謎のやうに思は

れた。夢に見る幻影も同じやうに動いてゆくのだ。黄昏の色が深くなり、其處此處に、點々として燈火が輝きはじめてた。

「ジェニー、僕は話して置きたいことがあるのだ。」レスタは放心の状態から、やつと我に返つて言つた。「あのことがあつてから以來、僕といふものが妙に思はれるかも知れない、けれども、僕は今でもあなたのことは氣にかけてゐるのだよ——少なくとも僕の流儀でね。別れてからもずつと、あなたのことを思つてゐた。別れるのが宜いと考へたのだ——それは事情がさうさせたのだ。僕はレティが好きで結婚した。或る意味では今も一番いゝことだつたと考へてゐる。だが、思つてゐたほど幸福にはなれなかつたよ。

今後の僕にしても、あなたと暮した頃より以上に幸福にはなれないだらう。それにしても、かうなつた事は何も僕が中心になつて動いたからではないのだ。今度の場合も個人の力は數へるに足りないものさ。僕が言はうとしてゐることを分つて貰へるかどうか知らないが、併しだ、人間といふものは將棋の駒も同然なのだ。我々人間は將棋の駒のやうに、周囲の境遇によつて左右され、自分ではそれを何うすることも出来ないものなのだよ。」

「分りますよ、レスタ」と彼女が答へた。「私不平は言ひませんわ。あれが一番好い方法だつたのですよ。」



「詰るところ、人生は茶番狂言なのさ、」彼は少し皮肉めいて言葉を續けた。「くだらない見世物さ。我々に出来る最善のことは、個性を傷つけないやうにすることなのだ。操守などいふことは、大して関係があるやうには思へないよ。」

ジェニーは彼の言葉を十分理解出来なかつたが、とにかく彼が現在の生活に満足してゐないこと、自分に同情を寄せてゐることだけは分つた。

「レスター、私のことを氣になさらないでね、」と彼女は慰めた。「私満足なの、やつて行きますわ。一時は何だか恐ろしいやうな氣がしてゐたけれど——孤獨にも慣れましたの。もう大丈夫。——やつて行きますわ。」

「僕のあなたに對する態度が、少しも變つてゐないといふ事を忘れないでゐて欲しい。」とレスターが熱心に續けた。「あなたのことは何によらず氣にかけてゐるのだよ。家内も——レティもそれは承知してゐる。僕の氣持を汲んでゐてくれる。出来たら、また様子を見て来て上げよう。二三日したら此方を訪ねるよ。僕の氣持は理解してくれたらどうね、どう？」

「え、分つてよ。」

彼はジェニーの片手を執つて、いたはるやうにそれをもてあそんだ。「心配することはない。僕は心配させたくないの

だ。僕は出来るだけの事はしてあげるからね。あんたさへ構はなかつたら、いつまでも僕のジェニーなのだ。僕は悪い男だ、だが天からきり迄悪いといふ譯でもないさ。」

「もう分つてますよ、レスター。私はあなたがなさりたいやうになさることを望んでゐましたの。それが一番いゝのですもの。貴方多分幸福でいらつしやるでしょ、だつて、あの——」

「ねえ、ジェニー、」と言つてレスターは遮つた。そして彼女の手を、腕を、肩をきつく締めて「昔の誰で接吻してくれない？」彼は微笑した。

ジェニーは両手をレスターの両肩に掛け、永いこと彼の眼をぢつと視詰めてから接吻した。唇が觸れ合つた時、彼女は身顫ひした。レスターも不安な氣持だつた。ジェニーは彼の心掛を見抜いたので、一生懸命で何か言はうとした。「もうお歸りになつた方がいゝでしょ、」と彼女がきつぱり言つた。「暗くなつて参りますわ。」

レスターは歸つて行つたが、彼は是非とも其處に留つてゐたかつたのだ。この女こそ、この世の中で一番大切な女であつたのだ。ジェニーにしても、別居の事實は結局嚴然たるものではあつたが、慰められる所があつた。彼女は目の前の事情が孕んでゐる道德的、倫理的な纏れを辯明したり、或は精算したりはしなかつた。彼女は世の多くの人々のや

うに、大洋の水を茶呑茶碗ちやのみさかずきに入れようとしたり、動いて止まない宇宙の姿を、法律と呼ばれる、こんがらかつた糸でからげるやうな努力はしなかつた。レスターは未だにジェニーを愛してゐた。同時にレティをも愛してゐるのだ。それで宜いではないか。嘗てジェニーは、彼が自分だけを愛してくるやうにと願つたことがある。併しその望みは叶はなかつた。では、彼の愛情は受ける値打のないものであらうか？ ジェニーはさう考へることも、さう感ずることも出来なかつた。レスターの方でも同様だつたのである。

## 六〇

事情の推移につれて、五ヶ年の間に、レスターとジェニーの関係がすつかり薄らいでしまつた。二人がトレモント・ホテルで數回會つてゐた時には、昔の關係が復活しさうに見えたが、遂にそのこともなく、何時の間にか各自の世界に納まつて了つたのである。レスターは社交界と事業の繁忙の中に身をまかせ、引込み主義のジェニーの決して渴仰しない路を辿つてゐた。彼女の生活は平穩無事であつた。サウス・サイドに在るジャクソン公園の近くに、質素な家を求めて——近所は非常に上品ではあるが、派出なところのない人達が住んでゐた——其處で幼い貰ひ子を唯一の相手とし

て、世捨人のやうな生活を送つてゐた。その栗色の髪をした幼女はウェスターン育兒園から買つて來た。此處へ引越してからはジェニーはケインといふ名前を遠慮して、ジェニー・ジイ・ストローヴァ夫人として通すことにした。レスター夫妻がシカゴ滞在中は、レイク・ショア・ドライブの立派な邸宅に住み、夜會、舞踏會、お茶の會、晚餐會を盛んに催し、時によるとそれが花火か何かのやうにぶつ續けに行はれることもあつた。

尤もレスターは、段々と靜かに楽しむ事を愛するやうになつた。彼は知己友人の名簿から、自分には單なる記憶にしか過ぎない昔の時代に、少しでもいかにしなかつた人々や、餘り狎々しくした人々や、冷淡であつた人々や、喋舌家の名前を削つてしまつた。彼は西部地方の最も重要な金融並びに事業會社——シンシナチ市街鐵道、西部製鋼會社、合同車輛會社、シカゴ第二ナショナル銀行、シンシナチ第一ナショナル銀行その他——の支配人や取締役會々長の職にあつた。合同車輛會社の事業には、直接顔を出さなかつたが、法律顧問のドワイト・エル・ワトソン氏に委任して、その事業を後援してゐたのである。兄のロバートとは既に七年といふもの會つて話したことがなかつた。同じシカゴに住んでゐながら、イモジェンとも三年も會はなかつた。ルイズやエイミー及びその夫達、また彼等の親しくしてゐる知人



の或者とは、全く没交渉になつてしまつてゐた。ナイト・キートリー・オブライエン法律事務所との關係も、全然切れてゐたのである。

實のところレスターは、聊か熱を失つてきた上に、人生に對する見方が漸然批評的になつてゐた。彼にとつて人生は不可解であつた。滄茫たる太古、一つの奇しき出來事が發生した。はじめは分裂によつて増殖してゐた微細な細胞組織が進化形態を採つて發達し、やがてそれは他の組織と結び付いて、魚類とか、獸類とか、鳥類とかいふ不思議な形を具へたものに變化し、最後に人間といふ組織體になつた。斯くて人間として、それ獨自の細胞より成り、他の人間個體との媒介および共同組織に依つて、安易なる生活を得、また異つた方向の生活を開拓して來たのである。それは何が故であるか？ 神のみぞ知る。今、レスターは特殊な頭腦と、可成な才能とを賦與され、その上、果してそれを受け得る價值があるかどうか自分でも信じ難い程の多くの富を相續してゐるのだが、これ偏に幸運と呼ばれるべきもの。併し、と云つて、自分以外にこの富を相續するに、一層相應しい價值のある人間があるとも考へられない。現に自分はそれを利用する上では、誰にも劣らないほど、保守的であり、建設的であり、實際的であるではないか。自分が貧乏人として生れて來たとしても、大して不平も言はなかつた

であらう——世間一般の人と、變つた所はなかつたであらう。何が故に不平を言ひ、くよくよと考へ、沈思黙想することがあるか？——世界は、彼の意志の如何に拘らず、自分勝手に動いて行つてゐるのだ。いかにもその通りなのだ。そして、それに就て兎や角と、心を騒がす必要が何處にあるのだ？ そんな必要はない。彼は時々、生命といふものゝ發生に意味を認められぬと考へたこともあつた。彼には詩人テニソンの言葉「そのかみの聖なるみわざ」(「イン・メモリア」も見)も何等事實上の根據があるものとは考へられない。レスター・ケイン夫人も亦、夫の考へと全く同じ意見を懷いてゐた。

ジェニーは賈子のロウズ・パーベチアと共にサウス・サイドに住んでゐたが、人生の意味といふものを明確に擲んでゐるなかつた。彼女には、レスター夫妻のやうな鋭い推理力がなかつたのである。彼女は多くのことを経験し、多くの苦痛を舐め、又讀書もするに足したが、何れも斷片的なものでしかなかつた。専門的知識の本質とか特質とかを理解することが出來ない。史學、物理學、化學、植物學、地質學、社會學等に對しても、レスターやレティの頭腦に入つてゐるやうに截然たる分野が出來てゐなかつた。さうではななくて、ジェニーにはこの世の中がなにか不思議に、氣隨氣儘に動いてゐるやうに感じられた。どうも人生のことは誰に

も明確には分らないらしい。人間は生れそして死んで行く。或人はこの世界が六千年前に創られたものと信じてゐる。

他の或者は何百萬年も大昔から存在したと信じてゐる。この世の中といふものは、盲目滅法に動いてゐるのか、それとも支配統治してゐる、神とでもいふやうな者がゐるのであらうか？ 彼女は我にもあらず、何かしら大きな力があつて一切の美しいもの——花だとか、星だとか、樹だとか、草だとかを創造したのだと考へるやうになるのである。自然は實に美しい！——ときに、人生が殘酷に見えることがあつても、なほこの美は依然として存續してゐる。かう考へて彼女は心を慰めた。彼女は獨り胸に秘めてゐる寂しさをかうして凌いだのであつた。

ジェニーは生來働くことの好きな女だと前に述べた。彼女は働きのながらも考へ事をしてゐたのだが、いつでも手をあけてゐるのが嫌ひだつた。今はもう彼女も年配の主婦らしくなつて——身體も醜い程大きいといふのではなく恰好よく肥つて、顔は苦勞をしてゐるにも拘らず、皺も見えなかつた。眼は灰色で、訴へるかのやうな光があつた。房々とした褐色の髪には、幾分白い毛が雜つてゐた。近所の人達は彼女のことを親切でやさしい、愛想のよい人だと噂し合つてゐたが、彼女の今迄の經歷に就ては、サンドウッドに住つてゐたといふことゝ、その前にはクリイヴランドにゐたとい

と、こ以外、何事も知られてゐなかつた。自分の過去に就ては、口をつぐむやうにしてゐたからである。

彼女は病人の世話を好む性質から、自分が立派な看護婦になれるかも知れないと考へてゐた。ところが年の若い女でないと採用して呉れないのを知つて、この理想を放棄する外はなかつた。その他、彼女は慈善團體で働かして貰へまいかと考へてゐたが、彼女には當時一般に受入れられ、實行の機運に向つてゐた慈善の新法則——自らを助ける爲にのみ他人を助けると云ふ考へ方を理解する事が出來なかつた。物を施す時は、相手の人を信じて施せば宜いと思つてゐたのだ。そして扶助を求めて來る者の、身元調書をほじくるやうにして見る癖はなかつた。それがため、ジェニーが地方の職業紹介所へ恐る／＼申し込むと、よしんば突慥に言はれない迄も冷淡な取扱を受けたのである。で終に彼女はロウズ・パーベチアの遊相手に、今一人子供を貰ふ事を決心し、ヘンリーといふ名で呼ばれてゐる、満四歳になつた男の兒を引請けることにした——これがヘンリー・ストローヴァである。生活費は信託會社を通じて支拂はれてゐたので、生計の保證は立つ。投機に手を出したり、當てにならぬ商賣を目論む氣持はなかつた。草花を世話したり、子供を養育したり、家事を整理することの方が、大切な仕事になつてゐたのであつた。



ジュニーの別居にからんで興味ある事情が一つ現はれた、と云ふのは、ロバートとレスターの間柄に關する事であつた。この二人の兄弟は、數年前父の遺言が發表されて以來一度も會つたことがなかつた。ロバートは弟のことがいつも念頭にあつた。殊に彼がジュニーと別れてから後といふもの、弟の成功振に關心を持つてゐた。ジュラルド夫人との結婚も新聞紙上で見て喜んだ。何時もロバートはこの女性こそレスターの理想的な配偶者だと考へてゐたのである。彼は父親がレスターに不利益な遺言を定め、又自分がケイン商會の支配權を握らうとして策動したことがあつてから、いろ／＼な證據から、弟が自分を忌避してゐることを知つてゐた。それにも拘らずこの二人の兄弟は理智的には——商賣上の判斷力では、決してそれ程縁が遠くなつてゐるわけではなかつた。今ではレスターも得意の境地にゐる。腹の太いところを見せてやつても宜い、和解と出ても宜い。何にせよ、ロバートとしては弟の爲めを思つて——厚意づくで世話をしやつた積りだ。若し二人が友誼關係を保つてゐるとしたら、金融上でも利益を共に出来る筈だ、ロバートは弟の方に折れて出る氣持はないものかと時々考へた。その内に月日は過ぎて行つたが、或時ロバートはシカゴに出て友人達とドライブをした際、馬車をわざとノース・シヨアに向けさせた。弟夫妻の立派な屋敷を見る目的だつ

た。その位置は噂に聞いたり、何かに書いてあつたのを讀んで承知してゐた。彼がその屋敷を見ると、自分の育つた懐しいケイン家の雲圍氣が思ひ出された。レスターは、この屋敷を買ひ取つて模様替をする時、本館の側に、シンシナチの本家に在ると大して違はない温室の建て増しをしたのであつた。ロバートはその晩、落着いた氣持で、レスターに一筆走らせ、ユニオン・クラブで食事を共にしては呉れまいかと書いた。自分はシカゴには一兩日しか逗留しないので、是非會ひたいと思つてゐる。感情の蟠りがあることは、承知してゐるが、一つ相談したいことがある。木曜日にも來て貰へるであらうか？

この手紙を受取つたレスターは眉を蹙めて、茫然と考へ始めた。彼は父から受けた痛手を未だ忘れずにゐる。そしてロバートが如何にも無愛想に彼をあしらつてからは、心中常に安らかならぬものがあつた。今となつてみると、ロバートが賭してかゝつたものゝ影響は大きかつた事が分る。而もロバートは、自分の肉親ではないか。若し自分があの時ロバートの立場にゐたとしても、自分は彼がしたやうな仕打はしなかつたらう。少く共そんなことは考へたくない。だが今、兄は會ひたいと言つて來てゐる。レスターは初め返事を出すまいと思つた。それから斷り

の返事を書かうと思ひ直した。然し彼は兄の顔を見て、どんな挨拶をするか、どんな提案を持つて來たのか聞いてやれといふ奇妙な欲求が湧いて來たので、とう／＼承諾の旨を答へる決心をした。さうしたつて差支はない筈である。と言つて、會つたところで何の役に立つわけでもない。過ぎ去つたことは過ぎ去つたこととするのに二人とも異存はないだらう。然し損傷は事實だ。壊れた碗をついで、それを無疵だと言つて通せるだらうか？ よしんば無疵だと言ふことに諒解したとして、それが何になる？ やはり壊れて繕つたものであることは否定できなからう。レスターはペンを取つて、參上致すべし、と書き送つた。

木曜日になるとロバートが自分の旅舎から約束の日である事を電話で知らせ寄越した。レスターは兄の聲を物珍らしさうに聞いた。「承知しました。お目にかゝりませう、」といふ返事を傳へた。正午にレスターは下町へ出掛け、ユニオン・クラブの靜かな別室で兄と顔を合せた。ロバートはこの前レスターが見た時よりは瘦せて、白髪も殖えてゐた。眼光は冷たく鋭かつたが、眼尻には皺が出来てゐた。動作は敏捷で、きび／＼して、力が籠つてゐた。レスターは一瞥見たゞけで兄とは異つてゐることが分る。どつしりして、無造作で、冷淡な態度である。レスターは近頃少し取つきにくくなつたと噂されてゐた。ロバートの鋭い碧い眼に會

つても壓迫を感じるやうな事もなく、極めて平然としてゐた。彼は動ずる所なく兄を眺めた。レスターの方が高處に立つて總てを觀察し、判斷を下してゐたからである。これに反して、ロバートは、レスターの本心を突きとめる事が出来なかつた。この數年間にレスターにどういふことが起つたかを見抜くことが出来なかつた。レスターは前よりも健康で、白髪が無いばかりでなく、元氣に溢れて、良い血色をしてゐた。そして現狀に満足して生活してゐるやうであつた。レスターは鋭く、落着いて兄を視た。ロバートの方は不安な氣持で、視線をそらさずにゐられなかつた。弟には、昔から具つてゐた精神力と勇氣が、聊も衰へてゐないのだつた。

「會ひたいものだと思つてゐたよ。」形式的に握手を交はした後、ロバートが口を切つた。「もう随分になるね——八年近く、さうぢやないかな？」

「その位になりますね。所でお變りありませんか？」

「うん、相變らずだよ。お前はずつと元氣らしいね。」

「病氣に罹つたことがありませんからね。」とレスターが言つた。「一寸した風邪を引くことがあるくらゐです。寢込むやうなことは殆んどありませんでしたよ。義姉さんはお元氣ですか？」

「うん、マーガレットは元氣だかね。」



「子供達は？」  
「ラルフとベレニスも結婚してからは滅多に會ふことがない、他の子供達は皆大概傍にゐる。レティは元氣なだらうね」とロバートが、稍氣兼ねて言つた。彼の口からは言ひ出し難い問題であつたのだ。

レスターは表情も變へずにロバートを見た。  
「え、妻もかなり健康體です。この頃は非常に元氣であります。」

暫くの間二人は思ひ出す儘に話をしてゐた。レスターは事業のことや、エイミーやルイズのこと、イモジェンのことなどを次々と尋ねた。そして近頃は彼等と不沙汰をしてゐると卒直に述べた。ロバートは、知つてゐることは詳しく話して聞かせた。

「ところで相談といふのはだね」とロバートがとう／＼口を開いた。「例の西部製鋼會社のことなのだ。君は自分で顔を出さないでウォトソン君に委せきりのやうだね。あれは精巧な人物だよ。だが社長がどうも物足りない——誰でもが知つてゐるのだ。收支償つて行かせるには、もつと實際的な専門知識のある者が必要だね。僕はウォトソン君の尤もな提案に賛成してゐるのだが、今の會社の状態に就いてはウォトソン君も何とか轉換の必要を認めて、僕の意見に同意して呉れてゐるのだ。所が都合のよいことにロシター氏の未

亡人が持つてゐる七十株を手に入れる機會が今あるのだ。それを此方のものにすれば、君と僕の現在の持株と合せて、會社を自由に操縦出来るのだ。僕はそれを君が買取つて呉れると宜いがと考へてゐる。尤も兄弟の中の誰が持つてゐようと、こつちの手に收めて置けば同じだが。さうすれば君の意中の人物を社長に据ゑることが出来て、改善の實も擧げられるだらう。」

レスターは微笑んだ。これは耳寄りな提案である。ウォトソンから、前にロバートと共同戦線を張つてゐる由を聞かされてゐた。で彼はロバートが仲直りに埋合せをつける腹であるのではないかと想像してゐたのだ。これが平和の標章なのだ——百五十萬弗に近い財産を有する會社の支配權が。

「結構ですね、有難く思ひますよ」とレスターが眞面目な顔をして言つた。「寛大なところを見せて下さつた譯ですね。ところで、さしむき兄さんの御意向はどういふのですか？」

「さうだね、ぶちまけて正直なところ」とロバートが答へた。「僕は例の遺言書の問題が、氣掛りでならなかつたのだよ。秘書兼會計係其他のいきさつに對しても、良い氣持ではゐないのだ。過去の事を掘かへしたくはないのだ——お前は笑つてゐるね——然し僕は自分の氣持を話さないでは

られない。僕も昔は可成り野心家だつた。お父さんが亡くなられた當時、合同車輛會社の計畫を進めるのに躍起になつてゐた。そして君がその計畫に反對ではないかと氣になつて仕方がなかつたのだ。その後になつて、それが無用の心配と分つたが、とにかくあんなことになつてしまつた。昔の出来ごとを、これ以上君も聞きたくはないだらう。けれども、今度のことは——」

「何か、埋合せの意味でもあるのですかしら」とレスターが靜かに口を挿んだ。

「そんな意味合ではない、それも少しは含まれてゐると言つても宜いが。こんなものは今の君には不必要であるに相違ない。僕から何かすべきは今日ではなく、幾年か前であつたのだ。でも、或は君が僕のこの提案に耳を傾けて呉れることゝ心から思つたのだよ。この事から曳いて他のことにも及ぶかも知れない。率直に言つて、このことが僕とお前との間にある蟻りを去つて呉れるかも知れないと考へてゐたのだ。何と言つても二人は兄弟なのだからね。」

「さう、僕達は兄弟です。」

レスターはかう言ひながら、事の皮肉さを思つてゐた。ロバートの言ふ兄弟といふ氣持が過去に於てどれだけ口を利いたであらうか？ 自分を現在の状態に無理に陥れてしまひ、ジェニーが只一人貧乏籤を引いて苦しんでゐるやうな

事情にしたのが、事實に於てロバートである以上、レスターは怒りを感じずにはゐられない。成程兄は、こつちのものになる父の遺産の四分の一を奪ひ取るやうなことはしなかつた。だが確かに、彼はその財産がこつちの手に入るようには骨折つて呉れなかつたのだ。それでゐて、今、この提案に依つて二人の間を取結ばうとしてゐる。それが彼——レスターの氣持を聊か傷けた。苛立たしく思はせた。人生といふものは、實に不可思議なものである。

「僕は理解し兼ねるのですが、兄さん」とレスターが決然として言つた。「かう云つた御相談をかけて戴くのは、有難く思ひます。併し僕はそれを受諾して良いか悪いか判断がつきません。貴方が旨い機會を掴んでゐらつしやるのなら、それはどこまでも貴方の機會です。僕はそんなものが欲しいとは考へません。問題の株は貴方が引受けて下さればそれでお話の首のすげ替へも出来ませう。僕は欲しいだけの富を今は持つてゐるのです。過去のことは過去のこととして、これからは時々會つて話させよう。兄さんが望んでゐられるのはそのことではないのですか。今の問題は古瘡に膏藥を貼るやうなものです。友人らしい交際なら、僕は喜んでするつもりでゐるのです。僕はもう少しも含む所はありませんよ。そんなことはありませんよ。」

ロバートは弟をちつと視据ゑて、半ば微笑んでゐた。彼



は今迄にレストアーから受けた仕打——また今レストアーが自分に向つてしてゐる仕打——には頓着なく、弟を偉い男だと思つた。

「君の言ふ通りに相違ない、レストアー」とロボートがとうとう折れて出た。だが僕はけちな根性から今の提案をしたのではないのだ。二人の間のそぐはない感情を融和させたばかりに言ひ出したのだ。ではこの事はもうこれ以上言ふまい。近い内にシンシナチに来ることはないかね？」

「今のところではありません」とレストアーが答へた。「若し来るのだつたら、僕の家で泊つて呉れ給へ。レティも連れて来たらいいだらう。色々と思ひ出話でもしようぢやないか。」

レストアーは皮肉なやうな笑を洩らした。

「有難う。」レストアーは感情も動かさずに言つた。だがジェニーと同棲當時とは變つてゐると思つた。この連中はことジェニーに關する限り片意地な態度で突張つてゐた。「が、まあ、あの徒輩を非難することも出来ない。見通して置けば宜い、」と彼は思つた。

二人は話題を變へて話しあつた。やがてレストアーは約束が他にもあつたことを思ひ出した。懐中時計を見ながら、「僕は直ぐ失敬しなければならぬのですが、」と言つた。「僕もかうしてはゐられないのだ、」とロボートが言つた。

二人は立ち上つた。

「では兎に角、」と兄が、弟と並んで外套預室の方へ歩いて行きながら、言葉を續けた。「將來は知らん顔はしないことだね、どうだい？」

「さうですとも、」とレストアーが應じた。「時々會ひに出かけますよ。」二人は握手して親しさに別れた。ロボートは弟がさつさと行つてしまふのを見送つて、その心に義務を果し得なかつた不満と一種の後悔の念を覺えた。レストアーは腕のある男だ。だが何故に二人の間にはあんなに多くの感情のもつれがあるのか——それはジェニーが現はれる以前から既にあつたのだ。ロボートは「蛇のやうに陰險な行爲」を思ひ出した。レストアーにはそれがなかつた。その點が自分と異つてゐるだけなのだ。弟は狡猾でなかつた、従つて蔭へ廻つて無慈悲なことをしたことがないのだ。「何といふ世の中だ、」と彼は考へた。

レストアーは兄に對して軽い反抗の氣持で別れたが、同時に同情もしてゐた。兄は特別に醜い人間といふ譯でもないし——世間の人とそんなに違つてはゐない。それなのに自分は何故烈しく批評するのだ？ 若し自分がロボートの立場に在つたとしたならば、どう云ふ行動に出ただらうか？ 兄は生きるためにやつたのだ。自分だつて同じことではなにか。今となつてレストアーにも、何故あんなことになつた

か——何故自分が犠牲になり、兄があつた莫大な財産の保管者となつたか？ 理解された。「それが世間の有様なのだ、」と彼は思つた。「何れにしたところで同じではないか？ 自分は十分に生活が保證されてゐる。なるやうにさせて置けば宜いではないか。」

## 六一

人間の壽命は、古から天の酬と考へられてゐる所、といふよりも聖書に記されて、今日なほ信じられてゐる所に従へば、七十歳といふことになつてゐる。この信念が語りつき語り傳へられて人類の意識に浸みこんでゐるため、最大の眞理のやうに考へられてゐる。事實、人間は結局死を免れないといふ考へがあるにせよ、その體質上から見て、成熟期に達する迄の年限の、五倍は生存し得る譯であつて、よし滅びないものは靈魂であり、時間は一の幻影であり、死と云ふやうなものはないとしても、結構それ位の期間は生存するに違ひないのである。ところが、どんな空想的な唯物論に基いたものであるのか分らぬけれども、上に述べた人類共通の思想が根を張つてゐて、日々死んで行く人間を見れば、この祖先から受継いだ數學的信念が、事實であることが知られるのである。

レストアーもこの信條を奉じてゐた一人だつた。彼は最早六十の聲をきいてゐた。そして高々二十年の餘命だと思つた——多分それ程は生きられまいと思つてゐた。何れにせよ氣樂に世の中を渡つて来たのだ、不平の言へる筈もなかつた。最後の日が来るものならば、それで宜い。覺悟は出来てゐた。彼の口から不平がましいことは洩れないであらう。何處から眺めてみても、人生は氣の利いた見世物ではないのだ。

彼は人生が殆ど幻影同然だと考へた——容易にそれは證明の出来ることだつた。實際に人生は大きな幻かもしれない、とも時々思つた。人生は夢のやうなもの——悪夢のやうなものであつた。彼がその日々を現實に送る所以のもの、あれやこれやの物質的問題で、——例へば周囲の人人、重役會議、種々の計畫を持ちかける個人若しくは團體、妻の社交界と云つたやうなものであつた。レティは彼を一老哲學者として愛してゐた。彼女もジェニーと同様に、苦境に面しても平然自若としてゐる彼の態度を尊敬してゐた。幸運に恵まれようと、逆運に弄ばれようと、レストアーは少しも取亂すことがなかつた。彼は外部からの脅威を突つばねた。どんな事があつても、自分の信念や感情を曲げようとはしなかつた。そして時々強制的にその信念や感情を棄てねばならないことがあつても、依然として信じる所は把



持してゐた。彼は日頃から言つてゐるやうに、事實を直視して勇敢に戦ふ以外のことは拒絶した。そして挑戦された時には直にも之に應じたけれども、頑強に守勢の立場を守つた。自分に双方向つて来る者に對しては、何處までも對抗するのが彼のやり方であつた。已むを得ず相手の意に屈するやうな場合にも、自分が懐いてゐた信念の價値は飽く迄之を棄てようとはしなかつた。

生活に對する彼の意見は飽くまで物質的で、口腹の快樂にその基礎を置いてゐた。そして何でも一番上等なものを求めてやまなかつた。家具類にしても、少しでもよければと、取外して賣拂ひ、家の中をすつかり新しくさせた。旅行をするにしても、豫め金にあかして準備を整へさせた。彼は又人と論争したり、無意味な話をしたり、彼の所謂無駄話をするのを好まなかつた。彼の相手になる者は何か面白い話題を持出すか、でなければ全然何も口を利かすにしなければならなかつた。レティは、かうした彼の氣持をすつかり吞込んでゐた。彼女は朝起きた時など、レストターの頭の下をくすぐつたり、兩手で彼の頭を揺ぶつたりして、貴方は野蠻人だけ好きな野蠻人だ、などと言つた。すると彼は「さうとも、さうとも」と唸るのであつた。「どうせ僕は獸だらうよ。お前は肉體を超越した天の使だからね。」「ようございませうね、まあ」と彼女は答へるのだつた。時

時彼はいぢめる積りもなく、鋭く切り込むことがあつた。彼はそんなことをして置いてから、レティの頭を撫で、やつたりもした。彼女は元氣一杯に世を渡つてはゐるけれども、彼を頼りにしてゐるのが分つてゐるからであつた。日頃からレティは、自分がゐなくとも、彼は平氣でゐられるのだと知つてゐた。けれども彼は親切氣から、そんなことは嘸氣にも出さず、レティがゐなければ夜も目も明けないやうな振りをしてゐた。その實、彼女がゐなくともやつて行けることは明かであつた。レティの方では、彼を頼りに思つてゐた。こんな落着かない不安定な世界で、レストターのやうながつちりとした、熊のやうな男の側にゐるのは心強いことである。丁度それは暗夜を照らすラムプの温い灯影の傍に坐し、或は多の日あかしくと燃える焚火の前にある感じであつた。レストターには何一つ恐れるものがなかつた。彼にとつては生も死も覺悟の前であつたのだ。

かうした性質の人の常として、何に關してもそつのない用意が見られた。彼は財政の方に心配がなくなり、大會社の株を澤山に持つてゐるので、重役會議は、唯腕利きの實際家の遣り口を承認してゐればよかつただけだから、自分は好きな眞似をして、その日を暮してゐることが出来た。彼とレティはアメリカや歐羅巴諸國の保養地を歩き廻つた。彼は賭勝負も少しばかりやつた。廻轉機の廻り具合、珠の

轉り具合で運命の數奇を知るために、若干の金錢を賭けるのは好い氣晴しになつたのである。それから彼は又酒を段段に嗜むやうになつて來た。と云つても、所謂酒呑みのだらしなさはなくて、贅澤な社交人として仲間づきあひの爲めであつた。彼は生のウキスキイを飲まない時には、シャンパンや、泡立つバーガンディや、高價な、沸き立つやうな白葡萄酒といったやうな芳烈な飲物を好んだ。いつも飲むと云へば相當の量がいけた。そして食べる方もそれに應じてゐた。スープ、魚、副皿、燻肉、鳥肉、デザート——何品に限らず最上等のものを要求した。そして高給の料理人でなければ間に合はないと決めてかゝつてゐた。彼は或る大きな呉服商の家に勤めてゐた。ルイ・ベルドオと云ふ一流の料理人を見附けて雇ひ入れた。週給百弗であつたが、それに就いて人から訊かれると、自分は二度と生れて來られないのだと極つて答へた。

こんな態度で暮してゐては、何一つ極りのつくことはなく、又改善されることもなく、何時迄も、成行に任せて置くばかりだつた。若し彼がジェニーと結婚して、一年一萬弗と云ふ比較的少ない収入でやつて行つても、矢張り終生、今と同じ生活態度であつたらう。今でこそ彼は社交界になくてはならない一員ではあつたが、ジェニーと結婚してゐたならばそんなものには見向きもしなかつたに相違ない。そ

してありのまゝの彼を好い仲間と呼んで相手にしてくれる少數の氣易い友達と、のらくらと日を送つた事であらう。だが一方ジェニーにしてみれば、現在のやうな氣樂な境涯にあるわけにはいかなかつたのである。興味ある變化と言へば、ケイン夫妻がニュー・ヨークへその居を移したことであつた。ケイン夫人は東の都の最上流家庭——四百家、或は九百家と呼ばれる家柄の、賢い婦人達と非常に馴染が出来、ニュー・ヨークへ移つて來るやうにと勧められた。それで遂に彼女は七十八番街のマデイスン・アヴェニュー近くに邸宅を構へて、數奇を凝した、英國風に仕着せをつけた召使を抱へ、邸内の部屋々々を異つた時代の好尚に因んで飾つた。レストターは彼女の晴れがましい見榮を羨爾として眺めた。「これで自分のことを、ディモクラティックだなんて言ふのだからね、」と或日彼が批評めいて言つた。「お前のデモクラシイと僕の信心は同じやうなものだ。つまり實がないのだね。」

「まあ、何を仰言るんです！」と彼女が否定した。「私民主的ですか。私達は皆何れかの階級に屬してゐるのぢやありませんか？ あなただつてさうですか。私は現在の立場に従つてやつてゐるに過ぎませんわ。」

「お前のお祖母さんのだらうよ！ この家に赤いピロイドの服を着た、給仕兼案内役の男が必要だと言ふのかい？」



「無論申しますわ。そりや是非必要ぢやないかも知れませんけれども、事情は確かにそれを求めてゐるのであります。一體何故そんな言ひ掛りをなさるの？ 御自分こそ何事も完璧を要求してゐらつしやるのよ——一寸でも目こぼしがあるとすぐ言ひ掛りをなさる。」

「僕は言ひ掛りをしたことはないよ。」

「まあ、言葉通りに取つて下すつてはいけませんけど。だつて貴方は何でも完全々と仰言る——それは時と場合に應じてのことぢやございませんの？」

「そりやさうかも知れん。でも、それとお前のデモクラシ」と何ういふ關係があるのだい？」

「どこまでも私は民主的ですよ。私の精神はこの女の方向でも同じやうに民主的ですよ。只私は何でも事實を見分けて、不愉快なことの無いやうに出来るだけ調子を合して行くだけですよ。その點貴方だつて同じでゐらつしやる。何卒私の硝子の家に石を投げこまないで下さいまし。貴方のお邸宅の中のことだつて、私にはよく透き通つて見えてゐますわ。」

「いや、僕は民主的だがお前は違ふ、と彼が擲言つた。けれども彼女の爲ることは一々尤もだと思つてゐた。そして自分の畑の始末をすることに就ては、彼女の方が自分よりも上手だと思ふこともあつた。」

こんな風にして美酒、美食に飽満し、彼處此處の湯治場に浴し、贅澤三昧な旅行をして肉體の運動を無視した爲、從來は元氣に満ち、敏活に働いて、好く均齊のとれてゐた彼の體格も、遂に營養過多となつて、身體の機能に故障を生じたのである。肝臟、腎臟、脾臟、膀胱——一切の機官が酷使された餘り、消化排泄の作用が一時は困難となつた。そして過去七年の間に、彼は自分で持扱ひにくい程肥満して了つた。彼の腎臟は衰弱し、従つて腦の動脈血管も弱つて來た。食攝生や適度の運動、また正しい精神の持ち方を以てすれば、彼は八十歳、九十歳までも壽命があつたかもしれぬ。所が身體を衰弱させるまゝにしてゐたので、極めて軽い病に冒されても、危険な程になつて了つた。因果は觀面で、遂にその酬いがやつて來た。

たま／＼彼はレティヤ友人達と一緒に、ノース・ケイブ（ノヴァスコチアの北端）へ船の旅を試みた。レスタターは或る重大な用件があつて、十一月の末にシカゴへ歸ることになり、彼の妻にはクリスマススの休暇前に、ニュー・ヨークで都合ふ手筈にして置いた。一方、ウォトソンに通知を出して、オーディトリウムに部屋を豫約した。と云ふのは、二年ほど前にシカゴの邸宅を賣拂つて、今ではニュー・ヨークを永住の地と定めてゐたからだ。十一月の末近くなつた或日、細々した事務を整理し、肝

腎な用談も済ませて了ふと、レスタターは病氣に襲はれた。彼の脈を取つた醫者の言ふ所に依ると、内臓の冷えこみで、普通それは血管或はその他の器官の衰弱から誘發されるものとされてゐた。彼は非常に苦痛を訴へたので、一般に用ゐられる鎮痛療法が施された。赤のフランネルに芥子を塗つて巻いたり、色々な特効薬が用ゐられた。で、痛みは幾分軽減したけれども、何か取返しのかかぬことになりさうな氣がしてならなかつた。彼はウォトソン氏に頼んで、妻に宛てて電報を打つて貰つた——危急の事無けれど病臥中、と。熟練した看護婦が附き切つてゐて、従者が一人、彼の安靜を妨げる者のないやうに、病室の入口で番をした。レティヤがシカゴへ来るまでには、三週間はかゝることが分つてゐた。レスタター自身はもう彼女に二度と會はれないのではないかと云ふ豫感があつた。

不思議にも彼は、自分がシカゴにゐると云ふだけの理由からではなく、精神的にジェニーから少しも離れてゐなかつた爲めに、この頃では絶えず彼女の事が考へられた。彼は用件が済み次第、シカゴを去る前に、ジェニーを訪ねようと思つてゐた。彼はウォトソンからジェニーの近狀を聞いて、彼女が無事に暮してゐるのを知つてゐたのである。彼女は靜かな日を送つて、健康さうに見えるとのことであつた。レスタターは、是非ともジェニーに會ひたいと思つた。

この希望は日増しに募つて行つたけれども、彼の病氣は一向はか／＼しくなかつた。彼は時々掻き捲るやうな激痛に襲はれ、臟腑を絞られるやうな思ひをすることがあつて、その爲め非常に衰弱した。醫者は止痛の手當として數回もコカイン注射を施した。或日、かうした激痛の後、彼はウォトソンを傍に呼び、看護婦を遠ざけて言つた。「ウォトソン君、僕は君にお願ひがあるのだ。ストローヴァ夫人に會ひに來てくれまいかと話して貰ひたいのだが。一緒に連れて來てくれると都合だ。それで午後の間か、それともストローヴァ夫人が來てゐる間だけでも、看護婦と従者のコーゾーを遠ざけて置いて貰ひたい。今後彼女が何時來ても、部屋へ通すやうに計らつて欲しいのだ。」

ウォトソンは事情を呑みこんだ。彼はレスタターのこの人間味のある言葉に好意を持つた。彼はジェニーを可哀相だと思つた。レスタターも氣の毒だつた。そして、これ程まで知名の男にこのロマンスがあると世間が知つたならば、どんな風に解釋するだらうかと思つた。レスタターは紳士らしい人物であつた。そしてウォトソンの爲めに榮達の道を計つて呉れたのである。彼はこの人物の爲めになら、どんなことも辭さない考へだつた。彼は馬車を呼んで、ジェニーの住居へ出かけて行つた。丁



度、彼女は植木に水をやつてゐるところであつたが、珍しい訪問客を迎へて、驚きの表情を浮べた。

「ストーリーヴァさん、今日は、少し御面倒なお願ひで上つたのですが」と、ウォトソンはジェニーの假の姓を呼んで言つた。「あなたの——あのケイン様がオーデトリウムで重病で寝てゐらつしやるのです。奥さんは今ヨーロッパの方に旅行中です。それでケイン様は私にこちらへお伺ひして、来て載けるかどうかお願ひして見てください、こんなに仰言るのです。若し出来れば一緒に連れ申してくるようにとのことですが、御都合は如何でございませうか？」

「それはもう參上致します」と言つたジェニーの顔には、何とも形容の出来ないものがあつた。丁度子供達は學校に行つてゐる留守、臺所には瑞典人の老家政婦があつた。ジェニーは行けるとも、行けないとも考へられた。だが四五日前の晩に見た夢のことがはつきりと記憶に浮んで來た。その夢と云ふのは、何でも彼女が眞暗な、神祕めいた水上に浮んでゐると、霧か煙のやうなものが一面に棚曳いてゐるのだつた。水のさら／＼と云ふ音を聞いたかと思ふと、闇の中から一隻のボートが現れて來た。それは、小さいボートで、機がないらしく、何によつて進んでゐるのか見えないが、その中には彼女の母とヴェスタと、それから今一人誰とも分らない人が同船してゐた。母の顔色は蒼白く、悲しさ

うで、生前よく見かけた顔にそっくりであつた。母はジェニーの方を嚴肅な、同情ある面持で視詰めた。すると急にジェニーはボートの中にある三人目の人をレスタターだと氣附いた。レスタターはジェニーを、陰鬱さうな顔付で眺めたが——そんな顔付は今までに彼女が見たことがなかつた——そのうちに母が「さあ、もう行かなければならない」と言つた。ボートは動き出した。ジェニーは惜別の感に打たれて叫んだ。「ねえお母さん、どうか私も一緒に連れて行つて！」けれども母が、悲しみに沈んだ靜かに深い眼眸をじつと彼女の方に向けたまゝ、ボートは去つて了つた。

彼女は驚いて目を覺した。そして自分の傍にレスタターがゐるのではないかしらと空想した。レスタターの腕に觸らうとして自分の手を差し伸べた。それから暗闇の中で居すまひを直して目をさすつて見ると、自分一人だつた。それですつかり氣落ちがして二日間といふものは、そのことが頭から離れなかつた。そして今、殆どそれを忘れかけた矢先に、ウォトソンがこの不吉な通知を齎したのである。ジェニーは着物を着替へて出て來たが、心の中の不安は、面にも現れてゐた。彼女の容姿は今でも美しく、優しい、良家の婦人であつた。レスタターが彼女から全く離れ去つてはゐなかつたやうに、彼女も精神的には、決してレスタターから引裂かれてはゐなかつた。昔二人が共に生活してゐた時と同じく、

彼女の心中には、常にレスタターが宿つてゐた。中でもクリ

イヴランドで、レスタターが初めて彼女を力づくで説いた時の有様——その時の彼は、丁度野蠻人が掠奪結婚をするやうな勢だつた——それが、何時も繰返し思ひ出されるのだつた。今彼女は自分の力の及ぶ限り、何でも彼の爲めにしやうとした。かうした迎へをうけて、非常な衝動を受けたが、それは一つの實證でもあつたからである。レスタターは彼女を愛してゐたのだ——結局レスタターは、彼女を愛してゐた。

馬車は長い通りを元氣よく走つて、煙の立ち籠めてゐる下町へ向つて行つた。オーデトリウムに到着すると、ジェニーはレスタターの部屋へ案内された。ウォトソンは彼女の胸中を察して餘り口を利かず、彼女の思索の邪魔をしなかつた。愈々この大きなホテルへ來てみると、今まで長い間隠退生活をしてゐたので彼女は氣遅れがした。部屋に入りながら、レスタターの灰色の、大きな理解に富んだ目に視線を注いだ。彼は二つの枕を支へにして横たはつてゐた。嘗ては暗褐色であつた彼の頭髮は、幾分白髪になつてゐた。彼は物珍しげにジェニーを眺めたが、その賢さうな目には、疲勞の色こそあれ、同情と愛情の光が輝いてゐた。ジェニーは情ない氣持になつた。痛みの爲めに稍澁面を作つてゐる彼の蒼白な顔を見ては、ジェニーはぎくつとした。彼女は掛

蒲團の外に出てゐる彼の片手を握つた。そして屈みかゝつて彼の唇に接吻した。

「ほんとにいけませんでしたのね、レスタター」と彼女が口籠つた。「いけないことでしたわ。でも、そんなにお悪くはないのでしょ？ 屹度好くなりますわ、——もう直ぐにね！」彼女が優しく彼の手を撫でた。

「あゝ、ジェニー、でも随分悪いんだよ。どうも今度はいけないやうだ。何だかさつぱりするやうに思へないのだ。だが、その後あなたの方はどうだつた？」

「相變らずですの」と彼女が答へた。「私は何時も達者で居りますわ。だつて、貴方、そんな氣の弱いことを仰言つてはいけません。もうすぐお元氣になれますわ。」

彼は寂しく微笑んだ。「そんなに思ふかね？」彼は頭を振つて見せた。自分では、もう癒るとは思はなかつたのである。「まあ、掛けるがいゝ」と彼が言葉を續けた。「僕は病氣の心配なんぞしてやしないのだ。あなたと又話したくなつたのさ。僕は側にゐて貰ひたいのだ。」彼は溜息をついて、暫くの間目を閉じた。ジェニーは椅子を寢臺の傍に引寄せ、彼の方へ顔を向けて、手を取つた。レスタターが自分を迎へに寄越してくれたとは涙の出る程嬉しかつた。彼女の目には同情と愛と感謝の念が相混じて輝いてゐた。けれども同時に心配の念にも驅られた。何と良くない顔色なの



だらう！

「どんなことになるか分らないよ、」と彼が言葉を續けた。「レティは今ヨーロッパにゐる。僕は前からあなたに會ひたいと思つてゐた。僕はこつちへ来る用事があつたのでね。僕達は今ニュー・ヨークに住んでゐる。ジェニー、あなたは以前よりも少し肥つたやうだね。」

「さうですの、レスター、年のせゐですわ、」と彼女が微笑んだ。

「いや、そんなことはちつとも構はないさ、」と、彼は應じてジェニーの顔をつく／＼と眺めた。

「年なんぞ問題にすることは無い。僕達は皆同じ船の仲間さ。たゞ世の中を何う感じてゐるかゞ問題だよ。」彼は言葉を切つて天井を見詰めた。一寸痛みが差込んで来たので、前に経験した激痛を思ひ出したのであつた。この前の時のやうな發作が度々來ては、我慢が出来ないと思つた。

「ジェニー、僕はあなたに是非會つて置きたかつたのだ、」と彼は軽い痛みが去つて、又自由に考へられるやうになつたので、言葉を續けた。「二人があんな別れ方をしたのを僕は残念に思つてゐるのだ、このことは是非會つて話して置きたいと日頃から考へてゐた。あれは誤つてゐたのだ。僕はちつとも幸福にはなれなかつた。僕は残念だ。あんなことをしなければよかつたと、僕自身の心の平和の爲めに、

つく／＼後悔してゐる。」

「それはもう仰言らないで、」と彼女は二人の間に起つた昔からの經緯を思ひ浮べながら、遮つて言つた。これこそ彼等二人の眞の結合——眞の精神の融合に對する歴とした證據である。「宜しいではございませぬの。どつちにしても同じですわ。あなたは何時も私に良くして下さいました。私、あなたが財産をおなくしになるのを好い氣持ではあらせせんわ。そんなことを見てはゐられませんでしたわ。私は今迄の生活で満足して參りました。そりや辛いこととはございませぬわ。でも、世の中には色々辛いことはあるものですもの。」彼女は言葉を切つた。

「いや、」と彼が言つた。「あれは間違つてゐた。最初から宜くなかつたのだ。でも、それはあなたの罪ではない。僕は濟まなく思つてゐる。そのことを僕は話したいと思つてゐたのだ。今こゝで望みが叶つて、僕はこんな嬉しいことはない。」

「そんなに仰言らないで下さいまし——本當にそんな風に仰言らないで、」と彼女が泣きつくやうに言つた。「構ひませぬのよ。氣になさることはございませぬのよ。貴方は何時も親切にして下さいました。本當に、私——」と言ひかけて言葉が出なくなつた。懐しさと同情の念で、彼女は胸が一杯になつたのだ。彼女はレスターの兩手を握つた。そ

してクリイヴランドに、自分一家の爲めに借りてくれた家のこと、彼が父ゲルハートを寛大に取扱つてくれたことなど、過去の總ての愛情の證據を思ひ起してゐたのだ。

「あゝ、話して了つて清々した。ジェニー、あなたは本當に立派な人間だ。それに又今日はよく會ひに来てくれた。僕はあなたを愛してゐた。今も愛してゐる。僕はこのことを言ひたかつたのだ。こんなことを言つては變なやうだが、僕が心から愛してゐたのは、あなた一人だつたのだ。僕達が別れたのは間違つてゐた。」

ジェニーは息を殺してゐた。これこそ——この愛の徴こそ、彼女が長の年月待望んでゐたものであつた。よしどんなことがあつても、この精神的に二人が堅く結ばれてゐると云ふ告白こそ、總てを償つて餘りがある。今まで彼女は幸福に暮すことが出来た。これで大往生を遂げることも出来る。「まあ、レスター、」と彼女は咽びながら叫んで、彼の手を緊と握りしめた。彼も握り返した。暫く沈黙があつた。それからレスターが口を開いた。

「二人の子供達はどうしてゐるの？」

「えゝ、可愛くなりましてよ、」と彼女は答へて、その子供達のことを詳しく話して聞かせた。彼も楽しさうに聽いてゐたが、ジェニーの聲が非常に彼を慰めてくれたのである。彼女の全人格が彼に對する感謝を現してゐた。そして別れ

る時間が來た時に、彼はジェニーを引留めて置きたいらしかつた。

「もう行くの、ジェニー？」

「私歸つても歸らないでも宜しうございますのよ、」と彼女が言つてみた。「私こちらへ部屋を借りますわ。自宅の方はステン夫人に手紙で知らせ置ませう。それで宜しいんですの。」

「いや、そんなにして貰はなくても宜いんだよ、」と彼は言つたけれど、ジェニーは自分にあて欲しい、彼は一人であるたくないのだと容易に見てとつた。

この時からレスターの臨終まで、ジェニーはホテルの外に一步も踏出さなかつた。

## 六二

その後四日してレスターの終焉の日が來た。その間ジェニーは殆ど絶えず彼の傍にゐて離れなかつた。附添の看護婦は初めジェニーをよい話相手として歡び迎へたが、醫師は反對の意向だつた。けれどもレスターは飽くまで頑張つた。「これは僕の死病だ、」と不興の面持で言つた。「どうせ死ぬのなら、僕の好きなやうにして宜いだろう。」

ウォトソンは何時に變らず向ふ意氣の強いのを見て、微笑



んだ。彼は今迄にこれほど一徹なところを見たことがなかつた。

見舞ひの客や、安否の問合せがあつたり、また新聞に彼の病状の報道が載つたりした。ロバートは「インクワイヤラ」新聞で弟の病氣を知り、シカゴへ行くことに決心した。イモジンは夫と一緒に見舞ひに来た。二人は、ジェニーが自分の部屋へ引取つてから、病室で數分間の面會を許された。レスターは別に話す事もなかつた。看護婦は客に向つて、餘り多く話しかけないようにと注意した。彼等が辭去してから、レスターはジェニーに「イモジンは随分變つたよ」と言つた。それ以外には、何も批評めいたことを言はなかつた。

レスターが永眠した日には、レテイ・ケイン夫人はニュー・ヨークまで三日航程の大西洋上にあつた。レスターは何かもつとジェニーの爲めにしやれないものかと考へ廻らしてはゐたのだが、名案はなかつた。手當の金を増してやつても無駄だと分つてゐた。彼女はそんなものは欲しがらなかつた。彼が、レテイは今頃何處にゐるのだらう、何時頃この地へ来るのだらう、と考へてゐると、最後の激しい發作が来た。そして鎮痛の手當も間に合はぬうちに死んで了つた。後になつて調べてみると、彼の命を縮めたのは内臓の故障ではなくて、實は脳の血管の障礙に因ることが分つた。

ジェニーは傍で一切を見成つて案じてゐた爲め、疲れ切つて、前後を忘れて悲歎にくれた。長い間レスターは氣持の上から彼女と一身同體であつたから、彼女は自分の半身をなくしたやうに思つた。廣い世界に唯一人の男として愛して來たのだし、彼の方でも、常に彼女の身の上を案じてゐてくれた。ジェニーは悲愁を涙に現すことは出来なかつた——放心して、けだるい痛みのやうなものを感ずるだけだつた。靜かに横たはつてゐる彼は、——彼女の唯一のレスターは——いかにもがつしりして見えた。平常と變らぬ表情で、——安らかに眠つてはゐるものの、なほ不撓不屈の面持があつた。ケイン夫人から次の水曜日には到着すると云ふ通知が届いた。それで遺骸は保有して置くことに決められた。ジェニーはウォトソンの口から、遺骸はベイス家の納骨堂のあるシンシナチへ移送される由を知つた。そして故人の親族が續々と駆けつけるので、彼女は自分の家へ歸つて行つた。彼女に出来る用事はこれ以上なくなつたのだ。

最後の儀式は、人生のこの端睨すべからざる一事例と考へられるのだつた。ケイン夫人と電報で打合せて、遺骸は、イモジンの邸宅へ移され、葬式はその家から出されることになつた。レスターの亡くなつた晩に到着したロバート、ベリー・ドッジ、イモジンの夫のミジリー氏、及び他に二人の知名の市民が、棺側の附添に選ばれた。ルイズとそ

の夫がバファロウから、エイミー夫妻がシンシナチからやつて來た。眞心からの弔問者、義理づくの會葬者で、邸内は溢れるばかりだつた。レスターもその一族もカトリック教徒と云ふことになつてゐたので、カトリックの司祭が招かれて納棺式が営まれた。故人の嘗て足を踏入れたこともない人の邸に安置され、枕許と足許には、佻しく仄めく蠟燭が點され、胸の上には蠟のやうな手に持たした銀の十字架が輝いてゐた。かうした姿を眺めると、實に奇妙な感じがするのだつた。若しも彼自身に、自分の恰好を見ることが出来るたら失笑したであらう。けれどもケイン家の人々は餘りに因習的であり、舊慣になじんでゐたので、かういふ場面に會つても不思議とは思はなかつた。教會は勿論何の反對もしなかつた。ケイン家は立派な家柄なのだから、その上に何を望むことがあらうか？

水曜日にケイン夫人が到着した。彼女もジェニーと同様に、心から故人を愛してゐたので、まつたく狂氣の有様だつた。その夜、彼女は邊りが靜かになると、自分の部屋を抜け出して棺側にもたれ、蠟燭の光に照される愛しいレスターの顔をつく／＼と眺め入つた。涙は溢れて兩の頬を流れ落ちた。彼との楽しい生活が切なく思ひ出された。冷たくなつてゐる頬と手を愛撫した。「ほんとうに残念です、レスター！」と彼女が囁いた。「よくも勇ましく耐へて下さい

ましたわね！」けれどもジェニーを迎へたことは、誰一人彼女に話さなかつた。ケイン一家の者にしても、誰もそのことは知らなかつたのである。

さうしたことのある一方、サウス・パーク・アヴェニューの或家では、一人の女が堪へがたき惜別の悲苦を己が胸に秘めて歎いてゐた。過去幾年かの間、多くの憂目を忍びながら、何時かは愛する者が自分の懐へ戻つて來るかも知れないと、果敢ない望みを持ち續けてゐた、その女であつた。いかにも彼は自分の許へ歸つて來た——死んで歸つて來たのだ——けれども再び去つて了つた、何處へ？ 母や、父や、ウエスタが行つた處へ赴いたのだらうか？ もはや一目たりとも彼の面影を見ることは望まれなかつた。新聞の報ずる所によれば、彼の遺骸は先づミジリー夫人の邸宅に移され、更にシカゴからシンシナチへ運ばれて、埋葬される手筈になつてゐる。そして、シカゴに於ける葬送の儀式は、サウス・サイドに在る羅馬加特力教會の中でも裕福な聖マイケル聖堂——ミジリー家は其處の信者だつた——で舉行されるのだつた。

ジェニーはこのことを知つて深く悲しんだ。シカゴの地に埋葬して貰へれば、自分も時々墓參に行けるものと思つた。けれどもそれは詮ないことだ。自分ばかりはつひぞ運命を御したことがない。世の人達は何時もそれを操つて行



くの。彼の遺骸がシンシナチへ移されると、彼を自分から奪はれるも同然だった。空間の距離が大した相異を齎すやうな気がするのだ。それで彼女は顔を深く面紗に包んで、聖堂での葬式に参列しようと決心した。新聞には、式が午後二時にあると見えた。そして四時に棺が停車場へ運ばれて列車に移され、家族の者が同じ列車でシンシナチへ赴く豫定である。これこそ最後の機会だ、彼女も停車場まで出向いて見送りが出来るわけだ。

葬列が聖堂へ到着する少し前に、黒衣を身に纏ひ、面紗を深く被つた一人の婦人が、横手の入口から入つて来て、人目につかぬ一隅に腰を下した。聖堂内は暗く、人の氣配もないので、彼女も最初は時間や場所を取違へたのではないかと、幾分落着かぬ様子だった。けれども、十分間ばかりも不安な氣持で待つうちに、鐘樓から嚴かに鐘の音が響いて来た。暫くすると、黒の祭服に白の袈裟をかけた司祭補助が現れて祭壇の兩側に立ち並ぶ蠟燭に点火した。また、唱歌隊席に、遠慮がちな足音のざわめきがあるので、式に音楽があると知れた。鐘の音を聞きつけてやつて来た若手の散歩者、物見高い見物人、また直接に案内を受けなかつた幾人かの會葬者が、集つて来て席に着いた。

ジェニーは、この有様を不思議に思つて見てゐた。彼女は今までにカトリックの聖堂に足を踏入れたことがなかつた

のである。薄暗くしめやかな空氣、窓硝子の美しさ、純白な祭壇、立ち揺らぐ蠟燭の黄金色の焰、是等のものが彼女に強い印象を與へた。悲哀、惜別、美、神秘感といったものが交錯して彼女の胸に湛へられた。空漠として心もとなない人生が、今此處に具象化されてゐるやうに思はれた。

鐘が打鳴らされると、祭壇奉仕の少年の一隊が、聖器安置室から行列をなして出て来た。一番小さい、天使のやうな、十一歳になる少年が先頭に立つて、大きな銀の十字架を高く捧げて進んだ。二列になつて續く少年たちは火を點した大蠟燭を一本づつ持つてゐた。司祭は縁飾の附いた黒衣を身につけ、兩側に司祭補助を引具して現れた。行列は聖堂の入口を車寄のところまで出て行つた。そして合唱隊が神の慈悲と平安を求め、悲しみに充ちたラテン語の唱和を誦し始めるまで、姿を見せなかつた。

その唱和の聲が響きわたると、莊嚴な行列は再び現れて来た。銀の十字架、蠟燭、歩きながら抑揚をつけて聖書を讀む顔の黒い司祭、それからレスターの遺骸が、銀の把手のついた大きな黒い柩に納められ、歩調を揃へて進む棺衣保持者の手で運ばれて来た。ジェニーは全神経が電流に感じでもしたやうに、目に見えて身體を硬ばらせた。彼女はこの行列に加はつてゐる人々を知らなかつた。ロバートも知らず、ミジリー氏も見ることがなかつた。二人づつ列を

なして進むこの長い、知名の人ばかりの行列の中で、彼女の見知つてゐるのは唯の三人だった。いづれも嘗てレスターから教へられた人達である。ケイン夫人は勿論分つた。棺のすぐ後ろに、見知らない人の腕にすがつて、隨つてゐた。夫人の後にはウォトスン氏が慇懃に、重々しく歩いてゐた。彼は左右に目を配つて、何處かにジェニーが来てゐるはないかと注意してゐたが、見當らないので、鹿爪らしく前方に視線を向けて進んだ。ジェニーは胸が張裂ける程に感じながらも、瞳を凝らして視入つてゐた。彼女はこの儀式に缺けてならぬ人物でありながら、全く没交渉だった。

行列が祭壇の手欄の處まで行くと棺が下に置かれた。苦悶の表象である黒い十字架の附いてゐる純白の棺蓋がその上に掛けられ、周圍には大きな蠟燭が幾本も立てられた。祈願と唱和が繰返され、棺に聖水がそそぎかけられ、香爐に火を入れて振りたてられた。そして會衆によつて、主禱とカトリック獨特の聖母に對する祈禱が口々に唱へられた。ジェニーは威壓と驚異の感を受けたものゝ、目を奪ふ絢爛な色相も、莊嚴な風景も、死別の悲しみ、癒す術ない苦惱を忘れさせることは出来なかつた。蠟燭の光、香の匂、聖歌などはジェニーにとつても美しいものに思はれた。是等のものは、彼女の胸の底の哀愁の絨線に觸れて、全身全靈を鳴り響かしめた。彼女の身體全體が、哀切な旋律と死の現

前によつて満たされた一つの館のやうなものであつた。ジェニーは泣きに泣いた。そして不思議にも、ケイン夫人が身體を打顫はせて駭り泣いてゐるのが目に入つた。

式が終ると、用意の馬車で棺は停車場へ運ばれて行つた。招かれた會葬者も、行きずりの弔客も残らず退場して、總てが靜寂に歸つた時、ジェニーは遂に立ち上つた。停車場へ行けば、列車に移される棺を見送る事も出来ようと思つたのである。ヴェスタの場合と同じく、多分遺骸はプラットフォームに持出されるのであらう。彼女は電車に乗り、やがて驛の待合室に入つて行つた。初め彼女は、乗客と線路との境の鐵柵に近く、群衆の中をあらゆるこちら歩いたり、それから待合室の中を動き廻つたりして、様子を窺ふことに努めた。そして遂に、待合せてゐる近親の一團を見附け出した。ケイン夫人、ロバート、ミジリー氏、ルイズ、エイミー、イモジンその他の人々だった。彼女は面識があるわけではなかつたが、全く直覺で、是等の人々を誰が誰と識別したのであつた。

人々は取込みに紛れて氣附かずにゐたが、丁度この日は感謝祭の前日だった。廣い停車場の中は何處を見ても、目の前に迫つてゐる樂しみの豫想に昂奮して、ざわめき立つてゐた。多くの人達が明日の祝日の行樂に出かけるところだったのだ。列車が幾本も並んでゐた。それらの列車の



出發時刻が近づく毎に、驛手が聲高らかに行先地を呼びあげた。ジェニーは自分が昔レスタールと共に幾度となく旅をした道筋の地名が、ゆつくりと、好い聲で發音されるのを遺瀨ない氣持で聞いた。「デイトロイト、トレイドウ、クリイヴランド、ニュー・ヨーク行。」「フォート・ウェイン、コランバス、ピッツバーグ、フィラデルフィア及び東部方面行」の列車の告知があつた。それから最後に、「インディアナポリス、ルイスヴィル、コランバス、シンシナチ及び南部方面行」と呼びあげられた。時間になつたのだ。

ジェニーは何度となく待合室と線路の間を群衆にまじつて往き來した。そして自分と愛する者とを分け距てゝある鐵の柵の間からでも、棺の入つてゐる木製の大きな箱を、列車に積込まれる前に一目でも見たいものと願つてゐた。今、棺がこちらへ運ばれて來るところだ。驛手が貨車の停車位置近くへ手押車を押して來る。その上にこそ、レスタールの亡骸が銀の十字架と屍衣に被はれて、横はつてゐるのだ。驛手は茲に、死別の悲苦を身に體して見入つてゐる者のあることは考へなかつた。富と地位とが大きな障壁となつて、この女をその愛する者から永久に引裂いて了ふのだとは、驛手の知る所でない。そんな事は今に始まつたわけであるまい。ジェニーの一生と云ふものは、彼女の目に見た富と權力のために自由自在に操られ、疎外された補綴細工

のやうなものではなかつたか？ 何處から見ても、彼女は屈從の生涯を送るためにこの世へ生れて來たのであつて、自ら積極的に働きかける事は出来なかつたのだ。幼少の時代から、彼女は富貴權門の甲冑行列を見て來た。今になつても彼女は眼前に誇らかに行進する其行列をたゞ茫然と見送るより外ないではないか？ レスタールはその行列の中にあつて敬重されてゐる。けれどもそれは彼女の存在には目を留めようとしななのだ。ジェニーが鐵柵の間から視つてゐると、再び「インディアナポリス、ルイスヴィル、コランバス、シンシナチ及び南部方面行」と呼ぶ聲が聞えた。赤く塗つた長い列車が皎々と燈火をつけて、貨車、客車、白いリンネルに銀の食器を並べた食堂車、それから六臺の贅澤なブルマン寢臺車を連結して、進入して來た。眞黒な、巨大な汽關車が煙や火を吐き出しながら、安全に列車を牽引してゐた。

貨車が手押車の待受けてゐるところへ近づくとき、青服を着た男が貨車から首を出して見てゐるが、車内にゐる同僚に聲をかけた。

「おい、ジャック、一寸手を貸しなよ、あすこに佛さまが一人ゐるんだ。」

ジェニーにはそれは聞えなかつた。

彼女の目に映つたものは、今直ぐ、去り行かうとしてゐ

る大きな棺だけだつた。その心に思つてゐたことは、間もなくこの列車が發車すれば、それで總てが終るといふことだけだつた。改札口が開かれると、乗客は押出されて行つた、その中にはロバート、エイミー、ルイズ、ミジリー等もゐて、後部に連絡されたブルマン寢臺車の方へ進んで行つた。彼等は、見送りの友人達には挨拶を済ませてゐたので、此處でまた繰返す必要はない。三人の者が手傳つて、大きな木の箱を列車に積込んだ。ジェニーはそれが見えなくなるまで、心臓も絞められるやうな感じがした。

トランクがあとから澤山押込まれた。そして貨車の扉は、發車の警鈴が響き渡るまでは半開きになつてゐた。「乗車」と云ふ聲があちこちで連呼され、やがて列車は走り出した。警鈴が鳴響き、蒸気が音を立て、噴出し、濛々たる黒煙が空高く逆巻いて棺衣のやうに列車の上になびいた。火夫は重い重量を牽いてゐるのを知つて、燃えさかる爐口を開いて石炭を投込んだ。火焰は黄金の巨眼のやうに照り返した。

ジェニーは立竦んでこの光景に眺め入つた。顔は蒼白く、目は大きく見開いて、兩手は無意識のうちに堅く握りしめてゐるが、たゞ一つ、彼女の心には——彼の遺骸が持去られると云ふ感慨のみがあつた。頭上には鉛のやうな重苦しい霜月の空が押しつぶさる、邊りは殆ど暗くなつてゐた。彼女はじつと見送つてゐた。遠ざかり行く列車の赤い燈が、

驛の構内の遙か彼方の、線路の上に立竦めた煙と霞の中に消えて了ふまで、彼女はじつと見送つてゐた。

「さうなんだよ」と明日の楽しみにはしやいである、通りがりの者の聲がした。「彼處へ行つて大いに愉快にやつて來ようつてんだ。アニーを覚えてるかい？ ジム叔父も、エラ叔母も來ることになつてんだよ。」

ジェニーにはこの會話の斷片も、その他の人の聲や、周圍の喧噪も何一つ耳に入らなかつた。たゞ前途に展開してゐる佻しい人生の行路が心の眼に映じるのだつた。この次には何が起るだらうか？ 彼女はまだ年老いたと云ふ程ではない。育て上げねばならぬ二人の孤兒がある。暫くすると彼等も結婚して去つて行くに違ひない。さうしたら、どんなことになるのだらう？ 日を送り日を迎へて、涯しなく同じことを繰り返す人生、さてその先は？ ——

了



# 白 い 牙

ジャック・ロンドン作  
北村喜八譯

## 第一部

### 一、肉の通つた跡

暗い樅の森林が、凍つた水路の兩側を顔をしかめて聳えてゐた。その樹々は、最近吹いた風で、白く掩はれてゐた霜を剥がれてしまつて、薄れゆく光の中で、黒く不吉に、互ひに凭れ合つてゐるやうに見えた。涯しない沈黙がこの土地を支配してゐた。土地そのものが、生命のない、運動をもたない、荒廢物であつて、悲哀の氣すら宿つてゐないほど、寂しく且つ冷たかつた。そこには、何となく笑ひの氣配があつて、而もその笑ひたるや、あらゆる悲しみよりも恐ろしく——スフィンクスの微笑のやうに陰鬱な笑ひであり、霜のやうに冷たく、完全無缺なものゝ無慈悲さをもつ笑ひであつた。それは、生命の無益さと生命の儂い努力を嘲笑ふ、力強い不可思議な永久不滅の觀智であつた。それは荒野であつた——未開のままの、氷のやうな冷酷な心

白  
い  
牙

をもつ、北方の荒野であつた。而も尙、この土地へ深く踏み入る大膽不敵な生命があつた。それは、凍つた水路を下流の方へと無我夢中で進んで行く、狼のやうな犬の一行である。彼等の硬ばつた毛は霜で縁をとつたやうになつてゐた。彼等の吐く息は、口を出るとすぐ空中で凍つて、白い水蒸氣となり、それが全身の毛にくつゝいて、霜の結晶となつてゐた。犬共は革の挽具をつけられてゐた。彼等は挽草でうしろの方に一つの橇を引張つてゐた。橇には滑り車がついてゐなかつた。それは頭丈な樺の樹皮で作つてあつて、その底全部が、びつたりと雪にくつゝいてゐた。前端は渦形に巻き上つてゐて、柔い雪の激しい潮が波となつて崩れかゝるのを、或は押しつけ、或は潜り抜けるのであつた。橇の上には、細長い長方形の箱が、しつかりと縛りつけてあつた。まだその他色々物が——毛布だの、斧だの、珈琲壺だの、フライパンだのが載せてあつたが、橇の大部分を占めてゐて一番目につくものは、その細長い長方形の箱であつた。犬共の先頭には、一人の男が大きな雪靴を踏みしめなが

三一九

$$\begin{array}{r} 2,82 \\ 62 \overline{) 177} \\ \underline{124} \\ 530 \\ \underline{416} \\ 140 \end{array}$$

$$\begin{array}{r} 412 \\ 319 \\ \underline{\quad} \\ 83 = 215 \end{array}$$

$$\begin{array}{r} 486 \\ 319 \\ \underline{\quad} \\ 177 \\ \times \\ \underline{\quad} \\ 354 \end{array}$$

2.9

$$\begin{array}{r} 496 \\ 413 \\ \underline{\quad} \\ 83 = 215 \end{array}$$

$$\begin{array}{r} 152 \\ 2,9 \\ \underline{\quad} \\ 1368 \\ 3041 \\ \underline{\quad} \\ 4408 \end{array}$$



ら跳いてゐた。櫛のうしろには第二の男が跳いてゐた。櫛の上の箱の中には、第三の男がもう跳きやんで横になつてゐた——荒野に征服され叩きのめされて、もう二度と動くことも闘ふことも出来なくなつた男である。荒野の態度としては運動を好まない。生命は運動であるが故に、荒野の敵である。荒野は常に運動を滅亡させようと狙つてゐる。それは、水を凍結させて海へ注ぐことを妨げ、樹木から樹脂を驅逐して力強い心臓まで凍らせる。その上、何よりも残忍で恐るべきことには、人間を——生命の中で最も活動的である人間、一切の運動は究局に於て運動の休止に歸着せねばならぬといふ金言に絶えず反逆する人間を、蹂躪し粉砕して屈服させる。

然し、先頭と殿とに、まだ死なぬ二人の男が、恐れず屈せずもがき進んでゐた。彼等の體は、毛皮と柔く軋された草とで包まれてゐた。睫毛も頬も唇も、凍つた息の結晶で掩はれてゐて、どこが顔やら分らぬ程であつた。まるで亡者の面でもかぶつたやうで、何かの妖怪のお葬ひをしてゐる亡靈界の葬儀屋のやうに見えた。然し、それにもかゝらず、彼等はやつぱり人間であつた。荒寥と嘲笑と沈黙の土地を突き進んで、空間の大深淵のやうな、遠い、見知らぬ、脈搏のない別世界の力と闘つてゐる、大冒険好きの小冒険家であつた。

彼等は體の苦役のために呼吸を節約しながら、黙りこくつて進み續けた。何處もかしこも、ひっそり静まりかへつて、その沈黙がはつきり感じられる程重々しく二人の上に掩ひかぶさつてゐた。それは、深い水底の色々の状態が潜水者に影響するやうに、二人の心に影響した。それは、涯しない空漠さと斷乎とした命令との重味で、彼等を押し潰した。それは彼等を、彼等の心の深い奥底へまで押し潰し、葡萄の實から汁を絞り出すやうに、人の魂に秘む偽りの熱情や昂奮や、又は不當な自己評價の一切を絞り出して、自分が有限で弱小であり、微塵で粟粒であり、微弱な奸策と取るに足らぬ智慧を以て、盲目的な大自然の諸要素と諸力との作用と相互作用との間に蠢いてゐるに過ぎないのを感じしめた。

一時間過ぎ、また一時間過ぎた。太陽のない短い日の青ざめた光が消え始めた頃、静かな空氣の中で、遠く微かな一つの叫び聲が起つた。それは最初、高い急激な叫びで始まり、すぐに最高潮に達し、暫くそのまゝ振動し緊張して續き、それから徐々に消えて行つた。若しその叫び聲に、何となく悲しげな狂暴さと、飢に迫られた熱烈さが籠つてゐなかつたら、亡者の悲しい泣聲に聞えたかも知れない。先頭の男は頭を振り向けた。その眼はうしろの男の眼とち合つた。すると、二人は長方形の箱越しに顔合せした。

第二の叫びが、針のやうな鋭さで沈黙を貫いた。二人はその聲の方角をたしかめた。それは、後方の、今しも二人が通つてきた雪の地域の、どこかであつた。それに答へる第三の叫びが、同じやうに後方の、第二の叫びの左手に聞えた。

「奴ら、俺たちのあとをつけて来るぜ、ビル。」と、先頭の男が言つた。彼の聲は、嘎れた、うつろな響をたてた。彼は明かに努力して口をきいたのであつた。

「食ひ物が缺乏してゐるんだよ。」相棒は答へた。「この二三日といふもの、鬼の影一つ見ねえからな。」

それつきり二人は口をきかなかつたが、その耳は、絶えずうしろに起る追跡の叫びに鋭く緊張してゐた。

あたりが暗くなつて來たので、二人は水路の縁の樅の木に密生したところへ、犬共を繋いで、キャンプを作つた。焚火のそばに置かれた棺は、腰掛けにもなり、食卓にもなつた。狼のやうな犬共は、焚火の向う側に群がつて、仲間同志で唸つたりぢやれたりしてゐたが、別に暗闇の方へ離れて行きさうな氣配もなかつた。

「何だなあ、ヘンリ、こいつら、また馬鹿にキャンプのそばへくつゝいてゐるな。」ビルが犬共を批評した。ヘンリは焚火の前に蹲つて、氷の一片で珈琲壺を据ゑな

がら頷いた。それから、棺の上へ腰をおろして、食事を始めるまで、口をきかなかつた。

「奴ら、どこにゐりや安全だか、ちやんと知つてるんだよ。」彼は言つた。「奴らだつて、食はれるよりや食つた方が好いからなあ。犬の奴め、なか／＼惻巧だて。」

ビルは頭を振つた。「さあ、どうだか。」相棒は珍らしさうにビルを眺めた。「おめえが、犬のことを惻巧でないなんて言ふなあ初めてだぜ。」

「だつて、おめえ。」ビルは食つてゐる豆を、念入りにくちや／＼やりながら言つた。「俺が奴らに食ひ物をやつた時、奴らのごたく／＼してゐた様子に、おめえ氣がついたかい。」

「うん、いつもよりやぶさげてゐたやうだつたな。」ヘンリはそれを承認した。

「俺たちの連れて來た犬は、何匹だつたい、ヘンリ。」

「そりや六匹さ。」

「さうだらう、ヘンリ……」彼は自分の言葉に重味をつけるために、一寸話を途切らした。「いゝか、ヘンリ、俺たちの犬は六匹のはずだ。で、俺は袋から魚を六つ取り出した。」

そして、一匹に一つづゝくれてやつたんだ。ところが、ヘンリ、魚が一つ足りねえんだよ。」

「そりやお前の數へちがひだらう。」

「だつて、犬は六匹だらう。」ビルは冷静に繰返した。「で、



俺は魚を六つ取り出したんだ。それなのに、『片耳』の奴、魚にありつかないんだ。仕方がないから、また袋のところへ戻つて、一つだけ出してやつたよ。」

「だつて、おめえ、犬は六匹きりぢやないか。」ヘンリは言つた。

「おい、ヘンリ。」ビルは續けた。「俺は犬だけだつたと言やあしないよ。魚を食つたなあ、七匹ゐたんだよ。」

ヘンリは食事をやめて、焚火越しに目をやつて、犬を數へた。

「今だつて、六匹しきやあやしねえよ。」彼は言つた。

「俺はもう一匹の奴が、雪を横切つて逃げて行くのを見たんだ。」ビルは冷静に断定するやうに言つた。「たしかに七匹ゐるのを見たんだ。」

ヘンリは假むやうにビルを眺めて言つた。「この旅行がすんでくれたら、どんなに有難いか知れやしねえ。」

「といふと、どういふことなんだい。」ビルは促すやうに訊ねた。

「つまり、この荷物が、おめえの神経に障るんだよ。だから、おめえ、變なものを見るやうになつたんだよ。」

「俺もさうかと思つたよ。」ビルは眞面目な顔で答へた。「ところがさ、俺が雪を横切つて逃げてく奴を見たとき、ちつと雪の中を見詰めてゐると、足跡が見えたんだよ。そこ

で、俺は犬を數へてみたが、ちゃんと六匹ゐるぢやねえか。今でも、その足跡は雪の中にあるぜ。どうだ、見るかい。見るなら見せてやるぜ。」

ヘンリは答へなかつた。たゞ黙りこんで、むしやく喰べ續け、食事が終ると最後の珈琲を飲んだ。それから、手の甲で口を拭いて、かう言つた。

「ぢや、何かい、おめえ、そいつあ——」

その時、恐ろしく悲しげな、泣くやうな長い叫び聲が、暗闇のどこからか聞えてきて、彼の喋べるのを妨げた。彼は口をつぐんで、その叫びに耳を傾け、叫び聲のした方を手で差して、前の言葉を結んだ。「——奴らのうちの二匹だつてえのか。」

ビルは頷いた。「何が何でも、さう考へるより考へやうがねえよ。おめえだつて、犬の騒ぐのに氣がついたんぢやねえか。」

叫び、また叫び、そして、それに答へる多くの叫びで、今までの静けさが、まるで癡狂院のやうな騒々しさに變じた。四方から叫びが起つた。犬共は、明かに恐怖に驅られた様子で、押し合つて、毛の焦げつくほど火の近くへ寄つて來た。ビルは更に薪を投げこんでから、パイプに火をつけた。

「おめえ、何かかへこたれてるやうだなあ。」ヘンリが言

さした。眞の暗闇なので、物の形らしい形は見えなかつたが、たゞ燃えてゐる石炭のやうにぎら／＼光る一對の眼が見えた。ヘンリは、更に第二の一對、第三の一對を見ろと言はんばかりに顔で差し示した。ぎら／＼輝く眼が圓を描いて、キャンプのまはりを取り巻いてゐた。時々、その一對が動いた。或は消えたかと思ふと、すぐまた現はれた。

さき程から、犬共の不安は次第に高まつてゐた。彼等は突然の恐怖に襲はれて、焚火のこつち側へどつと押し寄せ、人間の足元にもぐこまり匍ひつくつた。この騒ぎの間に、一匹の犬が焚火の縁でひつくり返つた。そいつは痛さと驚きできやん／＼鳴き叫び、その焦げた毛の臭ひは空中一杯に充ちた。この騒動で、ぎら／＼輝く眼の圓が暫くどよめいて、少しばかり後ずさりしたが、犬が鎮まると同時に、また以前の位置にかへつた。

「おい、ヘンリ、彈藥のなくなつたのは、ひどく痛手だなあ。」

ビルはパイプを吹かし終へて、それからヘンリを手傳ひながら、晩飯の前に雪の上へ並べておいた樅の枝の上に、毛皮や毛布の寢床を敷いた。ヘンリはぶつ／＼言つて、鹿皮の靴の紐を解き始めた。

「彈丸は何發残つてるといつたつけな。」彼は訊ねた。「三發よ。」それが答だつた。「三百發もあつたらなあ。さ

つた。

「ヘンリ……」ビルは考へこむやうに暫くパイプを吸つてゐたが、やがて話を續けた。「なあ、ヘンリ、この人は、俺やおめえよりどれぐらゐる仕合せか知れねえと思ふよ。」

彼は、二人の腰かけてゐる箱を親指で押しつけて、第三の男を示した。

「なあ、ヘンリ、おめえにしる俺にしる、若し死んだつて、死骸を犬に食はれぬやうに石ころでもどつさり載つけて貰へれば、まだしも仕合せの方だぜ。」

「だつて、俺たち二人あ、この人みてえに人が傭へるわけぢやなし、金があるわけぢやなしさ。」彼は合槌をうつた。

「この長道中のお葬ひなんざ、どうしてどうして、俺たちにや思ひも寄らねえこつた。」

「俺はかう思ふんだがな、ヘンリ。何だつてまた、こんな人間がさ、國にゐりや殿様か何かで、食ふ物や着る物によくよせずにすむ身分なのに、こんな神様に見棄てられたやうな地球の果へ迷ひこんで來たんだらうな。——それがどうしても俺にや分らねえ。」

「全くよ。うちにあさへすりや、いゝ年まで長生き出來たらうになあ。」ヘンリは賛成した。

ビルは口を開けて何か言はうとしたが、氣を變へて黙りこんだ。その代り、四方から押し迫つて來る暗闇の壁を指



うすりや、目にも物を見せてくれるんだ、あん畜生に！」  
 彼はぎら／＼光る眼に向つて、腹立たしさうに拳を振りあげた。そして、自分の鹿皮の靴を、倒れないやうにしつかりと焚火の前に置いた。  
 「それに、この急な寒さが止んでくれるといふだかな。」彼は話し続けた。「この二週間といふもの、氷點下五十度だぜ。俺は何だか、今度の旅に出て来なきやよかつたと思ふよ、ヘンリ。厭んなつちまふぢやねえか、このさまは。何しろくさ／＼するよ。だけど、俺は又かろも考へるんだ。早くこの旅がすんでさ、おめえと俺とがマクガアリの市場で、丁度こんな風に火にあたりながら、カルタでもやつたら好いだらうなあつて。——早くさうなりてえよ。」  
 ヘンリはぶつ／＼言つて、寢床へ匍ひこんだ。少しうとうとしたと思ふと、相棒の聲で目が覺めた。  
 「おい、ヘンリ、さつきやつて来て、魚を取つた奴な——何故、犬の奴、そいつをやつ／＼けなかつたんだらう。どうも氣になるなあ。」  
 「さうくよく／＼氣にするなよ、ビル。」眠さうな返事であつた。「おめえ、以前はそんな風ぢやなかつたぜ。さあ、もう黙りこんで寝ろよ。朝になりや、すつかりよくなるよ。おめえ、胃が悪いんだ。だから、そんなにくよく／＼するんだ。」

二人は並んで、一枚の毛布にくるまつて、高駈をかきながら眠つた。焚火は燃えつきた。すると、ぎら／＼輝く眼は、その圓を狭めて、彼等はキャンプのまはりへ突き進んで来た。犬共は怖氣づいて、ごちや／＼群がり、時々、一對の眼が近づいてくると、威嚇するやうな、唸り聲を立てた。一度なんぞ、その騒ぎがあんまり激しくなつたので、ビルは目を覺ました。彼は相棒の眠りを妨げないやうに、注意深く寢床を抜け出した。そして、焚火に薪を投げそへた。それがばつと燃えあがると、眼の圓はうしろへ遠退いた。彼はごちや／＼押し合つてゐる犬へ、ちらと視線を投げた。それから臉をこすつて、鋭く彼等を眺めた。そして、毛布の中へもぐりこんだ。  
 「ヘンリ。」彼は言つた。「おい、ヘンリ。」  
 ヘンリは眠りから覺め際に、う／＼と唸つて、それから訊ねた。「どうかしたのか。」  
 「いや、何でもないんだ。」ビルは答へた。「また七匹ゐたぜ。俺は今數へたばかりなんだ。」  
 ヘンリは、ふうつと一息、息を吐いて、その報告を承認した。そして、その息がすぐ駈になつて、再び眠りに陥ちて行つた。  
 朝、ヘンリの方が先に目を覺まして、相棒を寢床から叩き起した。もう六時だつたが、夜明にはまだ三時間あつた。

暗がりの中で、ヘンリは朝食の支度にかゝり、ビルは毛布を巻いて、櫓を走らす準備をした。  
 「おい、ヘンリ。」ビルが突然訊いた。「おめえ、犬は何匹ゐると言つたつけ。」  
 「六匹さ。」  
 「違ふ。」ビルは勝ち誇つたやうに言ひ張つた。  
 「また七匹になつたのか。」ヘンリは質問した。  
 「いや、五匹だ。一匹ゐないんだ。」  
 「畜生！」ヘンリは憤然として叫んで、料理を打つちやらかして来て、犬を數へた。  
 「成程、おめえの言ふ通りだ、ビル。」彼は結論した。「フアティの姿が見えねえ。」  
 「奴、まるで稲妻か何かのやうに、何處かへ消えうせがあつた。影も形も見えやしねえ。」  
 「見つかるものか。」ヘンリは結論した。「奴ら、フアティを生きながら呑みこんぢまつたのさ。きつと、フアティの奴、あいつらの喉をおりて行く時、きやん／＼鳴いたに違えねえよ、畜生！」  
 「あいつあ、普段から間拔けな犬だつたよ。」ビルは言つた。  
 「だが、いくら間拔けな犬だつて、あんな風にふら／＼出かけて、自殺するやうぢや仕様がねえなあ。」彼は推察す

るやうな眼付で、犬の組の残りを見渡して、すぐに各犬の特徴を推定した。「他の奴あ、きつとそんな眞似はしめえよ。」  
 「棍棒で殴つたつて、火のそばを離れやしねえからなあ。」ビルは賛成した。「俺はしよつちう思つてたんだが、フアティの奴にやどこか變なところがあつたよ。」  
 そして、これが北地に於ける足跡の上に殘された、死んだ犬の碑銘であつた——他の多くの犬や他の大勢の人間の碑銘に較べて、これはまだしも好い方であつた。

### 二、女 狼

朝食がすんで、手輕なキャンプの道具が櫓に縛りつけられた。二人は心地よい焚火に背を向けて、暗闇の中へ突き進んだ。と、忽ち、物凄いはかりに寂しい叫び聲が起つて来た——闇と寒さを劈いて、互に呼びかはし、答へかへす叫び聲であつた。二人の會話はすぐやんだ。日の光は九時になつてやつて来た。晝頃になると、南の方の空が暖か味のある薔薇色を呈し、その空のあたりに、地球の膨みがある。正午の太陽と北極の世界との伸を調停してゐるのを示してゐた。然し、その薔薇色は急速に褪せ去つた。そして、殘りの灰色の光が三時まで續いたが、それも亦消え去つて、北極の空の帷が、寂しい静かなこの土地へ下りて来た。



暗闇が迫ると共に、追跡してくる叫びが、右に、左に、うしろに、次第に近づいて来た——あまりにもそれが近くに來るので、苦しげに櫓を曳く犬共の間に、一度ならず恐怖がまき起り、その度毎に犬共は短い恐慌に追ひ込まれた。さうした恐慌の一つが鎮まつた後で、ビルとヘンリが犬共を挽革の位置へ引き戻した時、ビルは言った。

「奴ら、どつか他の獲物を襲つて、俺たちの方をうつちやらかしてくれるといふんだがなあ。」

「全くよ。氣が氣でねえからなあ。」ヘンリは同情した。

二人はキャンプの出來あがるまで、それきり口をきかなかつた。

ヘンリは屈みこみながら、豆のぐつぐつ煮える鍋に氷を加へてゐた時、不意に何かをなぐる音と、ビルの怒鳴る聲と、犬の間に苦痛を訴へる鋭い悲鳴が聞えたので、ぎよつとした。彼は吃驚して立ち上ると、丁度その時、ぼんやり黒い物が一つ、雪を横切つて闇の隠れ家へ姿を消すのが見えた。で、ビルの方へ眼をやると、彼は半ば勝ち誇り、半ばがっかりした様子で、犬の間に突つ立ち、片手に頭丈な棒をもち、片手に乾した鮭の尻尾の方の半分を下げてゐた。「奴、半分取りやがつたよ。」ビルは告げるやうに言った。「だが、俺の方でも、その代りうんとひとつばたいやつた。おめえ、あの悲鳴を聞いたらう？」

うすりや、すつかり元氣になつて、もつと愉快になれるつてことよ。」

朝になつて、ヘンリは、ビルの口から發する激烈な呪ひの聲で目が覺めた。ヘンリは片眩ついで體を起して見ると、相棒は新しく薪をたした焚火のそばで、犬の間に突つ立つて、兩手を擧げて何か呪ひの聲を立て、その顔は激情でひん曲つてゐた。

「おい！」ヘンリは呼びかけた。「どうしたんだい。」

「蛙」がゐなくなつたんだ。」それが答であつた。

「そんなことはあるめえ。」

「いや、さうなんだ。」

ヘンリは毛布から飛び出して、犬のところへ走り寄つた。彼は念入りに犬を數へた。それから、相棒と一しよになつて、この未開の大自然の力が、又しても犬を二匹奪ひ去つたのを呪つた。

「蛙」の奴、この中ちや一番強い犬だつたがなあ。」ビルは最後にさう斷定した。

「それに間抜けでもなかつたよ、なあ。」ヘンリは附け加へた。

かうして、二日の間に、第二の碑銘が記録された。

陰氣な朝食がすんで、残つた四匹の犬が櫓に結へつけられた。その日も、過ぎ去つた數日の繰返しであつた。二人は

「どんな格好の奴だつたかい？」ヘンリは訊ねた。「はつきり分らなかつたよ。だが、四肢があつて、口があつて、毛があつて、犬そつくりだつたよ。」

「人に馴れた狼にちげえねえよ。きつとさうだぜ。」

「とにかくひどく馴れてやがるんだ。飯どきにこゝへ來て、うまく魚にありつかうつてんだからなあ。」

その夜、晩飯がすんで、二人が長方形の箱に腰をおろして、パイプを吹かしてゐると、ざら／＼光る眼の圓が、前よりもずつと近くへ迫つて來た。

「奴ら、大鹿の群か何か飛びかゝつて、俺たちをうつちやらかしてくれると有難いんだがなあ。」ビルは言った。

ヘンリはまるで同情したらしくもない語調で、ふうつと息を吐き出した。そして、十五分間ほど、二人は無言で腰かけてゐた。ヘンリはちつと焚火を見詰め、ビルは丁度焚火の向うの闇の中に燃えてゐる眼の、圓をなして並んでゐるのを見詰めてゐた。

「今頃マクガアリへ着いてゐるといふんだがなあ。」ビルはまた始めた。

「おいおい、もう止めやい。いふんだがなあ、いふんだがなつて、泣き事並べてゐたつて始まらねえ。」ヘンリはふりふりして怒鳴つた。「おめえ、胃が悪いんだよ。だから、くさ／＼してゐるんだ。匙に一杯曹達でも飲んでみるよ。さ

無言のまま、凍りついた世界の表面を跳き進んだ。あたりは深い沈黙で、それを破るものは、目に見えないが、うしろから襲ひかゝつて來る、消跡者の叫びだけであつた。午後のうちに夜が迫つて來ると、追跡者は例のやうに接近してくるので、叫び聲は一層近くに聞えた。犬共は昂奮し、恐れをなし、幾度も恐慌を起すので、挽革はもつれ、そのために二人の氣持は更に重くなつた。

「そら、かうしておきや、貴様たち馬鹿野郎も動くこたあ出來めえ。」ビルは、その夜、仕事を終へて、すくつと突つ立ちながら、満足さうにさう言つた。

ヘンリは料理の手をやめて來て見た。相棒は犬を縛りあげたばかりでなく、インデアンの方方に做つて、棒で以て縛りつけたのであつた。即ち、ビルは各犬の頸のまはりへ革紐をしつかり巻きつけた。この革紐を齒の屈かぬやうに頸に密着させておいて、この革紐に長さ四五呎の頭丈な棒を結びつけた。そして、その棒の片端を、地面にさした杭に革紐で縛りつけた。かうしておけば、犬は自分の頸にある棒の片端の革を噛み切ることも出來ないし、又、棒に邪魔されて、他の片端を結びつけてある革を噛むことも出來なかつた。

ヘンリは賛成するやうに頷いた。

「全く『片耳』の奴を繋いでおくには、これより他に工夫は



豪猪

「おい、あれを見ろよ、ビル。」ヘンリは囁いた。焚火の眞正面へ、忍び足の斜めの動きで、犬のやうな一匹の獣が滑り寄つた。それは、不信と大膽さをまぜ合したやうな態度で、用心深く人間に氣を配りながら、注意を犬に集中して動いて來た。「片耳」は、この侵入者の方へ向つて、棒をありつたけの長さに伸して、夢中になつて鳴きたつた。

「あの『片耳』の馬鹿は、大して怖がつてゐないやうだなあ。」ビルは低い調子で言つた。

「ありや、雌の狼だぜ。」ヘンリは囁きかへした。「だから、ファティも『蛙』もやられたんだ。あいつは、あの群の囚なんだよ。奴が犬をおびき出すと、他の奴がみんなして飛びかゝつて、平げてしまふんだ。」

焚火がばち／＼燃え上つた。一本の丸太が、ぶす／＼大きな音を立てながら崩れ落ちた。その物音に、例の異様な獣は闇の中へ飛びすさつた。

「ヘンリ、俺は考へてゐるんだが。」ビルが言ひ始めた。

「考へてゐるつて、何を？」

「俺はかう考へてゐるんだ。俺が棒で殴りつけたのは、たしかにあいつに違ひねえつて。」

「さうともよ。さうに違ひあるもんか。」ヘンリは答へた。

「そこでだ、俺の言ひたいのは——」ビルは話を續けた。

「おい、あれを見ろよ、ビル。」ヘンリは囁いた。

「おい、あれを見ろよ、ビル。」ヘンリは囁いた。焚火の眞正面へ、忍び足の斜めの動きで、犬のやうな一匹の獣が滑り寄つた。それは、不信と大膽さをまぜ合したやうな態度で、用心深く人間に氣を配りながら、注意を犬に集中して動いて來た。「片耳」は、この侵入者の方へ向つて、棒をありつたけの長さに伸して、夢中になつて鳴きたつた。

「あの『片耳』の馬鹿は、大して怖がつてゐないやうだなあ。」ビルは低い調子で言つた。

「ありや、雌の狼だぜ。」ヘンリは囁きかへした。「だから、ファティも『蛙』もやられたんだ。あいつは、あの群の囚なんだよ。奴が犬をおびき出すと、他の奴がみんなして飛びかゝつて、平げてしまふんだ。」

焚火がばち／＼燃え上つた。一本の丸太が、ぶす／＼大きな音を立てながら崩れ落ちた。その物音に、例の異様な獣は闇の中へ飛びすさつた。

「ヘンリ、俺は考へてゐるんだが。」ビルが言ひ始めた。

「考へてゐるつて、何を？」

「俺はかう考へてゐるんだ。俺が棒で殴りつけたのは、たしかにあいつに違ひねえつて。」

「さうともよ。さうに違ひあるもんか。」ヘンリは答へた。

「そこでだ、俺の言ひたいのは——」ビルは話を續けた。

「おい、あれを見ろよ、ビル。」ヘンリは囁いた。

「おい、あれを見ろよ、ビル。」ヘンリは囁いた。焚火の眞正面へ、忍び足の斜めの動きで、犬のやうな一匹の獣が滑り寄つた。それは、不信と大膽さをまぜ合したやうな態度で、用心深く人間に氣を配りながら、注意を犬に集中して動いて來た。「片耳」は、この侵入者の方へ向つて、棒をありつたけの長さに伸して、夢中になつて鳴きたつた。

「あの『片耳』の馬鹿は、大して怖がつてゐないやうだなあ。」ビルは低い調子で言つた。

「ありや、雌の狼だぜ。」ヘンリは囁きかへした。「だから、ファティも『蛙』もやられたんだ。あいつは、あの群の囚なんだよ。奴が犬をおびき出すと、他の奴がみんなして飛びかゝつて、平げてしまふんだ。」

焚火がばち／＼燃え上つた。一本の丸太が、ぶす／＼大きな音を立てながら崩れ落ちた。その物音に、例の異様な獣は闇の中へ飛びすさつた。

「あいつがキャンプの火にあんなに馴々しく出来るのは、どうも變だし、怪しからんつてことだよ。」

「奴はたしかに、身の程を知つて普通の狼に較べると、いろんなことを知つてるぜ。」ヘンリは同意した。「何しろ、飯時に來て犬の中へもぐり込むのを知つてる狼なんて、よつぽど經驗のある奴だよ。」

「いつかオル・ヴィランの持つてた犬が、狼の群と一しよに逃げたことがあつたつけない。」ビルは大聲でさう言つて、考へこんだ。「うん、さうだつた。リトル・ステッキの大鹿の牧場で、奴が狼の群にまざつてゐるのを、俺が鐵砲で撃つたんだ。すると、オル・ヴィランの野郎、赤ん坊みたいに泣いたつけない。何でも三年間會はなかつたといふんだ。犬の奴、そんなに長く狼と一しよにゐたんだよ。」

「成程、それで分つたよ、ビル。あの狼は犬なんだ。何度となく人間の手から魚を貰つて食つてゐるんだぜ。」

「よし、今に折があつたら、あの狼が犬だらうが何だらうが、殺して餌食にしてやるから。」ビルは宣言した。「この上犬をなくしてたまるもんか。」

「だけど、おめえ、彈丸は三發しきやないぢやないか。」ヘンリは反對した。

「一發で見事撃ちとめる機會を待つてゝやるんだ。」それが返事であつた。

朝になつて、ヘンリは火を焚き添へ、相棒の鼾の音を聞きながら、朝飯の用意をしてゐた。

「おめえ、今朝はまた、馬鹿に心持好さうに寝てゐたなあ。」ヘンリは朝飯に相棒を呼び起しながら、さう言つた。

「あれぢや、おめえを起す氣になれなかつたよ。」

ビルは眠さうにしながら、食ひ始めた。彼は自分のコップが空なのに氣づいて、壺を取らうとした。然し、壺はヘンリのそばの、手の届かないところにあつた。

「おい、ヘンリ。」彼はおとなしく小言を言つた。「おめえ、何か忘れ物してやしねえか。」

ヘンリはひどく注意深く、あたりを見廻して、頭を振つた。ビルは空のコップを差し出した。

「おめえの珈琲はねえんだよ。」ヘンリは言つた。

「もうすつかりなくなつたのか。」ビルは心配さうに訊いた。

「いんや。」

「ぢや、俺の胃が悪いとでも考へたのかい。」

「いや、ちがふ。」

かつとなつたらしく、ビルの顔は赭くなつた。

「ぢや、一體どうしたんだ。是が非でもわけを聞かなくちや。」ビルは言つた。

「スペインカゝがるなくなつたんだよ。」ヘンリは答へた。



又かと、この不幸を諦めた様子で、別に急ぎもせずに、ビルは首を振りむけて、坐つた儘で犬を敷へた。

「どうしたつてんだ？」ビルは冷淡にかう訊ねた。

ヘンリは肩をそびやかした。「知るもんか。『片耳』の奴が噛み切りでもしたんだらう。でなきや、奴ひとりぢや噛み切れやしねえ。」

「忌々しいなあ。」ビルは、内心の激しい憤怒を面へ現はさず、重々しい口調で言つた。「きつと、奴あ自分の革が噛み切れないもんで、スパンカアの革を噛み切つたんだ。」

「とにかく、これでスパンカアの苦勞もお終ひになつたつてわけさ。きつと今頃は消化されちまつて、二十四の狼の腹の中で跳ね廻つてゐることだらうて。」ヘンリはかう言つて、昨晩なくなつた犬に碑銘を與へた。「おい、ビル、珈琲でも飲めよ。」

然し、ビルは頭を振つた。

「まあ、飲めよ。」ヘンリは壺を差しあげて勧めた。

ビルはコップを側へ押しやつた。「飛んでもねえ。俺は犬が一匹でもゐなくなつたら、飲まねえつて言つたんだ。だから、飲まねえよ。」

「素敵な珈琲だぜ。」ヘンリは心を惹くやうに言つた。

然し、ビルは片意地を通した。そして、珈琲なしの朝飯を喰べ、『片耳』のやつた悪戯に對して、もぐ／＼呪ひの呟

きをあげながら、飯を嚙み下した。

「今夜は、奴らがお互ひに近寄れないやうに縛りつけてやるぞ。」彼等が行進を始めたとき、ビルはさう言つた。

彼等が百碼あまりも進んだ。その時、先頭にゐたヘンリが、屈みこんで雪靴にぶつかつた何かを拾ひあげた。あたりは暗くて、それが何であるか見えなかつたが、手觸りで分つた。彼はそれをうしろへ投げつけた。すると、それが襪に當つて、ころ／＼跳ね返つて、ビルの雪靴の上へぶつかつた。

「多分、おめえの役に立つだらう。」ヘンリは言つた。

ビルはぎよつとしたらしい叫び聲をあげた。それは、スパンカアの形見のすべてであつた——彼に縛りつけてあつたその棒である。

「奴ら皮も何もすつかり食つちまつたんだ。」ビルは言ひ出した。「この棒の奴、まるで笛みてえに綺麗になつてらあ。奴ら、兩端の革まで食つちめえあがつた。ひどく腹がへつてるんだな、ヘンリ。これぢや、奴ら、この旅行のすまねえうちに、おめえや俺に襲ひかゝつてやらうと待ちかまへてゐるぜ。」

ヘンリは昂然と笑つた。「俺はこんな風に狼から跡をつけられるのは、これが初めてだ。然し、もつとひどい目に會つたことだつてあるが、びくともしなかつたよ。どんなに訊ねた。

「お前、櫛のそばにくつついてゐた方がいゝぜ。」相棒は抗議するやうに言つた。「だつて、彈丸はたつた三發しきやないのに、どんなことが起るか知れたもんぢやねえよ。」

「誰だい、今度悲鳴をあげるのあ。」ビルは勝ち誇つたやうに訊ねた。

ヘンリはそれに答へずに、とほ／＼と一人歩み續けた。然し、時々振り返つては、相棒の姿を消した灰色の荒野に氣づかほしげな眼差しを投げた。一時間ほどすると、櫛が廻り道しなげばならない地點で、ビルは近道を利用して追ひついた。

「奴らは、ばらつと撒らかつて、ずつと擴がりながら進んで來るぜ。俺たちの跡をつけながら、同時に他の獲物を探してゐるんだ。奴等、もうすつかり俺たちを自分のものにしたつもりで、たゞ取つて食ふ時期を待つてゐるんだ。そして、その道々、手近に來たもので食へるものがあつたら手當り次第に拾ひあげようとしてゐるんだ。」

「奴等、俺たちを自分のものにしたつもりでゐると言ふんだな。奴等、さう考へてゐるといふんだな。」ヘンリは辛辣に突込んだ。

然し、ビルはそれに對して何にも言はなかつた。「俺あ奴等を四五匹見たぜ。ひどく瘦せてやがつたよ。奴等、この何週間のうちに、ファティと『蛙』とスパンカア以外には、

厄介な獸だらうと、おめえの相棒様がへこたれてたまるもんかよ、なあ、ビル。」

「さあ、何とも分らねえぞ。何とも分らねえぞ。」ビルは不吉らしく呟いた。

「まあいゝつてことよ。マクガアリへ着けば、お前にもよく分るよ。」

「何だか俺あ氣が減入つてならねえよ。」ビルは言ひ張つた。

「おめえ、顔色が悪いぞ。どうかしてゐる證據だ。」ヘンリは獨斷を下した。「おめえ、キニネを飲むといゝんだ。マクガアリへ着いたら、おめえが元氣になるやうに俺はすぐに薬をつくつてやらあ。」

ビルはその診斷に不本意らしく、ぶつ／＼言つた。それから、黙りこんだ。その日も、いつもの日と變りがなかつた。光は九時になつて射して來た。十二時になると、南の地平線は見えない太陽に暖められた。それから午後の冷たい灰色が迫つて、三時間後にはもう夜の中へ呑みこまれてしまふのであつた。

太陽が、姿を見せようと努力して徒勞に終つたすくのと、ビルは櫛の縛り革の下から、銃を抜き出して言つた。

「お前は、構はず先へ行つてくれよ、ヘンリ。俺は出来るだけ奴等の様子を委しく見るから。」



これといふ食ひ物にありついでゐないんだよ。あゝ數が多  
いんだもの、あれぢや腹の足しにやなるめえ。げつそり瘡  
せてるぜ。肋骨つたら洗濯板のやうだし、胃袋はまるで背  
骨にくつついてゐやがるんだ。實際、奴等、死にもの狂ひ  
だ。まるで氣の狂つたやうになつてやがる。だから、用心  
しなくちやいけねえぜ。」

それから數分の後、今度は靄の殿になつてゐたヘンリが  
低い警告の口笛を吹いた。ビルは振りかへつて見た。それ  
から、靜かに犬を停めた。後方に當つて、今し方迎つて來  
た足跡の上を、一匹の毛深いこそくした動物の駈けて來  
るのが、今の曲角のところからはつきりと見えた。それは、  
足跡へ鼻をくつつけ、一種獨特の、滑るやうな、軽い足取  
りで走つてゐた。彼等が立ち留ると、その獸も立ち留り、  
頭を持ちあげて、彼等の臭ひを嗅いで研究するやうに、小  
鼻をびくつかせながら、ちつと彼等を注視した。

「例の女狼だぜ。」ビルは囁いた。  
犬共は雪の上へ腹匍ひになつてゐた。ビルはそのそばを  
通つて、樞のところにある相棒の方へ行つた。二人は一し  
よに、この異様な獸——數日間彼等を追跡し、既に犬の組  
の半數を滅してしまつたこの獸を、ちつと見詰めた。  
探るやうにじろく見てから、この獸は五六歩前へ走り  
出した。彼は幾度かそれを繰返したので、僅か百碼足らず

の距りになつた。彼は立ち留つて、頭をあげ、樞の密林に  
身を寄せて、自分を見詰めてゐる人間の様子を、目で見、  
臭をかいて、研究した。まるで犬のするやうに、妙に人懐  
つこい態度で彼等を眺めた。然し、その懐つこさうな態度  
には、犬の持つやうな愛情は微塵もなかつた。それは飢餓  
から生れた懐つこさであつて、彼の牙そのものゝやうに、  
殘忍であり、霜そのものゝやうに苛酷であつた。  
それは狼としては、圖體が大きかつた。その瘡せこけた  
骨組が、同じ種族の中の最大な動物の血統を引いてゐるこ  
とを示してゐた。

「あの肩の高さは二呎半はあるなあ。」ヘンリが批評した。  
「それに、長さは確かに五呎を缺けないところだぜ。」

「狼にしちや色氣が妙だぜ。」今度はビルの批評だ。「俺は  
生れてまだ、赤い色の狼にお目にかゝつたことはねえよ。  
奴、まるで肉桂色をしてゐやがる。」

その獸は必ずしも肉桂色ではなかつた。その毛並は正し  
く狼のそれであつた。その主色は灰色であつたが、それに  
加ふるに、幽かな赤い色が混つてゐた——それは變り易  
い色合で、まるで幻覺が見る幻のやうに、現はれたり消え  
たりして、或る時は灰色に、はつきりした灰色になるかと  
思ふと、今度は、普通使つてゐる言葉ではとても區別出來な  
いやうな、ほんやりした赤い色氣が、仄めき、閃くのであ

つた。

「あいつ、どう見たつて大きなハスキー種の樞犬だよ。」  
ビルは言つた。「奴が馴々しく尾を振つたつて、俺は不  
思議だとも何とも思ひやしましよ。」

「おい、ハスキー。」ビルはその獸に呼びかけた。「おい、  
こつちへ來いよ。何て名だか知らないが。」

「おめえをちつとも怖がつてゐないぜ。」ヘンリは笑つた。  
ビルは威嚇するやうに手を振り、大聲で怒鳴つたが、そ  
の獸はまるで恐れる氣合も見せなかつた。たゞ二人の氣の  
ついた變化は、一分の隙もなく身構へた態度であつた。彼  
は相變らず、飢餓から來る、苛酷な懐つこさで、二人をじ  
ろじろ見てゐた。二人は食肉であつた。そして、彼は飢ゑ  
てゐた。出來るなら思ひ切つて、飛びこんで來て二人を食  
つてしまひたさうな様子であつた。

「おい、ヘンリ。」ビルは心に考へこんでゐたので、我知ら  
ず聲を落して、囁き聲になつて言つた。「彈丸は三發しきや  
ない。然し、今なら命中疑ひなしだ。これを外しちや駄目  
だぞ。奴は、俺たちの犬を三匹まで取りやがつたんだ。も  
う躊躇してゐる時ぢやねえよ。おめえ、どう思ふ？」

ヘンリは頷いて同意した。ビルは氣を配りながら、樞の  
縛り革の下から銃を引き出した。彼は銃を肩のところへ持  
つて行かうとしたが、持つて行く間もなかつた。その瞬間、

女狼は道から飛びのいて、樞の密林の中へ駈け込み、姿を  
消してしまつた。

二人の男は顔を見合せた。ヘンリは、成程と言つた風に、  
長く口笛を吹いた。

「俺もこれぐらゐのことは分つてゐた筈なのに。」ビルは  
銃を元の場所へ置きながら、大聲で自分を叱りつけた。「無  
論、飯時にやつて來て犬の間にまざつてゐる程の狼なら、  
飛道具のことを知らねえ筈がねえ。俺は今度こそ、たしか  
にかう思ふよ、ヘンリ。今度の災難はみんな、あん畜生の  
せゐなんだぜ。奴さへゐなきや、犬だつて三匹にならず  
に、ちやんと六匹ゐるんだがなあ。だから、俺はどうした  
つて、奴を殺してやるつもりだ。あいつ、なか／＼すばし  
つこいから、見るところぢや撃つこたあ出來めえ。だか  
ら、俺は待ち伏せてやるんだ。間違ひなく、茂みのところ  
で撃ち殺してやる。」

「だけど、さうするためには、あんまり遠くまで道を踏み外  
しちやいけねえぜ。」相棒は忠告した。「あの群が一度に飛  
びかゝつて來てみる。たつた三發の彈丸ぢや、地獄で咳の  
三つするほど役に立ちやしねえ。奴らは飢ゑ切つてゐる  
んだ。飛びかゝつて來たが最後、おめえを食ひ殺さずにや  
おかねえよ。」  
その夜、二人は早くキャンプを作つた。三匹の犬では、



六匹の時のやうに早い速力で長時間橋を挽くことが出来なかつた。彼等は明かに力を使ひ果した徴候を見せてゐた。それで、二人は早く寝についた。尤も、ビルはその前に、犬共が互ひに噛みつけないやうに離して縛りつけた。

それに反して、狼の方は次第に大膽になつて来て、二人は一度ならず眠りから呼びさまされた。狼が餘りに近くへ来るので、犬は恐怖で氣が狂つたやうになつた。で、時々焚火に薪を投げそへては、その冒險な掠奪者をやゝ安全な距離へ追つ拂はなければならなかつた。

「俺はな、鱈が船の跡をつけるといふ船乗りの話を聞いたことがあるんだが。」ビルは寢床から抜け出して火を焚きそへてから、再び毛布の中へもぐり込んだ時に、言ひ出した。「奴ら狼は陸地の鱈だよ。奴らと来ちや、俺達よりも仕事のことあよく心得てゐらあ。こんな風に俺達の跡をつけるなあ、てめえの身を氣づかつてぢやねえ。奴ら、俺達をとつちめる氣なんだ。たしかにさうだぜ、ヘンリ。」

「おめえ、もう半分はとつちめられてゐるぜ、そんなことを言ふところを見ると。」ヘンリは鋭く逆襲した。「人間、自分で負けるといふ時は、もう半分負けてゐるんだ。そんなことをよくよくするのは、もう半分食はれてゐるやうなものだぜ。」

「奴ら、おめえや俺よりもつと立派な人間だつてとつち

めてゐるんだぜ。」ビルは答へた。「おい、もう泣き言はよせ。全く、おめえの話を聞いてると、うんざりしてしまふよ。」

ヘンリはさう言つてぶり／＼しながら寢返り打つた。然し、ビルがいつものやうに機嫌を悪くしないで驚いた。どうもいつものビルらしくなかつた。ビルは何かづ／＼言はれると、すぐに憤然とする男であつた。ヘンリは寢入るまでに、長い間そのことを考へ廻した。それから、彼の臉が重たくなつて、うと／＼として来た時、彼は心の中でかう思つた。——「いや、全くだ。ビルの顔色は恐ろしく眞つ青だ。あしたは一つ、奴を元氣にしてやらなくちやならねえ。」

### 三、飢餓の叫び

その日は幸先よく明けた。前の晩は一匹の犬も失はなかつた。で、二人はすつかり軽い氣持になつて、足跡の上を辿り、沈黙と暗闇も寒氣の中を進んで行つた。ビルは前夜の不吉な豫感を忘れてしまつた様子で、晝頃、道の峻しいところで橋が顛覆した時など、犬を相手にぶざけたりした。橋の顛覆したことは、厄介な混雑を惹き起した。橋は仰向けに引っくり返つて、樹の幹と大きな岩の間に挟まつて

しまつた。で、二人は挽革の縫れを直すために、犬の革具を外さなければならなかつた。二人は橋の上へ屈みこんで、それを直してゐると、ヘンリは、『片耳』が身を斜にして何處かへ外れて行くのに氣がついた。

「おい、『片耳』」ヘンリは、突つ立つて、犬の方を振りかへりながら叫んだ。

然し、『片耳』は、革紐をうしろに引きずりながら、雪を横切つて一目散に駆け出した。見ると、今来た道の雪の中に、女狼が彼を待つてゐた。然し、『片耳』は彼女に近づくと、急に用心深くなつた。彼は速力を緩めて、警戒するやうな小刻みの歩調になり、それから立ち停つた。彼は注意深く、訝るやうに、而も、何となく慕はしさに、女狼を見守つた。狼は、威嚇するといふよりも、むしろ御機嫌を取るやうに齒をむき出して、彼にほゞ多みかけてゐるやうに見えた。狼は戯れるやうに、二三歩彼に近寄り、それから立ち停つた。『片耳』の方でも狼に近づいたが、相變らず警戒し用心してゐる様子で、尻尾と兩耳を空中に突つ立て、頭を高く持ちあげた。

『片耳』は狼と鼻を嗅ぎ合せようとしたが、狼は戯れるやうに、羞むやうに、後ずさりした。犬の方で進めば進む程、それに應じて、狼の方がぢり／＼後へさがつた。狼は一步一步、人間のゐる仲間の安全地帯から、犬をおびき出した。

これは危いといふ考が、ぼんやり犬の腦裡に閃いたらしく、彼は頭を振り向けて、顛覆した橋と、仲間の犬と、自分を呼んでゐる二人の人間とを見返した。

然し、どんな考が彼の心に浮んでゐようと、それは女狼のために消されてしまつた。狼は彼の方へ進み寄り、ほんの一瞬間、鼻を嗅ぎ合せ、彼が更に進み出すと、又しても羞むやうに後ずさりした。

その間に、ビルは鐵砲のことを思ひ出してゐた。然し、それは顛覆した橋の下へ抑へつけられてゐた。そして、ヘンリと力を合して積荷を直した頃には、危険を冒して鐵砲を撃つには、『片耳』と狼とはあんまり接近しすぎてゐたし、その距離も遠くなりすぎてゐた。

『片耳』が自分の過ちを悟つた時は既に遅過ぎた。二人はまだその原因の分らないうちに、『片耳』がくるりと身をひるがへして、こつちへ駆け戻つてくるのが見えた。すると道に直角をなして迫り、彼の退路を斷たうとして、一ダースばかりの灰色の瘠せた狼の一群が、雪を横切つて驅けるのが二人の眼にはひつた。その刹那、女狼の羞むやうな戯れるやうな身振りは消えてしまつた。彼女は、一聲、唸りを發して、『片耳』に飛びかゝつた。彼は肩でそれを突きつけた。そして、退路は斷たれてゐても、何とかして橋のところにへ戻らうと夢中になつて、進路を變じて橋の方へぐるり



と廻り道して歸らうとした。刻一刻、狼の数は増し、追跡に加つた。女狼は一飛びで『片耳』に飛びつけるのであつたが、自分だけで飛びつかずに、その儘後にくつゝいて走つた。「おい、どこへ行くんだ！」ヘンリは突然、相棒の腕に手をかけて訊いた。

ピルはそれを拂ひのけた。「もう我慢が出来ねえ。俺に何とか出来るうちは、これ以上犬を取られて耐えるもんか。」銃を手にして、道の縁に沿うた叢林の中へ飛びこんだ。彼の意圖は分り過ぎるくらゐ分つてゐた。『片耳』は樞を中心にして圓を描いてゐる。だから、ピルは或る地點で、狼の追跡して来る圓を遮断しようと計畫した。銃を持つてゐるし、白晝だしするから、狼を畏れさせ、犬を救ふことが出来るかも知れないと考へたのであつた。

「おい、ピル！」ヘンリはうしろから呼びかけた。「氣をつけるよ！ 滅多なことをするな！」

ヘンリは樞に腰をおろして見張つてゐた。彼には、それより他どうしやうもなかつた。ピルの姿はもう見えなかつた。たゞ時折、叢林や樞の木立の間に見え隠れする『片耳』の姿が見えた。『片耳』はもう助かる見込みがないと、ヘンリは判断した。犬は十分に危険を感じてゐたが、何しろ彼は圓の外側を走つてゐるのに、狼の群は圓の内側の距離の短い方を走つてゐた。だから、『片耳』が追跡者を遙かに抜

いて、狼の前進して来る圓を切つて、樞のところへ戻り着かうとは、どうしても考へられなかつた。

この異つた進路は、急速に一點へ接近しつゝあつた。木立や茂みに遮られてヘンリには見えなかつたが、あすこら邊の雪のどこかで、狼の群と、『片耳』と、ピルとが一しよになりつゝあるといふことが、ヘンリにはよく分つてゐた。ところが、それが、あまりに早く、彼が豫期してゐたよりもずつと早く起つた。彼は一發の銃聲を耳にした。それから、續けざまに二發。もうそれでピルの彈藥の盡きたことが分つた。と、大變な唸り聲や悲鳴が一齊に聞えた。『片耳』が苦痛と恐怖を訴へる叫び聲が聞き分けられた。彈丸に撃たれた狼の叫び聲も聞えた。そして、それつきりであつた。唸り聲が止んだ。悲鳴も消えた。沈黙が再びこの寂しい土地を掩うた。

ヘンリは長い間樞の上に腰をおろしてゐた。彼には、何が起つたか行つて見る必要がなかつた。それは目の前で起つたかと思へるほどよく分つた。一度は、不意に立ちあがつて、草紐の下から斧を取り出した。然し、又しても、坐りこんで考へこんだ。残りの二匹の犬は、彼の足元に蹲つて顫へてゐた。

たうとう元氣がすつかり體から脱け去つた者のやうに、彼は懶うさうに立ちあがつて、二匹の犬を樞に結へつけた。

彼は自分の肩にも人間用の挽革をかけて、犬と一しよに引いた。然し、遠くまで進まなかつた。暗くなり始めるとすぐに、急いでキャンプを作り、薪をどつさり集めておくやうに氣をつけた。彼は犬に食ひ物をやり、自分も晩飯の支度をして喰べた。そして、焚火のすぐそばへ寢床を拵へた。

然し、彼はその寢床を享樂する運命をもたなかつた。眼を閉ぢない先に、危険が感じられるほど狼共は近くへ來てゐた。彼等の姿を見分けるには、最早、視力を勞する必要がなかつた。彼等は狭い圓を作つて、ヘンリと火のまはり集つてゐた。それが焚火の光に照されて、或は寢をべり、或は坐り、或は腹を地につけて前へ匂ひ出し、或はあつちこつちと歩き廻るのが、はつきりと見えた。中には眠つてゐるのさへあつた。犬のやうに雪の中に體をまるめて、眠くてどうにも出来ないといふ風に眠つてゐるのが、そこかしこに見えた。

ヘンリは焚火を明々と燃やし續けた。自分の體の肉と飢ゑた牙との間を遮るものは、たゞこの火だけであるのを、彼はよく知つてゐた。二匹の犬は彼の兩側に寄り添うて、保護を求めるやうに體をもたげ、くん／＼鳴いたり咆えたりした。そして、時々、狼の一匹が前よりも近くへ寄つてくると、必死となつて唸つた。さういふ風に犬の唸る瞬間には、狼の全圓が殺氣立つた。狼は一齊に立ちあがり、試

験的に前へにじり寄り、ヘンリのまはりには激しい唸りと悲鳴の合唱が起つた。それから、狼の圓は再び坐りこみ、或るものは、こゝかしこで又もとの居眠りを續けるのであつた。

然し、この圓は絶えずヘンリの方へ押し迫つて来る傾向を示した。少しづつ、一度に一時ばかり、こゝの一匹が匂ひ出し、あすこの一匹が匂ひ出して、次第に圓が狭くなつて、終にはこの獸共が一息に飛びかゝつて來られる程の近い距離になつた。そこで、ヘンリは焚火の中から薪の燃えさしを引つ掴んで狼の群へ投げつけた。その度毎に、奴等は急いで退却するのであつたが、狙ひすました燃えさしが、圓々しい奴に巧く當つて、その毛を焼け焦すと、憤怒の叫びと驚きの唸りが起つた。

朝になると、彼はへと／＼に疲れ切つて、寢不足の目はとろんとしてゐた。彼は暗いうちに朝飯をすました。そして、九時になつて、夜が明けると共に、狼の群も退却したので、前夜の長い時間のうちに計畫しておいた仕事に取りかゝつた。先づ若木を幾本か切り倒し、それを横木にして、立木の幹と幹との間へ高く縛りつけて、一つの棚を作つた。それから牽綱代りに樞の縛り革を使つて、犬にも手傳はせて、棺をその棚の上へ引きあげた。

「奴ら、ピルを取りやがつた。今度は俺も取られるかも知



れない。だが、かうしておけば、お前さんだけは取られずにすむよ。」彼は木の墓の中にある死骸に向つて、さう言つた。

それから、彼は道を進んだ。軽くなつた櫛は、悦んでゐる犬のうしろで跳ねた。何故なら、一刻も早く安全になるには、マクガアリの市場へ着きさへすればいいといふことを、犬もよく知つてゐたのであつた。然し、今や狼は益々おほつびらに追跡して来た。うしろの方から、そして兩側にずらりと並んで、小走りに落着き拂つて走つて来た。赤い舌をべろりと垂れ、その瘡せた側腹は、動く度に肋骨の波を打つた。彼等はひどく瘡せてゐて、肉の代りに筋だけで以て、骨組を掩ひ包んでゐる皮袋であつた——あんまりひどい瘡せ方なので、よくもあれでちゃんと走り、雪の中へぐたりと倒れないでゐられるものと、ヘンリは心の中で不思議に思つた程であつた。

彼は暗くなるまで旅程を續ける氣力がなかつた。眞晝には、太陽が南の地平線を暖めただけでなく、その輪廓の上部を、薄青い黄金色に染めて、地平線の上へ突き出した。彼はそれを見て覺つた。日が長くなつて来たのであつた。太陽が回歸して来たのであつた。然し、その光の麗かさが消えるか消えぬうちに、ヘンリはキャンプを作つた。灰色の晝の光と薄暗い黄昏とが、まだ數時間續いたが、彼はそ

れを利用して、ありあまる位どつさり薪を切りとつた。夜と共に恐怖が来た。飢ゑた狼が一層大膽になつた。でなく、睡眠不足がヘンリに影響して来た。彼は焚火のそばに蹲り、毛布で肩を巻き、膝の間に斧を挟んだまゝ、我にもあらず眠りこんだ。その兩側には、犬が身を擦り寄せてゐた。一度目が覺めると、彼の鼻先の、十二呎と離れてゐないところに、全群の中で一番大きい灰色の狼が一匹見えた。彼がそいつを睨みつけても、その獸は、怠け犬のやうに、悠々と身を伸し、大きなあくびをし、お前は今にも食はれる筈なのだが、暫く食はずにおいてある食ひ物だといはんばかりの様子で、彼を我が物顔に眺めた。

この確信は、狼の全群の上に現はれてゐた。數へてみると、その總數は優に二十四匹以上で、或る者は飢ゑ切つた眼で彼を見詰め、或る者は靜かに雪の中に眠つてゐた。その様子たるや、食物を並べたテエブルのまはりに集つて、もう喰べていゝといふ許可を待つてゐる子供を、彼に思ひ出させた。そして、その食物が彼なのであつた。彼は、どんな風にして、何時食事が始まるのかしらと考へた。

彼が焚火の上へ薪を積みあげた時、自分の肉體に對して、曾つて感じたことのない眞價を發見した。彼は自分の筋肉の動きを見詰め、また、十本の指の巧妙な作用に興味を覺えた。焚火の光に翳して、自分の指を、一度に一本、或は

るだけであつた。然し、それは激しい飢餓から來てゐる懐

つこさであることが、ヘンリにはよく分つた。ヘンリは餌食であつた。そして、彼の姿は、強く彼女の味覺をそふのだといふ悦ばしい豫感で、舌を舐めずり廻した。恐怖の痙攣がヘンリの身内を走つた。彼は急いで、燃え

さを掴んで、彼女に投げつけようとした。然し、彼の手

が燃えさしに届いて、五本の指がその飛道具を掴まうとするや、彼女はもう安全な距離へ飛び退いてゐた。それで見ると、彼女が物を投げつけられるのに馴れてゐることが分つた。彼女は飛びすぎる時に、唸り聲を立て、その白い牙を根元まで剥き出した。そして、懐つこさうな馴々しさは消え失せて、その代り肉食獸の兇暴さが現はれ、ヘンリを身顫ひさせた。彼は燃えさしを持つてゐる自分の手を見詰め、それを掴む指先の微妙な器用さに氣がついた。五本の指が粗い薪を、上から抑へ、下から支へ、まはりを取り巻き、火の燃えてゐる部分にあまりに近い一本の指が、敏感に、自動的に、火傷をする熱さを避けて、他の熱くない掴み場所へ曲つてゐるなど、すつかり薪の表面の凸凹に適合してゐた。然し、彼はその同じ瞬間に、その同じ敏感で巧妙な指が、女狼の白い歯で噛み碎かれる幻を見るやうな思ひがした。彼は、自分の肉體の存在が危険に瀕してゐる今

一度に全部を、ゆつくりと曲げ、幾度もさうやつて見た。或は、五本の指を廣く開いたり、急に物を掴む眞似をしたりして見た。更にまた、爪の構造を研究した。そして、指先で鋭く突いてみたり、柔かく押してみたりして、それによつて生ずる神經の感覺を測定した。それは彼の心を魅了した。彼は急に、かくも美しく、かくも滑かな、かくも微妙な、自分の巧緻な肉をいとほしく思つた。それから、彼は自分のまはりに待ち遠しげに控へてゐる狼の圓に、恐怖の一瞥を投げた。すると、不意に殴りつけられたやうに、自分の驚くべき體、その生きた肉が、單なる餌食であり、貪婪な獸の追求物であり、やがては彼等狼の飢ゑた牙で引き裂かれ噛み碎かれるのであつて、大鹿や兎が屢々自分の榮養となつたと同じやうに、自分自身が狼の榮養となるのだといふことが、はつきりと感じられた。

彼は半ば夢魔に襲はれてゐた眠りから覺めると、目の前に例の赤い色の女狼の姿が見えた。彼女は五六呎と離れてゐない近くで、雪の中へ腰を下ろし、馴々しげに彼を見詰めてゐた。二匹の犬は、ヘンリの足先で、くん／＼鼻をな

らしたり、唸つたりしてゐたが、彼女はそれに目もくれなかつた。たゞ人間だけをちつと眺めてゐた。で、暫くヘンリも彼女を眺め返した。彼女の様子には、威嚇するやうな氣合が少しもなかつた。さも懐しさうに馴々しく眺めてゐる



ほど、その肉體をいとはしく思つたことがなかつた。夜つびて、彼は燃える薪を以て、飢ゑた狼の群と戦つた。彼がわれにもあらず眠りに陥ると、犬の鳴き唸る聲が彼を眠りから起した。朝になつたが、晝の光も狼を追ひ散らすことが出来なかつた。こんなことは、今日が初めてであつた。ヘンリは狼の退却するのを待つたが、徒勞に歸した。彼等は依然として彼と焚火のまはりには圓を作り、傲慢な所有の態度を示してゐた。そのため、朝の光によつて生じたヘンリの勇氣も挫けてしまつた。

ヘンリは必死の勇を振つて進み出ようとした。然し、彼が焚火の保護を離れた瞬間、最も大膽な狼が彼に躍りかゝつた。然し、仕損じた。彼は飛びすさつて難を免れた。狼の兩顎は、彼の腿から六吋足らずのところ、噛み合された。一群の残りの狼は一齊に起ちあがつて、彼に襲ひかゝつた。ヘンリはそれを相當離れた距離へまで追ひ拂ふために、左右へ薪の燃えさしを投げ散らかすが、何よりも急務であつた。

晝間でさへ、彼は新しく薪を切りとりたくも、焚火のそばを離れることが出来なかつた。二十呎向うには、大きな樅の枯木が一本聳えてゐた。彼は半日費して、キャンプの火をその木まで延長した。その間でも、始終、燃える薪を手元に用意して、敵に投げつけなければならなかつた。や

つと、枯木に達すると、今度は、最も薪の多さうな方向へその木を倒すために、周囲の森を調べた。

その夜も前の夜の繰返しであつた。たゞ、睡眠の必要が耐へ難いほどになつて来た。犬の唸り聲も、最早、その効力を失つた。その上、犬は始終、唸り續けたので、彼の痺痺した鈍重な感覺は、最早、その聲の高低や強弱の變化を感ずることが出来なかつた。彼はぎよつとして目が覺めた。見ると、女狼が一碼以内の近くに來てゐた。はつとして機械的に、近い距離をそのままに、彼は燃えさしを狼の大きく開けて唸つてゐる口の中へ押し込んだ。女狼は飛びすさつて、苦痛の叫びをあげた。ヘンリは焦げた肉や毛の臭ひを小氣味好く感じながら見ると、女狼は二十呎ばかり向うで、頭を振り、激しい怒りの唸り聲を發してゐた。

然し、今度は、再び眠りこむ前に、彼は燃えてゐる松の瘤枝を右手に結びつけた。かうして彼は目を閉ぢたが、僅か數分間うとくとしたと思ふと、今度は焔が手の肉を燒くので目が覺めた。數時間、彼はこのプログラムに固執した。かういふ風にして彼は目が覺める度に、燃えさしを投げつけては狼を追ひ拂ひ、焚火に薪をくべ、手に松の瘤枝を結び直した。この遣り方は非常に巧くいつたが、そのうち一度、松の瘤枝をゆるく結んでしまつた。で、目をとちて間もなく、それは手から滑り落ちた。

彼は夢を見た。何だかマクガアリの市場にゐるやうな氣がした。そこは暖かで居心地がよく、彼はその管理人とカルタをしてゐた。ところが、その市場が狼に包圍されてゐるやうだつた。狼は門のすぐ外で、咆えてゐた。彼と管理人は、時々カルタの手を休めては、その聲に耳を傾け、狼が門の中へ入り込まうとして無駄な努力を續けてゐるのを笑つた。暫くすると、随分奇妙な夢で、がしやりといふ大きな音がした。扉が押し破られたのであつた。と、狼の群が市場の大きな部屋へ、どつと流れこんで來るのが見えた。狼の群は、彼と管理人を目がけて飛びかゝつて來た。

扉の押し破られたのと同時に、狼の咆え叫ぶ騒ぎが、物凄くいほど激しくなつてゐた。今、ヘンリはその唸り聲に惱まされてゐた。彼の夢は、次第に他の夢に變つて來た——彼にはそれが何の夢だかはつきりしなかつたが、その間中、唸り聲だけは絶えず彼に迫つて來た。

それから程なく目が覺めると、その唸り聲の現實であるのが分つた。すさまじく唸り叫ぶ聲であつた。そして、狼は彼に向つて突進してゐた。彼等は一齊に彼を取り巻き、彼に迫つた。一匹の齒が彼の腕を噛んだ。本能的に、彼は焚火の中へ飛びこんだ。そして、彼が飛び込んだ時、片足の肉を鋭く噛まれたのを感じた。それから、火の戦ひが始まつた。彼の頑丈な長手袋が、暫くは彼の手を保護した。

で、彼は眞赤な炭火を擦つて、四方八方へ投げ散らしたので、キャンプの焚火が、まるで噴火山のやうな状態を呈した。

然し、それは長く續かなかつた。彼の顔は火熱で爛れ、眉毛や睫毛は焼け焦げてしまつた。足元の火の熱さも耐へられなくなつて來た。彼は兩手に燃え立つ薪を握んで、焚火の端へ飛び出した。見ると、狼はいつの間にか逐ひまくられてゐた。炭火の落ちたところ、雪が、じゆうじゆう音を立て、解けてゐた。刻一刻、狼が夢中で飛びあがつて、唸り聲を發して退却するのは、かうした炭火を踏みつけたからであつた。

敵の最も近くにゐる奴に、手に持つた燃えさしを投げつけて、ヘンリは燻ぶつてゐる手袋を雪の中へ突つ込み、足を冷すために、雪の上を踏み廻つた。二匹の犬の姿は見えなかつた。彼等は、幾日か前の日にフアティで始まつた長い食事のうちの一品として役立つたのであつて、續く日の最後の料理は、恐らくヘンリ自身であらうといふことが、彼にはよく分つてゐた。

「貴様等、まだ俺をとらねえのか！」彼は飢ゑた獸に向つて荒々しく拳を振りあげて叫んだ。すると、その聲の響で狼の全圓が昂奮して、一齊に唸り聲が起つた。そして、例の女狼が雪を横切つて、彼の方へ忍びより、飢餓から來る



人懐つこい態度で彼を見詰めた。

彼はふと思ひついた新しい考を遂行するために働き始めた。彼は焚火を押し擴げて、大きな圓を作った。そして、その圓の真ん中で、解けた雪で濡れるのを防ぐために、寝道具を敷き、その上に蹲った。かうして彼は焔の隠家の中へ姿を消したので、狼の群は彼の行方を探して、火の縁へ不思議さうに寄つて來た。彼等はこれまで、火のそばへ來ることを拒まれてゐたのだが、今や狭い圓をつくつて陣取り、まるで大勢の犬が並んだやうになつて、その馴れない暖かさに、瞬きしたり、欠伸したり、瘠せた體を伸したりしてゐた。すると、例の女狼は尻をおろし、星の方へ鼻を向けて、咆え始めた。一匹、また一匹、他の狼もそれに倣つた。終に、全軍の狼が尻をおろし、星に向つて鼻を突き出し、飢餓の叫びを咆え始めた。

曉が來、次いで晝になつた。焚火は次第に衰へて來た。薪が盡きたので、更にそれを取つて來る必要があつた。ヘンリは、火の圓から外へ踏み出さうと企てた。然し、さうすると、狼が彼の方へ押し寄せてくるのであつた。燃えてゐる薪を投げつけると、狼は飛びすざりはするが、最早、退却はしなかつた。ヘンリは彼等を逐ひ拂はうと努力したが、徒勞に終つた。彼が斷念して、火の圓の中へよろめきこんだ時、一匹の狼が彼に飛びかゝり、仕損じ、四肢で炭

火を踏みつけた。すると、恐怖の叫びをあげ、同時に唸りながら、あわてゝ飛び退り雪で蹠を冷した。

ヘンリは毛布の上に腰をおろして、しやがみこんだ。上半身をぐつたりと前へ曲げ、兩肩をだらりと下げ、膝に頭を載せてゐる様子は、彼がもう闘争を斷念してしまつたのを物語つてゐた。時々、彼は顔をあげて、焚火の衰へて行くのを見た。焔と炭火との圓が、ところ／＼缺けて、幾つかの弓形になつた。そして、その缺け目は次第に大きく、その弓形は次第に縮小した。

「もうかうなりや、何時でもやつて來て、俺を食ふことが出来るだらう。」彼はぶつ／＼と呟いた。「とにかく、俺は寢るよ。」

一度眼が覺めると、圓の缺け目の、彼のすぐ眞つ正面に、女狼が彼を見詰めてゐるのが見えた。

再び眼が覺めた。それはほんの暫く後だつたが、彼には數時間も経つたやうに思はれた。見ると、不思議な變化が起つてゐた——おやと思つてすつかり目が覺めた程、不思議な變化であつた。何事か起つたのだ。最初、彼には理解出來なかつたが、すぐに分つた。狼が退散したのだ。跡にはたゞ、踏みつけられた雪が、いかに近くまで彼等が押し寄せてゐたかを示してゐた。再び眼氣が湧き起つて、彼を掴んだ。彼の頭は膝の上へ沈み落ちた。その時、突然、ぎ

よつとして彼は目をさました。

人間の叫び聲、櫓の軋る音、革具のぎし／＼いふ音、緊張してゐる犬の熱心な鳴聲が聞えた。四臺の櫓が、河床からこの木立の中のキャンプの方へ牽き込まれた。六人の男が、消え衰へた焚火の中央に蹲つてゐる男を取り巻いた。彼等はその男の眼を覺ますために、揺り動かし、小突き廻した。彼は酔つぱらひのやうに、彼等を眺めて、奇妙な、睡さうな聲でもぐ／＼言つた。

「赤い女狼の奴……飯時にやつて來て、犬の間にまざつて……初めは犬の食ひ物を取りやがつたが……それから、犬を食ひやがつて……それから、ビールを、ビールを食ひやがつて……」

「アルフレッドの旦那は何處にゐなさるんだ。」彼等の一人が、彼を荒々しく揺り動かしながら、耳元で怒鳴つた。

彼はのろく頭を振つた。「奴、旦那を食やしなかつたよ……旦那はこの前のキャンプで、木の上に休んでゐるよ。」

「死んだのか？」その男は叫んだ。  
「うん、箱の中へはひつてる。」ヘンリは答へた。彼はひどく不機嫌に、肩からこの質問者の手を振り放した。「おい、暫くうつつちやつといてくれ……俺はへと／＼にくたびれてるんだ……おい、みんな、俺は寢るよ。」  
彼の目は睡さうにぱち／＼して閉ぢた。彼の顎はぐたり

と胸の上へ落ちた。そして、人々が彼を毛布の上に寢かしてやると、高い軒が凍つた空氣の中に響いた。

然し、まだ他にも物音があつた。それは、遠く幽かに、遙か彼方で聞えた。今の男を食ひ損つたので、更に他の肉を追うてゐる、飢ゑた狼の群の叫び聲であつた。

450枚246



## 第二部

### 一、牙の戦

人間の聲と犛犬の鳴き聲を、眞つ先に聞きつけたのが、例、女狼であつた。そして、消えかゝつた焔の圓の中へ追ひ詰められた人間から、眞つ先に飛び退いたのも、その女狼であつた。狼の群は、折角追ひ詰めた獲物を見棄てるのを口惜しがつて、その物音をたしかめながら、數秒間うろろ歩き廻つてゐたが、それも矢張り、女狼の跡を追うて飛び去つて行つた。

全群の先頭を切つて走つて行くのは、一匹の大きな灰色の狼で——數匹の指導者のうちの二匹であつた。女狼の跡について全群の進む方向を指圖するのが、この狼であつた。又、群中の若いのが野心的に彼を追ひ越さうとすると、それを戒めるやうに唸つたり、白い牙で噛みついたりするのでも、矢張りその狼であつた。そして今、女狼が雪を横切つてゆつくり歩いて行くのを見て、急に歩調を早めて彼女に追ひついたのも、その狼であつた。

女狼はその狼のそばに並んで、それを自分の定められた地位と考へる様子で進み、そして、全群と足並を揃へた。

然し、兩方が同時に言ひ寄る時は、兩方から荒々しく突きめくられるので、彼女は餘儀なく、左右に素早く噛みついて、二匹の情人を追ひのけ、そして、それと同時に、先へ進む自分の歩調を全群と合し、自分の前進する足元を注意するのであつた。さういふ時には、兩側の相手は齒をむき出し、女狼を距て、威嚇するやうに咆え合つた。この二匹は喧嘩しかねない様子であつたが、然し、戀の戯れや戀の競争さへも、全群の一層切迫した飢餓のために控へなければならなかつた。

かういふ鬨退を食ふたびに、老狼は自分の性慾の目的物である鋭い齒の女狼から慌て、離れるので、彼は自分の目のつぶれてゐる右側を走つてゐる三歳の若狼に、ぶつかつた。この若狼はもうすつかり一人前の大きさになつてゐて、全群の飢ゑ疲れてゐる状態から見ると、普通以上の精力と元氣をもつてゐた。それにも拘らず、彼は自分の頭を、片目の老狼の肩と並べて進んだ。若し、老狼と頭を並べて進むやうな眞體をしようものなら、そんな事は殆どなかつたが、老狼は一聲唸つて彼に噛みついて、自分の肩のところまで追ひ返した。然し、時々、若狼は注意深くゆつくりとうしろへさがつて、老指導者と女狼の間へ割りこんだ。それは、二重の怒り、三重の怒りさへ買つた。女狼が不機嫌な唸りを發すると、老いた指導者は三歳の若狼に食つてか

彼の方でも、女狼が何かの拍子で彼の前へ乗り出すことがあつても、彼女に向つて唸りもせず、白い齒を剃き出しもしなかつた。それどころか、彼は女狼に好意を寄せてゐるやうに見えた——然し、それがあんまり親切過ぎて、女狼の方で持てあましてゐる程であつた。彼はともすると、彼女に近く擦り寄り、それがあんまり近寄り過ぎるので、彼女の方が却つて、唸つたり齒をむき出したりした。時として、彼女は鋭く彼の肩を噛むこともないではなかつた。さういふ時でも、彼は怒つた様子を見せなかつた。彼は單にわきの方へ飛びのいて、不様な足取りでこのくくと五六歩前へ駆けて行つた。その格好や態度は、田舎の若者のてれた時の様子そっくりであつた。

これが、全群の行進中に於ける、彼の一つの厄介事であつた。然し、女狼の方には、もつと他に厄介事があつた。彼女のもう一方の側には、白髪まじりの、幾多の戦鬪で受けた傷痕だらけの、瘡せこけた老狼が走つてゐた。彼はいつでも、彼女の右側に並んで走つた。それは、彼が片目だけで、その片目が左眼であるせいであらう。その老狼も亦、何かといふとすぐ彼女に擦り寄り、彼女の方へ顔を向け、その傷痕だらけの口で、彼女の體や肩や頭にふれるのであつた。すると彼女は、左側を走つてゐる相手にしたと同じやうに、齒をむいてその心盡しをはねつけるのであつた。

かつた。時とすると、女狼も一しよに食つてかゝり、時とすると、左側の若い指導者も食つてかゝる事があつた。

さういふ時、三組の兇暴な齒に直面して、若い狼は急に踏み止まり、お尻を地につけ、前足をしつかり踏みしめ、威嚇するやうに口を開け、首筋の毛を逆立てた。前進中の群の前方で、かうした騒ぎが起ると、後方でも必ず騒ぎが捲き起つた。後方の狼は、若狼に衝突するので、若狼の後足や側腹に鋭く噛みついて、不快の感を現はした。食ひ物の缺乏に短氣はつきものなので、若狼はひとりでも不愉快を忍ぶより他はなかつた。然し、年少客氣の際限のない確信を以て、彼は又しても、この策略をしつこく繰返した。然し、それは失敗以外の何物をも齎らさなかつた。

若し食物があつたとしたら、戀と争闘はさつさと行はれて、全群の組織が破壊されてゐたことだらう。然し、全群の立場は絶望的であつた。長い間の飢餓のために、瘡せ衰へてゐた。走り方も通常の速力以下になつてゐた。後方には、生れて間もないのや、ひどく年を取つた、弱い連中が跛を引いてゐた。前方には強いのがゐた。然し、どれも皆、ちやんと血や肉のある狼といふよりは、むしろ骸骨のやうであつた。それにも拘らず、跛を引いてゐる幾匹かを除けば、彼等の動きは、輕快で、疲れを知らぬ様子であつた。その逞しい筋肉は無限の精力の源泉のやうであつた。鋼鐵



のやうに収縮した筋肉の下に、更に、一つの鋼鐵のやうに収縮したのがあり、更にその下に、又その下にと、限りなく重なつてゐるやうであつた。

彼等は、その日幾哩となく走つた。その夜も走つた。その翌日も依然として走り續けた。彼等は、凍りつき死んでゐる世界の表面を走り續けてゐた。動いてゐる一つの生命もなかつた。たゞ彼等だけが、廣漠たる死のやうな荒野を動いて行つた。生きてゐる者は彼等だけであつた。そして、彼等は他の生きてゐる者を探し求めて、それを貪り食つて、自分の生命を持續しようとするのであつた。

彼等の探求が報いられるまでに、彼等は低い分水嶺を横切り、低地にある十二ばかりの小河を跋渉した。そこで、彼等は大鹿に出會つた。それは彼等の初めて見つけた大きな一匹の牡鹿であつた。こゝには、食物があり、生命があつた。そして、それは不思議な焚火や燃える薪の飛び道具で防禦されてゐなかつた。平つたい蹄や、掌のやうな叉角なら、彼等はよく知つてゐた。それで、普段の忍耐や注意を投げ棄て、しまつた。短い、猛烈な戦が起つた。その大きな牡鹿は、四方八方から包圍された。彼はその大きな蹄で、巧妙に蹴散らして、狼を引き裂き、狼の頭を割つた。その大きな角にかけて、狼を叩き潰した。又、轉がりながらの鬭ひに於て、狼を雪の中へ押し潰した。然し、彼の運

命は拙なかつた。例の女狼に喉笛を殘忍に引き裂かれ、他の狼共に全身到るところ噛みつかれて、たうとう倒れてしまつた。そして、彼の最後の鬭争のまだ止まないうちに、彼の致命傷のまだ息の根をとめないうちに、生きながらにして貪り食はれてしまつた。

豊富な肉であつた。牡鹿は體重八百ポンドを越えてゐたので——全群四十四にあまる狼に對して、一匹あて優に二十ポンドの肉であつた。然し、彼等狼は思ひ切り長い絶食をすることも出来れば、思ひ切り多食することも出来た。間もなくあたりへ散らかつた僅かばかりの骨が、つい二三時前に狼の群に出會した立派な生きた獸の名残りのすべてであつた。

今度は、十分な休息と、十分な睡眠が取れた。胃袋が一杯になつたので、若い雄の狼の間にいざこざや喧嘩が始まつた。そして、それは數日後にこの一群の解散するまで續いた。飢餓は去つた。今や狼たちは、獲物の國へ來てゐるのであつた。で、彼等はまだ群をなして獲物を求めてゐたが、今までのやうに無謀なところがなくなつて、大鹿の小群に出會ふと、その中から、身重の牝鹿や跛の老いた牡鹿を選び出しては襲ふのであつた。

然し、終に、この豐饒な土地に於て、全群が二分して、別々の方向へ進む日が來た。女狼と、その左手の若い指導

者と、右手の片目の指導者とが、分れた半分を率ゐて、マツケンジイ河へ出て、更にそれを横切つて東部の湖水地方へ進んだ。この群の残りは、毎日その數を減じた。女狼と男狼が、二匹、また二匹と、次第に逃亡した。又、時折、孤獨な男狼が戀仇の鋭い齒で逐ひのけられた。たうとう最後には、四匹だけが残つた。即ち、女狼、若い指導者、片目の指導者、それに野心を抱く三歳の狼が、それであつた。女狼は今や非常な兇暴性を帯びて來た。三匹の求婚者はいづれも彼女に噛まれた傷痕を留めてゐた。然し、彼等は決して噛み返しもしなければ、自分を防禦もしなかつた。彼等は彼女の野蠻この上もない噛みつきに對して肩を向けるだけで、尾を振り氣取つた足取りをして、彼女の憤激を鎮めるやうに努めた。然し、彼等は女狼には優しくしてゐたが、お互同志に向つてはひどく野蠻であつた。三歳の狼はその野蠻さの點でも野心的になり過ぎた。彼は片目の先輩の、目の見えない側を襲つて、その耳をずた／＼に引き裂いた。白髪まじりのこの老狼は、片側しか見えなかつたが、敵の若さと元氣に對して、長年の經驗から得た智慧を働かした。彼の潰れた目と傷痕だらけの口は、彼の經驗がどんな性質のものだかをよく現はしてゐた。何しろ數々の戦ひを通して生き伸びて來た彼として、この場合いかになすべきかについて一瞬間も躊躇しなかつた。

戦ひは堂々と開始された。然し、堂々と結末を告げなかつた。どつちが勝つたであらうかといふ事は分らなかつた。といふのは、第三の狼が老狼の方に味方して、二匹一緒になつて、この野心的な三歳の狼を攻撃し、彼を粉砕しにかつた。そのために、彼は先刻までは仲間同志であつたものの、殘忍な齒で、兩側から攻め立てられた。彼等が共に食ひ物を探し、獲物を倒し、飢餓に苦しんだ日のことは、忘れられてしまつた。その仕事は過去のことであつた。今日目の前にあるのは、戀の仕事で——それは食ひ物の探求よりも、遙かに苛酷で殘酷な仕事であつた。

かうして戦ひが續けられてゐる間、この戦ひのすべての原因であつた女狼は、満足さうに尻をおろして見物してゐた。彼女はそれを悦んでさへゐた。今こそ彼女の得意の日であつた——滅多に來ない彼女の日であつた——鬻が逆立ち、牙と牙とが打ち合ひ、或は、その牙が力の弱い方の肉を食ひ裂き噛み切るのも、みんな彼女を所有せんがためであつた。

そして三歳の狼は、初めて試みたこの戀の冒險に於て、命を落した。彼の死骸の兩側には、二匹の戀の競争者が立つてゐた。そして彼等は、女狼が微笑を浮べながら雪の中に坐つてゐるのを、ちつと眺めてゐた。然し、老狼は賢明であつた。戦ひに於けると同じく、戀に於ても甚だ賢明で



あつた。若い方の指導者が自分の肩の傷を舐めるために頸を曲げた。その曲げられた頸筋が、丁度戀仇の方を向いた。老狼は片目で以て機會を見てとつた。彼は低く突撃して、ぐさと牙を立てた。それは長い見事な噛みつきで、十分深くもあつた。そして、そのついでに、彼の齒は相手の喉の大動脈を裂いた。そして、彼はひらりと飛びのいた。

若い指導者は恐ろしく唸つたが、その唸りは途中で咽せざるやうな咳に變つた。血にまみれ、咳をし、もう息も絶え絶えになつてゐたが、彼は尙も老狼に飛びかゝつて戦つた。然し、生氣は消え、足の力はなくなり、目の光は鈍つて来て、攻撃も突進も次第に効を奏さなくなつた。

その間中、女狼は地面に尻をおろしたまゝ微笑してゐた。彼女は何となくこの戦を悦んでゐた。これが荒野に於ける戀の口説であり、自然界に於ける性の悲劇であつた。が、それは、たゞ死んだ者にのみ悲劇であつた。生き残つた者にとつては、それは悲劇でなく、願望の實現であり成就であつた。

若い指導者は雪の中に倒れて、最早動かなくなつたので、『片目』はのそくと女狼の方へ歩み寄つた。彼の態度は、勝利と警戒のまじり合つたそれであつた。彼は明かに拒絶を受けることを豫期してゐた。然るに、彼女は憤然として齒をむき出さなかつたので、彼は明かに驚いた。彼女は今

初めて彼を親切に遇した。彼と鼻を嗅ぎ合せ、まるで仔犬のやうな態度になつて、彼と一しよに飛び廻り、ぢやれつき、ふざけ散らした。彼も亦、白髪まじりの老齡と、賢しい經驗とにかゝはらず、同じく仔犬のやうに、いや、いくらか馬鹿げた風にさへ振舞つた。

征服された戀仇のことも、雪の上に血で書かれた戀物語も、既に忘れられてしまつた。たゞ一度、老いた『片目』は、血の乾く自分の傷を舐めるために立ち停つた。その時だけ、彼の唇は半ば歪んで唸りを發し、頸や肩の毛は我知らず逆立ち、同時に飛びかゝるやうに半ば腰を曲げ、しつかり踏みかまへるために、彼の爪は雪の表面を癢癢するやうに引つ摺んだ。然し、次の瞬間にはすべては忘れられ、彼は女狼のうしろから走り、女狼も羞むやうな素振りを見せながら、木立の間を獲物を追ひながら彼を導いて行つた。

それから後、彼等は心の合つた友達のやうに、肩を並べて走つた。幾日か過ぎ、彼等は共に連れ立ち、獲物を追つては、一しよにそれを殺して食つた。暫くたつと、女狼は何となく落着きのない様子を出した。何かを探しながら、それが見つからないやうな様子だつた。倒れた木の下の窪みなどが、彼女の心を惹くやうに見えた。彼女は岩の間の雪に埋れた大きな割目や、突き出した河岸のかげにある洞穴を、長い間嗅ぎ廻つた。老『片目』はかうしたことに

全然關心を持たなかつたが、上機嫌で彼女の探索のあとに従いて廻つた。そして、彼女の調査がこれと思ふ場所までひどく長引くやうな時には、彼は腰をおろして、彼女が出發の用意をするまで待つのであつた。

彼等は一ツ場所に留まらないで、その地方を先から先へと旅をし、再びマッケンジイ河へ立ち戻り、それに沿うておもむろに下つて行つた。その途中、度々、この河に注ぐ小河に沿うて獲物を追ふこともあつたが、また必ず元の本流へ歸つて來た。時折、彼等は他の狼、大概一對になつてゐるのに出會つた。然し、彼等はどつちの方からも、同類らしい親しさも示さず、出會つた悦びも見せず、群の組織へ戻らうといふ願望も現はさなかつた。又、幾度もひとりぼつちの狼に出會つた。これらは何時でも男狼であつて、『片目』とその伴侶の一行に加へて貰ひたさうに、しつこく纏ひつた。すると、『片目』はそれを憤つた。そして、女狼が彼と肩を並べて立ち、毛を逆立て齒をむき出すと、切なげにしてゐる孤獨の狼は、後ずさりし、尻尾をむけ、又してもその寂しい道を歩き續けるのであつた。

或る月明の夜、静かな森を走つてゐると、不意に『片目』が立ち停つた。彼の口は上を向き、尾は硬くなり、小鼻は膨らんでしきりと臭ひを嗅いだ。彼は犬のするやうに片足をもちあげさへした。彼は納得出來ないので、しきりと空

氣を嗅ぎ續け、臭ひがもたらす消息を理解しようとなつた。然し、女狼の方は氣にもとめないやうに一寸それを嗅いだだけで満足して、彼を安心させるために、足早やに歩き出した。彼はその後に従つたが、まだ何となく不安な様子で、その臭ひの警告をもつと注意深く研究するために、時々、立ち止まらずにはゐられなかつた。

彼女は木立の眞ん中にある大きな廣場の縁へ、警戒しながら忍び出た。暫く彼女はひとりで立つてゐた。それから、『片目』がこつそり忍び足で、全身の感覺を緊張させ、全身の毛に無限の疑ひを發散させて、彼女に加はつた。彼等は目を見張り、耳を澄まし、臭ひを嗅ぎながら、並んで立つた。

すると、彼等の耳に響いて來たのは、いがみ合ひ取つ組みあつてゐる犬共の音、男たちの喉にかゝる叫び、女たちの叱りつける鋭い聲、それから、子供のきい／＼哀れつぽく泣く聲であつた。大きな幾つかの獣皮のテントの他、焚火の焰が見えるだけで、その他は何にも見えなかつた。ただ人影の動くのがその焰を遮つた。そして、烟が静かに空中に立ち昇つてゐた。然し、彼等の小鼻へは、インデアンのカンプの無数の臭ひが漂つて來た。それは『片目』にとつて大部分知らないことであつたが、女狼はその一つ一つを委しく知つてゐた。



女狼は奇妙に心を動かされて、次第に増してくる悦びで、鼻をくん／＼させた。然し、老『片目』は疑念に驅られた。彼はその不安の念を外へ現はして、試みに立ち去らうとした。彼女は振り向いて、大丈夫だと言はんばかりに、口を彼の頸に觸れた。それから、再びキャンプをちつと眺めた。新しい人懐っこさうな色が彼女の顔に現はれた。然し、それは飢餓から来る人懐っこさではなかつた。彼女は前へ進み出て、その焚火の近くへ行き、犬とぢやれ合つたり、人間のよろめく足元を避けて身をかはしたり、さうした事をしたいといふ欲望で身顛ひした。

『片目』は彼女のそばで苛立しさうに身を動かした。女狼の不安が再び返つて来た。彼女は探し求めてゐた物を見つけないければならないといふ切迫した必要を感じた。で、彼女は踵を返して、森の中へ早足で駆けこんだ。『片目』はほつと安心して、二人がすつかり森の隠家に姿をかくすまで、少し彼女の先に立つて走つた。

月光を浴びながら、彼等は影のやうに音も立てずに滑つて行くと、不圖、一筋の通路に出會した。二人の鼻は雪の中の足跡に向けられた。その足跡は踏まれてまだ間もないものであつた。『片目』は警戒しながら先頭に立ち、女狼はその後に従つて走つた。彼等は肢を大股にひろげ、その踏みつける雪の感じは天鵞絨のやうであつた。『片目』は白い

雪の眞ん中に、微かに動く白いものを見つけた。彼の滑るやうな足取りは、目を迷はず程に早かつたが、今走り出した速度は、それと比較にならないほど早かつた。今見つけた微かな點のやうな白いものは、彼の前方で飛び跳ねた。彼等は若い樅の木の小徑に突つ立つてゐる小徑を走つた。その小徑の入口が、月に照された空地に開けてゐるものが、木立の間から見えた。老『片目』はその飛んで行く白いものに迅速に追ひついてゐた。一飛び、また一飛び、彼は近づいた。今や、彼は追ひ詰めた。今一飛びで、彼の齒はそれに噛みつくところであつた。然し、その一飛びが出なかつた。その白いものは、空中高く、眞つ直に飛びあがりして、彼の頭上の空中で幻想的な踊りを演じ、一度も地上へ降りて來なかつた。

『片目』は不意にぎよつとした驚きの鼻息を洩して飛び退つた。それから雪の上へ縮みこみ、得體の分らぬこの恐怖の生物に向つて、威嚇するやうに唸つた。然し、女狼は冷やがて踊つてゐる兎に向つて飛びかゝつた。彼女もかなり高く飛びあがつたのだが、獲物の高さにまで達しなかつた。彼女の齒はかちやりと金屬のやうな音を立てて、空しく噛み合された。彼女は、飛びあがり、また飛びあがつた。

彼女の相棒は、おもむろに蹲つてゐる姿勢を緩めて、彼女を見詰めてゐた。が、今や、彼女の度々の失敗に對して不快さを現はし、自ら力強い飛躍をなした。彼の齒は兎を噛んだ。そして、自分の體と一しよにそれを地上へ引きずり落した。然し、それと同時に、彼のそばで、びし／＼と音を立てる妙な運動が起つた。そして、彼の驚いた眼に、一本の若い樅の木が彼を打つやうに折れ曲るのが見えた。

彼の頸は獲物を放した。彼は飛びすさつて、この不思議な危険から身を脱れた。彼の唇は釣りあがつて牙をむき出し、喉は唸りを發し、全身の毛は憤怒と驚駭で逆立つた。その瞬間、若木はほつそりした幹を立て直し、兎はまた空中へ飛びあがつて踊つた。

女狼は怒つた。彼女は非難するやうに相手の肩へぐさりと牙をたてた。すると、彼はこの新しい襲撃が何を意味するか分らないで、吃驚して、猛烈に彼女を突き返し、更に恐怖のあまり、彼女の口の横側を噛み裂いた。ところが、彼女の方でも、かうした非難に對して彼の怒つたのが意外だつたので、彼女は憤激の唸り聲を立て、彼に飛びかゝつた。すると、彼は自分の過ちに氣がついて、彼女を宥めようと努力した。然し、彼女は厳しく彼を罰しようとしたので、たうとう彼は宥めようとするあらゆる努力を放棄して、彼女から頭をそむけ、彼女の齒の處罰を肩に受けながら、

ぐる／＼圓を描いて走つた。

その間、兎は彼等の頭上の空中で踊つてゐた。女狼は雪の中に坐りこんだ。老『片目』は、今では不思議な若木よりも相棒に附する恐怖が大きかつたので、又しても兎に飛びかゝつた。彼は齒の間に兎をくはへて地面へ降りると、その目をぢつと若木に注いだ。若木は、以前と同じやうに彼を追うて地面の方へ折れ曲つた。彼は毛を逆立て、その襲ひかゝる打撃の下に身を屈めたが、その齒はしつかりと兎をくはへて放さなかつた。然し、若木は彼を打たなかつた。たゞ彼の上へ折れ曲つてゐるだけであつた。彼が動くと、木も動いた。で、彼は食ひしばつた齒の間から、その木に向つて唸つた。彼が靜かにしてゐると、その木も靜かにしてゐるので、彼は靜かにしてゐるさへすれば安全だといふ結論に達した。それに、兎の暖い血が、彼の口にはいい味だつた。

彼が陥つた困惑から彼を救ひ出したのは、相棒の女狼であつた。彼女は彼から兎を取つて、若木が頭上で威嚇するやうにゆら／＼揺れてゐるのに、落着き拂つて兎の頭を噛み切つた。すると、若木は忽ち弾ねかへつて、それからは何ごともなく、自然が生長するやうに意圖した行儀の好い垂直の姿勢を保つた。それから、女狼と「片目」とは、この不思議な若木が捕まへておいてくれた獲物を貪り食つた。



まだ他にも兎の空中にぶら下がってゐる小徑や通路があつた。この狼夫婦は、それを残らず調べた。女狼が案内すると、『片目』は注意深くそれに従ひ、兎の獲物を盗む方法を學んだ——それは、後の日、彼にとつて大いに役に立つ知識であつた。

## 二、獸 穴

二日間といふもの、女狼と『片目』はインデアンの子のまほりをうろついた。彼は、當惑もし氣がかりでもあつたが、女狼はキャンプに心を惹かれ、そこを立ち去るのを厭がつた。然し、或る朝、銃の爆音が近くの空気を劈き、一發の彈丸が『片目』の頭から數吋と離れてゐない木の幹にあたつた。彼等はもう躊躇してゐる場合でなかつたので、大股にさつさと駈け出し、間もなく彼等と危険の間が數哩距つてしまつた。

彼等はあまりに遠くへ行かなかつた——ほんの二三日の旅であつた。女狼にとつて、彼女が探してゐたものを見つける必要が、今や絶對的なものになつてゐた。彼女は段々身が重くなつて来て、ゆつくり走るこゝしから出来なかつた。一度なんぞ、兎を追ひかけたが、普段なら、安々と捉まへられるのに、彼女はそれを斷念し、横になつて、休息した。

あつた。天井は、彼女の頭とすれ／＼の高さであつた。中は乾燥してゐて、居心地がよかつた。彼女はそれを念入りに調査した。その間に、後へ引き返した『片目』は、入口に立つて、辛抱強く彼女を見てゐた。彼女は頭を垂れ、鼻を地面につけて、寄せ合した足の近くの一點へそれを向け、それから、この一點のまほりを幾度かぐる／＼と廻つた。そして、殆ど呻きに近い疲れた溜息をついて、體をまるめ、肢を伸し、入口の方へ頭を向けて、寝ころんだ。『片目』は關心をもつやうに尖つた耳を翹て、彼女に笑ひかけた。その顔の向うに、白い光にくつきりと縁取られて、彼が従順さうな様子でふさ／＼した尾を振つてゐるのが、彼女の目に映つた。彼女自身は、耳を擦り合せ、その尖つた耳先をうしろへ曲げて暫く頭へくつき／＼け、口を開け、舌を穩かに垂れ、かうすることによつて彼女の悦びと満足を現はした。『片目』は飢ゑてゐた。彼は入口のところに坐つてゐたが、その眼りは途絶え勝ちであつた。彼は絶えず目をさまし、四月の太陽の雪の上に輝いてゐる、外の明るい世界へ耳を翹てた。彼がうと／＼すると、何かの蔭をちよろ／＼流れる水の微かな音が、彼の耳に忍びこんで来たので、彼は起きあがつて、一心に耳を傾けた。太陽は、既に回歸してゐて、目ざめつゝある北地の全世界が彼に呼びかけてゐた。生命は動いてゐた。春の氣合が空中に漂つてゐて、雪の下

『片目』はそばへ来たが、慰めるやうに口で彼女の頸にふれると、彼女は不意に彼に噛みつき、それがあまりに猛烈だつたので、彼はうしろへ引つくり返り、彼女の齒を脱れるために滑稽な格好をした。今や彼女の短氣は一層ひどくなつたが、彼の方は一層我慢強く、一層優しくなつた。間もなく、彼女は深し求めてゐたものを見つけた。それは小さな流を數哩溯つたところであつて、その流は夏になるとマッケンジイ河へ注ぎこむのだが、今は岩の底まですつかり凍りついて——水源から川口まで白く硬い一條の死んだ流をなしてゐた。女狼は、相棒をかなり先へやり過して、自分は懶さうに歩いて行くと、高い粘土の岸が掩ひかぶさるやうになつてゐるところへ來會はした。彼女は歩みをそらして、その土手の方へ進んだ。春の嵐や雪解けが、その土手の下を剝るやうに洗ひ取つて、一個所、狭い裂け目に一つの小さな洞穴を作つてゐた。

彼女はその洞穴の入口に立ち停つて、その壁を注意深く見廻した。それから、右に左に壁に沿うて走り、やゝ柔かい線を描いた河岸の風景から、その壁が急に突き出してゐるところまで走つた。それから、彼女が洞穴へ戻つて、狭い入口をはひつた。三呎足らずの間は、しゃがんで歩かなければならなかつたが、それから先は、壁がひろがり、高くなつてゐて、直徑七呎足らずの小さな圓い部屋をなして

から萌え出す生命の感じ、樹々の中を樹液の昇る感じ、霜の束縛を破る蕾の感じが、そこにあつた。

彼は氣づかはずに眼差しを女狼の方へ投げた。然し、彼女は起きあがりたさうな氣合も見せなかつた。彼は外へ目をやつた。と、六羽ばかりの雪鳥が彼の視界を横切つて飛び去つた。彼ははつ／＼として起きあがらうとしたが、また相手を見返り、そのまゝ坐りこんで、うと／＼した。鋭くち／＼と鳴く歌ひ聲が、彼の聽覺へ忍びこんだ。一度、また一度、彼は手のひらで睡さうに鼻を擦つた。それから、目をさました。見ると、彼の鼻先の空中で、一匹の蚊がぶんぶん唸つてゐる。それはすつかり成熟した蚊で、冬中、枯れた丸木の中に凍りついてゐたのが、今太陽の光で解放されたのであつた。彼は最早、自然の呼び聲を拒絶することが出来なかつた。それに、彼は飢ゑてもゐた。

彼は相手の方へ這ひよつて、彼女を説得して起きあがらせようとした。然し、彼女は彼に向つて唸りつけるだけだつたので、彼はひとりで明るい日光の中へ歩み出ると、踏みつける雪の面は柔かく、旅をするのに困難なことが分つた。彼は流の凍つてゐる河床を歩いて行つた。そこは樹木で影になつてゐて、雪はまだ固く結晶してゐた。彼は八時間ばかり歩いてから、出發した時よりもつと空腹になつて暗闇の中を戻つて來た。彼は獲物を見つけないわけでは



なかつたが、取り損つたのであつた。彼は雪の面の解けかかつてゐるところを踏み抜いて、ひつくり返つたので、その間に、雪靴兎がいつものやうな身軽さで、雪の表面を滑るやうに飛んで行つたのであつた。

彼は洞穴の入口で、不意に疑惑のショックに打たれて立ち停つた。微かな異様な聲が中から聞えて來た。それは相棒の女狼の聲ではなかつたが、何だか心の奥底で聞き覚えのある聲であつた。彼は用心深く中へ這ひこむと、女狼から警戒するやうに唸りつけられた。それを聞いても、彼は別段狼狽しなかつたが、その唸り聲に服従して近づくのを遠慮した。然し、他の聲——微かな、低い啜泣きや涎を垂らすやうな聲に興味を感じて、そこに留まつた。

女狼が背立しさうに叱りつけるので、彼は入口の方へ戻つて、そこで體を丸めて眠りこんだ。朝になつて、薄明りが洞穴へさしこんだので、彼は又しても、例の心の底で、かすかに聞き覚えのある聲の源をさぐつた。すると、女狼の警戒の唸りに、新しい調子がふくまれてゐた。それは嫉妬の調子であつたので、彼は十分注意して敬遠するやうに相當の距離をおいて離れてゐた。然し、相當離れてゐるに拘らず、すぐ彼の目についたのは、彼女の全身に沿うて腋の間に庇ふやうに抱きこまれ、五つの生命の不思議な小袋が、可憐い、たよりない様子で、くん／＼微かな泣き聲を

たて、開かない目を光の方へ向けてゐる有様であつた。彼は吃驚した。彼の長い成功的な生涯に於て、かういふことの起つたのは、これが初めてではなかつた。既に幾度も起つてゐたのであるが、それが起る度に彼にとつてはいつも新しい驚きであつた。

女狼は不安げに彼を見詰めた。彼女は殆ど絶え間なしに低い唸り聲を發し、彼があまり近寄り過ぎたと思へる時には、その唸り聲が喉の中で激しい唾み聲に變つた。彼女自身の経験にはかうしたことゝ起つた記憶はなかつたが、彼女の本能、昔からのあらゆる狼の母の経験であつたところの本能の中には、新しく生まれた頼りない子供を、父親が食つてしまふといふ記憶がひそんでゐた。その本能が彼女の心の中に強い恐怖となつて現はれ、それが彼女を驅つて、父親の「片目」にその子供をもつとよく見ることを妨げたのであつた。

然し、何の危険もなかつた。老いた「片目」も或る衝動の迫るのを感じてゐた。それはやつぱり、狼のあらゆる父から傳はつて來た本能であつた。彼は、それに對して疑問も持たなければ、當惑もしなかつた。それは、彼の肉體の組織の中に存在してゐた。で、彼はたゞそれに服従して、新しく生まれた自分の家族に背を向け、自分の生きてゆく糧である肉の跡を追うて出て行くのが、最も自然なことであ

つた。

洞穴から五六哩行くと、流が二つに分れて、その分岐線が直角をなして山の中へ走つてゐた。そこで、左手の分岐線を登つて行くと、彼はまだ新しい一つの足跡にぶつかつた。彼はそれを嗅いでみて、つい今し方つけられた足跡であるのを知つたので、素早く腰を屈め、その足跡の消えた方角を見詰めた。それから、のろ／＼と振り向いて、右手の分岐線を辿つた。今の足跡が彼自身の足跡よりもずっと大きいので、さういふ足跡を追うて進んでも、自分の口に入る餌食のないことが分つてゐたからであつた。

右手の分岐線を半哩も登つて行くと、彼の敏感な耳が何かを噛んでゐる齒の音を聞いた。で、その獲物の方へ忍びよると、それは一匹の豪猪で、木につかまつて眞直に立つて、その樹皮をかじつてゐるのであつた。「片目」はこつそり注意しながら近寄つたが、無駄であつた。彼はかうした遠い北地で豪猪に出會つたことがなかつたが、その性質はよく知つてゐた。彼の長い生涯に於て、豪猪が彼の食料として役立つことは一度もなかつた。然し、彼は、思ひがけない場合とか、偶然の機會とかのあるのを、ずつと昔から知つてゐたので、ぢり／＼と近寄つた。然し、どういふことが起るか、まるで見當がつかなかつた。といふのは、生き物を相手にしてゐる場合は、大概、豫想外のことが起

るものであつた。

彼が近寄ると、豪猪は急に身をまるめて、圓い玉になつてしまつた。そして、長い鋭い針を四方八方へ放射して、襲撃にそなへた。「片目」は若い時分に、それによく似てゐて、外観は死んだやうに見える刺の玉を、鼻をくつつけて嗅いだために、不意に、その尻尾で顔を叩かれたことがあつた。その時、一本の刺が口にさゝつて、數週間も抜けずに、ずき／＼痛んだ末、やつと抜け落ちたのであつた。さうした経験があるので、彼は樂な姿勢で躊躇り、たつぷり一呎ばかりも鼻を離して、尻尾で叩かれないやうに用心した。かうして、彼はぢつと物音をたてずに待つた。何が起るか分らなかつた。何か起りさうなものだつた。豪猪が體を伸ばすかも知れなかつた。その柔かい防禦のない腹へ、手際よく、見事に前足を突つ込む機會があるかも知れなかつた。

然し、半時間も待つた後、彼は立ちあがつて、身動きもしない玉に腹立たしさうに咆えつゝ、歩み去つた。彼は過去に於て、屢々豪猪が體を伸すのを待つて、馬鹿をみたことがあるので、もうこれ以上時間を浪費する氣になれなかつた。彼は右手の分岐線を登り續けた。その日も次第に過ぎたが、まだ何の獲物もなかつた。

彼の目ざめた父性の本能が、強く彼を襲つた。彼は食物



を見つねばならなかつた。午後になつて、彼は思ひがけなく雷鳥に出會つた。彼が或る茂みから出ると、ひよつくり目の前にこの遅鈍な鳥がゐた。それは丸太の上にとまつてゐて、彼の鼻先一呷と離れてゐなかつた。兩方ではたと顔が合つた。と、雷鳥は吃驚して飛び立つたが、彼は前足で打つて、地上へ叩き落し、尙もそれが大周章に雪の上をちよこ／＼走つて空中へ飛ばうとするので、飛びかゝつて、歯でくはへてしまつた。彼の歯がその柔かい肉と脆い骨とを噛んだ時、彼は自然とそれを食ひ始めた。然し、彼は思ひ出したので、雷鳥を口にくはへたまゝ、元の道へ引き返して、家路へ急いだ。

分岐點から一哩ばかり上で、彼はいつものやうに天鷲絨のやうな柔かい足取りで走り、道の新しい見通しへ来る度に、用心深く前を調査しながら、滑る影のやうに進んで行くと、今朝早く見つけた大きな足跡が、更に新らしく印しられてゐるのに出會つた。その足跡の導くまゝに進みながら、河の曲り角へ来る毎に、その足跡の主立會ふ心構へをした。

河が特に大きく曲り始めてゐる地點で、彼が岩角を曲つてそつと首を出すと、その鋭い眼に何か映つたので、彼は素早く身を屈めた。それは足跡の主である大きな山猫の躰であつた。彼女はしつかり巻いた刺の玉を前にして、彼

が今朝躰つてゐたと同じ姿勢で蹲つてゐた。今までの彼が、滑る影であつたとすれば、今の彼はその影の幽靈となつて、靜かに身動きもせず相對してゐるこの二匹のまはり、こつそりと廻つて、風下の方へ出た。

彼は雪の中に身を伏せ、雷鳥を傍におき、低く生えた樾の葉の間から、目の前の生の活劇を覗きこんだ——待つ山猫と、待つ豪猪と、いづれも生に執着してゐるのであつた。そして、一方の生きる道は他を食ふことであり、一方の生きる道は他に食はれないことであるといふ、それがこの勝負の物珍らしさであつた。さうした一方、老いた片目の狼が、茂みの中に蹲り、自分の生きる道である肉の追跡に於て、ひよつとして自分に好運を與へるかも知れない機會を待ちながら、これも亦、この勝負の役を演じてゐた。

半時間過ぎ、一時間過ぎたが、何事も起らなかつた。刺の玉は、よしんば動いたにしても、まるで石になつたかと思へる程だし、山猫はまるで大理石に凝結したかと思へる程だし、老いた『片目』は、まるで死んだかと思へる程であつた。而も、この三匹の動物は、痛々しいばかりの生の緊張に縛られてゐて、外見上化石のやうになつてゐる今の状態よりも、もつと活氣のあることは、恐らくあるまいと思へた。

『片目』は微かに身動きして、慇々熱心に覗きこんだ。何

ごとか起り始めた。豪猪はたうとう敵が去つたものと斷定した。そろ／＼と警戒しながら、堅忍不拔の鎧の玉を解きかけた。彼は何ら豫感の身顫ひに緊張してゐる様子がなかつた。靜かに、靜かに、刺の逆立つてゐる玉がほぐれて伸びた。それを見てゐる『片目』は、まるで御馳走のやうに自分の前に擴げられた、この生きた食物に昂奮して、不意に口の中が濕ひ、垂涎が思はずだ／＼と流れ出た。

豪猪はすつかり體をほぐし切らないうちに、敵の姿を發見した。その一瞬間、山猫は打撃を與へた。その打撃は電光のやうであつた。硬い爪の鋭く曲つた前足が、相手の柔かい腹部を突いて、敏捷に引つ掻いて元のところへ戻つた。然し、もし豪猪がすつかり體をほぐしてゐるか、或は、敵を發見するのが打撃をうける一秒の何分の一か遅れたとすれば、山猫の前足は傷を受けずにすんだであらう。ところがその前足の引つこむ時に、豪猪の尾が横なぐりにびしやりと來たので、鋭い刺が前足にぐさりと刺さつた。

何もかもが一時に起つた——翼撃も、逆襲も、豪猪の苦痛の悲鳴も、山猫の不意の痛手と警駭の叫びも。『片目』は昂奮して、半ば立ちあがつた。その耳は突つ立ち、その尾はびいんと伸びて顫へた。山猫は癡癡で目がくらんだ。彼女は自分を傷つけた者に向つて、猛然と飛びかゝつた。然し、豪猪は悲鳴をあげ呻きながら、その引き裂かれた體を

弱々しく丸めて、防禦の玉を作らうとして、その途端に、再びびしやりと尾をはいた。すると、山猫は又しても痛手と警駭の叫びをあげた。それから、うしろへ引つくり返つて、後ずさりし、嘔を吐出した。見ると、その鼻は大きな針さしのやうに、刺が一ばい刺さつてゐた。彼女は前足で鼻を擦つて、燃えつくやうに痛む刺を抜かうとし、更に、雪の中へ突つ込んだり、木の枝や茂みにこすりつけて、痛みと恐れで氣の狂つたものゝやうに、絶え間なくそこらぢゆう跳ね廻り飛び廻つた。

彼女は續げざまに嘔を連發した。そして、ちよつぶり短い尾を、急速に激しく振動させて、出来るだけ巧くあたりを突きまくるやうな様子をした。然し、すぐにこの滑稽な動作をやめ、やゝ暫くちつとしてゐた。『片目』はそれを見守つてゐた。すると、山猫は何の前觸れもなしに、突然、すくつと空中に飛びあがり、それと同時に、長い物凄悲鳴をあげたので、『片目』はぎよつとして、思はず背筋の毛を逆立てずにはゐられなかつた。それから、山猫は道の方へ走り去つて、一足ごとに悲鳴をあげて駆けて行つた。

山猫の騒ぎが次第に遠く去つて、それが聞えなくなるかならないうちに、『片目』は前へ乗り出してきた。彼は、あたりの雪がすつかり豪猪の刺で敷きつめられ、それがすくつと立つて、彼の柔かな足の裏を突き刺してもするやうに、



102.  
38  
③  
177

ひどくデリケートな歩き方をした。豪猪は兇暴な唸りを立て、長い歯をがちやりと噛み合して、この近づく敵を迎へた。彼はどうやら再び體を丸めて玉にしたにはしたが、元のやうな引き締つた玉にはならなかつた。さうするには、筋肉があまりにずた／＼になつてゐた。體は殆ど二つに裂かれ、出血がやまらずに夥しく流れ出てゐた。

『片目』は血に染つた雪を幾口も掬ひとつて、それを噛み、味はつて、呑みこんだ。それが薬味の用をなして、彼の飢餓は物凄く増大した。然し、彼は警戒を怠るには、あまりに年をとつてゐた。彼は待つた。腹餓ひになつて待つた。すると、豪猪の方では、齒をきしり、呻き、鬩泣き、時々、鋭い悲鳴をあげた。暫くすると、刺が垂れかゝり、激しい身顫ひの起つたのが、『片目』の目にうつゝた。その身顫ひが突然やんだ。長い齒が無念さうにかちやりと最後の噛み合せをした。それから、刺はすつかり折れ伏し、體はぐたりと緩んで、動かなくなつてしまつた。

神經質なおつ／＼した前足で、『片目』は豪猪の全身を伸し、それをひつくり返した。何ごともし起らなかつた。たしかに死んだのであつた。彼は暫く熱心にそれを調べてゐたが、それから、注意深く齒でくはへて、半ばつるし、半ば曳きずり、その刺だらけの塊りを踏みつけないやうに首を横へ向けて、河を下流の方へと歩き出した。彼はふと何か

思ひ出したので、その荷物をおろし、雷鳥を残して来た場所へ戻つた。彼は一瞬間も躊躇しなかつた。彼にはどうしていゝか、はつきり分つてゐた。彼は大急ぎで雷鳥を食つて、自分のなすべきことを果した。それから、彼は戻つて来て、荷物を取りあげた。

彼がその日の獲物を曳きずつて獸穴へ歸つてくると、女狼はその獲物を檢分し、それから彼の方へ口を向けて、軽く彼の頸を舐めた。然し、次の瞬間には、一聲唸つて、子供たちから退いてゐるやうにと警告した。たゞその唸り聲は、いつものやうに激しくなく、威嚇するよりは寧ろ辯解するやうであつた。自分の子供に對して父を恐れる本能的恐怖が、彼女から薄らいで来たのであつた。彼も亦、狼の父として當然の振舞をなし、彼女がこの世へ持ち來たつた若い生命を貪り食ふといふ、不神聖な欲望は現はさなかつたのであつた。

### 三、灰色の仔狼

彼は兄弟姉妹とは違つてゐた。彼等はその母、即ち、例の女狼の遺傳である赤い毛色を、早くも現はしてゐたが、彼だけは、この點、父の遺傳をうけてゐた。同じ腹の仔のうちで、彼だけが灰色の仔であつた。彼は生粹の狼の血統

を引いてゐた——實際、肉體上からみて、老『片目』そのままに生れつゝいてゐたが、たゞ一つ異なる點は、父が片目であるに拘らず、彼は兩眼を具へてゐたことであつた。

この灰色の仔狼は、目が開いてまだ間がないのに、もう既にはつきりと物を見ることが出來た。まだ目の開かないうちでさへ、彼は感じ、味ひ、嗅いでゐた。彼は自分の二匹の兄弟と二匹の姉妹とをよく知つてゐた。彼は早くも兄弟姉妹と、弱々しい不様な恰好でふざけちらし、時には喧嘩さへし、激して來ると、その小さな喉が奇妙なごろ／＼いふ音で振動した。それは、他日の唸り聲の先觸れであつた。彼は目の開かないずつと前から、觸覺と味覺と嗅覺で、母を——温味と、液體の食物と、優しさの源である母を、よく知つてゐた。母は優しい愛撫するやうな舌をもつてゐて、それが彼の柔かい小さな體を舐めると、彼はいゝ氣持になり、思はず母に擦り寄つて、うと／＼と眠りこむのであつた。

彼の生活の最初の一月は、大部分、かうした風に眠りのうちに過された。然し、今や彼はよく物を見ることが出来るので、相當長い時間をさましてゐて、自分の世界をすつかり知るやうになつた。彼の世界は憂鬱であつた。然し、彼はそれを知らなかつた。何故なら、それ以外の世界を知らなかつたからであつた。彼の世界は薄暗かつた。然し、

彼はそれ以外の光線を知らないで、厭でもその薄明るい光に自分の眼を適合させなければならなかつた。彼の世界はひどく小さかつた。獸穴の四方の壁が限界であつた。然し、彼は外の廣い世界に對する知識がなかつたので、自分の生存の窮屈さに壓迫されなかつた。

然し、彼は早くから、自分の世界の壁の一つが、他の壁とは違ふのを發見してゐた。それは、この獸穴の入口であり、光の源であつた。彼は何ら自分自身の思想といふものがなく、何ら意識的な意欲といふものゝない頃から、既に早くもその壁が他の壁と違ふのを知つてゐた。彼の目があらず、従つてそれを見ない前から、その壁は彼にとつて不可抗的な魅力であつた。その光は彼の臉を照らすと、彼の兩眼と視神經が震動して、暖かい色をした、奇妙に好ましい、ちか／＼する小さな火花を感じるものであつた。彼の肉體の生命、彼の肉體のあらゆる纖維の生命、彼の肉體の實質そのものであつて、彼の個體的生命から分離してゐる生命、この生命が、その光にあこがれ、そして、植物の巧妙な化學作用が、その植物を太陽の方へ押しやると同じやうに、彼の體をその光の方へ押しやつた。

最初、まだ彼の意識的生活の始まらない前から、彼は常に獸穴の入口の方へ這ひ寄つた。そして、この點では、彼の兄弟姉妹は彼と同じであつた。さうした期間中に、彼等



のうちの一匹といへども、うしろの壁の暗い隅々に這ひよるものはなかつた。光は、まるで植物でも引き寄せるやうに、彼等を引き寄せた。彼等を構成してゐる生命の化学作用が、生存上の必要として、光を要求した。そして、彼等の人形のやうな肉體は、蔓草の卷鬚のやうに、盲目的に、化学的に、這ひ寄つた。その後、彼等が鋭々、個性が發達し、それづくに衝動や欲望を意識するやうになると、光の魅力は一層強くなつた。彼等は始終、光の方へ這ひ寄り擦り寄つては、いつも母親から追ひ返されるのであつた。

これによつて、灰色の仔狼は、自分の母が優しい愛撫するやうな舌以外に、更に他の屬性を持つてゐるのを知つた。彼は、しつこく光の方へ這ひ寄る時、自分を叱りつけるやうに鋭く小突く鼻を、次いで、彼を突き倒したり、素早く、然し加減して打つて、ころ／＼彼をころがしたりする足を、母親の中に發見した。かくして、彼は危害といふことを學んだ。更にその上、危害を避けることを學んだが、それは第一に、さういふ危険にぶつからないことであり、第二に、もしさういふ危険にぶつかつたら、身をかはして退却することであつた。これらは意識的行爲であつて、彼が世界に對する最初の推論の結果であつた。これ以前にあつては、彼はたゞ、自動的に光の方へ這ひ寄つたやうに、自動的に危害から身を引つ込めてゐたのであつた。然し、意識的行

爲が生ずるやうになつてからは、彼は危害だといふことをはつきり認識するが故に、危害から身を引いたのであつた。彼は悍猛な小狼であつた。兄弟姉妹も亦さうであつた。それは當然なことである。彼は肉食動物であつたからだ。鳥獸を殺し、鳥獸を食ふ種族の血を引いてゐた。彼の父も母も、食物の全部を肉食によつてゐた。彼が最初の明滅するやうな微かな生命を以て吸つた乳は、肉から直接に變形した乳であつた。そして今、生れて一月になり、目があいて僅か一週間にしかならないのに、早くも肉を食ひ始めた。但し、その肉は女狼によつて半ば消化されて、吐き出されたものであつた。五匹の生長する子供は、彼女の乳に對して既に過大な要求をするやうになつてきたので、彼女はそれに耐へられなかつたのである。

然し、その上彼はまた、同じ腹の子供たちの中で、最も悍猛であつた。彼は兄弟たちの誰よりも高い唸り聲で、ふう／＼唸ることが出来た。彼のちつぽけな怒りも、兄弟たちの誰よりも激しかつた。巧妙な足の打撃で、仲間の仔狼をひつくり返すトリックを覺えたのも、彼が最初であつた。又、他の仔狼の耳をくはへて、引きずり廻し、堅く食ひしばつた顎の間から唸り聲をたてたのも、彼が最初であつた。又、子供たちを洞穴の入口から退ける時、母親を一番困らしたのも、彼であつたのは疑ひもないところである。

この灰色の仔狼にとつて、光の魅力は日毎に強くなつて行つた。彼は絶え間なしに、穴の入口へ向つて一碼ばかり進み出る冒險を繰返し、絶え間なしに逐ひ返された。たゞ彼は、それが入口だといふことを知らなかつた。彼は入口といふものに就て——即ち、一つの場所から他の場所へ行く通路といふものに就て、何にも知らなかつた。彼は他の場所も知らなければ、ましてやそこへ行く道も知らなかつた。だから、彼にとつては、洞穴の入口は、一つの壁——光の壁であつた。外界の居住者に對する太陽のやうに、この壁は、彼に對して彼の世界の太陽であつた。それは、灯

火が蛾を牽きつけるやうに、彼を引きつけた。彼は始終、そこへ行かうと努力した。彼の體内で急速に伸びてゐた生命は、絶えず彼を促して光の壁の方へ行かした。彼の體内にある生命は、それが外へ出る一つの通路であり、彼がそれを踏むべく前以て運命づけられてゐるのを、よく知つてゐた。然し、彼自身はさうしたことを少しも知らなかつた。彼は外に世界があらうなどは、夢にも知らなかつた。

この光の壁に關して、一つ奇妙なことがあつた。彼の父（彼はもう既に自分の父を、この世に於ける母以外の一人の居住者として、光の近くに眠り、また、肉を持つて來る、母に似た動物として、見知つてゐた）——その父は、遠くの白い壁の中へ眞直に歩いて行つて、影を消す手段を持つ

てゐた。灰色の仔狼には、それがどうしても理解出来なかつた。その壁へ近づくことを、母親は決して許してくれなかつたが、彼は他の三方の壁へ近づいたことがあつた。すると、彼の柔かい鼻先に、堅い障害物がぶつかつた。この危害で、數度かういふ冒險をやつた後で、その壁にはかまはないことにした。彼はそれについてとやかく考へずに、壁の中へ姿を消すのを父の特性として受け容れた。それは乳や半ば消化した肉を、母の特性として受け容れたのと同じであつた。

實際、灰色の仔狼には、物を考へる力が與へられてゐなかつた——少くとも、人間のするやうな考へ方をする力がなかつた。彼の頭腦はぼんやりと働いた。而も、彼の断定は、人間のなしうる断定と同じやうに、鋭くて明瞭であつた。彼は、何故とか、何のためにとか、疑ふことなしに、物を受け容れるのであつた。實際、これが分類の働きであつた。彼は或ることが何故起つたかについて、くよく／＼思ひ煩つたことがなかつた。いかにして起つたかといふ状態で、彼には十分であつた。かくて、彼は幾度かうしろの壁に鼻をぶつつけた後、自分は壁の中へ姿を消すことが出来ないといふことを受け容れた。それと同様に、彼の父が壁の中へ姿を消すことが出来るといふことを受け容れた。然し、彼は、父親と自分との差異について、その理由を發見したい



といふ欲求に、何ら煩はざれるところがなかつた。論理も物理も、彼の心的構成の一部分をなしてゐなかつた。

荒野にある大概の動物と同じやうに、彼も早くから飢餓を體驗した。肉の給供が止まつたばかりでなく、母の胸から最早乳の出なくなつた時が来た。最初のうちは、仔狼たちはくん／＼鼻を鳴らしたり泣いたりしたが、大概の時は眠つてゐた。然し、間もなく、飢餓の昏睡状態に陥つた。最早、嘔み合ひも喧嘩もなく、ちつぽけな怒りも、唸らうとする努力もなく、遠くの白い壁の方へ行かうといふ冒險も、すっかり止んでしまつた。仔狼たちは眠り、そして、その体内にある生命の火は、ちら／＼と明滅し、やがて消えて行つた。

『片目』は死物狂ひであつた。彼は遠く廣く徘徊して、今や寂しく惨めになつてしまつた。死物で、殆ど眠らなくなつた。女狼も亦、子供たちを残して餌食の探索に出かけた。子供の生れた當時は、『片目』は度々インデアンの方へ出かけて、買の兎を盗んで来た。然し、雪が解け、河が開けると共に、インディアンのキャンプは移轉して、その給供の源が断たれてしまつたのであつた。

灰色の仔狼が生命を取り戻して、再び遠くの白い壁に興味を感じた時には、彼の世界の居住者が減少してしまつたのに氣がついた。妹がひとり残つてゐるきりで、他の者はひ

とりもゐなくなつてゐた。彼が前よりも力がついた時、彼はひとり遊ばなければならぬことが分つた。妹はもう頭もあげず、動き廻りもしなかつた。彼の小さな體は、今しも食つた肉で圓々としてゐた。然し、妹にとつては、肉の來ようが晩過ぎた。彼女は絶えず眠りつゞけ、皮ばかりになつた小さな骸骨のやうな體を投げ出し、その生命の焔は、次第に微かにゆらめき、終に消えてしまつた。

それから、灰色の仔狼は、父が壁の中から現はれたり消えたり、或は、入口のところを寝たりしてゐる姿を見なくなる日があつた。これは、二度目の、前よりはいくらか樂な飢餓状態の終る頃に起つたことであつた。女狼は、何故『片目』が歸つて來ないか知つてゐた。然し、彼女の見たことを、灰色の仔狼に知らせる方法がなかつた。彼女自身も獲物を求めて、山猫の住んでゐた左の分岐線を登りながら、前の日に、『片目』の辿つた足跡をつけて行つた。すると、その道の盡きるあたりで、彼女は彼を見つけた。然し、それは彼の遺物ばかりであつた。そこには、激しい戦ひのあつた證據と、山猫が勝利を得て自分の獸穴へ引きあげた證據とが、數多く残つてゐた。女狼は立ち去る前に、その山猫の獸穴を見つけたが、證據から察すると山猫が中にあるらしいので、中へ突撃して行く勇氣がなかつた。

さうしたことがあつてから、女狼は獵をするのに、左の

460枚

分岐線を避けた。何故なら、山猫の穴には子供たちのゐることが分つてゐたからである。それに、山猫が悍猛で短氣な動物で、恐るべき戰鬥者であることを知つてゐた。もし五六匹の狼がゐたなら、山猫を唸らせ毛を逆立たせて、木の上へ追ひあげるのには、容易なことであつた。然し、狼が一匹で山猫に對抗するのは、殊にその山猫が飢ゑた子供たちを背後に控へてゐる場合には、事情がまるで違ふのであつた。

然し、荒野は荒野であり、母性は母性であつた。母性は荒野におかれると否とに拘らず、常に強い保護心をもつてゐる。そして、女狼が灰色の仔狼のために危険を冒して、左の分岐線を登つて、岩の間の獸穴を侵し、山猫の憤激に會ふ時が終に來たのであつた。

#### 四、世界の壁

母親がその獸穴を去つて、獲物を求める遠征に出た頃には、仔狼は入口に近づくことを禁ずる法則をすっかり會得してゐた。この法則は、母の鼻と足とによつて、強制的に、且つ、屢々、彼の印象に刻みつけられたばかりでなく、彼の体内には恐怖の本能も發達して來た。彼の短い洞穴生活に於て、彼はまだ一度も恐ろしいものに出會つたことがな

かつた。而も、恐怖が彼の心の中にあつた。それは、幾千萬の生命を通して、遠い祖先から彼に傳はつたものであつた。彼はその遺産を、『片目』と女狼から直接受け嗣いだのであつたが、その代りに、それは過去のすべての時代の狼を通して、兩親に傳はつたものであつた。恐怖！——その荒野の遺産は、いかなる動物も脱れることが出來ないし、スノプなどと交換出來るものでもなかつた。

かくて、灰色の仔狼は、恐怖をつくつてゐる本質を知らなかつたが、恐怖そのものはよく知つてゐた。恐らく、彼はそれを生活の束縛の一つとして受け容れた。何故なら、彼は既に、かうした束縛の少なくないのを知つてゐた。彼は飢餓といふものを早くも知つてゐる。そして、飢餓を充すことの出來ない時に、彼は束縛を感じた。洞穴の壁の障害、母親の鼻で強く小突れること、母親の足で激しく打たれること、幾度の飢餓状態に於ける充されぬ空腹、それらすべてによつて、この世にあるのは自由ばかりでなく、又、生活には制限と拘束とがあるといふことを、彼は腦裏深く刻みこまれた。かうした制限と拘束が法則であつた。そして、それに服従することが、危害を脱れて、幸福へ向ふことであつた。

彼はこの問題を、かうした風な人間式の方法で理論つけたものではなかつた。彼は單に、害になるものと、害になら



ないものとを、分類したに過ぎなかつた。そして、かゝる分類に従つて、彼は害になるもの、即ち、種々の束縛や拘束を避けて、生の満足と報酬とを享樂しようとした。

かやうにして、彼は母の與へた法則に服従し、恐怖といふ言ひやうのない譯の分らぬものゝ法則に服従して、洞穴の入口から遠ざかつてゐた。その入口は、彼にとつてはいつまでも、白い光の壁であつた。母のゐない時には、彼は大概眠つてゐたが、時々目のさめた時には、くん／＼啼く泣き聲が、咽喉の中でむず痒くなり、今にも喚き出しさうになつたが、それを押へてちつとしてゐた。

或る時、目がさめると、白い壁の方で聞き馴れぬ物音がした。それは穴熊であつて、洞穴の外に立つて、自分自身の意氣込みに身顫ひしながら、中の物を用意深く嗅ぎわけてゐるのであつたが、彼にはそれが分らなかつた。たゞ仔狼は、その嗅ぎ方が變で、今までの分類にないものであり、従つて、彼の知らない恐ろしいものであるのを知つた——この『知らない』といふことは、恐怖をつくる重大な要素の一つであつた。

灰色の仔狼の背筋の毛が逆立つた。然し、それは音もなく逆立つた。鼻をくん／＼させてゐる相手が、毛を逆立てて對すべきものであると、どうして彼が知つたのであらうか。それは、何ら彼の知識から生れたものでなかつたが、

而も、彼の心にある恐怖の目に見える發現であつて、彼自身の生活に於て、如何ともすることの出来ないものであつた。然し、恐怖は他の本能——身を隠すといふ本能を伴つた。仔狼は氣の狂ふばかりの恐怖に襲はれてゐたが、而も、物音一つ立てず、凍りつき、化石したやうに、外觀上はすつかり死んだ者のやうになつて、横たはつてゐた。彼の母は、歸つてきて穴熊の足跡を嗅ぐと、唸り聲を發し、洞穴の中へ飛びこんで、彼を舐めるやら鼻ずりするやら、並々ならぬ激しい愛情を示した。そして、仔狼は何かしら大きな危害を免れたのを感じた。

然し、仔狼の體內には、他の力が働いてゐた。その力のうちで最も大きいのは生長であつた。本能と法則は彼に服従を要求した。然し、生長は反抗を要求した。彼の母親と恐怖とは、彼に白い壁から遠ざかるやうに強ひた。然し、生長は生命であり、生命は永久に光に向つて進むべく運命づけられてゐる。従つて、彼の體內に高まつてくる——呑みこむ肉の一口と共に、吸ひこむ息の一口と共に高まつてくる、生命の潮を堰きとめることが出来なかつた。終に、或る日のこと、恐怖と服従が、生命の迸りによつて拂ひのけられ、仔狼は入口の方へためらひ勝ちに這ひ出して行つた。彼の曾つて經驗した壁とは違つて、この壁は彼が近づく

と、うしろへ退くやうに思へた。試しに眼の前をその柔かい小さな鼻で突いてみても、それにぶつかかる硬い表面がなかつた。壁の内容は、光と同じく、突けば通り、押せば退くやうに見えた。それに、彼の目には、その状態が形體を具へてゐるやうに映じたので、彼は壁と考へてゐる物の中へはひり、それを構成する内容の中へ身を浸した。

さつぱり譯が分らなかつた。彼はその容積の中を這ひ廻つた。そして、光は益々輝いて來た。恐怖は彼をうしろへ引き戻さうとしたが、生長は彼を前へ押しやつた。突然、彼は洞穴の入口にゐる自分を見出した。彼は壁の中にあると思つてゐたのに、壁は、突然、彼の目の前の、測り知ることの出来ない遠くへ飛びのいた。光は痛いほど明るくなつた。彼はあんまり明るいので眩暈がした。同時に、この急激な驚くべき空間の擴大に目がくらんだ。自動的に、彼の目は、その明るさに適合し、物體の増大した距離に合ふやうに焦點を合はした。最初は、壁は彼の視界の外へ飛び去つた。然し、今や再びその壁は彼の目に映じたが、それは著るしく遠くにあつた。それに、その外觀が一變してゐた。今やそれは種々の色彩を塗られた壁であつて、流を縁どる樹木、樹木の上に聳える向うの山、山の上に高く擡がる空によつて、組み立てられてゐた。それは、知らないことから來

る恐れよりも大きかつた。彼は洞穴の縁にしやがんで、その世界をつく／＼と眺めた。彼は恐ろしくてならなかつた。それは未知のものであるが故に、彼の敵であつた。それ故、彼の背筋に沿つて毛が突つ立ち、唇は兇暴な威嚇の唸りを立てようとして、弱々しく歪んだ。彼は自分の弱小さに驚き、恐怖に驅られて、この廣い全世界に向つて挑戦し威嚇した。

何事も起らなかつた。彼はじろ／＼と眺め續けた。そして、つい興味を感じて、唸るのを忘れた。次いで、恐ろしいのも忘れた。こゝ暫くは、恐怖は生長のために根こそぎに取り去られ、そして、生長は好奇心といふ衣裳をつけてゐた。彼は近くの物體に氣が付き出した——太陽に反映してゐる流の、樹木に隠されない一部、傾斜地の麓に立つてゐる一本の松の枯木、彼の方へ高まつて來て、彼のしやがんでゐる洞穴の縁の下二呎のところで、その高まりの止んでゐる傾斜地そのもの、などが目についた。ところが、灰色の仔狼は、今まで始終、平坦なところに住んでゐた。彼はまだ墜落の危害を経験したことがなかつた。彼は、落ちるといふことが、どんなことか知らなかつた。で、彼は空氣の上を大膽に踏み出した。すると、彼の後足はまだ洞穴の縁に残つてゐたので、轉倒返しに落つた。地面がこつびどく彼の鼻を打つたので、きやんきや



ん鳴き聲をたてた。それから彼は、傾斜地をころ／＼轉がり出した。彼は恐怖でまご／＼した。『未知』が、たうとう彼をつかまへたのであつた。それは荒々しく彼を引つ摺んで、何か恐るべき危害を彼に與へようとしてゐた。今や生長は恐怖のために根こそぎにされて、彼はたゞ怖氣づいた子供のやうにきやん／＼鳴いた。

彼を捕へた『未知』がどんな恐るべき危害を與へるか分らないので、彼はしつきりなしに、きやん／＼鳴き續けた。これは、『未知』のものが彼のそば近くに身をひそめてゐる時に、凍つたやうな恐怖の状態で蹲つてゐたのとは、大分わけが違つた。今は、『未知』がしつかりと彼をつかまへてゐるのであつた。ぢつと黙りこんでゐる位では役に立たなかつた。それに、彼を顫へさせてゐるのは、恐怖以上のものと強い恐れであつた。

然し、傾斜地は次第にゆるやかになり、その麓には草が生えてゐた。そこまで来ると、仔狼ははずみを失つた。やつとのことで彼の體が止まると、きやんと一聲、最後の悲鳴をあげ、それから、長い哀れつばい遠吠を始めた。それから、いかにも當然のことだが、生れてもう千度もお化粧をしたかのやうに、自分の體をよごした乾いた泥を舐め始めた。

それがすむと、彼は坐り直して、あたりをじろ／＼と見

廻した。まるで、地球から火星へ上陸した最初の人間のやうだつた。仔狼は世界の壁を突き破つた。『未知』は彼を掴んだ手を放した。そして、彼は何の危害も加へられずにここにゐるのであつた。然し、火星へ着いた最初の人間といへども、この狼ほどには珍奇な思ひを経験しなかつたであらう。彼は何らの豫備知識もなく、又、かうしたものが存在するといふ何の警告もうけずに、全然新しい世界の探索者となつた自分自身を見出したのであつた。

さて、恐ろしい『未知』が彼を放したので、彼は『未知』が恐怖であるといふことを忘れてしまつた。彼は周囲のすべての物に、好奇心だけを感じた。彼は、足の下にある草、すぐ向うのつるこけ桃の木、林の間の空地の縁に立つてゐる枯れた松の幹などを調査した。その松の幹の根元を走り廻つてゐた一匹の栗鼠が、ばつたり彼の前へ飛び出して来たので、彼はぎよつとした。彼は縮みこんで唸り聲をあげた。然し、栗鼠の方でも、同じやうに吃驚した。彼は木に駆け登つて、安全な位置から、野蠻にきやつきやと鳴きかへした。

これが仔狼に勇氣をつける役に立つた。そして、次に出會した啄木鳥も、彼をぎくりとさせたが、彼は自信を以て前へ進んで行つた。彼の自信がそんなに強くなつたので、一匹のムズ鳥が圖々しく彼の方へびよん／＼飛び出して

来た時、彼はふざけるやうに足を出して、それに觸れた。すると、その結果は、鼻を鋭く突つかれたので、彼は縮みこんで、悲鳴をあげた。その騒ぎがあんまり大きかつたので、ムズ鳥は急いで逃げ去つて、身をかくした。

然し、仔狼は物を學びつゝあつた。彼の朦朧とした小さな心は、既に無意識の分類をしてゐた。この世界には、生きてゐるものと、生きてゐないものとがあつた。それで、彼は生きてゐるものには警戒しなければならなかつた。生きてゐないものは、常に一つ處に留まつてゐた。然し、生きてゐるものは、動き廻り、何を仕出かすか分らなかつた。生きてゐるものに豫想しうることは、豫想しないことの起るといふことであつた。で、彼はそれに對する心構へを忘れてはならなかつた。

彼はひどく不恰好な様子で歩き續けた。彼は棒切れやいろんな物にぶつかつた。遠く向うにあると思つた小枝が、次の瞬間には、彼の鼻をぶつたり、彼の側腹を引つ搔いたりした。地面には凸凹があつた。彼は屢々、がくりと踏み過ぎては鼻をぶつけ、がくりと踏みあまつては足をぶつけた。それから、彼が踏みつけると、足の下で轉がる小石や石ころがあつた。で、彼は生きてゐないものでも、彼の洞穴の中と違つて、みんながみんな同じ安定の状態にあるものでないといふことを知るに至つた。それから又、生きて

ゐないものゝ中で、小さな物は大きな物に較べて、倒れたり轉がったりし易いものだといふことを知つた。然し、失策をやらかす毎に、彼は學問した。歩けば歩く程、彼は歩き方が巧くなつた。彼は自分を物事に適應させるやうになつた。彼は、自分の筋肉の運動を計算し、自分の體力の限界を知り、物體間の距離や、物體と自分との距離を測定することを學んだ。

彼の旅は好運な初旅であつた。肉食の獵人として生れた彼は（自分ではさうと知らなかつたが）、初めて外の世界へ侵入して行くと、自分の洞穴の入口を去つて間もなく、ひよつくり肉に出會つた。それは、全くのまぐれ當りであつたが、彼は巧妙に隠された雷鳥の巢に、偶然ぶつかつたのであつた。彼はその巢の中へ落つこちた。それは倒れた松の幹に沿うて行かうとしてゐた時であつた。腐つた樹皮が彼の足元で破れたので、彼はきやんと一聲、絶望の悲鳴をあげて、圓い坂を轉がり落ちると、小さな茂みの小枝や葉を突き抜け、茂みの中心をなす地面の上の、雷鳥の雛の七匹ゐる真中へ達した。

雛共が騒ぎたてたので、最初は彼も吃驚した。然し、すぐに、彼等のひどく小つぽけなのを見てとつて、彼は大膽になつた。彼等は動いた。彼がその一羽に足をかけると、その動きが速くなつた。それが彼にはひどく面白かつた。



彼はそれを嗅いだ。口にくはへた。それは身をながいて、彼の舌を擦った。すると、彼は急に空腹の感を覚えた。彼の顎はがくりと締った。脆い骨がぼり／＼碎けて、生暖い血が彼の口へ流れこんだ。その味は素敵だった。これが、母親のくれたのと同じ肉であつたが、それは彼の齒の間で生きてゐるだけに、一層旨かつた。かうして、彼は雷鳥を食つた。そして、全部の雛を食ふやうに食ひつくすまで止めなかつた。それから、母親のしたと同じやうに、頬を舐めて、その茂みから這ひ出さうとした。

すると、彼は鳥の翼の旋風に出會つた。彼はその旋風の突撃と、怒つた翼の打撃に、すつかり狼狽して目がくらんだ。彼は前足の間に頭を突つこんで、悲鳴をあげた。打撃は激しくなつた。母の雷鳥が怒りで荒れ狂つてゐるのであつた。暫くすると、彼も腹が立つて來た。彼は唸りながら立ち上つて、足で敵に打つてかゝつた。彼は翼の一つを、小さな齒でぐさりと噛んで、力まかせにぐん／＼引つ張つた。雷鳥は彼と闘ひ、片方の翼で雨のやうに打撃を浴せかけた。それは彼の生れて初めての戦闘であつた。彼は意氣昂然としてゐた。「未知」に對する恐怖をすつかり忘れてゐた。彼は最早、何物も恐れなかつた。彼は今、自分に撃つてかゝる生きた物を引き裂きながら戦つてゐた。而も、この生きた物が食肉であつた。殺さうといふ欲望が、彼を捉

へた。彼は今し方、小さな生き物を殺したばかりであつた。今や彼は、大きな生き物を殺さうと思つた。彼が幸福であるのを知るには、あまり忙しく、あまりに幸福であつた。彼にとつて新しい、そして、彼の曾つて知つたことよりも一層大きいこの仕事に、戦慄し狂喜した。

彼は翼をしつかりくはへて、堅く食ひしばつた齒の間から唸つた。雷鳥は彼を茂みから曳きずり出した。それから、向きを變へて、また茂みの蔭へ曳きずり込まうとしたので、今度は彼の方で、それに抗つて、彼女を空地の方へ引つぱり出した。かうした争ひの間に、雷鳥は絶えず怒號し、翼で打ち續けたので、羽根は吹雪のやうに散亂した。彼の昂奮が絶頂に達すると物凄かつた。狼の種族のもつ鬭争の血のすべてが、彼の體内に湧きたち、彼を通して溢れ出た。彼はさうと知らなかつたが、これが生きることであつた。彼は、世界に於ける自分自身の意義を悟り、彼を作つてゐた目的——即ち、肉を殺し、また殺すために戦ふこと、そのことをなしつゝあつた。彼は自分の生存を正當化してゐた。それ以上に生命のなしうる最大事はない。自分に爲すべく負はされたことを究極まで行ふとき、生命はその頂點に達するものなのである。

暫くして、雷鳥は鬭争をやめた。彼は尙も相手の翼をくはへてゐた。そして、両方が地の上に倒れて、互に顔を見

合した。彼は、兇暴な威嚇するやうな唸りを發しようとした。彼女は彼の鼻を啄いた。今度は、前の冒険の場合とは違つて、ひどく痛かつた。彼は痛さに辟易したが、尙も噛みついたまゝ放さなかつた。彼女はさかんに彼を啄いた。彼は痛さに辟易するあまり、悲鳴をあげ始めた。彼は相手を避けて後ずさりしようとした。然し、相手の翼をくはへてゐるので、いくら後ずさりしても、相手をうしろから引きずつてくるといふ事實を忘れてゐた。彼の虐待された鼻に、嘴が雨と降つた。戦闘の氣が漸く衰へたので、彼は獲物を放し、尻尾をまいて、空地を横切つて逃げながら、不名譽な退却をなした。

彼は空地の向う側の、茂みの端近くに、身を横たへて休息して、舌をだらりと垂れ、は／＼息して喘いだ。鼻は相變らず痛んだので、絶え間なく悲鳴をあげ續けた。然し、彼がそこに休息してゐると、突然、何か恐ろしいものが迫つてくるやうな感じがした。「未知」が、それによつて生ずるあらゆる恐怖を伴つて、彼に襲ひかゝつてきたので、彼は本能的に縮みこんで、茂みの隠家へ身をひそめた。丁度その時、一陣の風が彼を煽つて、大きい翼のある物體が、不氣味に、音もなく、さつと掠めて通つた。一羽の鷹が、青空から舞ひさがつて、あぶないところで彼を逸してしまつたのであつた。

彼は茂みに身をひそめながら、今の驚きから恢復して、恐る／＼外を覗くと、母親の雷鳥は、空地の向う側で、荒された巢の中から、羽搏きしながら出て來た。彼女は子供を失つた悲しみのために、空を羽搏く不意の襲來物に、まるで氣がつかなかつた。然し、仔狼は見た。そして、それは彼に對して、警告であり教訓であつた——鷹はさつと舞ひさがり、地面をすれ／＼に掠めたと思ふと、その鋭い爪は雷鳥の體へ打ちこまれ、雷鳥は苦悶と驚駭の鳴き聲をあげ、そして、鷹は雷鳥を浚つたまゝ、見る／＼うちに青空高く舞ひ昇つた。

かなり経つてから、やつと仔狼は茂みの隠家を出た。彼は多くのことを學んだ。生きてゐるものは肉であつた。それは食ふべきものであつた。が、生きてゐるものでも、圖體の大きい者は、危害を與へる力をもつてゐた。だから、雷鳥の雛のやうな小さなものを食つて、雷鳥の雛のやうな大きなものは打ちやつておく方が、好いのであつた。さうは考へるものゝ、ちよつびり野心が出て來て、あの雷鳥の雌ともう一度戦つてみたいといふ、ひそかな欲望を感じた——が、その雷鳥は鷹に浚はれてしまつてゐた。多分、他にも雷鳥の雌があるかも知れない。彼は出かけて行つて、探してみようと思つた。

彼は傾斜のゆるやかな岸を下つて、流へ出た。彼はまだ



水といふものを見た事がなかつた。歩いて大丈夫らしく思へた。表面には少しの凸凹もなかつた。彼は大胆に、その上へ歩き出した。すると、ざぶんと落つこちて、『未知』のものに抱き込まれてしまつたので、恐怖の叫び聲をあげた。それは冷たかつた。彼は激しく息を吸ひこみながら、喘いだ。これまで息をしようと、いつでも空気が流れこんで来たのに、今度はさつと水が肺の中へ流れこんだ。その窒息の感じは、死の苦しみのやうであつた。彼には、それは死を意味してゐた。彼は死に關して何ら意識した知識を持つてゐなかつたが、野生のあらゆる動物と同じく、彼は死の本能をもつてゐた。それは彼にとつて、危害の最大なものであつた。それは『未知』の眞髓そのものであり、彼に起りうる究極の、考へ得べからざる大破壊であつた。彼はそれについて何事も知らなかつたが、それに關するあらゆることを恐れた。

彼は水面に浮び出ると、氣持のいい空氣が、あけた口の中へ流れこんだ。彼は再び沈まなかつた。まるで永年かゝつて作られた習慣でもあるやうに、四肢でもがいて、泳ぎ始めた。近い方の岸は一碼と離れてゐなかつたが、彼はそれに背をむけて浮びあがつたので、最初に彼の目に映じたものは、向う側の岸であつた。それで、彼は直ちにその岸に向つて泳ぎ出した。その河は小さな流であつたが、淀

みのところは、二十呎ばかりに廣がつてゐた。そこを渡る途中で、急流が彼を掬つて、川下へ押し流した。淀みの終るあたりに小さな急流があつて、彼はそれに巻きこまれたのであつた。ここでは、殆ど泳ぐことが出来なかつた。静かな水が、急に激怒してゐたのであつた。彼は或は沈み、或は浮び上つた。そして、絶え間なしに、體を激しく揺すられ、或はぐる／＼轉がし廻され、或は岩に打ちつけられた。彼は岩にぶつかる度に、悲鳴をあげた。彼の行程は悲鳴の連続であつて、その悲鳴の數からして、彼のぶつかつた岸の數を知ることが出来たかも知れない。

その急流の次に、第二の淀みがあつて、そこで彼は、渦に巻きこまれて、靜かに岸へ運ばれ、同じやうに靜かに、砂利の床の上へ押しあげられた。彼は狂氣のやうに水から匍ひあがつて、打ち倒れた。彼はこの世界について、更に多くを學んだ。水は生きてはゐなかつた。而も、動いてゐた。その上、地面のやうに堅く見えたが、實際は何らの堅さも持つてゐなかつた。で、事物は必ずしも外觀の通りでないといふのが、彼の結論であつた。仔狼の『未知』に對する恐怖は、遺傳して来た疑惑であつたが、今やそれは體験によつて強められて来た。従つて、事物の性質といふものは見かけによらないことを知つたので、彼は外觀に對して永久の疑惑を抱かうと思つた。事物に信をおくことが出来

るには、先づ事物の眞實を知らなければならぬと思つた。その日は、もう一つの冒険が、彼のために運命づけられてゐた。彼は、母といふものがこの世界にあるのを思ひ出した。すると、この世界のすべてのものにもまして、母が慕はしいといふ感情に襲はれた。彼の體は、その日に出會つた冒険のために、すつかり疲れてゐたが、彼の小さな頭腦も、同じやうに疲れてゐた。彼の頭腦は、彼が生れて今日までのすべての日を合しても、この日一日ほど、激しく働いたことはなかつた。その上、彼は眠かつた。そこで、彼は自分の洞穴と母とを探して歩き出したが、同時に、寂寥と頼りなささが、壓倒するやうに襲つてくるのを感じた。

彼が幾つかの茂みの間を、のそ／＼歩いて行くと、鋭い威嚇するやうな叫びが聞えた。彼の目の前に、何か黄色いものが、さつと閃いた。見ると、一匹の鼯が素早く彼から飛びのいた。それは小さな生き物だつたので、彼は恐れなかつた。すると、彼の足元に、僅か四五寸くらの長さの、極めて小さな生き物のゐるのを見えた——それは、鼯の子で、彼と同じやうに、母の言ひつけに背いて、のこ／＼冒険に出かけてゐたのであつた。子鼯は彼から逃げようとした。彼は前足でそれをひつくり返した。それは奇妙にきいきい言ふ鳴き聲をたてた。すると、その瞬間、再び黄色いものが、彼の目の前に閃いた。彼は再び威嚇するやうな叫

びを耳にしたかと思ふと、その瞬間に頸筋をこつびどく打たれ、鼯の母の鋭い齒が、自分の肉に食ひこむのを感じた。彼がきやん／＼悲鳴をあげて、逃げ戻ると、鼯の母は子供に飛びついて、一しよに近くの藪の中へ姿を消した。頸筋を噛まれたのが、尙も痛んだが、彼の氣持はもつと痛ましく傷つけられた。彼はしやがみこんで、弱々しく鳴いた。あの鼯の母は、あゝも小さくせに、何と兇暴だつたことか！ 鼯は體の大きさや重さに較べて、荒野のあらゆる殺戮者のうちで、最も兇暴で、最も執念深く、最も恐ろしいといふことを、この仔狼はまだ知らなかつたのであつた。然し、今やこの知識の一部分は、忽ち彼のものになつた。鼯の母が又しても姿を現はした時、彼はまだ泣き續けてゐた。母は、子供を安全なところへおいて来たので、今度はすぐ飛びかゝらなかつた。前よりも一層用心深く、ぢりぢり近寄つて来たので、仔狼は、その瘠せた蛇のやうな體や、眞直にもたげ、ぢり／＼迫る、同じく蛇のやうなその頭を、じろ／＼眺める十分な機會を持つた。彼女の鋭い威嚇するやうな叫びに、思はず彼の背筋の毛が逆立つた。彼は警戒するやうに唸りつけた。彼女は次第に近く迫つて来た。彼の馴れない眼には見分けのつかない程の速さで、飛び込んで来たと思ふと、一瞬間、その瘠せた黄色い體が、彼の視界から消えて見えなくなつた。次の瞬間には、彼女



は早くも彼の咽喉に食いついて、その齒を彼の毛や肉に埋めてゐた。

最初彼は唸りを發して、闘はうとした。然し、彼はまだほんの子供だつたし、今日が彼のこの世界へ踏み出した最初の日に過ぎなかつたので、彼の唸りは泣き聲に變り、彼の闘ひは逃げようとする努力に變つた。然し、鼬は決して放さなかつた。彼女は咽喉にぶら下つたまゝ、彼の生命の血の滾々と流れる大動脈へ、齒を食ひ込ませようと夢中になつてゐた。鼬は、血の愛飲者であり、生命そのものゝ咽喉からそれを飲むのが、彼女の常に愛好してやまないところであつた。

もしこの時、女狼が茂みから飛び出して來なかつたなら、この灰色の仔狼は死んでしまつたであらうし、彼について書くべき物語も盡きてしまつたわけである。鼬は女狼の姿を見ると、仔狼を放して、女狼の咽喉に飛びかゝつた。然し、仕損じて、わづかにその頸に食いついた。女狼は鞭でも振るやうに、激しく頭を振つて、鼬を振り放して、空中高くへ投げ出した。そして、それがまだ空中にゐる間に、早くも女狼の頸は、その瘡せた黄色い體に噛みついた。そして、鼬はほり／＼噛み碎かれて死んで行つた。

仔狼は、又しても母が愛情の發作を示すのを經驗した。母が子供に出會つた悦びは、母に出會つた仔狼の悦びより

も、大きいやうに思へた。彼女は彼に鼻をすりつけ、彼を愛撫し、鼬の齒で噛まれた傷口を舐めた。それから、母と仔狼は共々に、血の愛飲者である鼬を食ひ、そして、洞穴へ歸つて眠つた。

### 五、肉の法則

仔狼の發育は迅速であつた。彼は二日間休息してから、再び、大膽に洞穴から出て行つた。この冒険の途上で、彼はこの間食つてしまつた鼬の子に出會つた。そこで、仔鼬をも食つて、その母と同じ運命へ逐ひやつた。そして、今度の旅行では、彼は道に迷はなかつた。彼は疲れると、自分の洞穴へ歸つて來て眠つた。それから以後、彼は毎日外へ出て、一層廣い範圍を歩き廻つた。

彼は、自分の強さと弱さを、正確に測りうるやうになり、大膽になつていゝ場合と、警戒すべき場合とを知るやうになつて來た。然し、彼は、しよつちう用心してゐる方が有利であるのを知つたが、たゞ稀な場合、自分の勇敢さに自信が持てる時、彼は多少の憤激と欲望に身を委せるのであつた。

彼ははろつてゐる雷鳥に出會ふと、必ず憤怒の小悪魔になつた。彼は又、松の枯木の上で初めて見た栗鼠が、ち地上にゐる時に、氣づかれないやうに忍び寄るより他はなかつた。

仔狼は自分の母に對して、強い尊敬の念を抱いた。彼女には獲物を得る力があつた。そして、必ず彼に分前を持つてくるのを缺かしたことがなかつた。そればかりか、彼女は事物を恐れなかつた。その恐れを知らぬことが、經驗と知識に基くものだと、彼にはまだ思ひ及ばなかつた。ただそれが彼に與へる効果は、力の印象、効果であつた。母は力を表現してゐた。そして、彼が生長するにつれて、その力を、今迄よりも嚴しい訓戒を與へる母の前足の中に感じた。同時に、これ迄、母から叱りつけるやうに鼻で小突かれたが、今やそれに代つて、牙で噛みつかれるやうになつた。これに對しても亦彼は母を尊敬した。彼女は彼に服従を強ひ、彼が生長すればする程、母は氣短かになつた。飢餓が又しても襲つた。そして、仔狼は以前よりも一層

はつきりした意識を以て、又しても飢餓の苦しみを知つた。女狼は餌食の追求に瘡を細つた。彼女は極くまれに洞穴で眠るだけで、時の大部分を肉の追跡に費したが、時は徒らに空費されるばかりであつた。今度の飢餓状態は長くはなかつたが、それが續いた間は、随分激しかつた。仔狼は母の胸から一滴の乳を得ることも出來なければ、自分で一口の肉を手に入れることも出來なかつた。

ゆつ／＼鳴くのを聞くと、荒々しくそれに答へるのを決して忘れなかつた。それから、ムーズ鳥を見ると、殆どきまつたやうに、最も荒々しい怒り方をした。それは、彼が出會つた最初のムーズ鳥から、鼻を啄かれたのを忘れなかつたからであつた。

然し、時として、このムーズ鳥でさへ、彼に何の影響も與へないことがあつた。それは、うろつき廻つてゐる他の狩獵者がゐて、自分の身が危険であると感ずる時であつた。彼は決して、鷹を忘れなかつた。そして、鷹の飛ぶ影がさすと、彼は必ず一番近くにある茂みの中へもぐり込んだ。彼は最早、のろ／＼と這ひ廻りはしなかつた。彼の足取りは既に發達して、母の足取りのやうになつてゐた。忍び足でこつそりと、明かに何の骨折れもせず、而も、非常な速さで滑つて行くので、それは人目を掠め、まるで目につかぬ程であつた。

食肉の點では、最初はひどく運が好かつた。雷鳥の雛が七羽、鼬の赤ん坊が一匹、それが彼の殺した總和であつた。獲物を殺したいといふ欲望は、日増しに強くなつて行つた。そして、あの喧しく鳴きちらして、いつでも狼の近寄つて來たのをあらゆる動物に告げ口する栗鼠を、とつちめてやらうといふ強い野心を抱いた。然し、鳥が空中へ飛ぶやうに、栗鼠は木へ駆け登ることが出来るので、仔狼は相手が



以前には、彼は遊び半分（おぼろげ）に獵（おぼ）をした。何故なら、それが面白くてならなかつたからだ。ところが今度は、死物狂（にせつきちやう）ひの眞剣（まけん）さで獵をしたが、獲物（えつぶつ）は何一つなかつた。然し、その失敗は、彼の發達（はつたつ）を促した。彼は、前よりも一層深い注意力を以て、栗鼠（りそ）の習性を研究し、より巧妙に相手に忍び寄つて、不意打ちをくはせる努力をした。彼は野鼠（のそ）を研究して、穴から掘り出す工夫をした。またムズ鳥（むずどり）や啄木鳥（たくもどり）の遣り口についても、多くのことを學んだ。それから、鷹（たか）の影がさしても、茂みの中へもぐり込まなくなる日が来た。彼は、より強く、より賢明に、より多く自信をもつやうになつてゐた。それに、彼は死物狂（にせつきちやう）ひであつた。そこで、彼は目につくやうに、空地の中に尻をおろして、鷹が空から舞（ま）ひ降りるやうに挑戦した。彼は、青空に浮んでゐる肉のあることを、彼の胃袋がしつきりなしに慕つてゐる肉のあることを知つてゐた。然し、鷹は降りて来て、闘（たか）はうとしなかつた。で、仔狼は茂みの中へ這（は）ひこんで、失望と飢ゑとに泣いた。

飢餓状態が終つた。女狼は肉をもつて歸つて来た。それは見馴れない肉で、今迄に持つて歸つたどの肉とも違つてゐた。それは、可なり生長した山猫の仔で、まるで仔狼のやうであつたが、それほど大きくなかつた。そして、これが全部、仔狼に與へられた。母は何處かで飢ゑを充（た）してゐたのであ

つた。然し、母が飢ゑを充たしたのは、山猫の一つ腹の兄弟たちだといふことを、仔狼は知らなかつた。また、母の行爲が無謀（むぼう）極まるものだといふことも知らなかつた。彼はたゞ、この天鷲（てんじゆ）絨（じゆ）のやうな毛並の仔が食肉であることを知るだけであつた。そして、それを食ひ、一口ごとに、次第に幸福な氣持になつた。

胃袋が一杯になると無精（むしやう）になる。仔狼は、洞穴（ほら）の中で身を横たへ、母のそばにくつついて眠つた。彼は母親の唸り聲で目がさめた。彼は曾つてまだこんな恐ろしい母の唸り聲を聞いたことがなかつた。恐らく彼女の全生涯に於て、最も恐ろしい唸り聲であつた。それには理由があつた。そして、母がそれを誰よりもよく知つてゐた。山猫の獸穴（じゆうけつ）を荒して無事であつたためしはない。午後のぎら／＼する日光を浴びて、洞穴の入口にしゃがんでゐる山猫の母の姿が、仔狼の目に映つた。それを見ると、仔狼の背筋の毛が逆立つた。恐怖がやつて来たのだ。その恐ろしさは、本能の力をかりるまでもなく、彼にはよく分つた。もし姿だけでは恐怖を與へるに十分でないとは假定しても、その闖入者（まはしりしや）の發する憤怒の叫びたるや、最初は唸りで始まり、急に噎（おどろ）れた金切聲（かねきりこゑ）に高まつて、恐怖を感じさせるには十二分の物凄さであつた。

仔狼は、彼の體内に、生命の激動するのを感じた。彼は

立ちあがつて、母のそばで勇ましく唸つた。ところが、折角勇んでゐる仔狼を、母は不名譽にも追ひのけて、自分のうしろへ隠した。入口の天井が低いので、山猫は飛びこむことが出来なかつた。で、山猫が匍（も）ひながら突進してくると、女狼は飛びかゝつて、押し倒した。仔狼には格闘（かくとう）の有様が殆ど見えなかつた。たゞ、物凄（ものぢやう）い唸り聲と、咆（う）えたてる音と、鋭い金切聲（かねきりこゑ）とが聞えた。二匹の獸は取（と）り組み合つてゐた。山猫は爪をふるつて荒れ狂ひ、同じく齒も用ゐたが、女狼は齒を用ゐて噛みつく一方であつた。

一度、仔狼は飛びこんで、山猫の後足にぐさりと齒を食ひこんだ。彼は悍猛（はんまう）に唸りながら、そのまま食ひさがつてゐた。彼は自分では知らなかつたが、彼の體の重みで、敵の足の行動を妨害し、そのために、母がひどく傷をうけるのを救つた。闘（たか）ひに變化が起つたので、彼は二匹の體の下へ押しつぶされ、噛みついてゐるのを、無理に引き放された。次の瞬間、兩方の母親は飛び離れた。そして、兩方が再び突撃し合ふ前に、山猫はその大きな前足で仔狼をなぐりつけたので、彼の肩は骨まで裂けて、横ざまに壁の方へ叩きつけられた。仔狼が苦痛と驚駭（おどろ）の鋭い悲鳴をあげるの、それが加はつて、闘（たか）ひの騒ぎは一段と激しくなつた。然し、闘（たか）ひはかなり長く續いたので、仔狼は泣くだけ泣いて、再び勇氣の盛り上つてくるのを感じるだけの餘裕があ

つた。で、彼は、闘（たか）ひの終つた時に、再び山猫の後足（おそし）に噛みついて、齒の間から兇暴な唸り聲を發してゐる自分自身を見出した。

山猫は死んだ。然し、女狼はすつかり弱り切つて元氣がなかつた。最初のうちは、仔狼を劬（おとろ）り、彼の傷ついた肩を舐めてゐたが、彼女自身、出血がひどいので、その血と共に力も抜けて、まる一晝夜といふもの、死んだ敵の傍に横になつたまま、身動きもせずに、息も絶え／＼になつてゐた。かうして一週間、彼女は水を飲みに行く時以外、決して洞穴（ほら）を出なかつた。その水を飲みに行く時の運動も、のろくて苦しさうであつた。この一週間も終る頃になると、山猫は食ひつくされ、一方女狼の傷も十分癒えたので、彼女は再び肉を求めて出かけることが出来るやうになつた。

仔狼の肩は硬（かた）ばつて痛んだ。そして、暫くの間は、彼の蒙（かぶ）つた恐ろしい打撃のために、跛（こ）をひいてゐた。然し、世界は今や一變したやうに思つた。彼は、より強い自信に充ちて、また、山猫と戦ふ以前にはまだ持つてゐなかつた武勇の氣に充ちて、世界を歩き廻つた。彼は生の外貌を、以前よりも一層兇暴なものとして見るやうになつてゐた。彼は闘（たか）つた。彼は敵の肉に齒を埋めた。そして、彼は生き残つた。これらすべての故に、彼はより大膽に舞振（ま）ひ、ふてぶてしい様子さへ、新しく加はつた。彼は最早、些細（ささい）なも



のを恐れなかつた。そして、おづ／＼した臆病なところは、大部分消えてしまつた。然し、『未知』は依然として、謎のやうな、永久に威嚇する、神祕と恐怖を以て、彼の上へ押し迫ってくるには來たのであつた。

彼は母に伴つて獲物を求めに用始めた。そして、獲物の殺し方をいろ／＼と見て、自分もそれに加はつて一役演じるやうになつた。そして、彼自身の躡るげな考へ方で、肉の法則を學んだ。生命には二種類ある——彼自身の種類と、他の種類と。彼自身の種類には、母や自分が含まれてゐた。他の種類には、動き廻るあらゆる生物が含まれてゐた。然し、他の種類は二つに分れてゐた。その一つは、彼自身の種類によつて殺され食はれるのであつた。これに屬するのは、殺戮者でないもの、殺戮者であつても極く小つげなものから成り立つてゐた。今一つは、彼自身の種類を殺して食ふか、或は、彼自身の種類によつて殺されて食はれるかとするものであつた。そして、この分類から法則が生まれた。生命の目的は肉であつた。生命それ自身が肉であつた。生命は生命を食つて生きた。食ふものと、食はれるものとがあつた。従つて、これが法則であつた——「食ふか、然らずんば、食はれるか」。彼はちやんとした明瞭な言葉で、法則を公式化したのでもなく、それを道徳化したのでもなかつた。彼は、法則を考へさへしなかつた。たゞ、何ら考へ

ることなしに、法則を實行したに過ぎなかつた。

彼は自分の周囲の到るところで、その法則の行はれてゐるのを見た。彼は雷鳥の雛を食つた。鷹は雷鳥の母を食つた。鷹はまた、彼をも食はうとした。それから後、彼がより強くなつてくると、彼の方で鷹を食はうとした。彼は山猫の仔を食つた。山猫の母は、彼女の方が殺されて食はれなかつたら、彼を食つてゐたことであらう。そして、すべてがさうでもあつた。この法則は、すべての生き物によつて、彼の周囲で實行されてゐた。そして、彼自身がこの法則の一部分であつた。彼は殺戮者であつた。彼の唯一の食物は肉であつた。生きた肉であつた。彼の前を素早く逃げて行くか、空中に飛ぶか、木に登るか、地中に隠れるか、彼に向ひ合つて闘ふか、逆振をくはせて彼を追つかけるかする肉であつた。

若し仔狼が人間流に考へたとすれば、生命を摘要して、貪婪な食欲と考へ、世界を摘要して、無数の食欲が徘徊し、追ひつ追はれつ、獵をし獵をされ、食ひつ食はれて、一切が盲目と混亂の裡に、暴力と無秩序に充ちて、暴食と殺戮の混沌を現出して、容赦なく、計畫なく、果つるところなく、偶然に支配されてゐる場所である、と考へたかも知れない。

然し、仔狼は人間流には考へなかつた。彼は廣い觀察を

### 第三部

#### 一、火を作る者

仔狼がそれに出會つたのは、突然であつた。それは彼自身の過失であつた。彼は不注意だつたのだ。彼は洞穴を出て、水を飲み流の方へ駈け出したのであつた。彼は寢ぼけてゐたので、つい注意を拂はなかつたのかも知れない。(彼は一晩中、獲物を探してゐて、そして、つい今し方起きあがつたばかりであつた)。そして、その不注意は、川縁へ行く道に馴れすぎてゐたせゐかも知れない。彼は今までに幾度となくその道を歩いたが、曾つて何事も起つたことがなかつた。

彼は、松の枯木のそばを通り、空地を横切り、木立の間を駈けて行つた。すると同時に、彼の目に映じ、鼻に臭つたものがあつた。彼の目の前に、黙つてしやがみ込んで、五つの生きたものがあるのであつた。彼はまだ一度も、さうしたものを見たことがなかつた。それが、彼の人間を見た最初であつた。然し、彼の姿を見ても、その五人の人間は、飛び起きもしなければ、齒をむき出しもせず、唸りもしなかつた。彼等は動かなかつた。黙つて薄氣味わるく、

以て、事物を見なかつた。彼の目的は單純で、一時に一つの考か、一つの欲望しか抱かなかつた。肉の法則以外に、彼の學び且つ従ふべき、他の小さな法則が無數にあつた。世界は驚異で充ちてゐた。彼の體內にある生命の動き、彼の筋肉の働きは、涯しない幸福であつた。肉を追ひ詰めることは、昂奮と得意を経験することであつた。彼の憤激と闘争は快樂であつた。恐怖そのものも、そして、『未知』の神祕も、彼の生存に役立つた。

それから、安易と満足があつた。胃袋の充ちること、日光を浴びてう／＼と眠ること——それらは、彼の熱情と勞役に對する十分な報酬であり、同時に、熱情と勞役そのものが、自己報酬的な感を與へた。熱情も勞役も、生命の表現であつた。そして、生命は、自己を表現してゐるなら、常に幸福なのである。だから、仔狼は、敵に充ちた周圍に對して、何の不満も抱かなかつた。彼はひどく元氣に充ち、ひどく幸福で、ひどく自分を誇らかに感じた。



坐つてゐた。仔狼も動かさなかつた。彼の生來の本能が、彼を促して一目散に逃げさせるであらうと思へたのに、突然、そして初めて、それと反對の別の本能が目ざましたのであつた。深い畏敬の念が彼を靜かに襲つた。彼は自分自身の弱くて小つぽけだといふ感じに壓倒されて、身動きも出来ない程に打ちのめされた。今こゝに、支配力と權力、遙か高く彼の上に存在する何かであつた。

仔狼は人間を見たことがなかつた。而も、人間に對する本能を持つてゐた。人間が荒野に於ける他の動物と闘つて、それに君臨してゐる一動物であることを、彼は臆ろげながら認識した。仔狼は今、彼自身の目のみでなく、彼の祖先全體の目で——冬の夜の數限りないキャンプの焚火を取り巻いて、暗闇の中でその火を見てゐた目、すべての生き物を支配する人間といふ奇妙な二本足の動物を、遠い安全な距離から、又は、茂みの奥から眺めた目、その目で人間をじろく／＼と眺めてゐた。仔狼の遺傳の魔力が、即ち、鬭争の幾世紀を通じ、幾十年代の蓄積された經驗によつて生れた、恐怖と尊敬の念が、彼をとらへた。この遺傳の力は、まだ子供にすぎない彼にとつて、あまりにも強かつた。もし彼が十分生長してゐたなら、すぐにも逃げ去つたことであらう。然し、實際はそれとは違つて、彼は恐怖に癡痺し

て、その場に縮みこみ、もう既に降伏を示してゐた。それは、彼の祖先が初めて人間に屈して、その焚火のそばに坐つて暖を取つたその時から示して來た、その降伏であつた。インデアンの一人が立ちあがつて、彼の方へ進み寄り、彼の上へかよみこんだ。仔狼は縮みこんで、一層びつたりと地面に身をつけた。『未知』は終に、ちやんと血と肉をもつた、目に見える形となつて現はれ、その手が、彼の上に掩ひかゝり、まさに彼に掴みかゝらうとした。彼の毛は思はず逆立ち、彼の唇は引きつつて、小さな牙、露出した。彼の頭上に宣告を下すやうに置かれたその手は、暫くためらひ、そして、その人間は笑ひながら言つた。

「Waban wabisa ip pit tah.」(見ろよ、この白い牙を!) 他のインデアンは、高く笑つた。そして、その男に向つて、仔狼を掴みあげると促した。手が次第に近くへ下りてくると、仔狼の心には激しい本能の闘ひが起つた。彼は二つの大きな衝動を——屈伏すべきか、戦ふべきかの二つを感じた。その結果は、妥協の行動であつた。彼は兩方をなした。即ち、手が自分に觸れる刹那まで、彼は屈伏した。然し、次の瞬間には彼は闘つた。彼の齒がさつと閃いて、その手を噛んだ。すると、彼は頸筋の横側を拳で殴りつけられたので、横ざまに倒れた。そして、鬭争の氣持はずつかりなくなつた。彼の子供心と服従の本能が、彼を捕へてし

まつた。彼は前足を立て、躊躇、きやん／＼鳴いた。然し、手を噛まれた男は憤然とした。仔狼は頸筋の他の横側を殴りつけられた。すると、彼は起きあがつて、一層大きく悲鳴をあげた。

四人のインデアンは、前よりも大聲で笑つた。手を噛まれた男までが笑ひ出した。彼等は仔狼を取り巻き、仔狼を見て笑つた。仔狼は恐れと傷とで、悲しげな鳴き聲を立てた。すると、その騒ぎの間に、彼は何か物音をきいた。インデアンにもそれは聞えた。然し、仔狼はそれが何であるか知つてゐた。そして、最後の長い悲鳴をあげたが、それには、悲しみよりも勝ち誇つた響がこもつてゐた。それ切り、彼は鳴くのを止めて、彼の母、兇暴で何物にも征服されない母、あらゆるものと戦ひ、それを殺し、曾つて恐れを知らぬ母、その母の來るのを待つた。母は唸りながら、走つて來た。彼女は仔狼の叫びを聞いて、彼を救ふために突進して來たのであつた。

彼女は、人々の間へ躍りこんだ。子供を氣づかひ、戦ひを挑む、その母性の姿は、物妻さの限りであつた。然し、仔狼は、自分を庇ふ母の憤怒の姿を見てよろこんだ。彼は悦びの小さな叫びをあげて、母の方へ聲け出した。すると、人間動物は、急いで五六歩身を引いた。女狼は子供のの上に掩ひかぶさるやうにし、人間の方へ顔を向け、毛を逆立て、

咽喉の奥でごろ／＼いふ唸り聲をあげた。彼女の顔は歪み、威嚇で殺氣立つた。彼女は、あまりに大きな唸り聲を立てるので、その鼻柱は目元まで皺だらけになつた。

すると、人間の一人から叫び聲がとび出した。「キチー!」それが、その男の發した言葉であつた。それは驚きの感歎詞であつた。仔狼は、母がその聲でひるむのを感じた。「キチー!」その男は再び叫んだ。今度は、鋭い威嚴のある聲であつた。

すると、女狼が、恐れを知らぬ彼女が、地面に腹のつくほど匍ひつくばつて、くん／＼鼻をならし、尾を張り、和睦の態度をしめした。それを見た仔狼には、わけが分らなかつた。彼は呆然とした。人間に對する畏敬が、又しても彼を襲つた。彼の本能は正しかつた。彼の母がそれを立證した。彼女も亦、人間動物に對して降伏を示したのだ。

彼女を呼んだ男が、彼女の方へ來た。彼女がその手を彼女の上におくと、彼女は益々地面にびつたり匍ひつくばるばかりだつた。彼女は噛みつきもせず、噛みつかうとする氣合も示さなかつた。他の人間もそばへ來て、彼女を取り巻き、撫で、彼女をいぢくり廻したが、彼女はその行爲に對して、少しも憤らうとしなかつた。彼等は、何だかひどく昂奮して、口々に何かべちやくちや物音を立てた。然し、その物音は危険の表示でないと、母のそばにしやがみなが



ら、仔狼はさう断定した。それでも、時々、毛が逆立つたが、彼は出来るだけ屈伏の態度をとつた。

「全く、ありさうなこつたよ。」一人のインデアンは言った。「こいつの親父は狼だつたんだ。尤も、おふくろは犬にはちがひないんだが、俺の兄貴が、こいつを、さかりのついでる時に、三晩もぶつ通して森の中へ繋いでおいたんぢやないか。だからよ、キチの親父は狼なんだよ。」

「こいつが逃げてから、もう一年になるなあ、『白髪の子狸』。」第二のインデアンが言った。

「全く、ありさうなこつたよな、『蛙の舌』。『白髪の子狸』は答へた。「何しろ飢饉の時で、犬にやる餌食なんて、これつばしもなくつたからなあ。」

「こいつ、あれからずつと、狼と一しよに暮してゐたんだぜ。」第三のインデアンが言った。

「どうもさうらしいな、『三つ鷲』。」仔狼の上に手をおきながら、『白髪の子狸』は答へた。「そして、これがその證據だよ。」

仔狼は手で觸られたので、少し唸つた。すると、その手は殿りつけようとして、振りあげられた。そこで、仔狼は牙をかくして、おとなしくしやがみ込んだので、手はおろされ、彼の耳のうしろを擦り、背中を上下に撫でた。「こいつが、その證據だぜ。」『白髪の子狸』は續けた。「こ

いつのおふくろがキチだつてことは分りきつてるよ。だが、親父は狼だぜ。だから、こいつには犬らしいところが少くて、狼らしいところが多いんだ。こいつの牙は眞白だから、こいつ『白い牙』つて名にしてやらうぜ。おい、みんな。こいつあ俺の犬だよ。だつて、キチは俺の兄貴の犬だつたぢやないか。そして、その兄貴は死んぢやつたんだからなあ。」

かうして、この世界に於て名前といふものを與へられた仔狼は、腹筋ひになつて、ぢつと見てゐた。暫くの間、人間・動物は口の物音を近づけた。それから、『白髪の子狸』は自分の頸にかけた鞆から、ナイフを抜いて、茂みの方へ行つて、木片を一本切り取つた。『白い牙』はそれを見てゐた。彼はその棒の両端を切り込んで、その切り跡へ生皮の紐を結びつけた。彼は片方の紐を、犬の咽喉のまはり縛つた。それから、彼女を小さな松の木の方へ連れて行つて、もう一方の紐で、それに縛りつけた。

『白い牙』はそのあとへ従いて行つて、彼女のわきに身を横たへた。『蛙の舌』は彼に手をさし伸べて、彼を仰向けにひつくり返した。母親のキチは、心配さうにそれを眺めた。『白い牙』は、又しても心の中に恐怖の高まつて來るのを感じた。彼は唸り聲を押へることが出来なかつたが、噛みつく氣配は見せなかつた。人間の手は、曲つた、そして廣く開いた指で、ふざけるやうに彼の咽喉をこすり、彼を左右

へ轉がした。仰向けになつて、四つ肢を空中でもがいてゐるのは、いかにも滑稽で氣がきかなかつた。その上、さういふ頼りない姿勢に身をおくことは、『白い牙』の性質としては、反抗せずにはゐられない程であつた。然し、彼はさういふ姿勢では、どうにも自分を防禦する方法がなかつた。もしこの人間・動物が、危害を加へる考だとしたら、『白い牙』にはそれを脱れる道のないのを知つてゐた。四つ肢を空中へさし上げてゐるのでは、どうして飛びさることが出来るであらうか。而も、屈伏の念が彼の恐怖を押へたので、彼は穩かに唸るだけであつた。彼はこの唸りだけは押へることが出来なかつたし、人間もそれを怒つて、彼の頭に打

擲を加へるやうなことがなかつた。その上、不思議なことには、『白い牙』は手で上下に撫でまはされると、何とも言へない快い昂奮を経験した。彼は横に轉がされると、唸るのをやめた。指で耳の根元を押へられたり、突かれたりすると、その快感が増した。それから、擦つたり引つ掻いたりするのをよして、その男が、彼をうつちやつて向うへ行くと、あらゆる恐怖が『白い牙』から消え去つた。彼は人間との交渉に於て、幾度か恐怖を味はなければならなかつたが、而も、結局は彼も人間と恐怖のない附合ひが出来るといふしるしが、この時現はれてゐたのであつた。暫くして、『白の牙』は聞き馴れぬ物音の近づいてくる

を耳にした。彼は急速に分類して、すぐにそれが人間・動物の物音であるのを知つた。數分の後、このインデアン一族の残りの者が、列を作つて行進しながら、ぞろ／＼やつて來た。男も大勢ゐれば、女子供も大勢ゐて、四十人ばかりの人數であつたが、みんなキャンプ道具を重さうに背負つてゐた。その他、犬も大勢ゐた。そして、まだすつかり生長してゐない仔犬共を除いて、犬も同じやうに、キャンプの道具を背負つてゐた。彼等は、背中の上や、背にしつかり結びつけられた袋の中に、二三十ポンドの重さのものを運んでゐた。

『白い牙』はまだ犬を見たことがなかつた。然し、彼等を一目見て、自分と同じ種族だが、たゞ何處か違つたところがあると感じた。然し、彼等が仔狼とその母の姿を發見すると、殆ど狼と異らない態度を示した。突撃が起つた。『白い牙』は、口を開けて押し寄せる犬の浪に向つて、毛を逆立て、唸り、噛みついた。そして、彼等の足に踏みつけられ、體に鋭く齒をたてられるのを感じながら、自分も下から、彼等の足や腹に噛みつき引き裂いた。大變な騒ぎであつた。彼には、キチが彼のために戦つてゐる唸り聲が聞えた。又、人間の叫び聲、棍棒でなぐる音、なぐられて苦痛の悲鳴をあげる犬共の聲も聞えた。彼が再び立ちあがるまでには、僅か數分しか経たなかつ